鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（166）

南九州西回り自動車道建設（薩摩川内都IC～高江IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（ＸＸＸⅡ）

上新田遺跡
（かみしんでん）

（薩摩川内市青山町）

2012年１月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

カラー図版

上新田遺跡　遠景（南から）

序　　文

この報告書は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴って，平成21年度から22年度にかけて実施した上新田遺跡の発掘調査の記録です。

上新田遺跡では縄文時代早期から近世にかけての遺構・遺物が発見されました。なかでも，弥生時代中期の竪穴住居跡５軒とそれらに伴う遺物は，北部九州地方や中九州地方の影響を受けたと思われるものがあり，当時のこれらの地域との交流を考える上で貴重な資料を提供したものと考えています。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々がご覧になり，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたりご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，薩摩川内市教育委員会，関係各機関及び発掘調査および整理作業に従事された方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年１月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　寺　田　仁　志

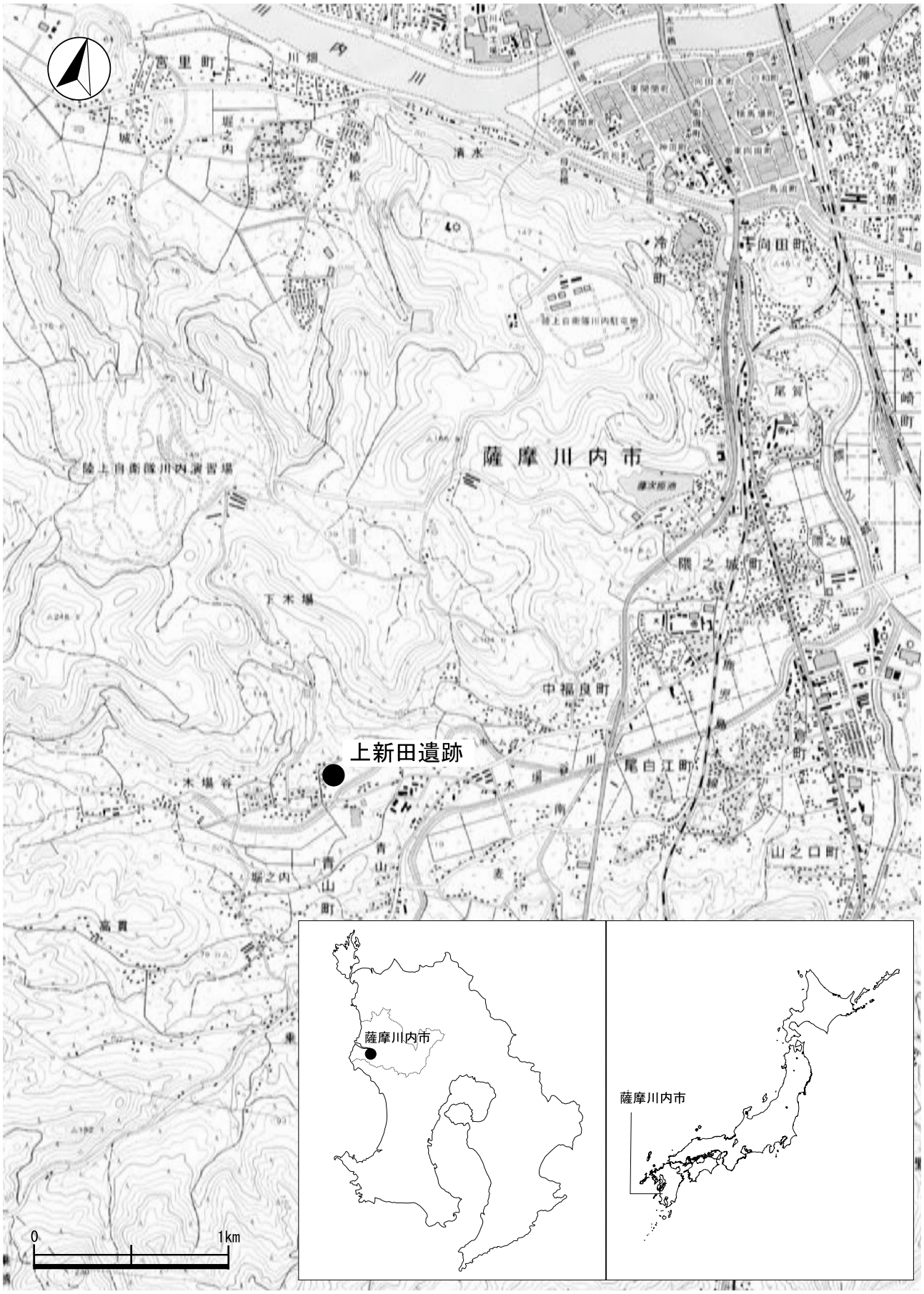
報　告　書　抄　録

ふりがな	かみしんでんいせき
書　　名	上新田遺跡
副　書　名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ＸＸＸⅡ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	166
編集者名	富山　孝一
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995-48-5811
発行年月日	2012年１月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
かみしんでんいせき 上新田遺跡	かごしまけん 鹿児島県 さつませんだいし 薩摩川内市 あおやまちょう 青山町	46215	6-145	31° 47′ 09″	130° 17′ 07″	20091104～ 20100222	958	南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴う記録保存調査
						20100510～ 20100928	4,842	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上新田遺跡	散布地	縄文時代早期	集石遺構	中原式土器，石坂式土器，石鏃，磨石，敲石，石皿	
		縄文時代後期	なし	市来式土器	
		縄文時代晩期	なし	黒川式土器	
	集　落	弥生時代中期	竪穴住居跡（5軒）	入来式土器，黒髪式土器，須玖式土器，磨製石鏃，磨製石斧，砥石，石皿	
	その他	古代・中世	掘立柱建物跡（2棟），石列，土坑	土師器，須恵器，紡錘車（土製・石製），耳皿	
		近世	古道，溝	陶磁器	

遺跡の概要	縄文時代早期から晩期，弥生時代中期，古代後半から中世，近世にかけての遺跡である。遺構は，縄文時代の集石遺構，弥生時代中期の竪穴住居跡，古代から中世にかけての掘立柱建物跡と石列，中世の土坑，中世から近世にかけての古道跡，溝跡が検出された。 遺物は，縄文時代早期から晩期にかけての土器，石器，弥生時代中期の入来式などの土器，磨製石鏃などの石器，古代・中世の土師器，須恵器，土製紡錘車，耳皿，近世の陶磁器などが出土した。



宮里町
川畑
堀之内
城
植松
清水
冷水町
向田町
尾賀
宮崎町
薩摩川内市
陸上自衛隊川内演習場
隈之城町
下木場
中福良町
上新田遺跡
木場谷
尾白江町
山之口町
青山
青山町
堀之内
高貫
0
1km
薩摩川内市
薩摩川内市

上新田遺跡位置図

例　　言

1　本書は，南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴う上新田遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は鹿児島県薩摩川内市青山町4,640番地ほかに所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は，平成21年度から22年度に実施し，整理・報告書作成は，平成22年度から平成23年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

5　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表，図版の各番号は一致する。

6　遺物注記で用いた遺跡記号は「カミシ」である。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所の作成した現況計画図中のセンター杭№394に基づく標高である。

9　本書で使用した方位は，すべて磁北である。

10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は，(株)ふじたに委託した。

11　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは富山孝一，玉利浩実が整理作業員の協力を得て行った。

12　出土遺物の実測・トレースは，富山孝一が担当し，整理作業員の協力を得て行った。また，遺物実測の一部を(株)九州文化財研究所に委託し，富山孝一が監修した。

13　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

14　本報告に係る放射性炭素年代測定，樹種同定は，(株)加速器分析研究所に委託した。

15　本書の執筆は，１～２章，３章２節までを玉利浩実が，３章３節以降は富山孝一が行い，編集は富山孝一，玉利浩実が行った。

16　本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図･写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

目　　次

巻頭カラー
序　　文
報告書抄録
遺跡位置図
例　　言
目　　次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　一次調査 …… 1
　第３節　二次調査 …… 1
　第４節　整理・報告書作成作業 …… 2
　第５節　川内隈之城道路建設に伴う各遺跡の概要 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　発掘調査の方法
　第１節　発掘調査の方法 …… 11
　第２節　層　　序 …… 13
第４章　調査の成果
　第１節　縄文時代の調査
　　１　遺構 …… 16
　　２　遺物 …… 17
　第２節　弥生時代の調査
　　１　遺構 …… 26
　　２　遺物 …… 43
　第３節　古代・中世の調査
　　１　遺構 …… 67
　　２　遺物 …… 68
　第４節　近世の調査
　　１　遺構 …… 89
　　２　遺物 …… 89
第５章　自然科学分析 …… 91
第６章　総　括 …… 104
写真図版 …… 107

挿図目次

第１図　薩摩川内都ＩＣ～高江ＩＣ間遺跡位置図　4
第２図　周辺遺跡　10
第３図　遺跡周辺地形図　11
第４図　グリッド図およびトレンチ配置図　12
第５図　土層断面図(1)　14
第６図　土層断面図(2)　15
第７図　縄文時代遺構配置図　16
第８図　縄文時代集石　16
第９図　Ⅳ層（縄文時代）遺物出土状況図　18
第10図　縄文土器(1)　19
第11図　縄文土器(2)　20
第12図　縄文土器(3)　21
第13図　縄文土器(4)　23
第14図　Ⅳ層出土の石器(1)　24
第15図　Ⅳ層出土の石器(2)　25
第16図　弥生時代遺構配置図　26
第17図　１号住居跡　27
第18図　１号住居跡出土遺物(1)　28
第19図　１号住居跡出土遺物(2)　29
第20図　１号住居跡出土遺物(3)　30
第21図　２号住居跡・３号住居跡　31
第22図　２号住居跡出土遺物(1)　31
第23図　２号住居跡出土遺物(2)　32
第24図　３号住居跡出土遺物　32
第25図　４号住居跡　33
第26図　４号住居跡出土遺物(1)　34
第27図　４号住居跡出土遺物(2)　35
第28図　５号住居跡　36
第29図　５号住居跡周辺ピット図　37
第30図　５号住居跡出土遺物(1)　38
第31図　５号住居跡出土遺物(2)　39
第32図　５号住居跡出土遺物(3)　40
第33図　５号住居跡出土遺物(4)　41
第34図　５号住居跡出土遺物(5)　42
第35図　Ⅲ層（弥生時代）遺物出土状況図　45
第36図　弥生時代甕形土器Ⅰ類(1)　46
第37図　弥生時代甕形土器Ⅰ類(2)　47
第38図　弥生時代甕形土器Ⅰ類(3)　48
第39図　弥生時代甕形土器Ⅰ類(4)　49
第40図　弥生時代甕形土器Ⅰ類(5)　50
第41図　弥生時代甕形土器Ⅱ類(1)　51
第42図　弥生時代甕形土器Ⅱ類(2)　52
第43図　弥生時代甕形土器Ⅲ類　53
第44図　弥生時代壺形土器(1)　54
第45図　弥生土器壺形土器(2)鉢形土器　55
第46図　弥生土器（その他）　55
第47図　Ⅲ層出土の石器(1)　60
第48図　Ⅲ層出土の石器(2)　61
第49図　Ⅲ層出土の石器(3)　62
第50図　表土・Ⅱ層出土の石器(1)　65
第51図　表土・Ⅱ層出土の石器(2)　66
第52図　古代・中世遺構配置図　69
第53図　古代・中世丘陵部遺構配置図(1)　70
第54図　古代・中世丘陵部遺構配置図(2)　71
第55図　石列遺構平面図　72
第56図　石列遺構側面図　73
第57図　掘立柱建物跡１　74
第58図　掘立柱建物跡１出土遺物　74
第59図　掘立柱建物跡２　75
第60図　１号土坑　76
第61図　１号土坑出土遺物　76
第62図　２号土坑　77
第63図　３号土坑　78
第64図　４号土坑　79
第65図　４号土坑出土遺物　79

第66図　溝跡　80
第67図　溝跡出土遺物　80
第68図　Ⅱ層（古代・中世）遺物出土状況図　81
第69図　土師器（埦）　82
第70図　土師器（坏・皿）　83
第71図　内黒土師器　84
第72図　土師器（甕）　85
第73図　須恵器(1)　86
第74図　須恵器(2)　87
第75図　土製品　87
第76図　近世遺構配置図　89
第77図　古道跡　89
第78図　近世の遺物　90

表目次

第１表　南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表　3
第２表　周辺遺跡一覧表　8
第３表　上新田遺跡基本土層　13
第４表　縄文土器観察表①　22
第５表　縄文土器観察表②　23
第６表　Ⅳ層出土石器観察表　25
第７表　１号住居跡出土土器観察表　28
第８表　１号住居跡出土石器観察表　30
第９表　２号住居跡出土土器観察表　32
第10表　２号住居跡出土石器観察表　32
第11表　３号住居跡出土土器観察表　32
第12表　４号住居跡出土土器観察表　35
第13表　４号住居跡出土石器観察表　35
第14表　５号住居跡出土土器観察表　40
第15表　５号住居跡出土石器観察表　42
第16表　弥生土器観察表①　56
第17表　弥生土器観察表②　57
第18表　弥生土器観察表③　58
第19表　Ⅲ層出土石器観察表①　60
第20表　Ⅲ層出土石器観察表②　63
第21表　表層・Ⅱ層出土石器観察表　66
第22表　掘立柱建物跡１観察表　74
第23表　掘立柱建物跡２観察表　75
第24表　掘立柱建物跡１出土遺物観察表　76
第25表　１号土坑出土遺物観察表　76
第26表　４号土坑出土遺物観察表　79
第27表　溝跡出土遺物観察表　80
第28表　土師器観察表①　82
第29表　土師器観察表②　83
第30表　土師器観察表③　84
第31表　土師器観察表④　88
第32表　須恵器観察表　88
第33表　土製品観察表　88
第34表　近世遺物観察表　90
第35表　古銭観察表　90

図版目次

図版１　調査地全景（西側から）　107
図版２　調査地全景（東側から）　108
図版３　丘陵部分（航空写真）　109
図版４　調査前風景・作業風景　110
図版５　作業・実測・表土剥ぎ　111
調査終了風景
図版６　土層断面・集石遺構　112
図版７　竪穴住居跡　113
図版８　石列・掘立柱建物跡１(1)　114
図版９　石列・掘立柱建物跡１(2)　115
図版10　土坑　116
図版11　溝跡　117
図版12　古道跡・現代水田跡　118
図版13　縄文土器　119
図版14　Ⅲ層・Ⅳ層出土石器　120
図版15　表層・Ⅱ層出土石器　121
１号住居跡出土遺物
図版16　２・３・４号住居跡出土遺物　122
図版17　５号住居跡出土遺物(1)　123
図版18　５号住居跡出土遺物(2)　124
図版19　弥生土器甕Ⅰａ類　125
図版20　弥生土器甕Ⅰｂ類　126
図版21　弥生土器甕Ⅰｂ類,　127
Ⅰ類底部, Ⅱａ類
図版22　弥生土器甕Ⅱｂ類・Ⅲ類　128
図版23　弥生土器壺・蓋・鉢・土製品　129
古代・中世遺構内遺物
図版24　土師器（埦・坏・皿・内黒）　130
図版25　土師器（甕）・土製品　131
図版26　須恵器・近世の遺物　132

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下鹿児島国道事務所）は南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下文化財課）に照会した。この照会を受けて，文化財課が平成18年６月に計画路線の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，当事業区内には，７か所の遺物散布地及び発掘調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについては，鹿児島国道事務所･県文化財課･鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）の三者の協議に基づき，鹿児島国道事務所と鹿児島県教育委員会との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に発掘調査を実施することになった。

これを受けて，平成19年度から計画的かつ継続的に各遺跡の発掘調査を実施して埋蔵文化財の記録保存を図ることとし，発掘調査は県埋文センターが実施した。

本書で報告する上新田遺跡は，平成21年11月４日(水)から平成22年２月22日(月)の期間に958㎡を，また平成22年５月10日(月)から平成22年９月28日(火)の期間に4,842㎡を対象とし，合計5,800㎡の発掘調査を実施した。

第２節　一次調査

上新田遺跡の一次調査は平成21年11月４日(水)から平成22年２月22日(月)の期間に実施した。まず２×５ｍのトレンチを24か所設定し，人力による掘り下げを中心に進め，遺構，遺物の掘削深度，範囲を確認した。その後Ａ・Ｂ－14・15区の一部の本調査を実施し，958㎡の調査を終了させた。一次調査における組織は以下のとおりである。

調査体制（平成21年度）
事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　齊藤　守重
次長兼南の縄文調査室長　青﨑　和憲
調査第二課長　彌榮　久志
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　冨田　逸郎
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　抜水　茂樹
文化財主事　田畑　哲治
文化財主事　市村　哲二
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　紙屋　伸一
主　査　鳥越　寛晴

調査の経過（日誌抄より）

平成21年11月
調査施設設営準備及び環境整備を行う。トレンチを設定し，掘り下げを開始。第１～第10トレンチ及び第８トレンチ拡張部Ⅱ層掘り下げ。トレンチ内土層写真撮影，第１～第３トレンチ埋め戻し。

平成21年12月
第８～第19トレンチⅡ層掘り下げ。トレンチ内土層写真撮影。

平成22年１月
上新田遺跡の調査を休止し，山仁田遺跡の調査を実施。

平成22年２月
第20～第24トレンチ掘り下げ。Ａ・Ｂ-15・16区（第４トレンチ及び第８トレンチ周辺）全面調査。縄文時代から弥生時代にかけての遺物出土。遺物取上げ。トレンチ内土層写真撮影。空中写真撮影。重機による埋め戻し。調査終了。

第３節　二次調査

一次調査の結果をふまえ，本調査は平成22年５月10日(月)から平成22年９月28日(火)の期間に4,852㎡の調査を実施した。本調査における組織は以下のとおりである。

調査体制（平成22年度）
事業主体　国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育長文化財課
調査総括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　中村　耕治
調査第二課長　井ノ上秀文
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　鶴田　靜彦
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　富山　孝一
文化財主事　玉利　浩実
調査事務　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
専 門 員　鳥越　寛晴

調査の経過（日誌抄より）

平成22年５月
調査施設設営準備及び環境整備を行う。トレンチを設定し，掘り下げを開始。Ａ-11～15区層序確認，掘り下げ。

Ａ・Ｂ-14・15区より中～近世の溝跡検出。Ｂ-６・７区より現代の水田面検出。Ａ・Ｂ-13～15区攪乱除去。Ⅲ・Ⅳ層より縄文時代早期～晩期土器出土。

平成22年６月

Ｄ-２・３区掘り下げ。Ⅱｂ層古代造成土面より石列検出，出土状況写真撮影。Ｂ-14区Ⅳ層掘り下げ。縄文土器数点出土。Ｄ-４区先行トレンチ掘り下げ。水田層（現代）検出。Ａ-３・４区調査開始。表土～Ⅱ層掘り下げ，弥生土器出土，出土状況写真撮影，遺物取り上げ。Ａ-15区土層断面実測。

平成22年７月

Ｄ-３・４区掘り下げ。古代遺物出土。Ａ-３・４区Ⅲ層掘り下げ。中～近世の古道検出，実測。Ａ-３・４区Ⅲ層上面地形コンター実測，土坑検出，掘り下げ，写真撮影，実測，炭化物採取。Ｄ-４区水田層掘り下げ。近・現代の遺物出土。

平成22年８月

Ａ・Ｂ-１・２区表土・Ⅱｂ層掘り下げ。石列，土坑，掘立柱建物跡検出，遺構掘り下げ，写真撮影，実測。空中写真撮影。

平成22年９月

Ａ～Ｄ-１～３区Ⅲ層掘り下げ。竪穴住居跡検出，弥生土器出土，遺物取り上げ，遺構実測。Ⅳ層掘り下げ。集石検出，縄文土器出土，遺物取り上げ，遺構実測，写真撮影。プレハブ等撤去，重機による埋め戻し。調査終了。

第４節　整理・報告書作成作業

上新田遺跡の整理・報告書作成作業は，平成22年10月１日（金）から平成23年５月31日（火）まで，鹿児島県立埋蔵文化財センターにて行った。

整理・報告書作成作業の組織は以下のとおりである。

（平成22年度）

本調査における調査体制と同じ

（平成23年度）

作成統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
作成企画　〃　次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
調査第二課長　冨田　逸郎
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　鶴田　靜彦
作成担当　文化財主事　富山　孝一
事務担当　総務係長　大園　祥子
主査　岡村　信吾
遺物指導　鹿児島国際大学　教授　中園　聡

報告書作成検討委員会
平成23年９月16日　寺田所長ほか　９名

報告書作成指導委員会
平成23年９月14日　井ノ上次長ほか　６名

整理作業の経過

整理の経過は，以下のとおりである。

平成22年10月　遺物整理，図面整理
平成22年11月　遺物洗浄，遺物注記，遺構トレース
平成22年12月　接合，復元，遺物実測，遺構トレース
平成23年１月　復元，遺物実測，観察表作成
平成23年２月　遺物実測，観察表作成
平成23年３月　遺物実測，トレース，原稿執筆
平成23年４月　トレース，レイアウト，原稿執筆
平成23年５月　レイアウト，写真撮影，原稿執筆
遺物指導　中園聡（鹿児島国際大学人間文化学部教授）

第５節　川内隈之城道路建設に伴う各遺跡の概要

南九州西回り自動車道川内隈之城道路建設に伴い，県文化財課が行った埋蔵文化財の分布調査の結果，遺物散布地及び発掘調査の必要な遺跡は以下の７遺跡である。

１　山口遺跡

薩摩川内市都町，標高約50mの丘陵地に位置する。旧石器時代の遺物が出土したほか，縄文時代早期の塞ノ神式土器，磨石，石鏃，古墳時代の成川式土器，中世の青磁，白磁が出土した。また古代・中世の掘立柱建物跡や焼土・土坑が検出された。

２　山仁田遺跡

薩摩川内市青山町の平地に位置する。遺跡の標高は27mで，川内川の支流である隈之城川中流域の左岸の微高地上に立地し，河床からの比高差は約５～10mである。縄文時代の岩本式土器，古代の土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋，近世の染付，薩摩焼が出土した。

３　堀之内遺跡

薩摩川内市青山町。標高約50mに所在する。旧石器時代の剥片尖頭器，縄文時代早期から晩期にかけての土器，石匙，石皿，磨石，石鏃が出土した。古墳時代の焼土も検出され，同時代の成川式土器が出土している。古代の柱穴，溝が検出された。また土師器や須恵器も出土している。中世の遺物として青磁，白磁が出土している。

４　上新田遺跡（本報告書）

薩摩川内市青山町の平地に所在する。遺跡の標高は約34mで，川内川の支流である木場谷川中流域の左岸の傾斜面上に立地する。縄文時代の中原式土器，黒川式土器，磨製石斧，弥生時代の入来式土器，須玖式土器，黒髪式土器，古代の土師器，須恵器などが出土し，遺構では縄文時代の集石，弥生時代中期の竪穴住居跡，古代～中世の石列，掘立柱建物跡，土坑，中近世の溝跡，古道跡が

検出された。

5　川幡遺跡

薩摩川内市宮里町に所在する。標高約12～20mの丘陵地の北斜面に立地している。土師器，須恵器，薩摩焼が出土した。また，幕末に構築された棚田の石垣が良好な状態で残っていた。

6　西之城遺跡

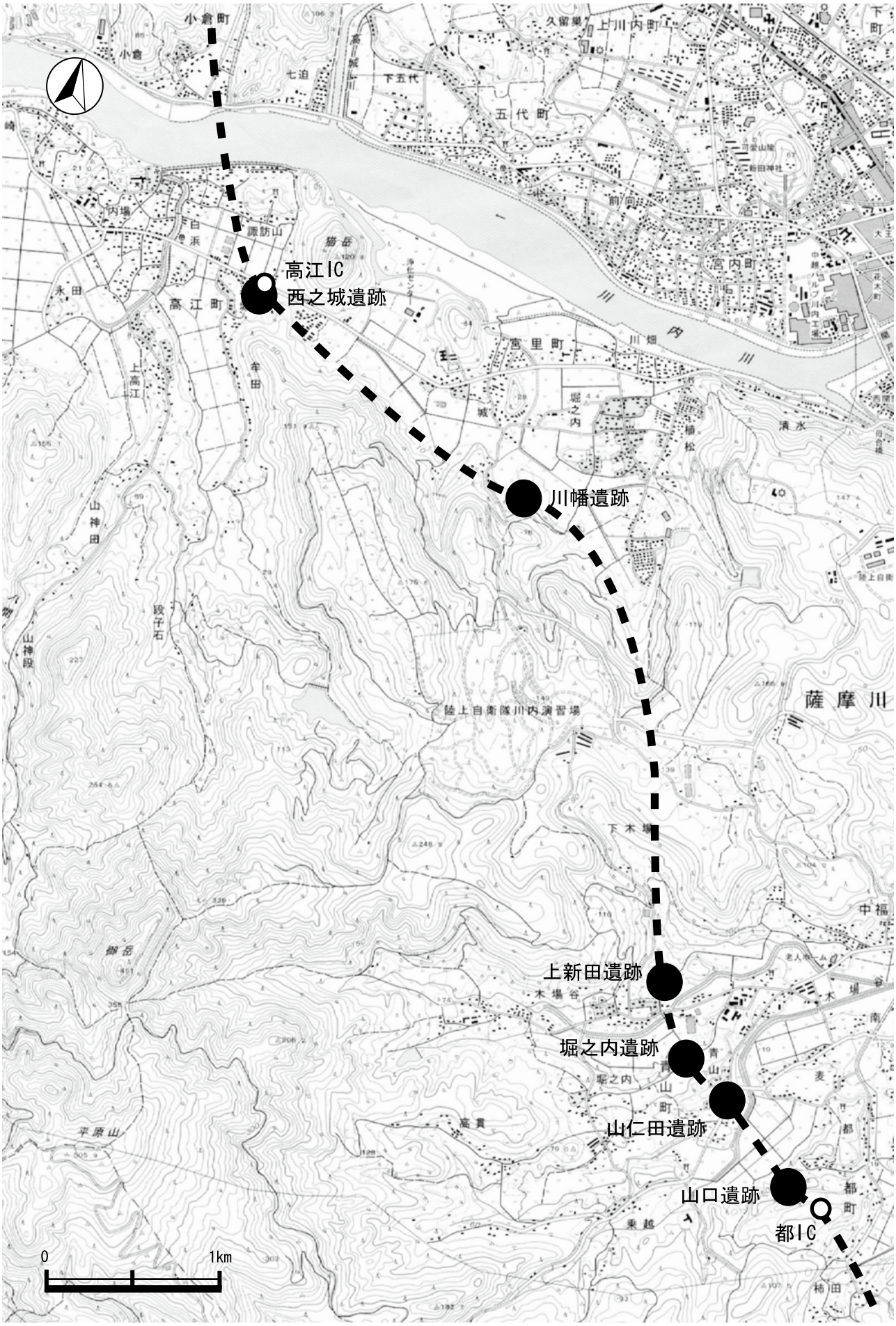
薩摩川内市高江町に所在する。標高約６mの微高地上に立地している。中近世の土師器や青磁・白磁のほか，石臼が出土した。

7　川骨遺跡

薩摩川内市高江町に所在する。標高約３～４mの川内川下流域左岸の自然堤防とその後背湿地に立地している。弥生時代後期～古墳時代の土器，古代の人面墨書のほか，中近世の遺物が出土した。遺構は，弥生時代～古墳時代の13か所の土器集中，古代・中近世の掘立柱建物跡，近世～近代の鍛冶炉跡，溝跡，水田遺構などが検出された。

第１表　　南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表（川内隈之城道路）

番号	遺跡名	所在地	調査対象面積（㎡）	調査期間	時　代	概　　要
1	山　口	薩摩川内市都町	15,200（調査中）	H21.11～22.3 H22. 5～23.2	旧石器	細石刃核，細石刃
					縄　文	集石，落し穴，前平式土器，吉田式土器，石坂式土器 手向山式土器，塞ノ神Ａ式土器，山形押型文土器，阿高式土器，市来式土器，石鏃，敲石，磨石，石皿，石匙，スクレイパー
					古　墳	成川式土器
					古　代	土師器
					中・近世	掘立柱建物跡，土坑，鍛冶炉，残滓遺構，焼土遺構，畠畝溝遺構，土師器，青磁，白磁，鉄滓，墨書土器，土錘，染付，天目，小玉，唐津焼
2	山仁田	薩摩川内市青山町	14,100	H21.11～22.3 H22. 5～22.9	縄　文	押型文土器，石鏃，石匙，敲石，石皿
3	堀之内	薩摩川内市青山町	9,700（調査中）	H21.12～22.1 H22.10～23.2	旧石器	剥片尖頭器
					縄　文	集石，吉田式土器，条痕文土器，曽畑式土器，剥片尖頭器，石鏃，石斧，石匙，磨石，磨製石斧，台石，砥石，スクレイパー
					弥　生	黒髪式土器
					古　墳	土坑，成川式土器
					古代～中世 近　世	掘立柱建物跡，落し穴，溝状遺構，土師器，須恵器， 青磁，白磁，青花 染付，薩摩焼
4	上新田	薩摩川内市青山町	5,800	H21.11～21.2 H22. 5～22.9	縄　文	集石，前平式土器，吉田式土器，石坂式土器，政所式土器，中原式土器，松山式土器，黒川式土器，石鏃，磨石，敲石，石皿
					弥　生	竪穴住居跡，入来式土器，黒髪式土器，須玖式土器 磨製石鏃，磨製石斧，砥石，石皿
					古代～中世	掘立柱建物跡，土坑，石列，溝跡，土師器，須恵器 紡錘車（石製・土製），耳皿
					近　世	古道跡，陶磁器，古銭 （本報告書）
5	川　幡	薩摩川内市宮里町	4,500	H21. 2 H21.11	古　代	土師器，須恵器
					近　世	棚田石垣
6	西之城	薩摩川内市高江町	7,000	H21. 2～3	中世～近世	中世土師器，輸入陶磁器（白磁・青磁・青花） 瓦質土器（擂鉢，火鉢），石臼，管
7	川　骨	薩摩川内市高江町	12,800	H19. 9～10 H20. 5～21.3	弥生～古墳	土器集中，成川式土器
					古　代	人面墨書土器，土師器，須恵器，瓦
					中世～近世	掘立柱建物跡，溝状遺構，鍛冶炉跡，水田遺構，井戸跡，土坑，石垣，青磁，白磁，青花，染付，肥前系陶磁器，薩摩焼，鉄滓，羽口，坩堝，瓦質土器，瓦，砥石



第１図　薩摩川内都IC ～高江IC間遺跡位置図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

上新田遺跡が所在する薩摩川内市は，薩摩半島の北西部（北緯31° 47′，東経130° 17′）に位置する。北及び北東は紫尾山に続く出水山地で，阿久根市，出水市，さつま町と境をなし，東は寺山（上床山地）を中心に標高300mの山々が連なり，さつま町，姶良市に至っている。南は修験場として古くから有名な冠岳を主峰とする標高500mの山々や，高江山地によっていちき串木野市と接している。東シナ海に面し，川内川を有する薩摩川内市は，古くから陸上・水上交通の要所であり，現在でも北薩地域の政治・経済の中心地となっている。

地形は，山岳地帯，台地，沖積平野，砂丘に大別される。山地の麓には，平野を取り巻くように権現原台地や国分寺台地など低いシラス台地が発達し，宅地や畑地として利用されている。シラス台地は，山地からの河川による浸食を受けるため台地の間には狭小な谷底平野が発達するとともに，台地の縁辺部にはシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し，急崖をなし，沖積平野へと移行する。これらの平野部（河岸段丘）では，薩摩国分寺など多くの重要な遺跡が発見されている。

市の中心地は，三方を山に囲まれた盆地状の地形をなし，これらの山々は東シナ海側に向かって開けている。中心地を流れる川内川は本県最大の河川である。川内川は熊本県白髪岳に源を発し，広範囲に沖積平野を形成し，白和町付近で大きく西に流れを変え東シナ海に注いでいる。

川内川下流域に広がる平野は川内平野と呼ばれ，山地が多く平野の少ない南九州において大口盆地，出水平野，肝属平野と肩を並べる穀倉地帯である。

川内川両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約８㎞にわたって自然堤防が形成される。自然堤防上の中でも，自然堤防が最も発達した大小路町，向田町周辺は現在の市街地の中心部である。近年の調査では，自然堤防上で多くの遺構・遺物が発見され，古くから人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。

大小路町，向田町付近の沖積平野の周辺には，高城川，平佐川，隈之城川などの支流によって，狭小な谷底平野が発達している。その中の１つに隈之城町，宮崎町，百次町に広がる隈之城平野がある。平野は，薩摩川内市の南部に位置し，東を権現原台地，西を高江山地から延びる平ノ山などの平坦な台地に挟まれ南北に細長く（平野の幅は約800m）川内川方向に開けている。この平野を網流状に流れる百次川，勝目川，木場谷川は，合流して隈之城川となり，さらに下流で平佐川と合流して川内川へと注いでいる。これらの河川によって形成された隈之城平野は，薩摩川内市の中でも有数の米所であり，平野を望む周辺の台地には旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が発見されている。遺跡の多くは，隈之城平野の開発の歴史と相まって営まれてきたと考えられ，上新田遺跡もその中の１つである。

上新田遺跡は，薩摩川内市青山町字上新田に所在し，遺跡の標高は約34mで，川内川の支流である木場谷川中流の左岸の小丘陵に立地し，河床からの比高差は約５ｍである。眼下に木場谷川があり，東側にのびる丘陵となっている。丘陵の東側は，土取りされており，畑地となっている。

第２節　歴史的環境

薩摩川内市は肥沃な川内平野を有し，交通の要所でもあるために古代以来北薩地域において，政治，文化，経済の中心地であった。川内という地名は，奈良時代に薩摩国府がおかれた地域が川内川の内側にあるから「川内」，対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来するといわれ，本県における奈良・平安時代の歴史を知る上で欠かすことのできない地域である。

薩摩川内市教育委員会が1988年から1990年に行った分布調査では，旧石器時代から江戸時代の遺跡が126か所確認され，古くから途切れることなく古代人の足跡を知ることができる地である。九州新幹線建設に伴う発掘調査では，本県で調査例の少ない平野部の低湿地遺跡の調査が行われ，重要な成果をあげて注目された。以下，各時代ごとに概略を説明する。

旧石器時代

楠元町馬立遺跡において県内で初めて旧石器時代の尖頭器が発見され，この地域は，本県における旧石器時代研究の出発点となった。昭和50年代以降，隈之城バイパス建設，九州新幹線建設等の開発に伴う発掘調査が実施され，中福良町成岡遺跡，百次町上野城跡・大原野遺跡，高城町前畑遺跡から剝片尖頭器，ナイフ形石器，細石刃などが発見された。成岡遺跡，西ノ平遺跡から出土した石器は，長崎県島原半島の石器と極めて類似しており，直接あるいは密接な交流のあったことを示している。南九州西回り自動車道建設に伴う発掘調査においても，都町山口遺跡，青山町堀之内遺跡から旧石器時代の遺物が発見されており，川内平野における旧石器時代の様相が明らかになりつつある。

縄文時代

縄文時代になると，西海岸を介した交流の活発さを示す遺物が多くの遺跡で発見されている。前畑遺跡では中九州系の土器である中原式土器や，北陸地域に特徴的な新崎式土器が出土し，縄文時代早期にかなり広範囲な交流があったことが分かってきた。縄文時代前期は百次町大原野遺跡，前畑遺跡で轟Ｂ式土器が出土しているのみであるが，縄文時代後期になると遺跡数が増加してくる。

代表的な遺跡として土坑墓や骨角器が発見された陽成町麦之浦貝塚や百次町楠元遺跡がある。両遺跡とも在地の土器である市来式土器に伴って，多くの鐘崎式土器や北久根山式土器が出土しており，東シナ海に面する川内の地理的特徴をよく反映している。縄文時代晩期になると遺跡数は減少するものの，城上町計志加里遺跡では黒川式土器と縄文晩期の壺形土器が出土しており，弥生時代の到来を担う人々の存在を確認することができる。

弥生時代

弥生時代になると，川内川下流域の平野部や沼沢地が新たな生産拠点として成立してくる。

川内川の自然堤防上に立地する大小路町大島遺跡では，水田跡は検出されていないが，石包丁が出土しており，水稲耕作を生業とする生活を営んでいたことがわかる。また，弥生時代前期～終末にかけての土器や，須玖式系土器，黒髪式系土器などが出土しており，他地域との活発な交流や川内川流域の弥生土器の型式変化を知ることのできる重要な資料である。

水田稲作は中郷町京田遺跡や百次町楠元遺跡で水田跡と木製農具が発見されていることから，中期後半以降は確実に定着している。

楠元遺跡では，弥生時代終末の集落跡と，それに隣接する低地に水田跡が発見されている。また，京田遺跡の下層からは，弥生時代中期後半の水田跡が発見され，黒髪式土器が出土した。この時代の南九州の水田は伝播以来，自然の沼沢地等を利用した湿田が一般的とされる。京田遺跡で発見された水田も湿田で，地形に左右され不定形で小規模の水田跡が確認されている。これらの遺構に伴って，京田遺跡と楠元遺跡からは，木製鋤や木製鍬の農具を中心に豊富な木製品が発見されている。柄は，南九州弥生時代の伝統をそのまま継承した曲柄と膝柄である。鍬には，平鍬・三叉鍬・横鍬があり，鋤は組み合わせ式で，未製品もあることから，遺跡内での農具の生産・加工も行われていたと考えられる。

中期以降は遺跡数が増え，五代町外川江遺跡では弥生時代後期の内行花文鏡が，麦之浦遺跡では後漢鏡片が出土した。このことは，青銅器の少ない南九州弥生社会の中における川内地域の特異性を示している。また，高江町川骨遺跡では弥生終末期の土器集中区が発見され，水辺の祭祀遺構と考えられている。

これらの発掘調査は，当該地域における水田稲作の実態を明らかにするだけでなく，南九州における弥生文化の解明に繋がる重要な発見となった。

古墳時代

古墳を築造しない本県の中で，川内平野と肝属平野一帯は，古墳文化が波及し定着する注目すべき地域である。特に川内平野は在地性の強い地下式板石積石室と畿内系の高塚古墳が重複し，古墳文化周辺部の様相をよく現している。上川内町横岡古墳では５世紀～７世紀にかけて築造された７基の地下石積石室が発見されている。高塚古墳としては陵墓に指定されている宮内町可愛山稜，前方後円墳の可能性がある端稜，円墳の可能性がある宮里町安養寺丘古墳，港町船間島古墳などが知られているが，正式な調査が行われていないために詳細は不明である。また，御釣場古墳では古墳時代初頭頃の石蓋土坑墓が，五代町若宮遺跡では石棺が出土している。平成21年には天辰町で竪穴式石室をもつ天辰寺前古墳が発見された。集落遺跡は中福良町成岡遺跡や麦之浦貝塚で発掘調査が行われている他は調査例が少なく川内地域における集落研究は今後の大きな課題である。

奈良時代・平安時代

大宝元年（701年）大宝律令が制定され，律令制度による政治の仕組みがほぼ整った。それを受けて翌702年には薩摩国が日向国から分置され，御領町・国分寺町に広がる河岸段丘に薩摩国府が設置された。奈良時代末には，薩摩国府に隣接する形で薩摩国分寺が建立され，薩摩国における政治，文化の中心地となった。

1968～1970年の発掘調査によって国分寺跡の寺域や，伽藍配置などが明らかとなり，国分寺創建時の瓦を焼いた鶴峯窯跡の発掘調査も行われ，1976年には国指定遺跡に指定された。なお，国分寺跡は1981年から1984年まで国分寺跡史跡保存整備事業が実施され，現在では「薩摩国分寺跡史跡公園」として保存されている。

条里制の地名が残っている川内平野では，早くから条里地割の存在が指摘されていたが，京田遺跡から条里制の内容を記した告知札と呼ばれる木簡（木簡四面に「告知諸田刀称等　勘取□田　二段九条三里一曽□□　右件水田□□□子〔息ヵ〕□□□□□□□□□　嘉祥三年三月十四日　大領薩麻公　擬小領」と記されている）が県内で初めて出土し，その存在は決定的なものとなった。それだけでなく木簡の発見は古代の地方行政のあり方や，土地支配を考える上で重要である。薩摩国分寺跡から谷を１つ挟んだ台地上に立地する城上町計志加里遺跡では，方形周溝墓や古道跡が発見された。川内川右岸の自然堤防上に立地する大島遺跡では，高城郡の中心部を構成すると思われる集落跡が検出され，越州窯系青磁，緑釉陶器，風字二面硯，石帯が出土している。両遺跡とも薩摩国府と関係の深い遺跡であると考えられる。

さらに大島遺跡の対岸に立地する平佐町鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶炉が発見され多くの鉄製品が出土した。古代に始まった鍛冶は中世から近世にかけても引き続き行われており，川内川を利用した鉄生産の場であった。

薩摩郡と呼ばれた川内川以南に目を移すと，中福良町西ノ平遺跡では多数の掘立柱建物跡が検出され，土師器，須恵器のほかに硯，墨書土器，刻書土器，焼塩土器，帯金具などが出土しており，薩摩郡の郡衙であった可能

性が指摘されている（池畑1986）。都町の都原遺跡では，古代の完形の蔵骨器が１点出土し，山口遺跡では古代の遺物，掘立柱建物跡が発見されている。また，高江町川骨遺跡では，「御前舎入□家［　　］方神郡進出」の文字が確認できる人面墨書土器が出土した。これらの文字は，「郡が四方あるいは未申・丑寅の方向の神に献げた」と解釈でき（永山修一氏の所見），当時の薩摩国府近傍における郡の機能を知ることのできる資料である。このように，近年になって川内平野全域で調査例が増加しており，大きな成果があがっている。

鎌倉時代・室町時代・戦国時代

鎌倉時代から室町時代にかけては，島津氏，渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士に，在地領主である武光氏，薩摩氏を加え川内は領地支配をめぐる争いが絶えることがなかった。

これらの諸氏は南北朝の動乱を挟んで激しく争い，それに伴って多くの山城が築かれた。上野氏の居城である上野城跡の調査では，多くの堀立柱建物跡や方形竪穴建物跡，土坑墓，畑跡などが検出されており，中世山城の解明に繋がることが期待される。また土坑の中からは木の実やオオムギ，コムギ，イネが発見されており，当時の人々の食生活の一端を垣間見ることができる。

これらの争乱は戦国時代末期の元亀元年（1570年）に島津氏による三州統一と同時に終息を迎える。その後，天正15年（1587年）豊臣秀吉の島津征討に伴い，平佐城において激しい戦いが繰り広げられた。秀吉軍は薩摩攻めの際に，猫岳をはじめとして周辺の山などに塁を築き数万の大軍を配置したと言われており，猫岳や猪子岳の頂上には現在も塁跡が残っている。この戦いは，豊臣側と島津側の和睦によって終わりを迎え，大小路町太平寺には和睦石が残されている。このような争乱の歴史も川内の地理的な重要性を示しているといえる。

江戸時代

江戸時代には薩摩藩のもとで，北郷家がこの地域をおさめることとなり，商業が発達した。その中心地は向田町で，水陸交通の要衝として賑わった。川内川河口の久見崎には，船手奉行所が置かれ，藩の造船所があった。当地は朝鮮の役の際，薩軍が船出した港として有名である。この役で夫を亡くした婦人によって始められたと伝えられる盆踊り「想夫恋」は，県の無形民俗文化財に指定されている（1971年）。

天明年間（1781～1788年）には，北郷家の家臣，伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いた。焼かれた磁器は平佐焼と呼ばれ，県内各地に流通するなど隆盛を誇った。昭和初期に廃窯となるまで，川内の伝統工芸品を生み出していた窯跡は，市の文化財に指定されている（1967年）。近年，新窯の調査によって窯の形態や作業小屋，石垣の存在が明らかとなっている。また，近世，近代において鍛冶も盛んに行われており，天辰町吉原遺跡，平佐町鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶に関連する遺構が検出されている。川内川の船運は平佐焼や鍛冶に関わる原料の搬入と製品の搬出にも積極的に利用され，商工業の発展に大きな役割を担っていたのである。

引用参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2011「川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』165

2008「霜月田・都原遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』131

2005「京田遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』81

2005「大島遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』80

2004「上野城跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』68

2003「楠元・城下遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』57

2002「鍛冶屋馬場遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39

2002「計志加里遺跡」
『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』38

鹿児島県教育委員会

2006『先史・古代の鹿児島（通史編）』

2005『先史・古代の鹿児島（資料編）』

1984「外川江遺跡・横岡古墳」
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』30

1983「成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡」
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』28

1975『薩摩国府跡・国分寺跡』

川内市教育委員会

1991「御釣場古墳（２号墳）」
『川内市埋蔵文化財調査報告書』１

1992「川内市文化財基礎調査報告書（埋蔵文化財）」
『川内市埋蔵文化財調査報告書』２

川内市土地開発公社

1987『麦之浦貝塚』

川内郷土史編纂委員会

1995『川内市史　上巻』

川内市歴史資料館

1985『川内市文化財要覧』

池畑耕一

1986「西ノ平遺跡と薩摩郡衙（上・下）」
『隼人文化』16・18　隼人文化研究会

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	時代	地形	遺物等	備考
1	6	145	上新田	薩摩川内市　青山町上新田	縄文～中世	丘陵	貝殻文・弥生土器・土師器	平成21・22年度調査本報告
2	6	146	堀之内	薩摩川内市　青山町堀之内・焼居	古墳～中世	丘陵	土師器・陶磁器・黒曜石	平成21・22年度調査
3	6	148	山仁田	薩摩川内市　青山町山仁田	古墳～中世	台地	土師器・陶磁器・黒曜石	平成21・22年度調査
4	6	147	床並	薩摩川内市　青山町床並・岡峯	古墳～中世	台地	土師器・陶磁器・黒曜石	
5	6	144	集	薩摩川内市　中福良町集	縄文～中世	台地	土師器・黒曜石散布	
6	6	142	立石A	薩摩川内市　中福良町立石	縄文～中世	段丘	土器片	
7	6	143	立石B	薩摩川内市　中福良町立石	縄文～中世	段丘	石鏃・内黒土師器・陶磁器	
8	6	150	麦	薩摩川内市　都町麦	縄文～中世	低地	内黒土師器･須恵器･石鏃･黒曜石・鉄滓	
9	6	152	都原	薩摩川内市　都町都原	平安～室町	台地	内黒土師器・青磁・染付	平成12・14年度調査
10	6	151	山口	薩摩川内市　都町山口	旧石器～近世	台地	土師器・陶器・黒曜石	平成21～23年度調査
11	6	152	霜月田	薩摩川内市　都町霜月田	古墳～中世（室町）	台地	土器・染付・青磁	平成12・15年度調査
12	6	149	薗田	薩摩川内市　青山町薗田・薗内	古墳～中世	丘陵	土師器・陶磁器・黒曜石	
13	6	141	成岡	薩摩川内市　中福良町成岡	旧石器～近世	台地	土器片・石器・陶磁器	昭和55～59年度調査
14	6	140	西ノ平	薩摩川内市　中福良町西ノ平	旧石器～近世	台地	土器片・石器・陶磁器	昭和55～59年度調査
15	6	139	上ノ原	薩摩川内市　中福良町上ノ原	縄文～中世（安土桃山）	台地	縄文・古墳・中世の土器等	昭和55年度調査
16	6	159	湯之谷	薩摩川内市　隈之城町湯之谷	平安	山腹緩斜面	土師器	
17	6	138	西ノ口	薩摩川内市　隈之城町西ノ口	古墳	台地	土器	
18	6	157	四反畑	薩摩川内市　尾白江町四反畑	平安～中世	低地	内黒土師器・磁器・染付・鉄滓	

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	時代	地形	遺物等	備考
19	6	153	瀬戸山	薩摩川内市　木場茶屋町瀬戸山	古墳～近世	台地	土器・須恵器・青磁・白磁	
20	6	156	蕨迫	薩摩川内市　木場茶屋町蕨迫	古墳～中世（室町）	台地	土器・陶器	
21	6	154	木場原A	薩摩川内市　木場茶屋町木場原	縄文～平安	台地	土器片散布	
22	6	155	木場原B	薩摩川内市　木場茶屋町木場原	縄文～室町	台地	土器・磁器・石鏃・黒曜石	
23	6	－	川幡	薩摩川内市　宮里町	古代・近世	丘陵斜面	土師器・須恵器・陶磁器	平成20・21年度調査
24	6	162	堀ノ内	薩摩川内市　宮里町堀ノ内	古墳～中世（室町）	低地	土器・須恵器・青磁・染付	
25	6	161	宮田	薩摩川内市　宮里町宮田	古墳	台地	土器片散布	
26	6	163	日吉	薩摩川内市　宮里町日吉	古墳	微高地	土器・須恵器・鉄刀	
27	6	164	安養寺丘古墳	薩摩川内市　宮里町安養寺2,364番地	古墳	丘陵	土器	石室露出・円墳
28	6	39	別府	薩摩川内市　五代町別府	古墳～中世（室町）	低地	土器・須恵器・青磁・染付	
29	6	165	上高江原	薩摩川内市　高江町峯元・岩崎・藤花崎ほか	古墳～中世（室町）	台地	土器・白磁・染付	
30	6	193	西之城	薩摩川内市　高江町	中世	平地	土師器・陶磁器	平成20年度調査
31	6	－	川骨	薩摩川内市　高江町	弥生～近世	自然堤防	弥生土器・土師器・輸入陶磁器・国産陶磁器	平19・20年度調査

31
28
30
27
29
26
25
24
23
16
17
15
14
13
6
7
5
1
8
18
2
3
4
9
10
11
12
19
20
21
22
0
1km

第２図　周辺遺跡

第３章　発掘調査の方法

第１節　発掘調査の方法

上新田遺跡は，薩摩川内市青山町に位置する。遺跡の標高は約34mで，川内川の支流である木場谷川中流の左岸の傾斜面上に立地し，河床からの比高差は約５ｍである。（第３図）

調査に先立ち，道路建設用センター杭２本を基準に，10m間隔の区画を設定し，北から南へ１・２・３・４･･･列，東から西へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・・・列と呼称した（第４図）。調査はまず先行トレンチを設定し，遺物包含層の深度や広がりを確認した。その結果，調査範囲を東西に横切る市道より北側部分であるＡ～Ｃ-１～４区に弥生時代の遺物包含層が確認され，調査区南側Ａ・Ｂ-14・15区に縄文時代晩期の包含層が確認された。

５～７区には宅地が造成される直前まで営まれていたと思われる水田層が３層確認された。水田層の直下は地山となっており，遺物包含層は確認出来なかった。また８～13区にかけては水田層は確認できなかったものの，表土直下は地山の礫層があり，こちらも遺物包含層は確認できなかった。

これらの調査結果を受けて，調査区北側Ａ～Ｅ-１～４区及び調査区南側Ａ・Ｂ-14・15区の全面調査を実施した。全面調査は，表土を重機で剥ぎ，山鍬，ジョレン，ねじり鎌等を使用し人力で掘り下げて調査を行った。その結果，縄文時代早期から近世にかけての遺構，遺物が発見された。一括遺物以外の遺物は番号を付け，出土位置，レベルを記録した。遺構は，検出状況記録の後，埋土を除去し，写真撮影・図面作成などの記録保存を実施した。

調査区北側Ａ～Ｅ－１～４区は，北側から南側へ下る斜面部分で，調査前は住宅地であり，包含層がかなり削平されていることが予想された。しかしＡ～Ｃ－１・２区では，表土，住宅の基礎を除去したあと，調査区北側の一部で縄文時代早期土器を含むⅣ層が検出された。そしてその他の部分は，弥生時代・古代・中世の遺物を含む造成土層が検出された。この造成土の下からは黒色の古代遺物包含層が検出されたため，古代以降の造成土層と判断した。したがってこの区域は古代以降に斜面に盛土を行う造成が行われたと考えられ，古代以降の造成土層の掘り下げを行った後，弥生時代中期包含層，縄文時代早期包含層の掘り下げを人力で行った。

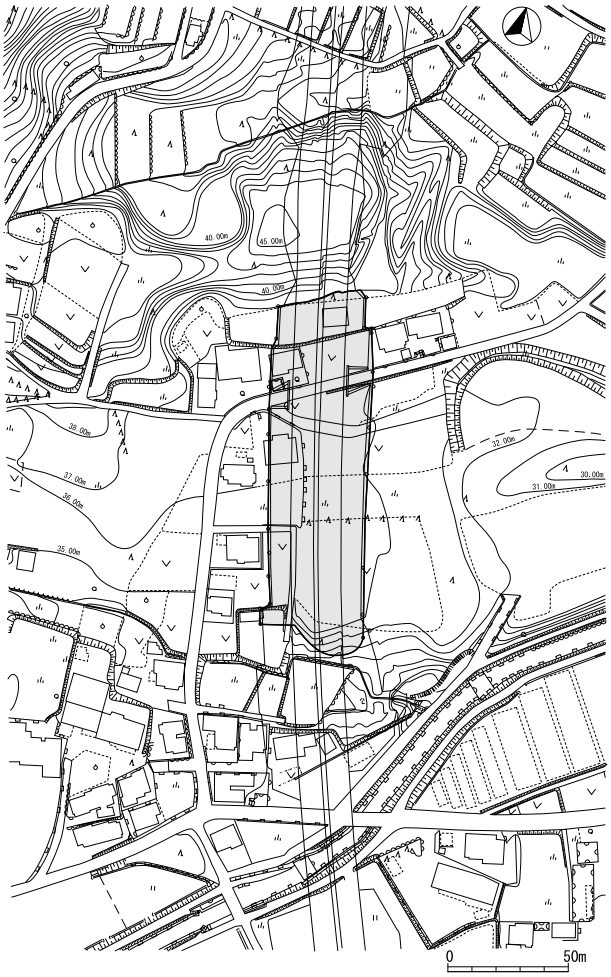
Ａ～Ｃ－３・４区は，北側から南側に下る斜面の下側の部分で，表土除去後は弥生時代の包含層Ⅲ層と縄文時代早期の包含層Ⅳ層が検出されたため，人力で掘り下げを行った。

調査の結果，これらの区域からは縄文時代早期から中世にかけての遺構・遺物が発見された。発見された遺構は縄文時代の集石１基，弥生時代の竪穴住居跡５軒，古代から中世にかけての石列，掘立柱建物跡２棟，中世の土坑４基，中世から近世にかけての道跡１条である。

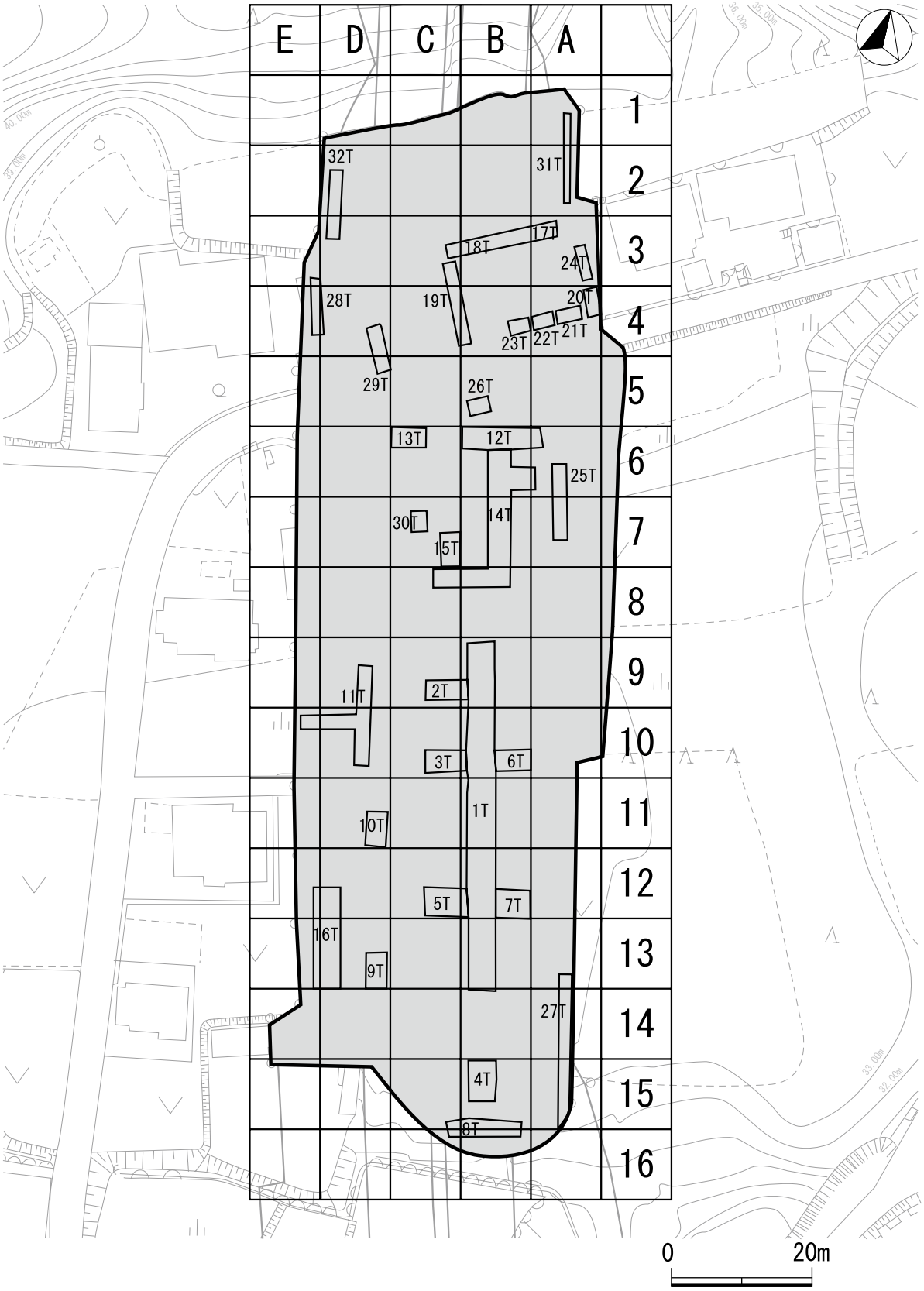
Ｄ・Ｅ－３・４区は，表土の下は現代の遺物を含むグライ化層が検出され，現代の旧水田部分と判断した。

水田層の下は地山となっており，遺物・遺構は発見されず調査を終了した。

調査区南側Ａ・Ｂ－14・15区は，木場谷川に傾斜する斜面の部分で，表土除去ののち縄文時代晩期土器が出土したⅢ～Ⅳ層を人力で掘り下げた。包含層の部分は薄く，礫層まで掘り下げた結果，近世以前の溝跡１条が検出され，縄文時代晩期土器の遺物が出土した。また，すぐ北側のＡ・Ｂ－13区部分も拡大して人力で掘り下げ調査をしたが，遺構，遺物の広がりはなかった。



第３図　遺跡周辺地形図



第４図　グリッド図およびトレンチ配置図

第２節　層序

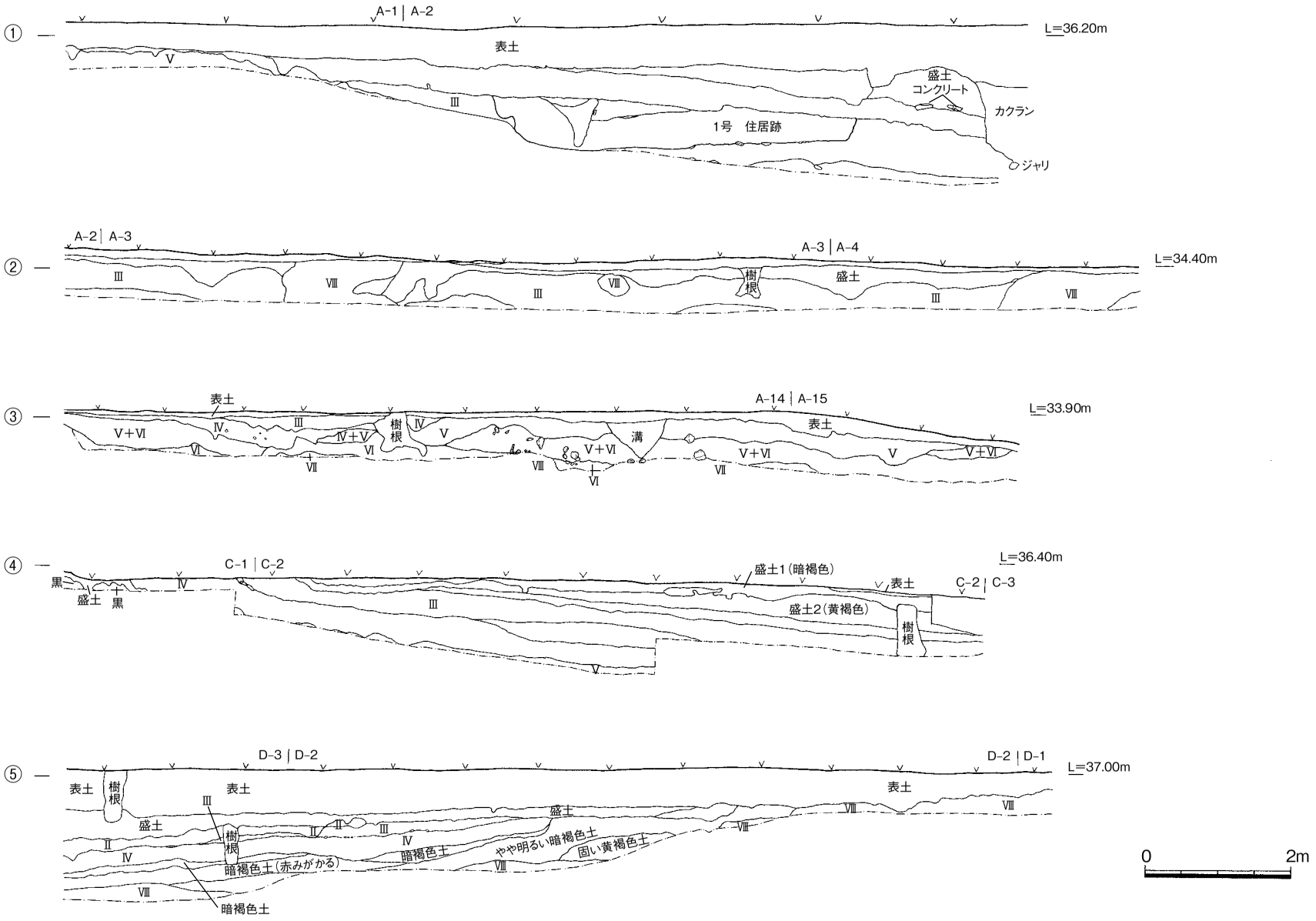
今回の調査に当たり，当初，調査区東側部分のＡ－11～15区を基準に基本層序を第３表（右）のように設定した。しかし，本遺跡は木場谷川の河岸段丘に位置することから，丘陵部分と段丘面では層序に違いが見られ，各土層の堆積状況が地点により欠落する層があるなど一定しない。また，北側から南側にくだる斜面部分にあたるＡ～Ｅ－１～３区ではⅡ～Ⅳ層の堆積が良好で，第３表（左）のように対比される。

Ⅱ層は，腐植の入る暗褐色土で古代～近世遺物包含層である。ただし古代・中世の遺物は溝跡の埋土から出土した土師器１点のみである。

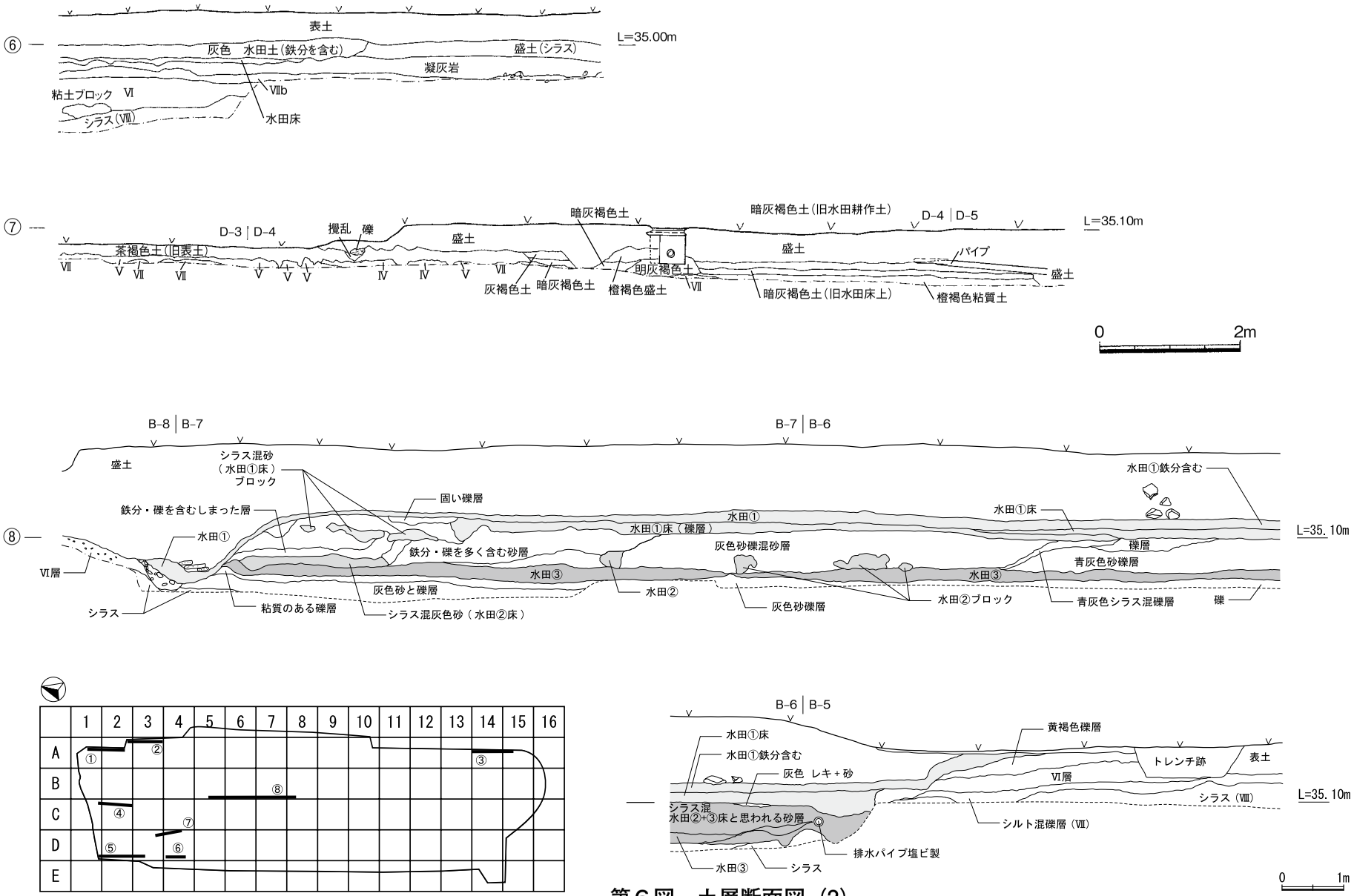
Ⅲ層は，アカホヤの二次堆積であり，層堆積は調査区北部丘陵面では40～50cmあり，弥生時代中期包含層とアカホヤ起源の黄橙色パミスを含む黄褐色土層に分層できる。調査区南部段丘面では層の堆積は薄い状況であり，Ⅱ層，Ⅳ層との分層が困難である。Ⅳ層は縄文時代早期の包含層であり，Ａ～Ｄ－１・２区及びＡ～Ｂ－14・15区で確認できた。Ⅴ層は淡褐色粘質土で，遺跡全体に広がっている。Ⅵ層は，砂混じりの礫層であるが部分的に欠落しており，点在している。Ⅶ層は，約５cm～15cm程度の大きさの礫を多く含むシルト混礫層で，遺跡全体に広がっている。Ⅷ層は白色火山灰であり，本遺跡の基盤層となる。

第３表　上新田遺跡基本土層

丘　陵　部　分（1～4区）			段　丘　面（11～15区）		
Ⅰ層	表土	宅地造成土	Ⅰ層	表土	耕作土
Ⅱ層a	黒色土	部分的に残存，古代～中世包含層	Ⅱ層	黒色土	古代～近世包含層
Ⅱ層b	黄褐色ブロックを含む暗褐色土	古代～中世の造成土			
Ⅱ層c	黒色土	古代包含層			
Ⅲ層a	濁黄褐色土	弥生時代中期包含層	Ⅲ層	黄橙色ローム	アカホヤ混じりの腐植土 縄文時代早期包含層
Ⅲ層b	黄褐色土	下部にアカホヤ起源の黄橙色パミスが入る			
Ⅳ層a	褐色土		Ⅳ層	暗褐色粘質土	縄文時代早期包含層
Ⅳ層b	暗褐色土	縄文早期包含層			
Ⅴ層	淡褐色粘質土		Ⅴ層	淡褐色粘質土	
Ⅵ層	黄褐色砂質礫層	部分的に欠落	Ⅵ層	黄褐色砂質礫層	部分的に欠落
Ⅶ層	シルト混礫層	安山岩風化礫	Ⅶ層	シルト混礫層	安山岩風化礫
Ⅷ層	白色火山灰層	シラス二次堆積	Ⅷ層	白色火山灰層	シラス二次堆積


①
A-1 | A-2
L=36.20m
表土
V
Ⅲ
盛土
コンクリート
カクラン
1号　住居跡
ジャリ
②
A-2 | A-3
A-3 | A-4
L=34.40m
Ⅲ
Ⅷ
樹根
盛土
③
表土
A-14 | A-15
L=33.90m
Ⅳ
Ⅳ+Ⅴ
Ⅴ
Ⅴ+Ⅵ
Ⅵ
Ⅶ
溝
④
C-1 | C-2
L=36.40m
黒
盛土
盛土1（暗褐色）
C-2 | C-3
盛土2（黄褐色）
⑤
D-3 | D-2
D-2 | D-1
L=37.00m
Ⅱ
暗褐色土（赤みがかる）
暗褐色土
やや明るい暗褐色土
固い黄褐色土
0
2m

第５図　土層断面図（1）


⑥
表土
L=35.00m
灰色　水田土（鉄分を含む）
盛土（シラス）
凝灰岩
粘土ブロック　Ⅵ
Ⅶb
シラス（Ⅷ）
水田床
⑦
D-3 | D-4
撹乱　礫
暗灰褐色土
暗灰褐色土（旧水田耕作土）
D-4 | D-5
L=35.10m
盛土
茶褐色土（旧表土）
パイプ
明灰褐色土
灰褐色土
暗灰褐色土
橙褐色盛土
暗灰褐色土（旧水田床上）
橙褐色粘質土
0
2m
⑧
B-8 | B-7
B-7 | B-6
盛土
シラス混砂（水田①床）ブロック
水田①鉄分含む
固い礫層
鉄分・礫を含むしまった層
水田①
水田①床
水田①床（礫層）
L=35.10m
水田①
鉄分・礫を多く含む砂層
灰色砂礫混砂層
礫層
Ⅵ層
水田③
青灰色砂礫層
水田③
灰色砂と礫層
水田②
水田②ブロック
青灰色シラス混礫層
礫
シラス
粘質のある礫層
シラス混灰色砂（水田②床）
灰色砂礫層
B-6 | B-5
水田①床
水田①鉄分含む
黄褐色礫層
トレンチ跡
表土
灰色　レキ＋砂
Ⅵ層
L=35.10m
シラス（Ⅷ）
シラス混
水田②+③床と思われる砂層
シルト混礫層（Ⅶ）
排水パイプ塩ビ製
水田③
シラス
0
1m

第６図　土層断面図（2）

第４章　調査の成果

第１節　縄文時代の調査

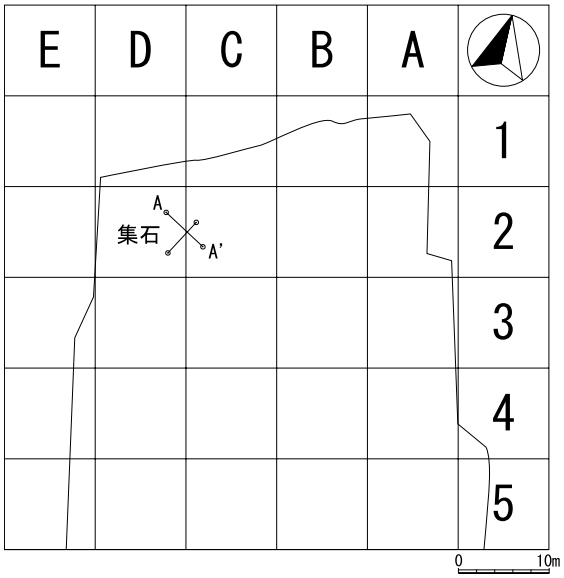
縄文時代の調査は包含層が確認されたＡ～Ｄ－１～４区の斜面部分及びＡ・Ｂ－14・15区のⅣ層を掘り下げておこなった。Ａ～Ｄ－１～４区の斜面部分では縄文時代早期の集石遺構が検出された。また，縄文時代早期の遺物，一部縄文時代後期の遺物が出土した。

Ａ・Ｂ－14・15区においては縄文時代晩期の土器を中心に遺物が出土している。遺構は検出されなかった。

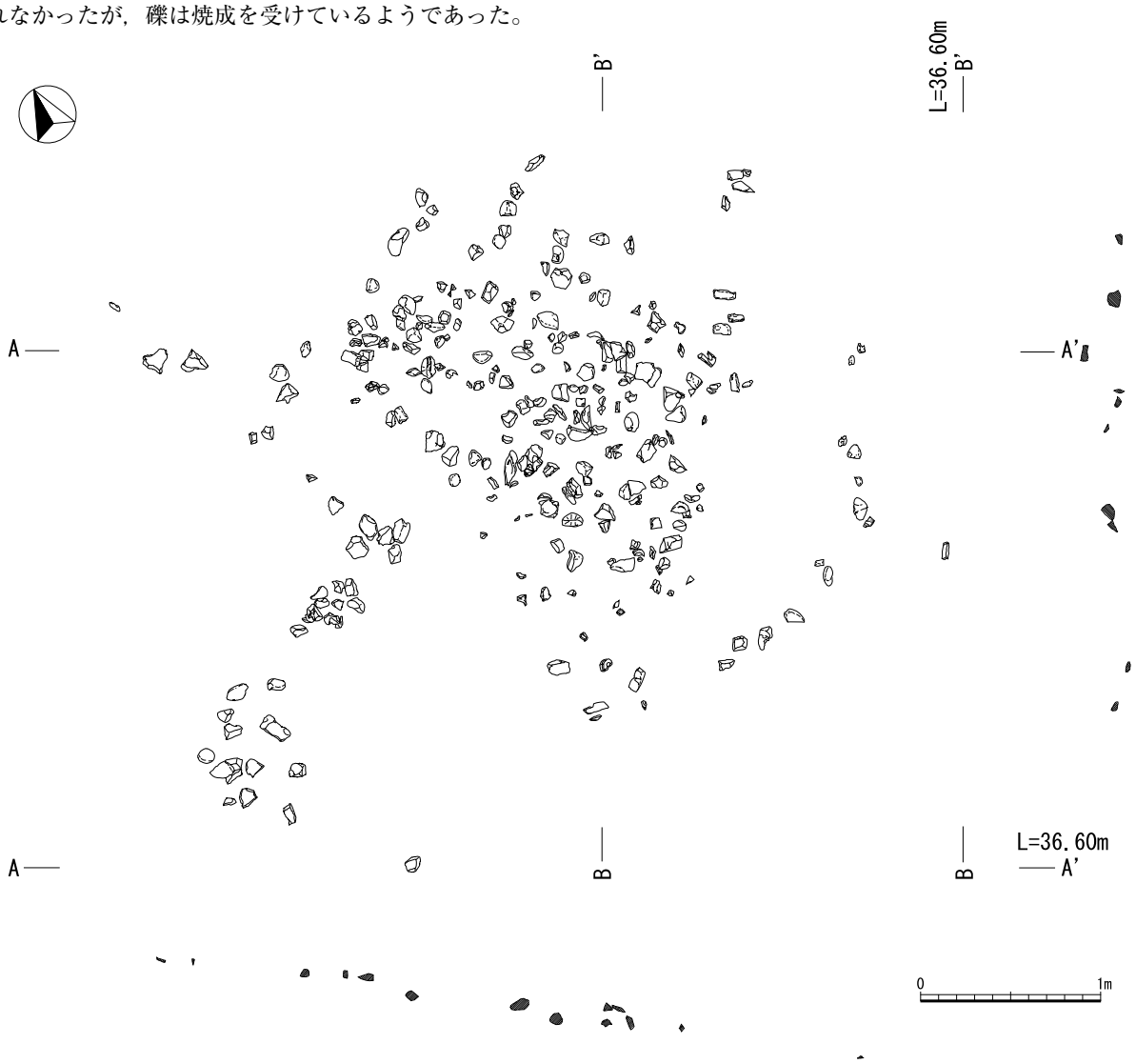
１　遺　構

集石（Ｃ・Ｄ－２区）

Ｃ・Ｄ－２区で安山岩を主体とした角礫が南北を長軸とした400cm×300cmの範囲に267個集中して検出された。彫り込みが見られないが，中央部で過密に集中している。また，集石の中心部から約２ｍ離れた東側に20cm×20cmの範囲で礫が集中した部分がある。炭化物等は見られなかったが，礫は焼成を受けているようであった。



第７図　縄文時代遺構配置図



第８図　縄文時代集石

2　遺　物

縄文時代早期（1～61）

縄文時代早期に該当する土器は，口縁部形態や施文方法により全部で８種類に分類した。

Ⅰ類土器（1～4）

粗い貝殻条痕を横方向に近い斜位に施す円筒形のもので，口唇部外面に貝殻復縁による連続した刻目を施す。口唇端部は尖ったような形状となり，内面の調整は粗いナデもしくはケズリである。

Ⅱ類土器（5・6）

胴部片のみであるが，斜位の貝殻条痕の後に縦方向の貝殻刺突が施される。小破片のため，円筒形，角筒形，レモン形の区別はできなかった。

Ⅲａ類土器（7～13）

７は円筒形の器形で,口縁部のみわずかに外開きする。口縁部以下に貝殻腹縁を縦方向に密に施すものである。口縁部文様は，縁に沿って横方向に貝殻腹縁を巡らすのみである。口唇部は平らに面取りし，浅い連続した刺突を施す。内面は丁寧なナデによるものである。これらの土器は，貝殻腹縁の刺突が縦方向に密に施文されるが，横へずらそうとする意識も窺える。

Ⅲｂ類土器（14～25）

14は下段施文に半裁竹管状の工具を用い，やや斜め方向に２段の連続した刺突を巡らす。口唇部はロッキング状に施文するため，鋸歯状にみえる。15は下段および口唇部共にロッキング状に施文するものである。これらの内面は，いずれも丁寧なナデによるものである。16は口唇部はやや斜め方向に，下段は縦方向に棒状の工具で２段の連続した刺突を巡らす。17～23は胴部で，貝殻腹縁の押圧もしくは横方向の押し引き文が施される。

Ⅳ類土器（26～29）

器形はⅢａ類やⅢｂ類と同様であるが，口縁部下位の押し引き文がみられないものである。口唇部は平らに面取りし，ロッキング状の施文がみられる。口唇部に沿って横方向の施文を２段巡らす点はⅢｂ類と同様であるが，下段の施文が貝殻腹縁もしくは櫛歯状の工具により刺突を連続させる。

時間的にⅢ類土器に近いものと考えられるが，Ⅲ類土器の指標である押し引き文がみられないことから，地域差のある例と考えられる。

Ⅴ類土器（30）

口縁部は外反せず直行する円筒形で，口唇部は平らに面取りされている。胴部は縦方向の貝殻腹縁状の施文具による条痕が施され，口縁部は横方向の条痕が施されている。

Ⅳ・Ⅴ類土器胴部・底部（31～37）

Ⅳ・Ⅴ類土器の胴部・底部と思われる土器片である。

31は横位の貝殻刺突文が一条めぐっており，口縁部に近いと思われる。32と30は同一個体の可能性がある。33～36は斜位あるいは横位の貝殻条痕文が施されている。37は平底の円筒形を呈する底部で，縦位の貝殻条痕文が施されている。

Ⅴ類土器（38）

１点のみの出土である。外側に外反する器形で器壁は厚い。口唇部は丸くなっており不明瞭ながらも連続した刺突が施されている。外側は斜位の貝殻腹縁による刺突が施される。

Ⅵ類土器（39～56）

口縁部付近しかないが，厚みのある器壁で，胴部上半は円筒形と考えられる土器である。口縁部以下は無文であり，縦方向の貝殻腹縁刺突を２段巡らしている。口縁部は丸くおさめ，同様の貝殻腹縁刺突を施す。内面は摩滅が著しいが，見える部分は丁寧なナデによるものである。胎土に角閃石はみられず，火山ガラスが多い。

Ⅶ類土器（57）

胴部がわずかにふくらみ，口縁部もわずかに外開きする円筒形の土器である。口唇部はやや丸めにおさめ，文様は施さない。口縁部外面には少なくとも５本を単位とする貝殻腹縁状の施文具で，横方向に端正な条線を巡らす。器壁が厚く，内面の調整は摩耗しているため確認することはできない。色調は黄白色であり，胎土に角閃石が目立つ。

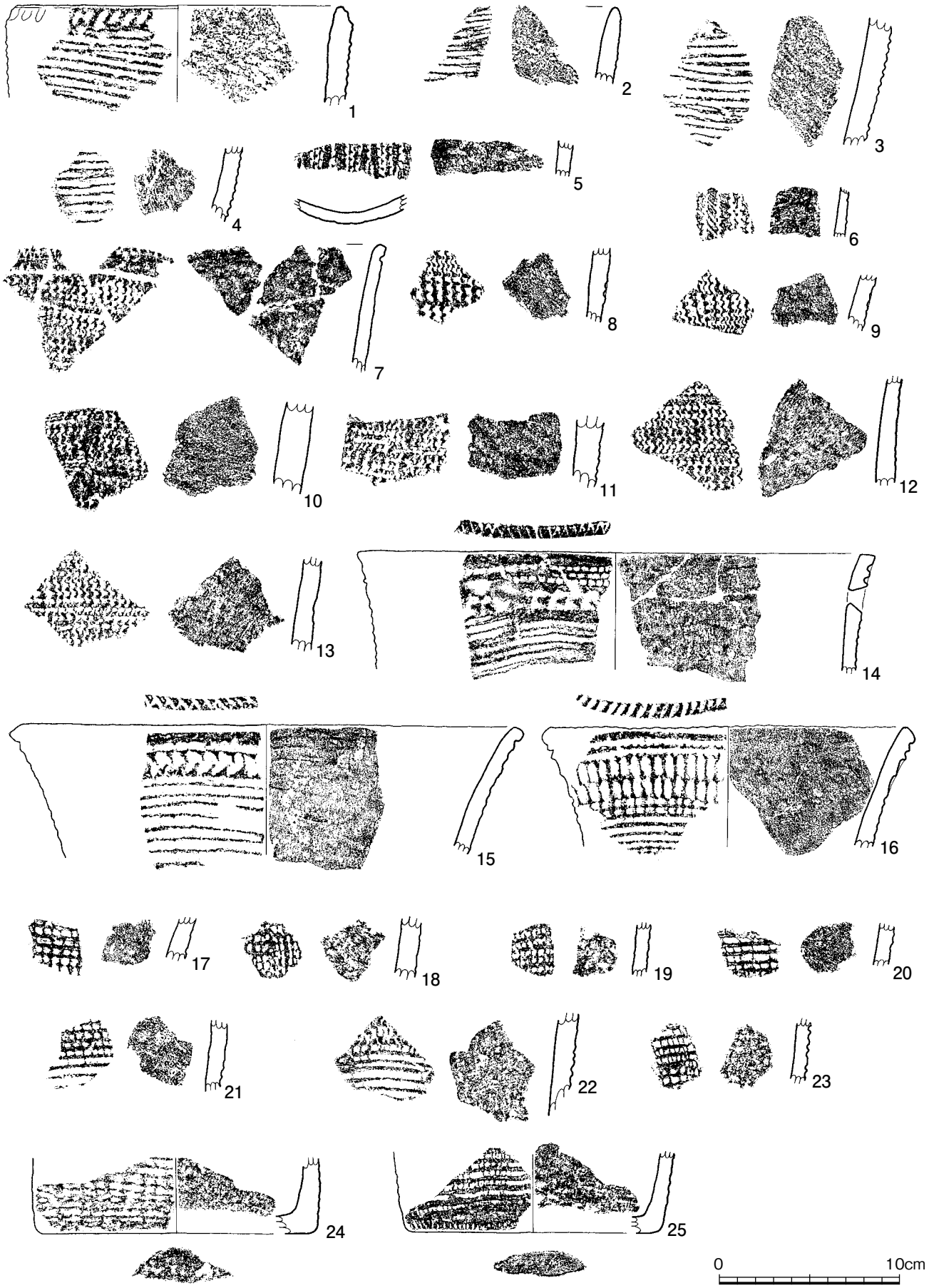
Ⅷ類土器（58～61）

Ⅰ～Ⅶ類のどの範疇にも入らないか，不明の土器群である。58は貝殻腹縁による横方向の刺突が施される。59は不明瞭であるが貝殻刺突が施される。60は楕円形の押型文土器の口縁である。61は施文具不明だが波状の文様が施される。胎土には黒色鉱物が目立つ。

縄文時代後期～晩期（62～78）

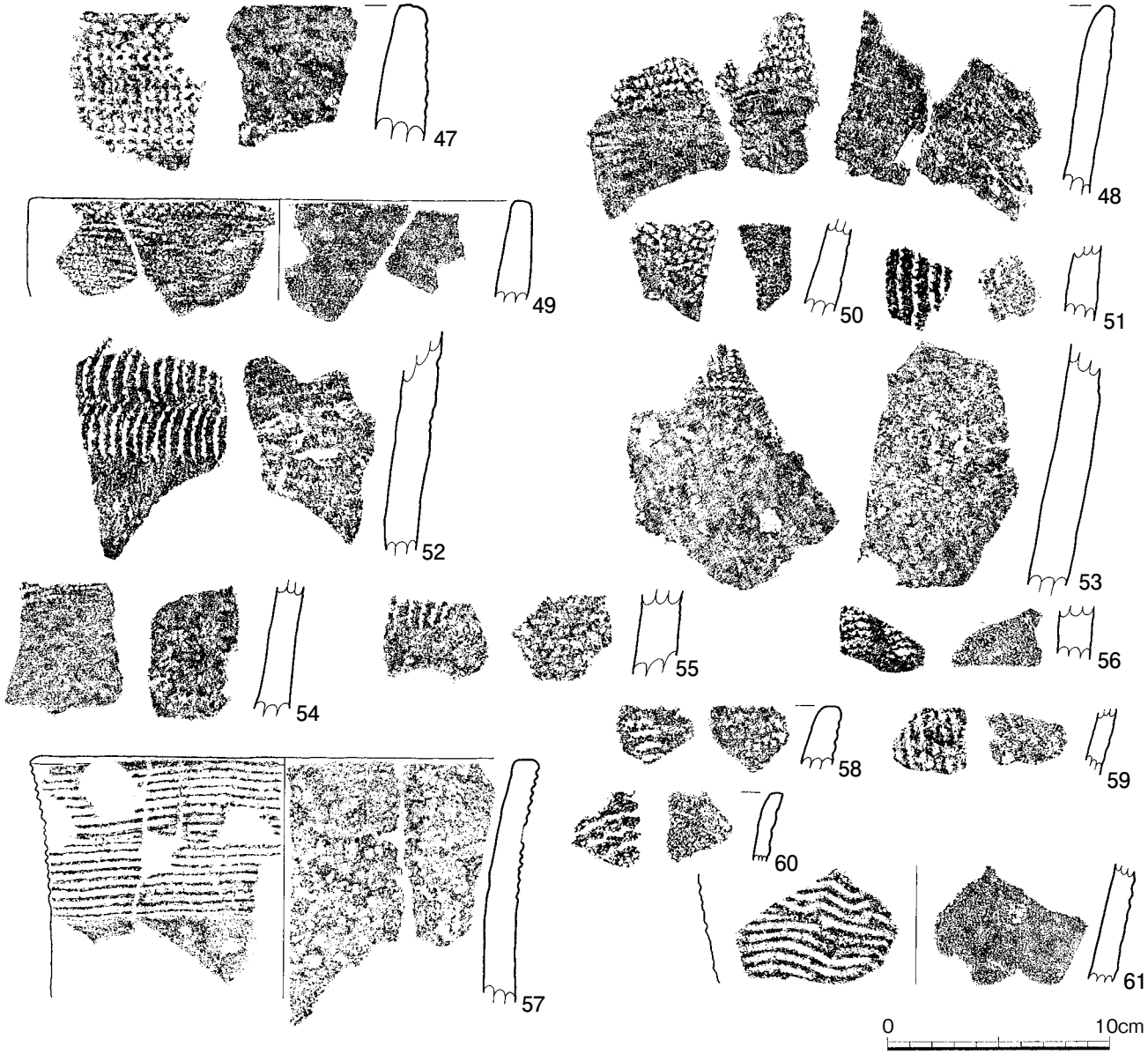
62はやや張りのある胴部から，大きく外反しながら口縁部に至る。口縁部断面は三角形に肥厚し，貝殻腹縁を連続して斜めに刺突する。復元口径は，22.6㎝である。器面調整は丁寧なナデで，色調は明褐色を呈する。胎土は，風化礫や火山ガラスが目立つ。63は大きく内弯した頸部に，外傾した短い口縁部が付く。口縁部の内外面には凹線がめぐり，口唇部は尖り気味になる。摩耗しているため器面調整は明らかでないが，おそらくミガキによるものと思われる。色調は黒褐色を呈する。胎土は，風化礫が目立つ。64は63と同様の形状であるが，色調が橙色で，胎土に赤茶色の細礫が目立つ点が異なる。65は外反気味に外傾する口縁部で,口唇部は尖る。胎土は石英・長石類が目立つ。66は外傾する口縁部で，口唇部は平らに面取りする。胎土は風化礫が目立つ。67は大きく内弯した頸部に，外傾した短い口縁部が付く。口縁部内面は凹線状となり，口唇部は平坦気味になる。色調は黒褐色

第９図　Ⅳ層（縄文時代）遺物出土状況図



第10図　縄文土器（1）

第11図　縄文土器（2）

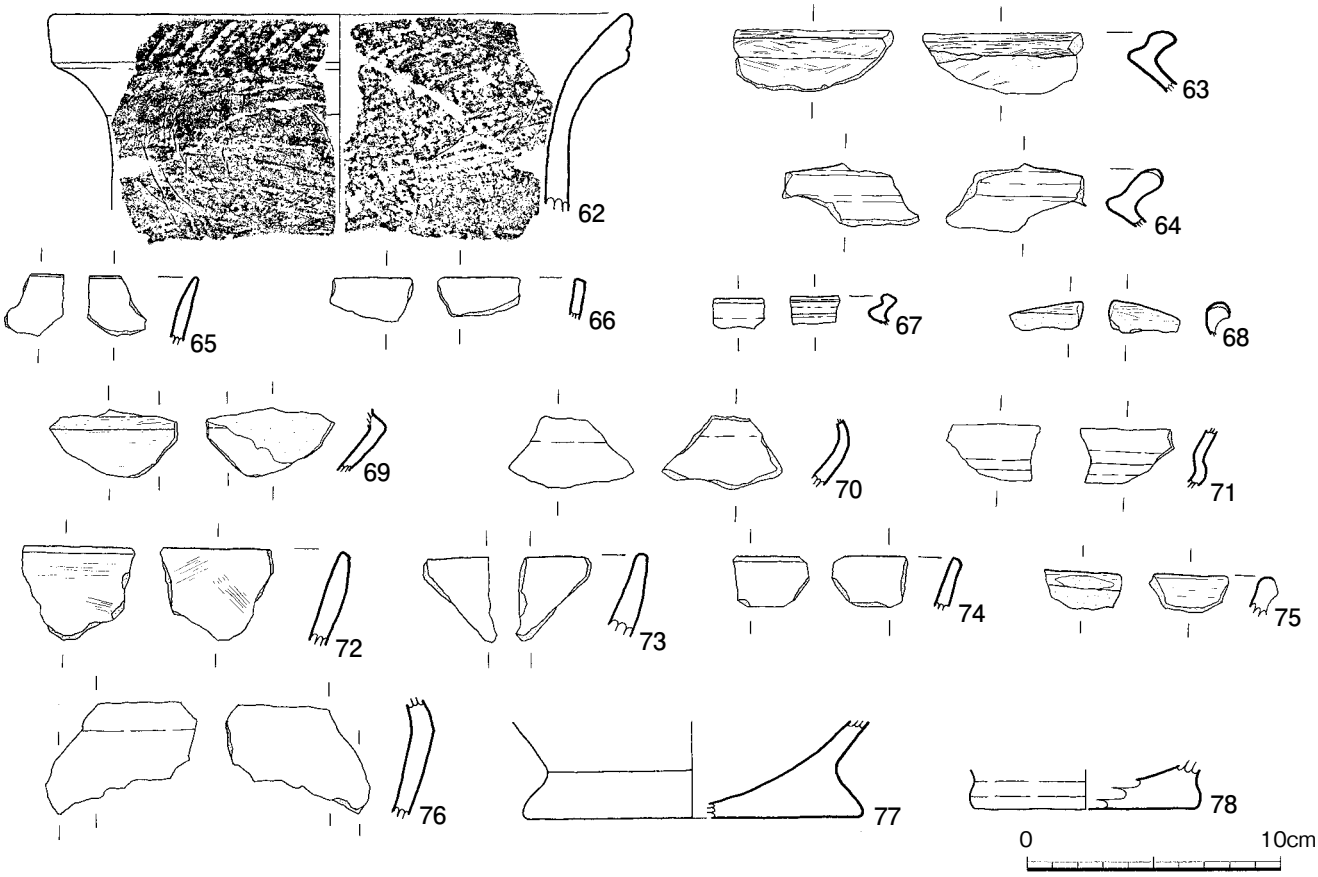


第12図　縄文土器（3）

を呈し，胎土は風化礫が目立つ。68は浅鉢形土器の口唇部と思われ，接合痕で剥落している。口唇部は丸くおさめてあり，胎土は風化礫が目立つ。69は外傾した体部から，「く」の字状に内屈し，外反する頸部もしくは口縁部に至る。胎土は風化礫が目立つ。70は内側に弯曲する浅鉢形土器の胴部と思われる。胎土は赤茶色の礫が目立つ。71は体部から「く」の字状に内屈し，直行する頸部もしくは口縁部に至る。胎土は石英・長石類が目立つ。72は外傾する口縁部で，口唇部は平らに面取りする。胎土は黒色鉱物が目立つ。73は内弯気味の口縁部で，口唇部は丸くおさめる。胎土は黒色の火山ガラスが目立つ。74は外傾する口縁部で，口唇部は平らに面取りする。胎土は火山ガラスが目立つ。75は口唇部のみの破片である。深鉢形土器であると思われる。口唇部は丸くおさめてあり，胎土は石英・長石類が目立つ。76は胴部で内側に屈曲する深鉢形土器と推定される。胎土は黒色鉱物が目立つ。77は大きな張り出しをもつ深鉢形土器の底部である。底径は13.4cmに復元される。胎土は黒色鉱物や透明の石英が目立つ。78はわずかに張り出しをもつ円盤状の底部である。底径は8.6cmに復元される。胎土は火山ガラスが目立つ。

第４表　縄文土器観察表①

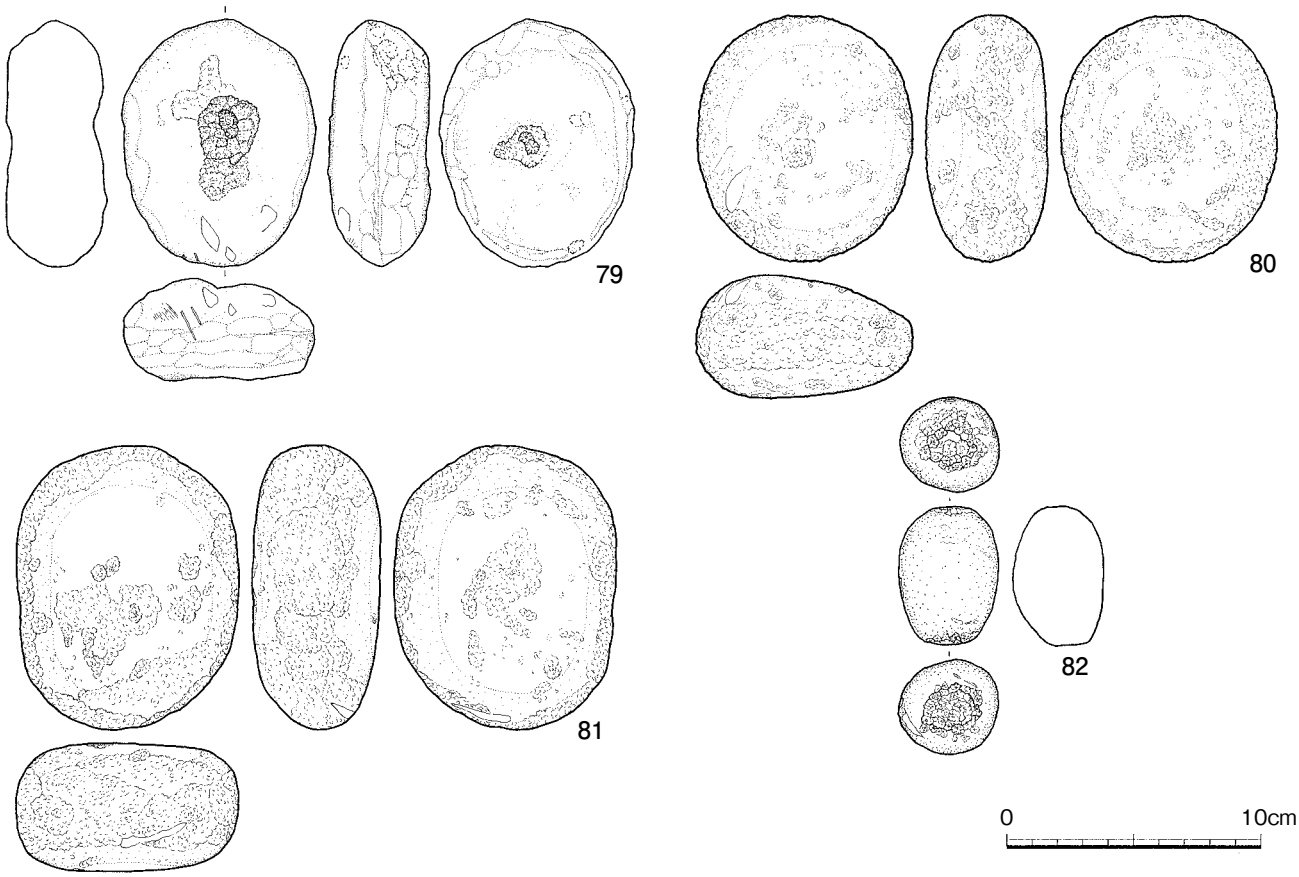
挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	類	部位	出土区	色調		文様・調整		口径	底径	器高	胎土				備考
								外面	内面	外面	内面	(cm)	(cm)	(cm)	石英	長石	角閃石	その他	
10	1	深鉢	Ⅲ	1353	Ⅰ	口縁	B－２	明褐	明褐	貝殻条痕	ナデ	17.6	－	－	○	○			
	2	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅰ	口縁	B－２	にぶい橙	にぶい橙	貝殻条痕	ナデ	－	－	－	○	○		スコリア	
	3	深鉢	Ⅳ	1535	Ⅰ	胴部	B－２	にぶい黄橙	橙	貝殻条痕	ナデ	－	－	－	○	○		ｽｺﾘｱ・細礫	
	4	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅰ	胴部	B－２	橙	明褐	貝殻条痕	ナデ	－	－	－	○	○		スコリア	
	5	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅱ	胴部	A－２	橙	にぶい橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	6	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅱ	胴部	B－２	黒褐	明褐	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	7	深鉢	Ⅳ	1513	Ⅲa	口縁	C－1･2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○		スコリア	
	8	深鉢	Ⅲ	一括	Ⅲa	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	9	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅲa	胴部	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	10	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅲa	胴部	B－１	にぶい黄橙	浅黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○		スコリア	
	11	深鉢	Ⅳ	1518	Ⅲa	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	12	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅲa	胴部	B－１	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○		スコリア	
	13	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅲa	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄褐	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	14	深鉢	Ⅲ	1240	Ⅲb	口縁	A－２	明褐	明褐	刺突･条痕	ナデ	28.6	－	－	○	○			補修孔あり
	15	深鉢	Ⅳ	1555	Ⅲb	口縁	C－２	にぶい橙	橙	刺突･条痕	ナデ	27.8	－	－	○	○			
	16	深鉢	表	一括	Ⅲb	口縁	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刺突･条痕	ナデ	19.6	－	－	○	○			
	17	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅲb	胴部	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	18	深鉢	Ⅳ	1558	Ⅲb	胴部	C－２	明黄褐	黄褐	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	19	深鉢	Ⅳ	1515	Ⅲb	胴部	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	20	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅲb	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	21	深鉢	Ⅲ	一括	Ⅲb	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄	刺突･条痕	ナデ	－	－	－	○	○			
	22	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅲb	胴部	A－２	にぶい橙	暗灰黄	刺突･条痕	ナデ	－	－	－	○	○			
	23	深鉢	Ⅳ	1453	Ⅲb	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	24	深鉢	Ⅳ	1456	Ⅲb	底部	B－２	にぶい橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	15.2	－	○	○	○		
	25	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅲb	底部	B－２	にぶい黄橙	浅黄	貝殻刺突	ナデ	－	13.4	－	○	○			
11	26	深鉢	Ⅳ	1511･1530	Ⅳ	口縁	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	沈線	ナデ	14.4	－	－	○	○		細礫	
	27	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅳ	口縁	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	刺突･条痕	ミガキ	－	－	－	○	○			
	28	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅳ	口縁	C－２	明褐	明褐	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○			
	29	深鉢	Ⅲ	1535	Ⅳ	口縁	B－２	にぶい黄	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	30	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅴ	口縁	C－１	橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	14.0	－	－	○	○			
	31	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅳ･Ⅴ	胴部	A－１	にぶい黄橙	浅黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	32	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅳ･Ⅴ	胴部	B－２	橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	－	－	－	○	○		細礫	
	33	深鉢	Ⅳ	1546	Ⅳ･Ⅴ	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ﾅﾃﾞ･ﾐｶﾞｷ	－	－	－	○	○		細礫	
	34	深鉢	Ⅳ	1521	Ⅳ･Ⅴ	胴部	C－２	橙	橙	貝殻条痕	ミガキ	－	－	－	○	○			
	35	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅳ･Ⅴ	胴部	B－１	明赤褐	明赤褐	貝殻条痕	ミガキ	－	－	－	○	○			
	36	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅳ･Ⅴ	胴部	B－２	橙	にぶい黄褐	貝殻条痕	ナデ	－	－	－	○	○		細礫	
	37	深鉢	不明	一括	Ⅳ･Ⅴ	底部	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	－	12.6	－	○	○			
	38	深鉢	Ⅱ	一括	Ⅴ	口縁	D－３	にぶい黄橙	明黄褐	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	39	深鉢	Ⅳ	1540	Ⅵ	口縁	B－1･2	明黄褐	明黄褐	貝殻刺突	ﾅﾃﾞ･ﾐｶﾞｷ	35.0	－	－	○	○		ｽｺﾘｱ・細礫	
	40	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅵ	口縁	B－２	にぶい黄	にぶい黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○		細礫	
	41	深鉢	Ⅳ	1472	Ⅵ	口縁	B－２	明黄褐	明黄褐	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○		細礫	
	42	深鉢	Ⅳ	1558	Ⅵ	口縁	C－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○			
	43	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅵ	口縁	B－２	にぶい黄橙	にぶい橙	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○			
	44	深鉢	Ⅳ	1480	Ⅵ	口縁	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○			
	45	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅵ	口縁	B－２	橙	明黄褐	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	46	深鉢	Ⅳ	1543	Ⅵ	口縁	B－２	橙	浅黄橙	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○			
12	47	深鉢	Ⅳ	1553	Ⅵ	口縁	C－２	橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○		細礫	
	48	深鉢	Ⅱa	一括	Ⅵ	口縁	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	49	深鉢	Ⅳ	1539･1544	Ⅵ	口縁	B－２	暗オリーブ褐	浅黄橙	貝殻刺突	ミガキ	21.5	－	－	○	○			
	50	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅵ	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	51	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅵ	胴部	B－２	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	52	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅵ	胴部	B－２	橙	橙	貝殻刺突	ﾅﾃﾞ･ﾐｶﾞｷ	－	－	－	○	○			
	53	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅵ	胴部	B－２	にぶい黄	浅黄	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	54	深鉢	Ⅳ	1552	Ⅵ	胴部	C－１	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ミガキ	－	－	－	○	○			
	55	深鉢	Ⅳ	1455	Ⅵ	胴部	B－２	にぶい黄褐	橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	56	深鉢	Ⅱb	一括	Ⅵ	胴部	B－２	にぶい褐	褐	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	57	深鉢	Ⅴ上	1111	Ⅶ	口縁~胴部	D－２	にぶい黄橙	浅黄橙	貝殻条痕	ナデ	22.8	－	－	○	○	○		
	58	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅷ	口縁	B－１	にぶい褐	明褐	貝殻条痕	ナデ	－	－	－	○	○			
	59	深鉢	Ⅲ	一括	Ⅷ	胴部	B－２	橙	にぶい黄橙	貝殻刺突	ナデ	－	－	－	○	○			
	60	深鉢	Ⅳ	1048	Ⅷ	口縁	B－13	明赤褐	にぶい橙	楕円押型	ナデ	－	－	－	○	○		スコリア	
	61	深鉢	Ⅳ	18T 8	Ⅷ	胴部	B－２	明赤褐	にぶい橙	波状沈線	ミガキ	－	－	－	○	○	○		



第13図　縄文土器（4）

第５表　縄文土器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	類	部位	出土区	色調 外面	色調 内面	文様・調整 外面	文様・調整 内面	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 その他	備考
13	62	深鉢	Ⅳa	1387 1385 1462	Ⅶ	口縁	C－２	明褐	明褐	貝殻刺突	ナデ	22.6	－	－	○	○		火山ガラス･細礫	
	63	浅鉢	Ⅲ	7	Ⅷ	口縁	B－15	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○		火山ガラス･細礫	
	64	浅鉢	Ⅲ	2	Ⅷ	口縁	B－15	橙	黄褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○		スコリア	
	65	浅鉢	Ⅳ	一括	Ⅷ	口縁	B－14	灰黄褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○			表面風化
	66	浅鉢	Ⅳ	一括	Ⅷ	口縁	A－14	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○			表面風化
	67	浅鉢	Ⅲ	一括	Ⅷ	口縁	B－14	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○			
	68	浅鉢	Ⅲ	7	Ⅷ	口縁	B－15	黒褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○			
	69	浅鉢	Ⅳ	1327	Ⅷ	胴部	B－14	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○		スコリア	
	70	浅鉢	Ⅲ	11	Ⅷ	胴部	B－15	にぶい黄橙	黄褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○		スコリア	
	71	浅鉢	Ⅳ	578	Ⅷ	胴部	A－14	にぶい黄橙	にぶい黄橙	半粗半精	半粗半精	－	－	－	○	○		スコリア	
	72	深鉢	Ⅳ	1325	Ⅷ	口縁	B－14	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○	○	細礫	
	73	深鉢	Ⅳ	572	Ⅷ	口縁	A－14	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○		火山ガラス	表面風化
	74	深鉢	Ⅳ	一括	Ⅷ	口縁	B－14	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○		火山ガラス	表面風化
	75	深鉢	Ⅳ	1512	Ⅷ	口縁	B－２	暗灰黄	暗灰黄	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○			
	76	深鉢	Ⅳ	564･601	Ⅷ	胴部	A－14	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	－	－	－	○	○	○		表面風化
	77	深鉢	Ⅲ	28T ４	Ⅷ	底部	B－４	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	13.4	－	○	○	○		
	78	深鉢	Ⅲ	13	Ⅷ	底部	B－15	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	8.6	－	○	○		火山ガラス	表面風化



第14図　Ⅳ層出土の石器（1）

Ⅳ層出土の石器（79～84）

Ⅳ層（暗褐色土）出土の石器で，土器との共伴関係から縄文時代早期に位置づけられる。

磨石・敲石類　79は平面形が楕円形を呈する凝灰岩の円礫である。背面の中央付近には明瞭な凹があり，腹面側にも浅い凹がみられる。風化が激しく，擦痕や敲打痕は不明瞭であるが，上下両端部の形状から敲打の痕跡がうかがわれるほか，同様に平坦面を有する裏面は磨石として使用されたと考えられる。

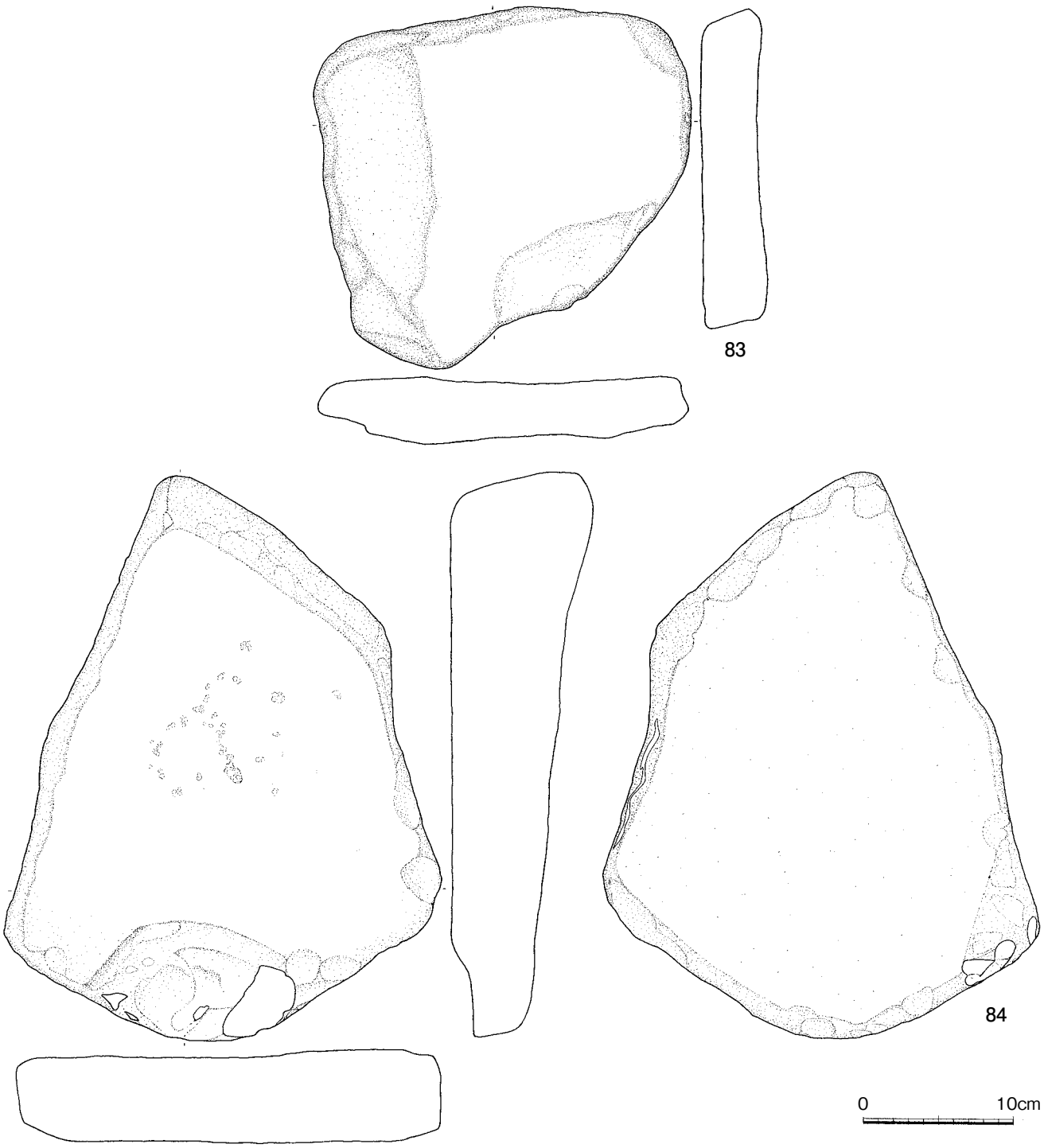
80は平面形が略円形を呈する安山岩の円礫で，周縁のほぼ全面に敲打痕がある。表裏面の中央付近にも敲打痕が集中し，浅い凹を形成する。風化もあり擦痕は観察できないが，平坦化した裏面形状から磨石としても使用されたものとみられる。

81は安山岩の円礫を素材とする磨石・敲石で，左右側縁は敲打により側面が形成され，断面が隅丸方形状を呈する。上・下辺および表・裏面の中央付近にも敲打の痕跡がみられ，裏面には浅い凹が生じている。また，表・裏面の緩やかに外弯する平坦面は磨石として使用されたものとみられる。

82は卵形大の安山岩円礫で，上・下両端部は敲打および「敲打つぶれ」により端部が著しくつぶれ，面状を呈する。石器製作に用いられた可能性が高い。

石皿　83は扁平な安山岩の亜角礫である。素材礫の性質もあり擦痕は観察できないが，表面の礫皮面上に磨滅が認められる。石皿として提示したが，最大長約25cmを計るが，使用痕の範囲を考慮すると砥石として使用されたものかもしれない。

84は最大長37.5cm，重量1.2kgのやや厚みのある安山岩の亜角礫で，表面の平坦部分には磨滅が認められるほか，敲打痕が疎らにみられる。石皿としての使用が考えられる。



第15図　Ⅳ層出土の石器（2）

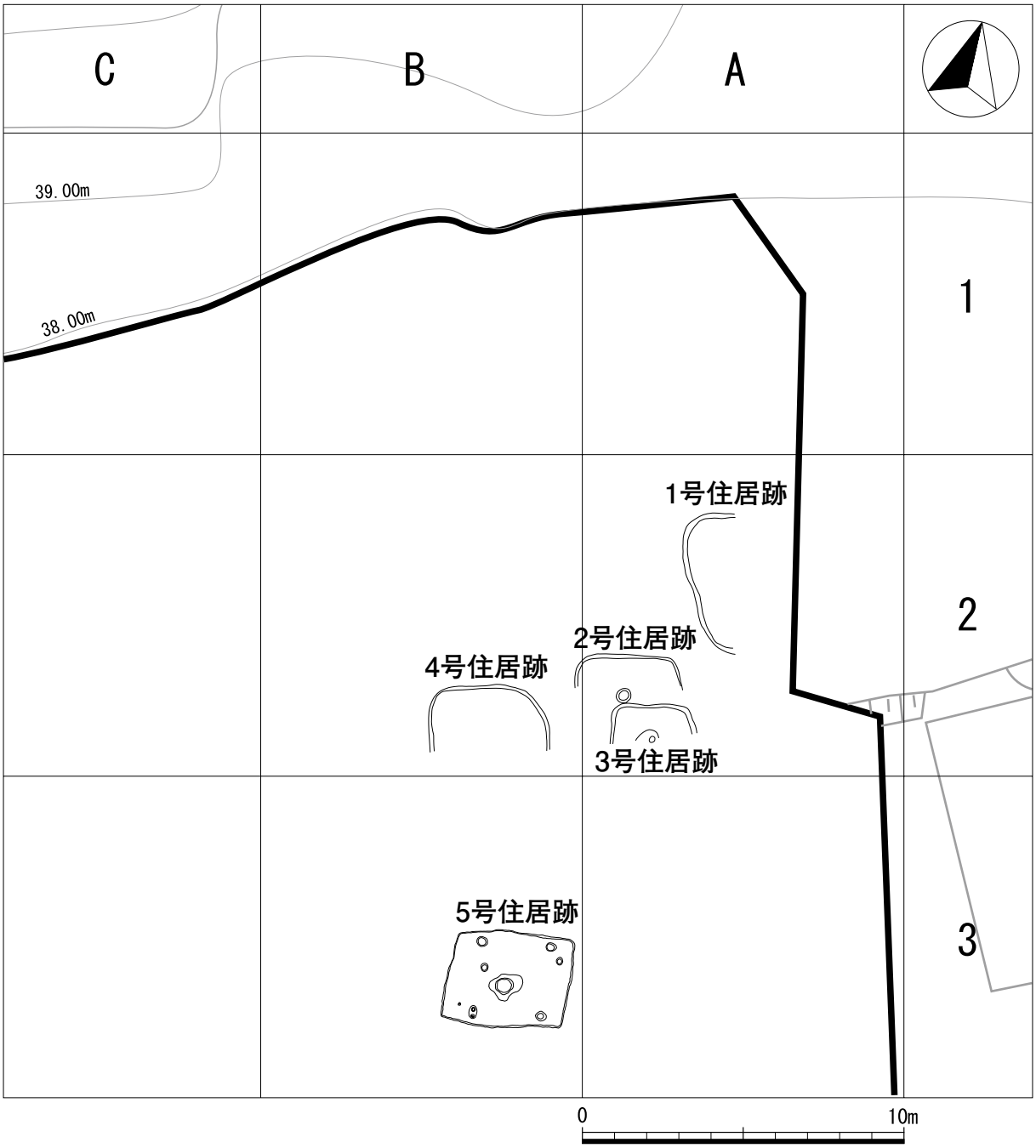
第６表　Ⅳ層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
14	79	凹石	Ⅳ	凝灰岩	B－1	－	1550	9.8	7.7	4.0	294	
	80	磨石・敲石	Ⅳ	安山岩	C－1	－	1524	9.7	8.6	4.9	440	
	81	磨石・敲石	Ⅳ	安山岩	B－13	－	1322	11.2	8.8	5.1	588	
	82	敲石	Ⅳ	安山岩	B－2	－	一括	5.6	4.0	3.8	80	
15	83	石皿	Ⅳ	安山岩	B－1	－	1534	21.2	24.8	3.8	4,200	
	84	石皿	Ⅳ	安山岩	A－2	－	1549	37.4	28.3	9.5	12,000	東側トレンチ

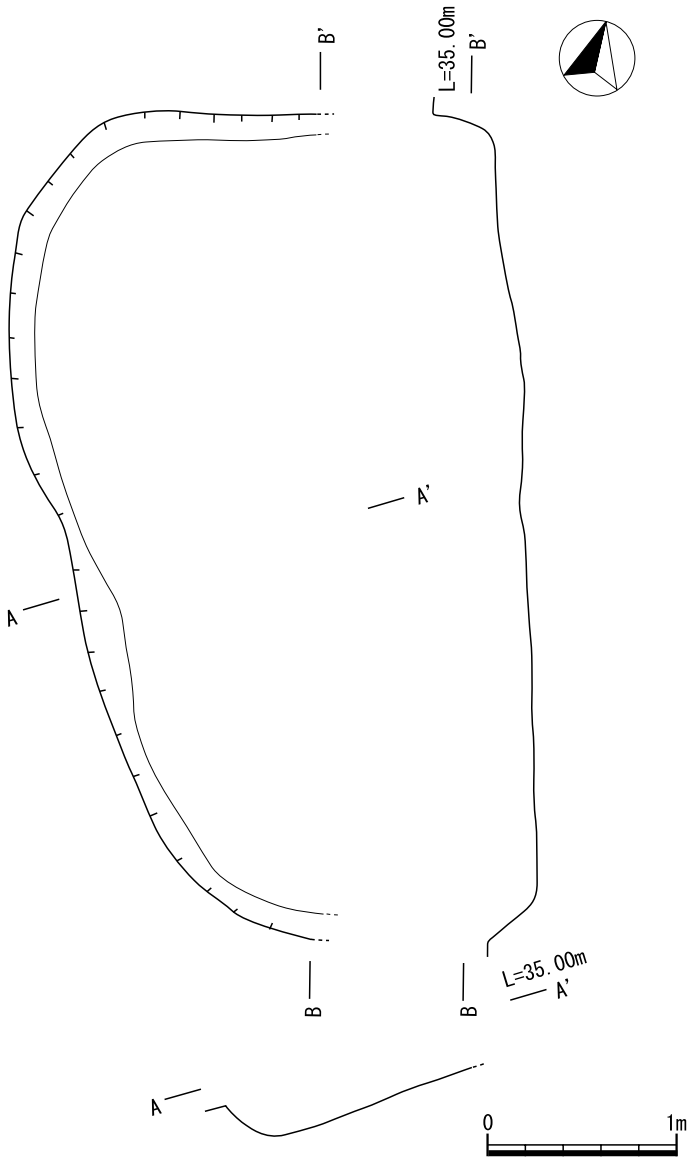
第２節　弥生時代の調査

１　遺　構

弥生時代の遺構として，Ａ・Ｂ－２区，Ｂ－３区で竪穴住居跡５軒が検出された。いずれもⅢ層からの検出で，遺構内遺物，包含層遺物の出土状況から，弥生時代中期の遺構と考えられる。１号住居跡は調査区外まで広がっていると思われる。２号住居跡の南側は３号住居跡に切られており，また後世の斜面造成の際にも削平されたと考えられる。３号・４号住居跡は現代の宅地境界のブロック塀で切られていた。５号住居跡は今回の調査で唯一完全なプランが検出されたが，現代の住宅地の造成によって上面はかなり削平されていたと思われる。１～４号はほぼ同じ方向である。完全なプランは検出できなかったが，検出状況から５号と同様の方形プランであると推測できる。また，２・３・５号には，中央部に炉跡と思われる円形の炭化物の集中域が検出された。５号では柱穴が検出されたが，その他の住居跡では柱穴は確認できなかった。いずれも床面は若干硬化していたが，貼床は検出されなかった。埋土は暗褐色土の単層で，縄文時代の遺物も混入している。石器については縄文時代と弥生時代の判別ができなかった。したがって縄文時代の石器も図化した可能性があることを明記しておく。



第16図　弥生時代遺構配置図



第17図　１号住居跡

１号住居跡

Ａ－２区東端で検出された。東側は調査区域外であり，西側およそ半分のみの検出となった。西側の南北方向の１辺は約3.5mである。検出面からの深さは約30cmであった。埋土は暗褐色土単層である。検出された状況から方形のプランと考えられる。床面はほぼ平坦で，柱穴，炉跡は検出されなかった。

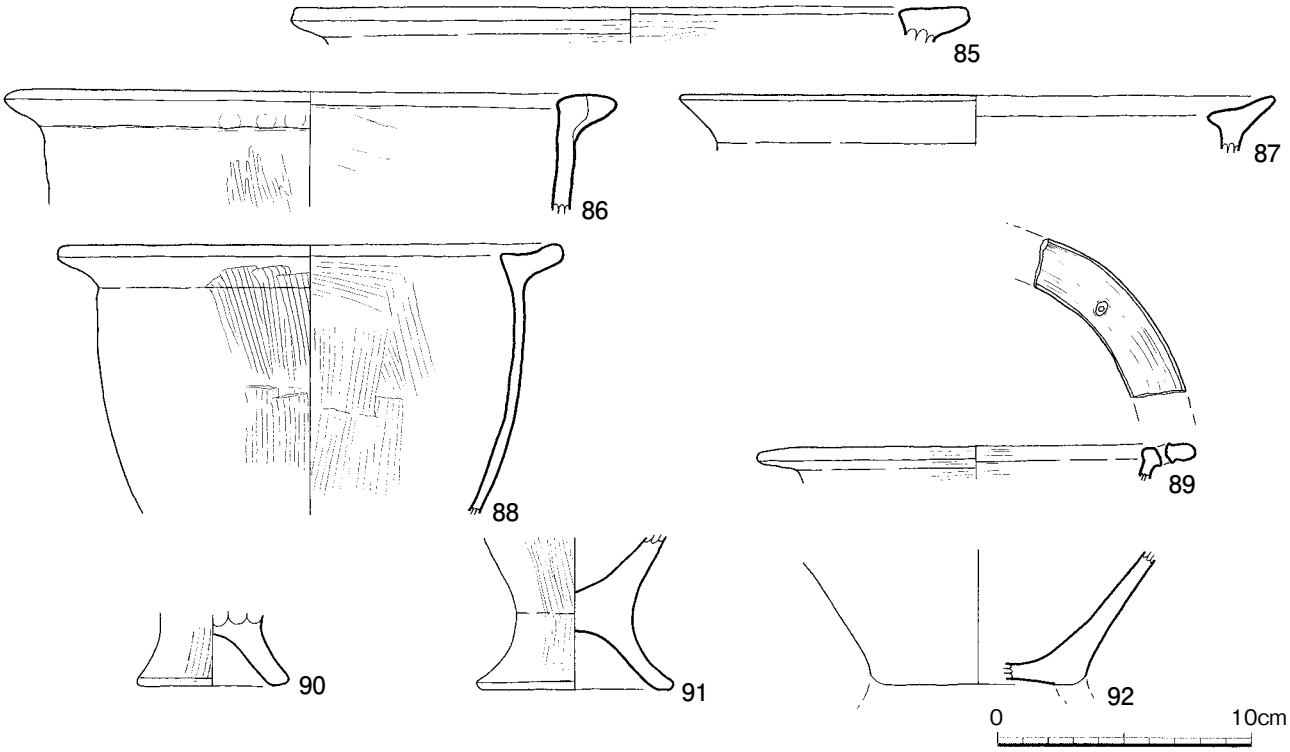
１号住居跡出土の土器（85～92）

弥生時代中期の在地土器と外来系土器が出土した。

85，86は在地の甕形土器である。85は，口縁端部が矩形を呈しわずかに凹む入来Ⅱ式である。86は，入来式に似るが，口縁部先端が尖り気味に丸くおさまっており，口縁部先端形状から中部九州の黒髪式あるいは北部九州の須玖式の影響があると思われる。

87，88は，口縁部が内部に突出し，上方に傾く。胎土に黒色鉱物を含み，器形，胎土から外来系の黒髪式の甕形土器である。88は，器壁が薄く，内外面には明瞭なハケメが施されている。黒髪Ⅱ式古段階であろう。本資料付着の炭化物については，年代測定を行っている（自然科学分析97頁参照。試料名３：ＩＡＡＡ－103492）。

89は，胎土に黒色鉱物を含む黒髪式の小型の甕形土器である。口縁部に穿孔が施されている。90，91は，甕形土器底部である。外面にはハケメが施され，底部内面天井部はドーム状を呈している。内面には横ナデが施されることなどから，黒髪式甕形土器の底部といえる。92は中期の甕形土器の底部で，胎土は在地的である。平底状であるが，脚の接合部が摩耗しているようにも見え，脚がついていた可能性がある。



第18図　１号住居跡出土遺物（1）

第７表　１号住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
18	85	1号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい褐	赤褐	ナデ	ナデ	21	－	－	○	○		火山ガラス	
	86	1号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ハケメ・ナデ	ナデ	20.6	－	－	○			細礫	
	87	1号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	22.8	－	－	○		○		
	88	1号住居跡	甕形土器	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ハケメ	19.2	－	－			○		
	89	1号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	15	－	－	○	○	○	スコリア	
	90	1号住居跡	甕形土器	底部	にぶい黄	灰黄	ハケメ	ナデ	－	5	－	○	○	○		
	91	1号住居跡	甕形土器	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	－	6.4	－	○	○	○		
	92	1号住居跡	甕形土器	底部	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○		細礫	

１号住居跡出土の石器（93～100）

磨製石鏃　２点が出土している。いずれも珪質を帯びた良質な頁岩製である。94は，両側辺とも鋭利に仕上げられ，正面先端部及び裏面左上辺には衝撃によるとみられる剥離が生じている。

磨製石斧（剥片）　95は研磨面を有する剥片であり，その弯曲の形状から磨製石斧の刃こぼれによるものである。本体は発見されていない。

石核　96は漆黒色を呈し白色の不純物を含む黒曜石製の石核で，分割面を打面とし不定形な剥片を剥出する。縄文時代の遺物と思われるが，竪穴が掘られた際にまぎれこんだものと思われる。

磨石・敲石類　97は安山岩の棒状の亜角礫で，両端部に敲打痕がみられる。98は周縁部分が赤化した砂岩礫で，被熱によるとみられる。図，正面は平坦な磨面で，砥石として使用されたと考えられる。

台石　99は大型の安山岩の亜円礫である。図，正面中央のやや平坦な部分に敲打痕がみられる。

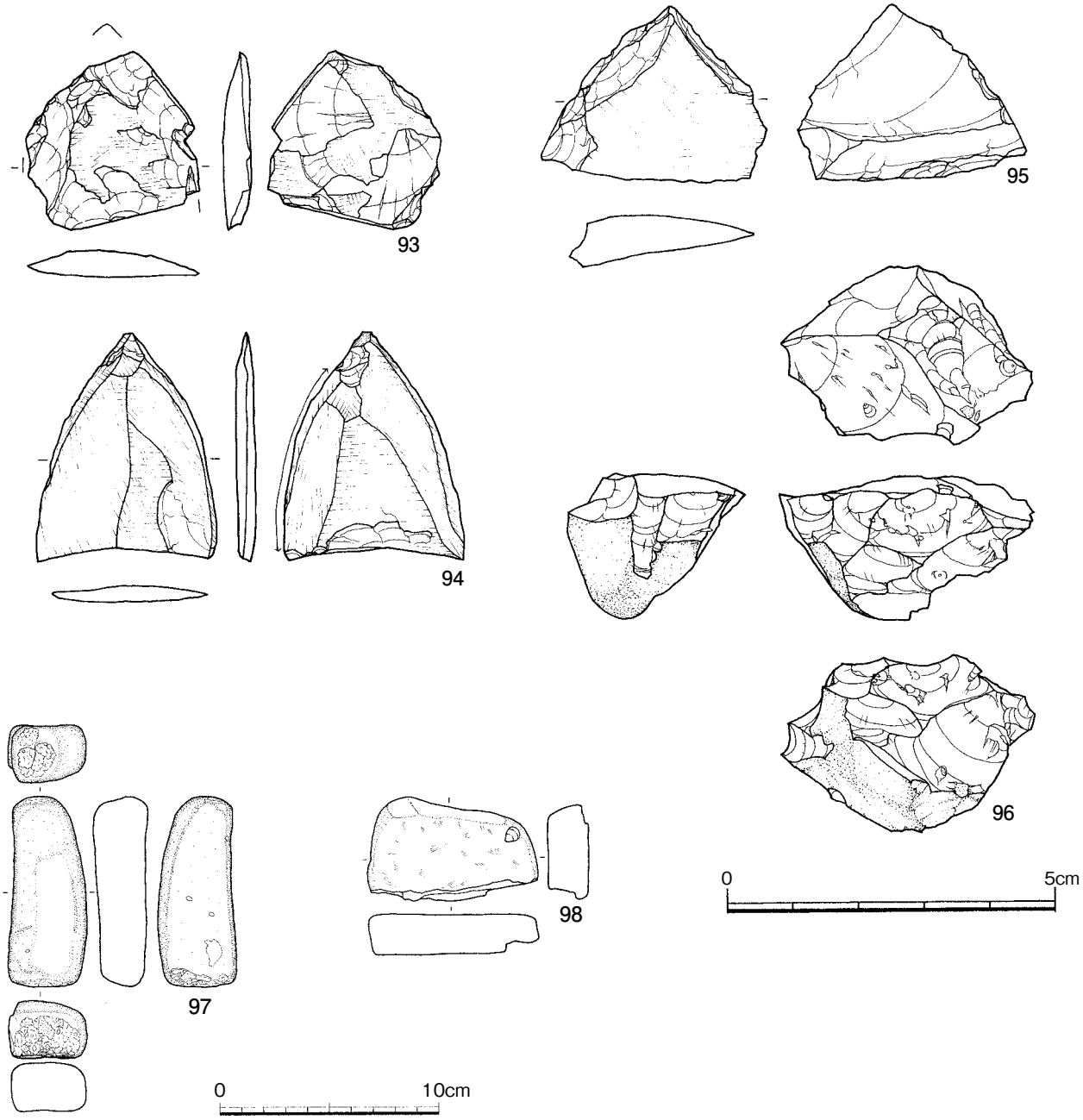
軽石製品　100は小型の軽石で，周縁が磨られ棒状に整形されている。

２号住居跡

Ａ－２区西側からＢ－２区にかけて検出された。北辺の長さはおよそ2.6mで，検出面からの深さは約10cmである。上端の南側半分は斜面の傾斜に沿って削平されており，床面の南側半分も３号住居跡に切られて残存していなかった。残存部分から方形プランであることが推測される。埋土は暗褐色土の単層である。床面はほぼ平坦で若干硬化が認められた。柱穴は検出されなかったが，中央部に円形の炭化物集中域が検出された。炭化物集中域は直径40cm，深さは約10cmである。

２号住居跡出土の土器（101，102）

出土した土器は，少数の土器小片であり，同一個体と考えられる２点を図化した。101，102は壺で，胎土は在地的ではなく，搬入の可能性が考えられる。本来は丹塗



第19図　１号住居跡出土遺物（2）

磨研が施されていたと考えられ，在地的様式にはない器形である。須玖式かさもなければ黒髪式に伴うものである。須玖Ⅱ式か黒髪Ⅱ式に属するものといえる。いずれも弥生時代中期のものである。

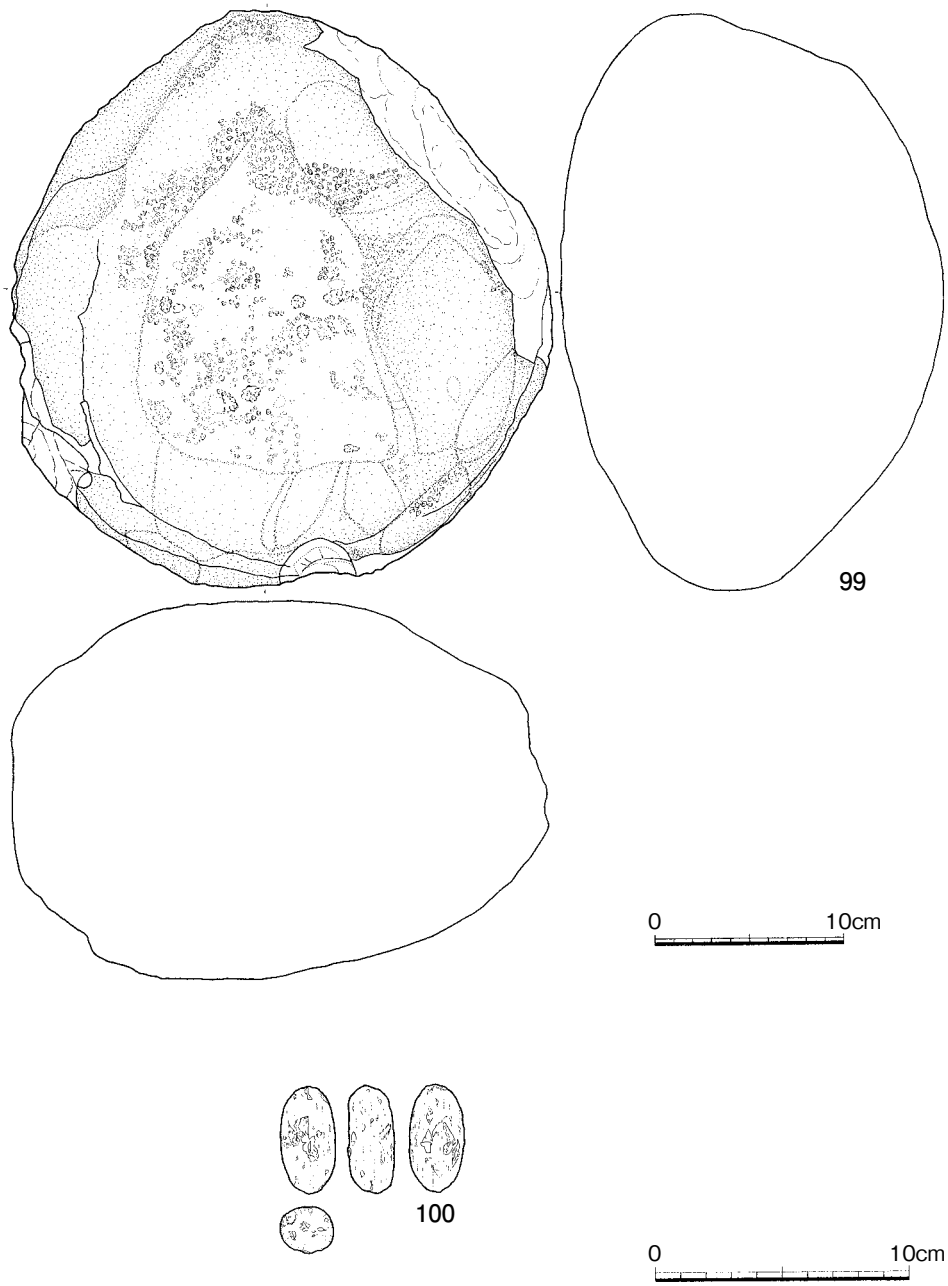
２号住居跡出土の石器（103，104）

粗製削器　103は，安山岩の剥片を用いて，下縁にラフな刃部調整を施し，器面調整は施されていない。縄文時代早～後期に見られる粗製の削器と同様のつくりであり，２号住居跡埋土にまぎれこんだものであろう。

石核　104は，蛋白石の転礫で背面は自然面である。周縁の自然面を打面に不定形な剥片を剥出する。

３号住居跡

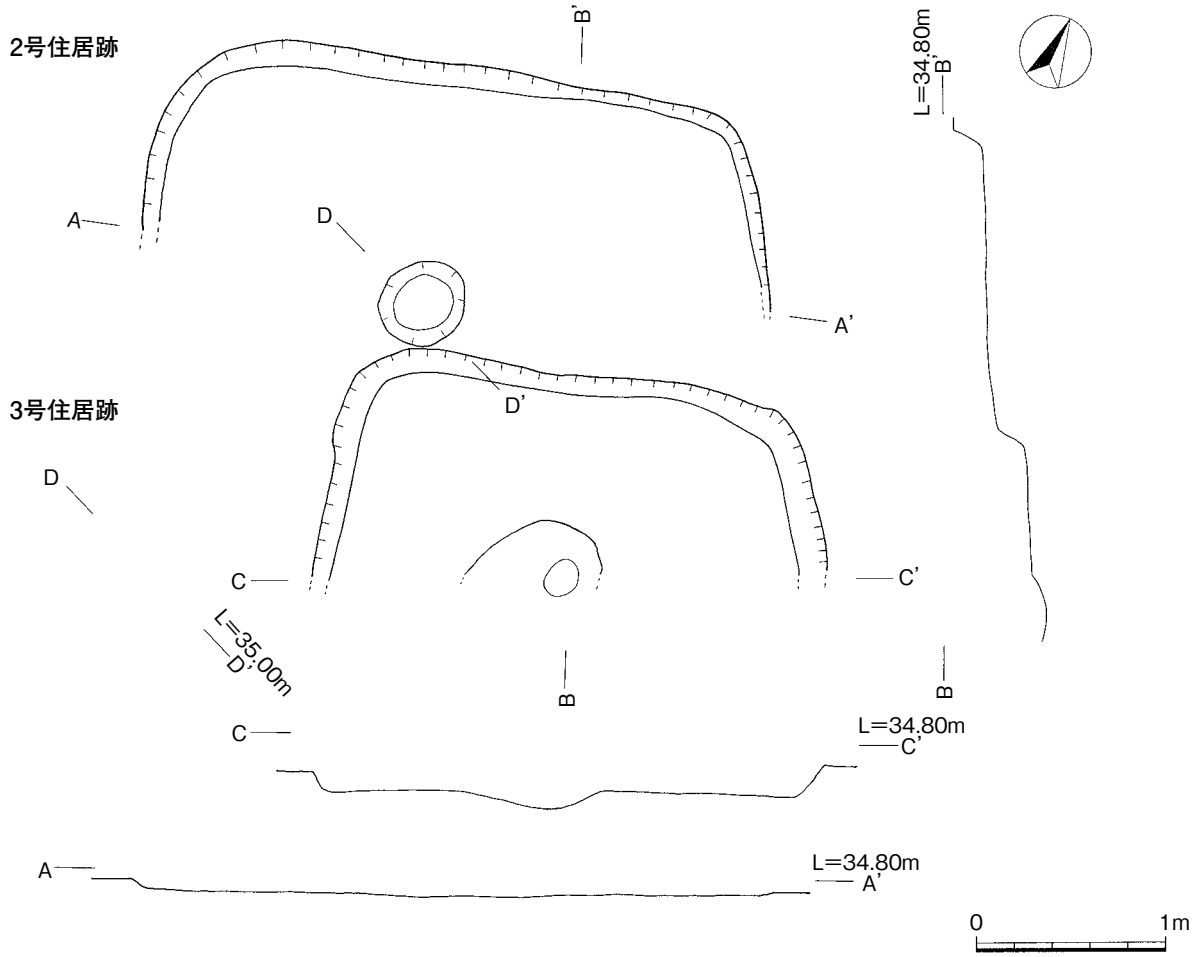
Ａ－２区南側で，２号住居跡を切った状況で検出された。現代の住宅のコンクリート壁が３号住居跡の南側に建設されたため，２号住居跡同様に南側半分が残存していない。３号住居跡も２号住居跡と同様に方形を呈すると推測できる。北辺の長さは約２ｍで，軸方向は２号住居跡とほぼ同じである。検出面からの深さは約15㎝で床



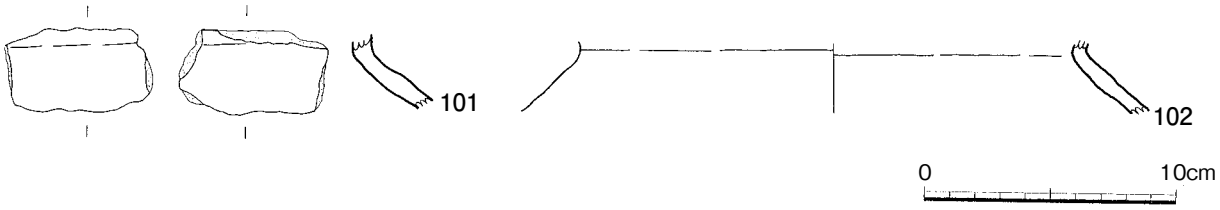
第20図　１号住居跡出土遺物（3）

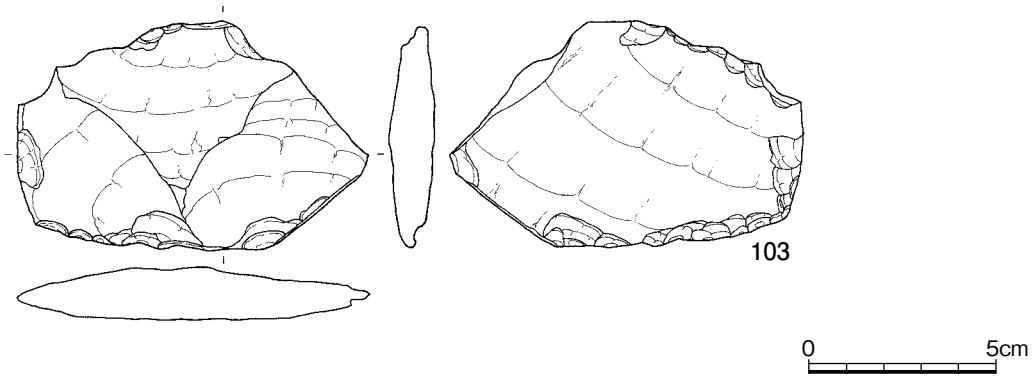
第８表　１号住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
19	93	磨製石鏃	―	頁岩	A－2	1号住居跡	一括	2.74	2.65	0.45	3.23	
	94	磨製石鏃	―	頁岩	A－2	1号住居跡	1	3.45	2.77	0.28	3.1	
	95	磨製石斧	―	頁岩	A－2	1号住居跡	一括	2.7	3.5	0.75	6.02	
	96	石核	―	黒曜石	A－2	1号住居跡	一括	2.2	3.85	2.7	16.34	
	97	磨石・敲石	―	安山岩	A－2	1号住居跡	191	8.75	3.65	2.7	142	
	98	砥石	―	砂岩	A－2	1号住居跡	8	4.8	7.8	1.85	106	
20	99	台石	―	安山岩	A－2	1号住居跡	21	30.7	28.9	20.2	22,200	
	100	軽石製品	―	軽石	A－2	1号住居跡	一括	4.3	2.2	1.9	5.3	

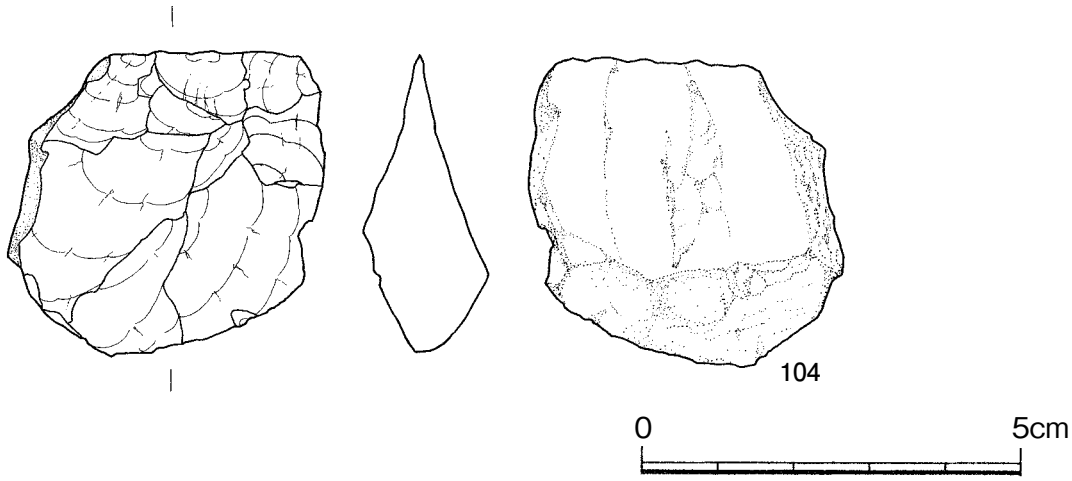


第21図　２号住居跡・３号住居跡





第22図　２号住居跡出土遺物（1）



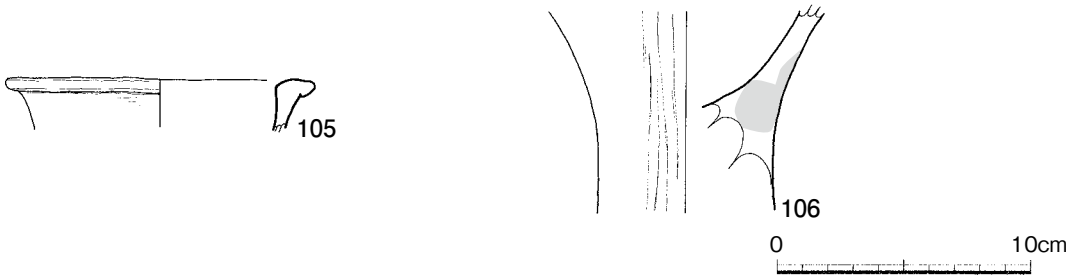
第23図　２号住居跡出土遺物（2）

第９表　２号住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
22	101	2号住居跡	壺形土器	肩部	橙	明赤褐	不明	ナデ	－	－	－	○	○	○		表面風化・同一個体か
	102	2号住居跡	壺形土器	肩部	橙	明赤褐	不明	ナデ	－	－	－	○	○	○		

第10表　２号住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
22	103	粗製削器	－	安山岩	A－2	2号住居跡	136	9.4	6.0	1.3	90	
23	104	石核	－	蛋白石	A－2	2号住居跡	一括	4.19	4.12	1.65	26.9	



第24図　３号住居跡出土遺物

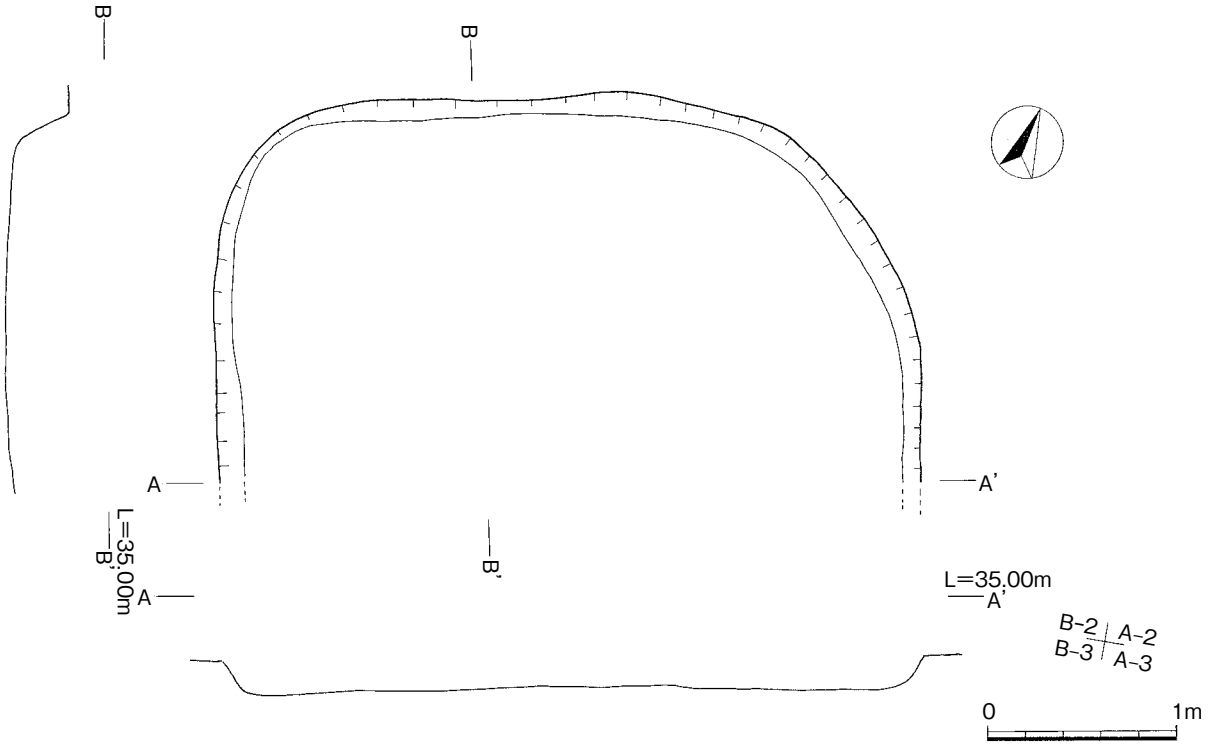
第11表　３号住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
24	105	3号住居跡	壺形土器	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	10.6	－	－	○	○			
	106	3号住居跡	甕形土器	脚	にぶい黄橙	灰	ケズリ	ナデ	－	－	－	○	○			煤付着

面は平坦，若干硬化が認められ，柱穴は検出されていない。埋土は暗褐色土の単層である。中央部に直径約70cm，深さ約10cmの炭化物集中域が検出された。

３号住居跡出土の土器（105，106）

弥生土器小片が少数出土し，特徴のある２点を図化した。105は小型の壺と思われる。ミガキ痕がなく，横ナデ調整が施される。在地的胎土である。106は充実の脚台状の底部であり，入来Ⅱ式の可能性が高い。下から上方向へミガキが施されている。いずれも弥生時代中期のものである。



第25図　４号住居跡

４号住居跡

Ｂ－２区で検出された。３号住居跡同様南側半分が現代のコンクリート擁壁に切られて残存していない。北辺約2.5m，東西方向の長軸が約3.5mあり，方形を呈すると推測される。検出面からの深さは約15cmであり，埋土は暗褐色土の単層である。床面は平坦で若干硬化が認められた。柱穴，焼土域は検出されなかった。２号・３号住居跡とほぼ同じ方向である。

４号住居跡出土の土器（107～121）

弥生時代中期の在地系，外来系の土器が出土した。

107，108は在地系の入来式Ⅱ式の甕形土器である。口唇部に凹みがみられ，108には胴部に突帯が施される。109～111は概ね入来Ⅱ式に類似し胎土も在地的であるが，口縁部に丸みがあり，特に109で明確なように，胴部文様がないことが注目される。これらの土器は在地的な技法でありながら，一部に黒髪式ないし須玖式の外来的な影響がうかがえると言える。112は在地的な胎土をもつ甕形土器の底部である。113，114は中期前半の黒髪Ⅰ式の甕形土器である。115は口縁が長くなる黒髪Ⅱ式の甕である。116は在地の壺形土器の口縁である。117は在地の壺形土器の胴部である。２条の突帯が施されている。118は，須玖Ⅱ式広口壺の頸部である。丹塗りであり，外面には数本が１単位となる分割暗文が施され，内面の分割ミガキを施すこと，赤橙色を呈する胎土や，微砂粒のみを含む胎土であることなどは須玖式の丹塗土器に通有のものであり，搬入である可能性がある。119，120は壺形土器の底部である。黒髪Ⅰ式新段階，あるいは黒髪Ⅱ式であろう。以上は胎土・色調も黒髪式に特徴的なものである。121は在地的胎土をもつ蓋である。

４号住居跡出土の石器（122～124）

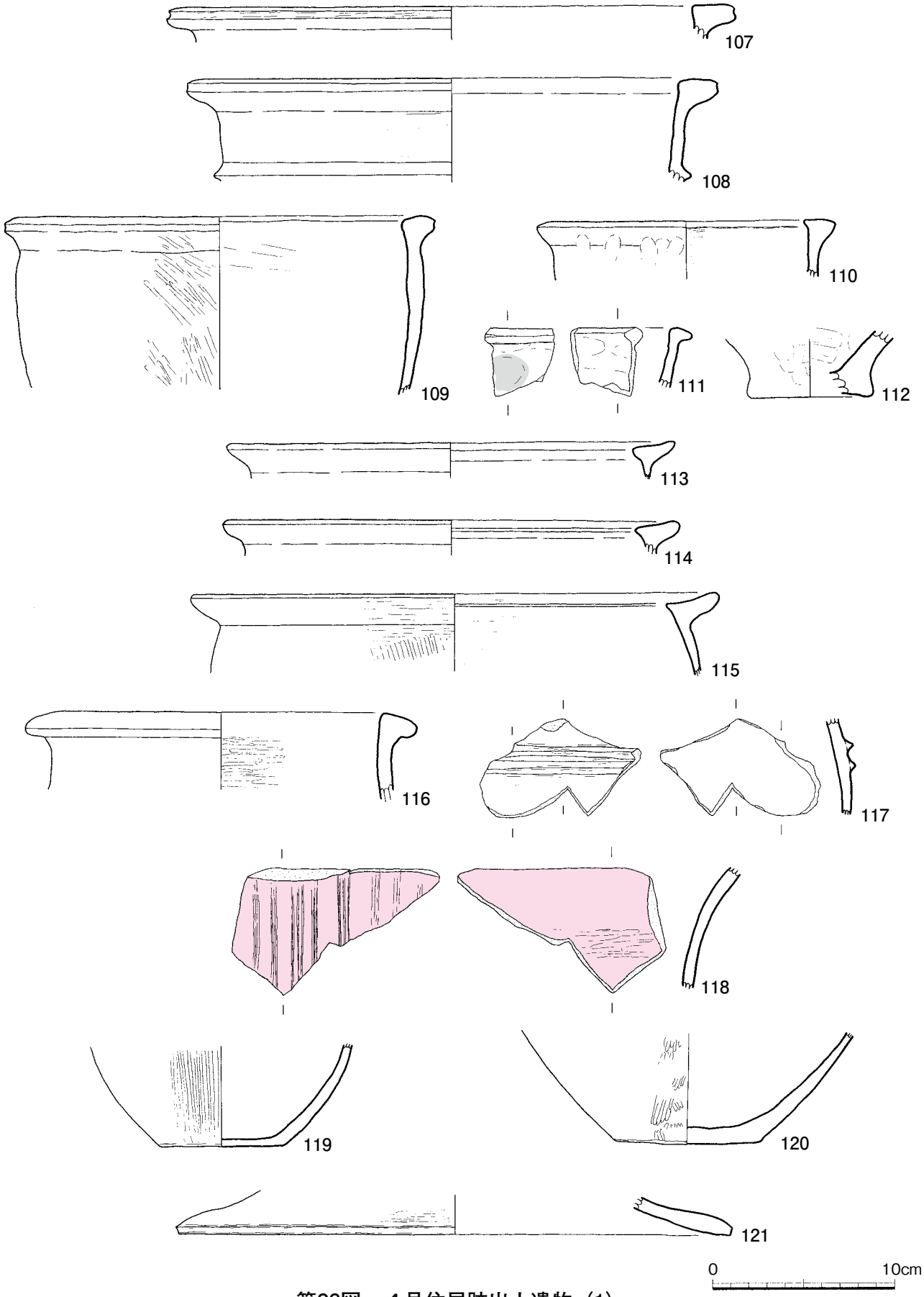
磨製石鏃　122は暗青灰色を呈する頁岩製の磨製石鏃で下半部を欠損する。

磨石・敲石類　123は安山岩の円礫で，図，正面および裏面の一部に磨面があり，下端部を中心に明瞭な敲打の痕跡が残る。

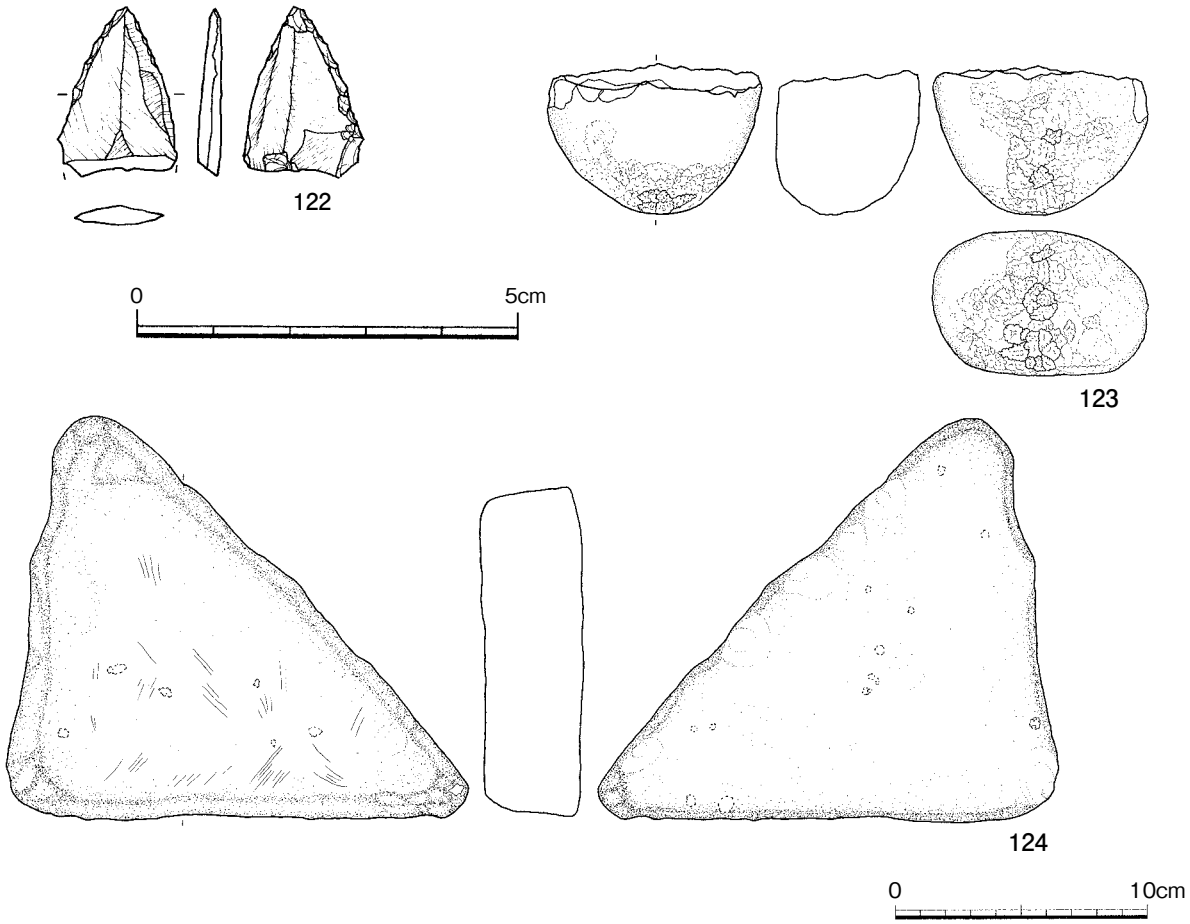
砥石　124は平面形状が三角形を呈する扁平な安山岩の亜角礫で，表面にやや内弯する磨面があり，裏面は平滑である。

５号住居跡

Ｂ－３区で検出された。表土を除去し，包含層を掘り下げると土器集中区域として検出され，慎重に精査をおこない方形プランを検出した。3.6m×2.6mの長方形で，検出面からの深さは約10cmである。埋土は暗褐色土の単層である。床面は平坦で若干硬化が認められた。また柱穴とおもわれるピットが６か所検出された。中央部に炭化物の集中域が検出された。直径100cm，深さ約15cmである。炭化物集中域から検出された炭化物は年代測定を行った（自然科学分析91頁参照。試料名６・７：ＩＡＡＡ－102872・102873）。また，住居跡を囲むように，直径約20cmのピットが８か所検出された。



第26図　４号住居跡出土遺物（1）



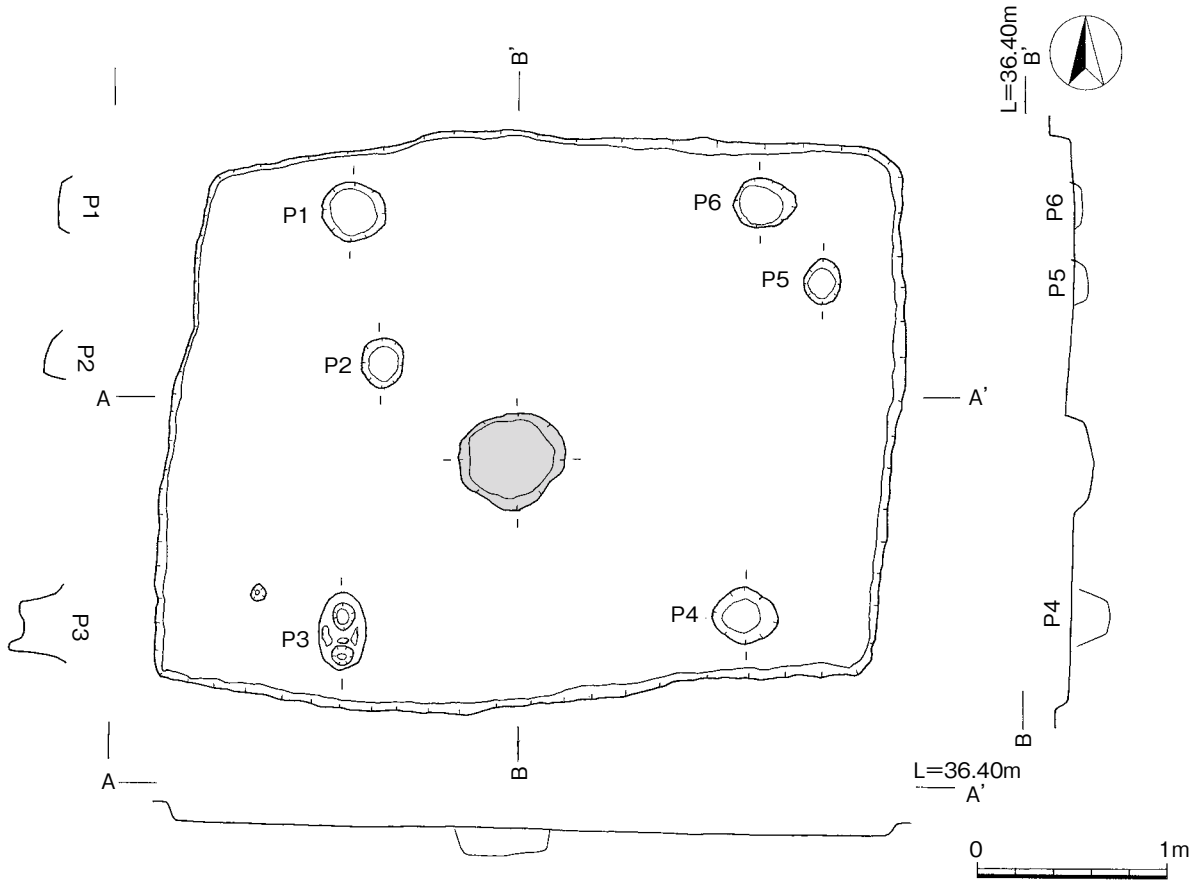
第27図　４号住居跡出土遺物（2）

第12表 ４号住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
26	107	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	明黄褐	ナデ	ナデ	15.4	－	－	○	○		細礫	
	108	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい橙	橙	ナデ・ミガキ	ナデ	26.6	－	－	○	○		細礫	
	109	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい橙	にぶい橙	ナデ・ミガキ	ナデ	21.6	－	－	○			細礫	
	110	４号住居	鉢形土器	口縁	橙	にぶい黄橙	ナデ・指頭圧	ナデ	13	－	－	○	○		火山ガラス	
	111	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	明黄褐	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○		細礫	煤付着
	112	４号住居	甕形土器	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	指頭圧	指ナデ	－	6	－	○	○		細礫	
	113	４号住居	甕形土器	口縁	淡黄	浅黄	ナデ	ナデ	24	－	－	○		○		
	114	４号住居	甕形土器	口縁	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	24.2	－	－		○	○		
	115	４号住居	甕形土器	口縁	にぶい黄	にぶい黄	ハケメ	ナデ	28.6	－	－	○	○	○		
	116	４号住居	壺形土器	口縁	橙	橙	ナデ	ミガキ	－	－	－	○	○		火山ガラス・細礫	
	117	４号住居	壺形土器	胴部	橙	橙	ナデ	ナデ・ミガキ	－	－	－	○	○			
	118	４号住居	壺形土器	頸部	明赤褐	明赤褐	暗文	ミガキ	－	－	－		○		雲母	丹塗り
	119	４号住居	壺形土器	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ハケメ	ナデ	－	6.8	－			○		
	120	４号住居	壺形土器	底部	浅黄橙	明黄褐	ミガキ	ナデ	－	4	－	○	○	○	細礫	
	121	４号住居	蓋	裾部	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	30.2	－	－	○			火山ガラス・細礫	煤付着

第13表　４号住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
27	122	磨製石鏃	－	頁岩	Ａ－２	4号住居跡	44	2.25	1.55	0.3	0.93	
	123	磨石・敲石	－	安山岩	Ａ－２	4号住居跡	一括	5.95	8.5	5.75	368	
	124	砥石	－	安山岩	Ａ－２	4号住居跡	52	18.3	15.9	4.1	1,636	



第28図　５号住居跡

いずれも埋土は住居跡と同様の暗褐色土であった。

５号住居跡出土の土器（125～152）

弥生時代中期中葉の在地系，外来系の土器が出土している。

125は在地系中期前半の入来式土器である。口縁断面は矩形を呈し，端部はやや凹む。胴部上半には１条の突帯がすれ違って巡る。底部は充実の低脚で，外面，内面ともヘラ状工具によるミガキが施される。口縁部付近に付着していた炭化物は年代測定を行った（自然科学分析91頁参照。試料名５：ＩＡＡＡ－102871）。

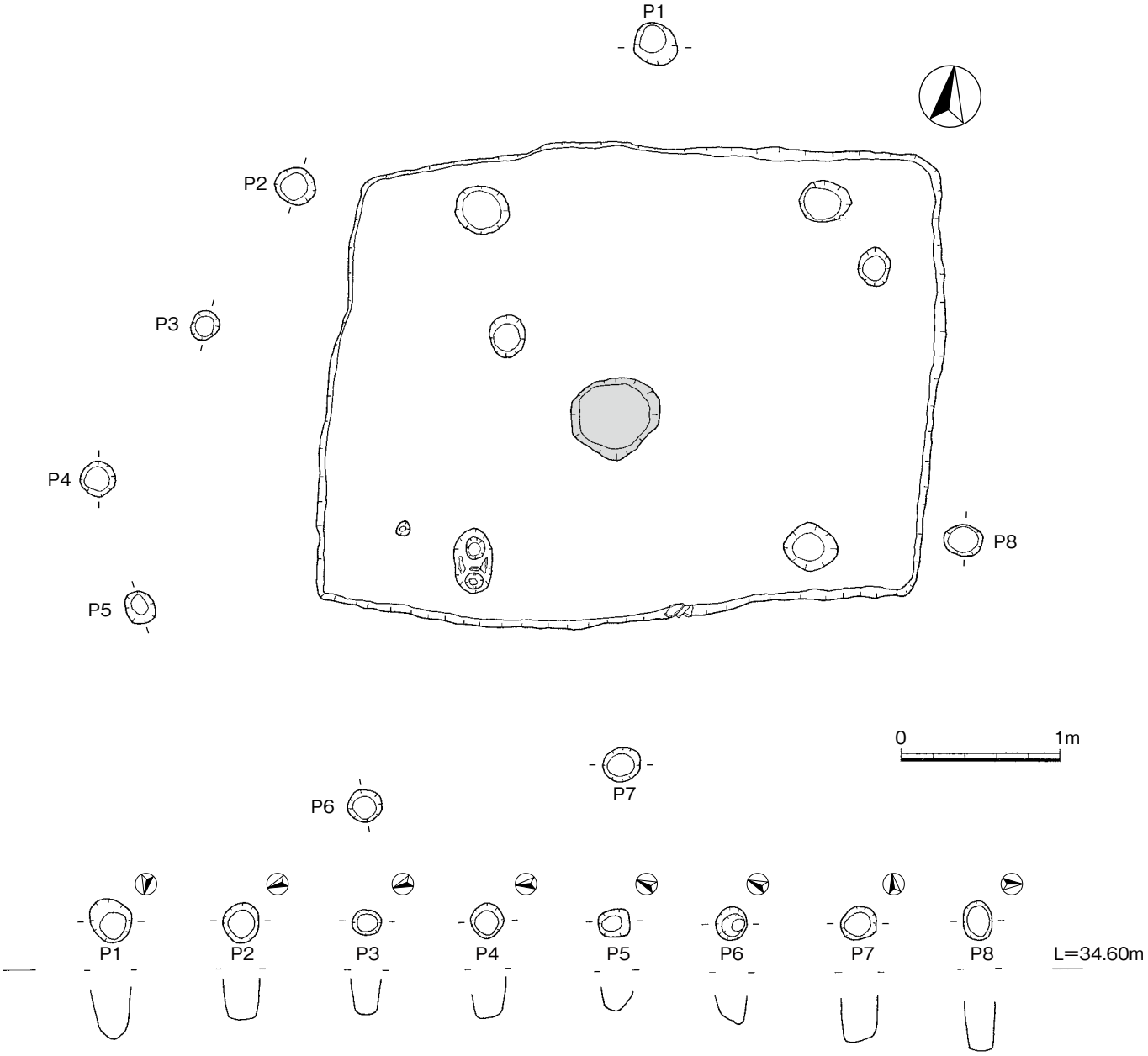
126～136は在地系甕形土器の口縁部，胴部である。中期前半の入来Ⅱ式を主体としている。

132は胴部に文様がなく，口縁部がやや上方に伸びており，黒髪式の何らかの影響か，中期後半に下る可能性が考えられる。ただし，入来Ⅱ式にありえない形ではない。133，134は口縁部がやや上方へ傾く。135，136は口縁部上面がやや丸みを帯びている。135については口縁部付着の炭化物について年代測定を行った（自然科学分析98頁参照。試料名１：ＩＡＡＡ－103668）。

137，138は口縁部が上方に傾き，内部が突出している。137は胴部に沈線が１条施され，内外面ともハケメ調整がなされる。胎土は黒色鉱物を多く含み，黒髪Ⅰ式である。138は口縁部がやや長くなっており，黒髪Ⅱ式古段階と推定される。139，140の口縁は水平に張り出し，内面の突出が強くなっている。須玖Ⅱ式の古段階から中段階である。141は一応須玖式であるが，口縁断面が三角形状を呈するなど，本来の須玖式とは異なる面も見られ，須玖式が変容したものである可能性がある。時期は須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式古段階頃と推定される。技法的には北部九州的であり，北部九州の技法をマスターした制作者の手によるものと思われる。142～146は甕形土器底部である。142～145は充実の脚で，在地の入来Ⅱ式である。146は中空の脚で，外面にハケメが施され，胎土に黒色鉱物が含まれる。黒髪式の脚である。147は在地系の壺形土器の口縁である。内外面ともミガキ調整が施される。148は壺型土器の胴部である。胴部最大径より上方に断面三角形状の突帯が１条巡る。149は壺形土器の底部である。平底で胎土は在地的である。150～152は蓋である。内面には煤があり，内外面ともヘラ状工具によるミガキが施される。

５号住居跡出土の石器（153～160）

打製石鏃　153は漆黒色を呈する黒曜石製の小型の打製石鏃で，基部の抉りは浅く，右脚部がやや長く非対称形となる。



第29図　５号住居跡周辺ピット図

磨製石鏃　154は暗青灰色を呈する頁岩製の磨製石鏃である。両側辺とも鋭利に仕上げられるが，基部側は平坦面を呈する。

磨石・敲石類　155は不定型な安山岩製の凹石である。腹面と背面に敲打による顕著な凹みが生じている。

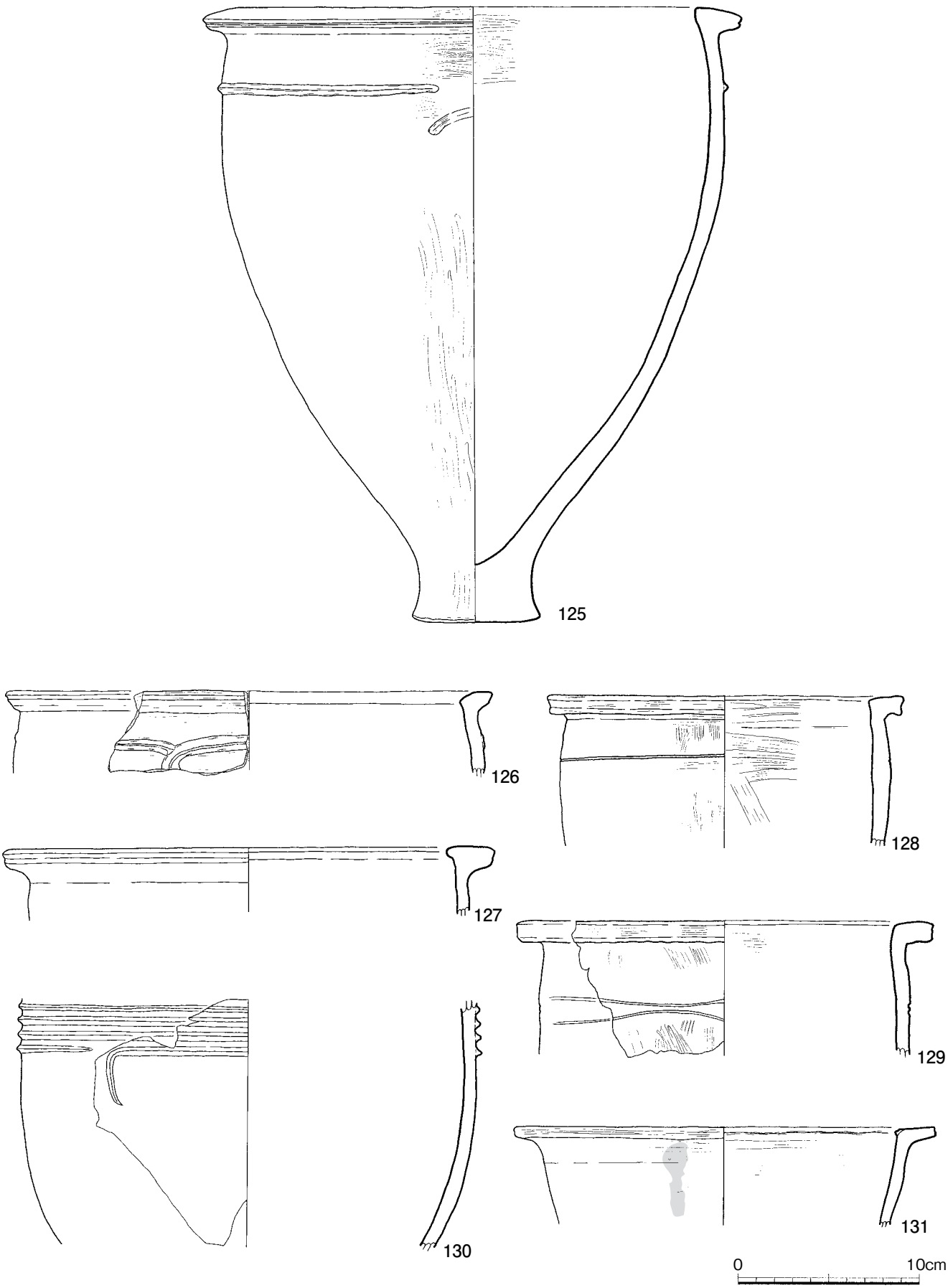
156は安山岩製の凹石で腹面と背面の中央付近に敲打痕があり，浅い凹を生じている。

157は安山岩製の凹石で腹面と背面に円形状に敲打痕があり，若干の凹みを作っている。

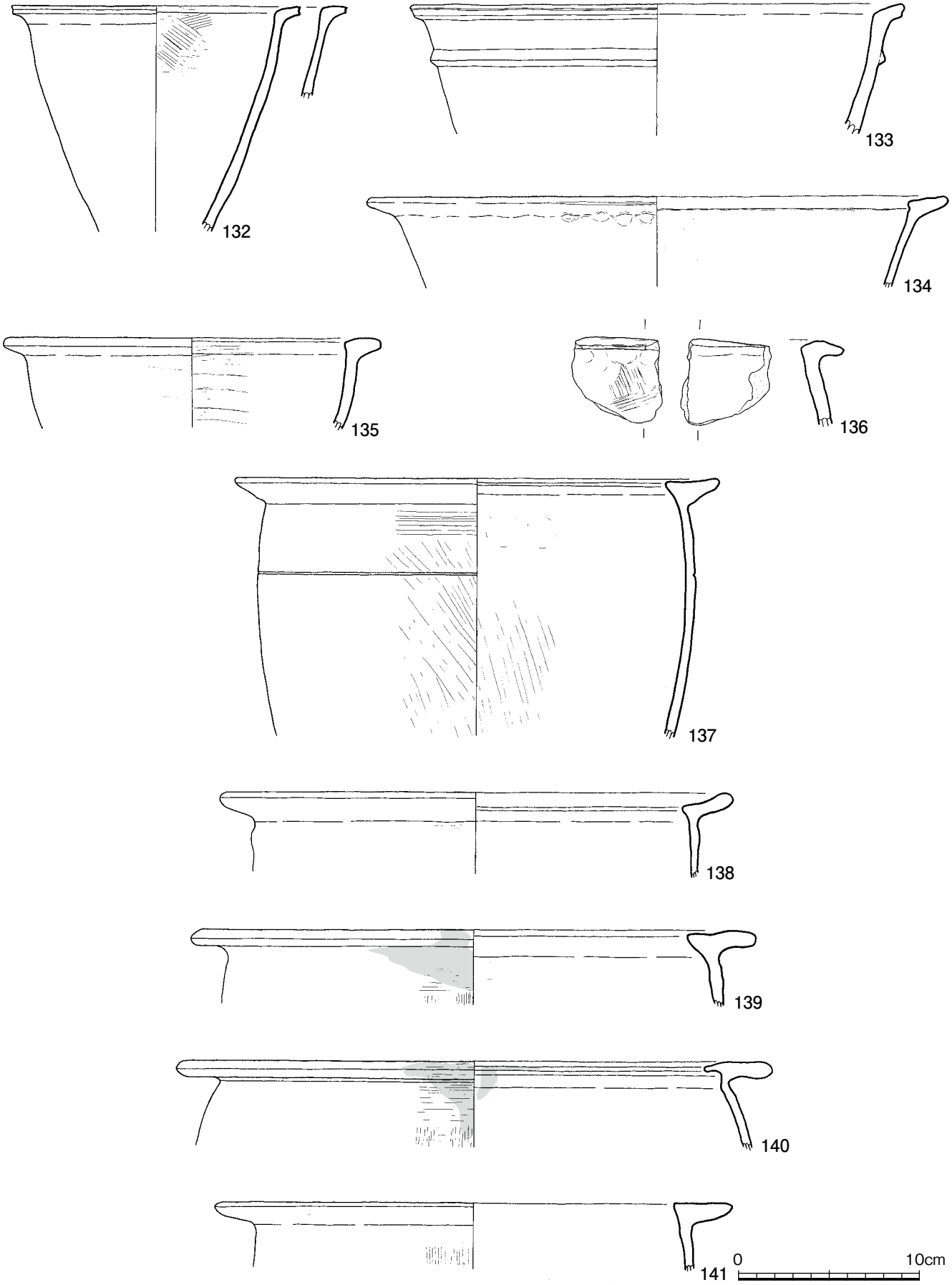
158はやや大型の安山岩の亜円礫である。やや外弯気味の平滑な面上に敲打痕がみられる。

石皿　159は扁平な安山岩の亜角礫である。素材礫の性質もあり擦痕は観察できないが，表面の礫皮面上に磨滅が認められる。石皿として提示したが，使用痕の範囲を考慮すると砥石として使用されたものかもしれない。

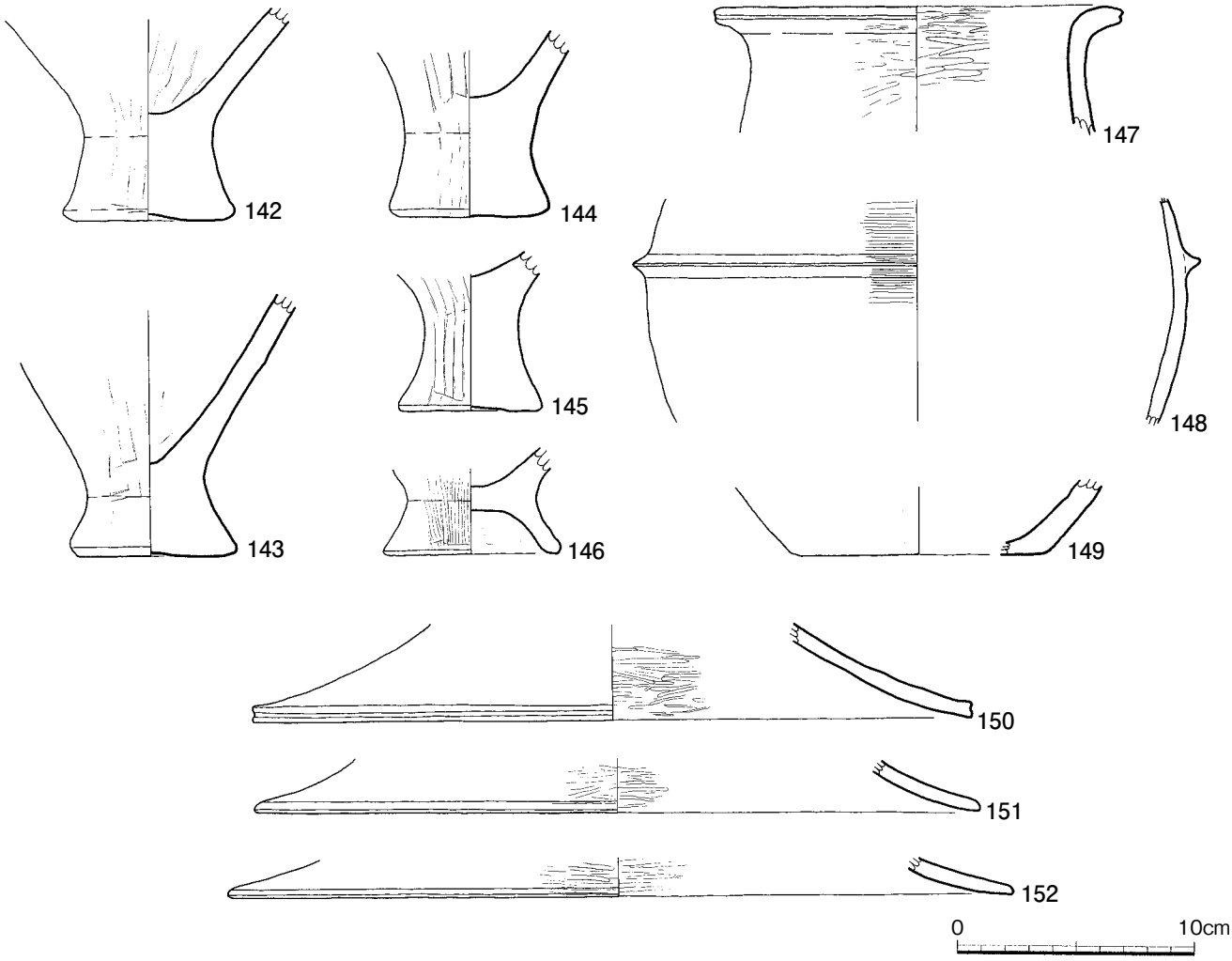
軽石製品　160は小型の軽石で，腹面は削られたように平坦になっており，背面の中央部には貫通しない穿孔が施されている。



第30図　５号住居跡出土遺物（1）



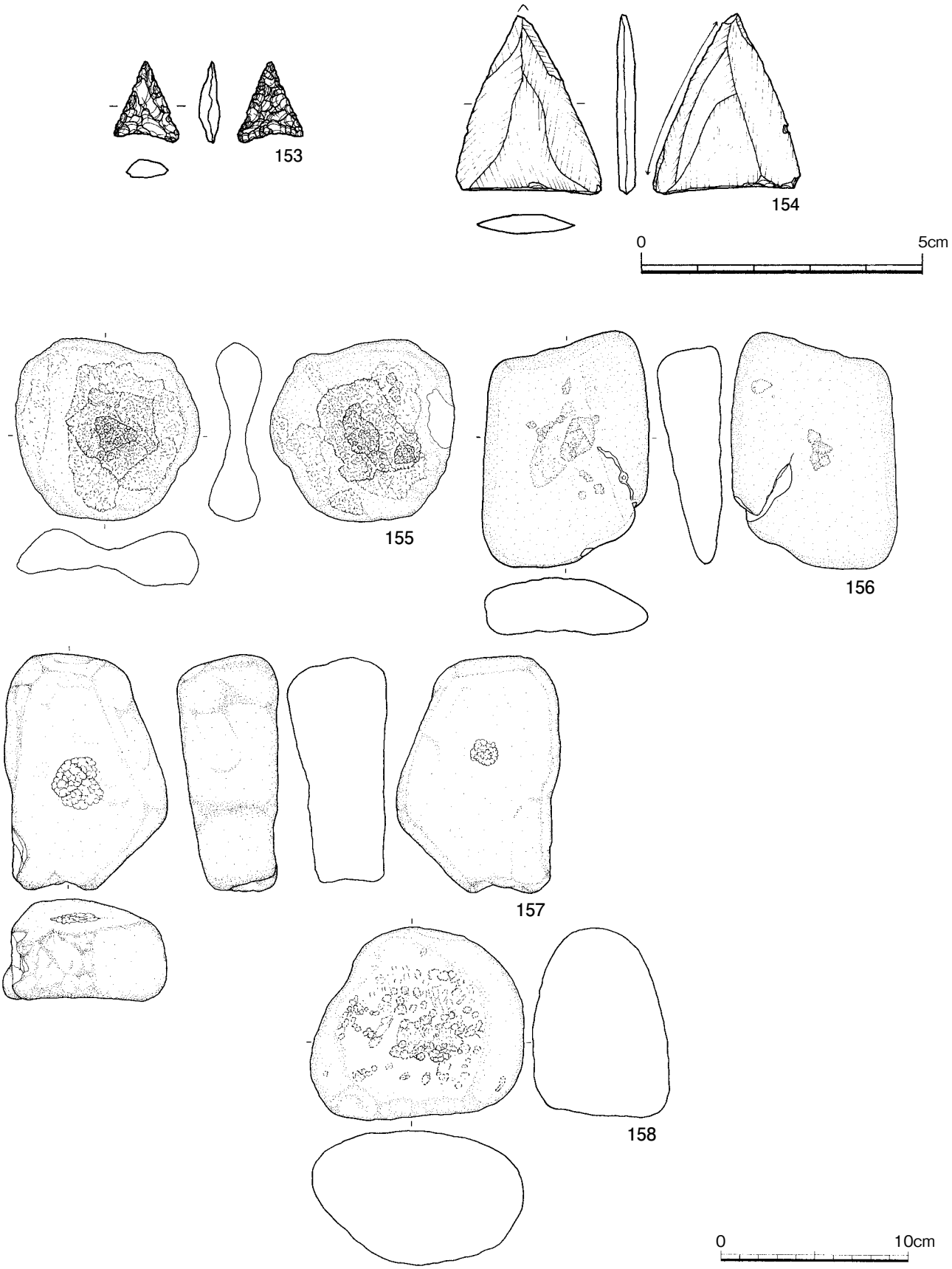
第31図　５号住居跡出土遺物（2）



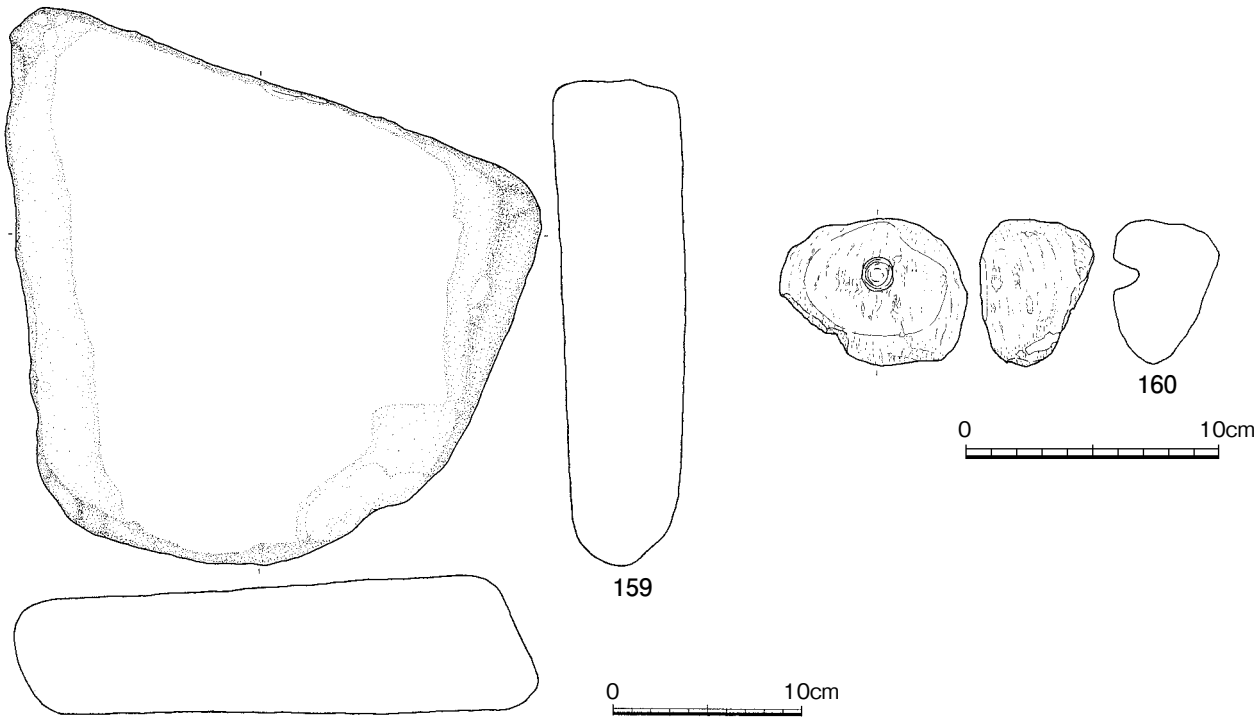
第32図　５号住居跡出土遺物（3）

第14表　５号住居跡出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
30	125	5号住居跡	甕形土器	完形	にぶい橙	にぶい橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	29.6	7	34	○	○		細礫	煤付着
	126	5号住居跡	甕形土器	口縁	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	25.4	－	－	○	○		火山ガラス・細礫	
	127	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	22.6	－	－	○	○		細礫	
	128	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ハケメ	ハケメ	20.6	－	－	○		○	火山ガラス	
	129	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄	にぶい黄	ナデ・ミガキ	ミガキ	18.6	－	－	○		○	火山ガラス・細礫	
	130	5号住居跡	甕形土器	胴部	にぶい赤褐	にぶい黄	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○		火山ガラス・細礫	
	131	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	21.8	－	－	○	○	○	火山ガラス	煤付着
31	132	5号住居跡	甕形土器	口縁	明赤褐	にぶい橙	ミガキ	ハケメ	15.2	－	－	○			火山ガラス	
	133	5号住居跡	甕形土器	口縁	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	26.8	－	－	○	○		細礫	
	134	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ･指頭押圧	ナデ	30.2	－	－	○	○		火山ガラス	
	135	5号住居跡	甕形土器	口縁	赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ミガキ	19.6	－	－	○	○		火山ガラス	煤付着
	136	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄褐	赤褐	ナデ	ミガキ	－	－	－	○	○	○	火山ガラス	
	137	5号住居跡	甕形土器	口縁～胴部	浅黄	浅黄	ナデ・ハケメ	ナデ	25.8	－	－	○		○		
	138	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄	黄灰	ナデ	ナデ	27.8	－	－	○		○		
	139	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	28	－	－		○		雲母	煤付着
	140	5号住居跡	甕形土器	口縁	明黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	31.6	－	－	○	○		雲母	煤付着
	141	5号住居跡	甕形土器	口縁	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	22.4	－	－		○		雲母	
32	142	5号住居跡	甕形土器	脚部	橙	黄褐	ナデ	ナデ	－	6.2	－	○	○		火山ガラス	スコリア
	143	5号住居跡	甕形土器	脚部	橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	－	6	－	○	○	○	火山ガラス・細礫	スコリア
	144	5号住居跡	甕形土器	脚部	にぶい橙	黄灰	ナデ	ナデ	－	6	－	○	○	○	火山ガラス・細礫	スコリア
	145	5号住居跡	甕形土器	脚部	にぶい橙	明赤褐	ミガキ	ナデ	－	5.8	－	○	○		火山ガラス・細礫	スコリア
	146	5号住居跡	甕形土器	脚部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	7	－	○	○	○		
	147	5号住居跡	壺形土器	口縁	にぶい褐	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	15.6	－	－	○	○		火山ガラス	
	148	5号住居跡	壺形土器	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	－	－		○		雲母	
	149	5号住居跡	壺形土器	底部	黄灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	－	10	－		○		雲母	
	150	5号住居跡	蓋	裾部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ミガキ	29.6	－	－	○	○		スコリア・細礫	煤付着
	151	5号住居跡	蓋	裾部	にぶい褐	黒褐	ミガキ	ミガキ	30.6	－	－	○	○		火山ガラス・細礫	煤付着
	152	5号住居跡	蓋	裾部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ミガキ	ミガキ	33.2	－	－	○	○		火山ガラス・細礫	ｽｺﾘｱ･煤付着



第33図　５号住居跡出土遺物（4）



第34図　５号住居跡出土遺物（5）

第15表　５号住居跡出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
33	153	打製石鏃	―	黒曜石	B－3	5号住居跡	61	1.4	1.15	0.35	0.33	
	154	磨製石鏃	―	頁岩	B－3	5号住居跡	183	3.18	2.6	0.34	2.81	
	155	凹石	―	安山岩	B－3	5号住居跡	181	9.7	9.5	3.0	322	
	156	凹石	―	安山岩	B－3	5号住居跡	126	12.7	8.9	3.5	496	
	157	凹石	―	安山岩	B－3	5号住居跡	150	12.75	8.7	5.45	818	
	158	磨石・敲石	―	安山岩	B－3	5号住居跡	134	10.4	11.5	7.2	1,258	
34	159	石皿	―	安山岩	B－3	5号住居跡	122	29.2	28.5	7.1	9,400	
	160	軽石製品	―	軽石	B－3	5号住居跡	81	4.8	7.4	4.45	35.1	

2　遺　物

弥生時代の土器は，竪穴住居跡が検出されたＡ・Ｂ－２・３区およびその周辺区域のⅢ層から出土した。また，古代の造成土と考えられるⅡｂ層からも出土している。これは造成をおこなった際，包含層が切られて造成土内に含まれたと考えられる。原位置はとどめていないものの，摩滅が比較的少ないことから遺跡のすぐ近くに埋蔵されていたものと思われる。したがってⅡｂ層出土でも良好な資料は本項に掲載した。本遺跡出土の弥生土器は，その様式から弥生時代中期中葉の時期内におさまると考えられ，遺構内出土の土器と同様，在地系，外来系の土器が出土した。そして本遺跡出土土器の傾向から，在地系の入来式土器系をⅠ類，中九州系の黒髪式土器をⅡ類，北部九州系の須玖式土器をⅢ類とし，時期差に応じて細分した。本項の土器様式名は，調査，整理指導を依頼した中園聡氏の編年案（中園2004）による。

甕形土器Ⅰａ類（161～196）

口縁部断面が三角形状あるいは台形状を呈している，入来式土器の一群である。161は断面三角形に近い口縁を持ち，胴部に断面三角形の突帯を施す入来Ⅰ式土器である。162～196は口縁部の形態は台形状を呈し，口唇部に凹みをもつ。胴部には断面三角の突帯あるいは沈線を施すものもある。調整はナデ，ハケメ，ハケメ後ナデあるいはミガキである。これらは入来Ⅱ式土器と捉えられる。

162～178は胴部に突帯を施すものである。170の口縁部は，やや細長い印象を受けるが，在地的技法と胎土を有し，形態的に入来Ⅱ式と思われる。口縁部がやや長い点は，わずかに外来系の影響を受けている可能性が考えられる。171は，２条の突帯がほぼ平行に下方へ弯曲し鉤状を呈する。技法，胎土とも在地的である。172は，一見普通の入来Ⅱ式の甕であるが，口縁部は平均的な入来Ⅱ式より外側への張り出しが若干長めである。177は特徴のある甕である。胴部にヨコナデを省略した細身の絡縄突帯が施され，胴部上半の内傾がきついこと，口縁部が短くいわゆる玉縁状を呈すること，色調・胎土もやや異質であることなどが注目される。北薩内陸部～宮崎南部の内陸・山間部で見られるタイプであり，中期前半とみられる。広い意味で入来Ⅱ式と考えられる。179～187は胴部に沈線が施されている。沈線は１条ないし２条，胴部上半部に細く施されている。180は胴部に沈線が２条（残存部。さらに増える可能性有り）確認される。182は口縁部がやや下方に垂れ，胴部は膨らまず，１条の沈線を持つ。外面は横方向のミガキが施されている。185は口縁部上面がほぼ水平で膨らみ，胴部は膨らまず２条の沈線が施される。胎土には軽石が含まれる。

188～196は，胴部に文様が認められない。

188の口縁部は厚さが均等でなく，若干ゆがみが生じている。口縁部先端が丸いことは多少外来系の影響を受けている可能性がある。189と192の口縁部上面はやや膨らみ，外面はミガキ調整が施されている。在地的な器形，技法であるが，胎土は黒色鉱物（角閃石であろう）を含み，灰色気味の色調を呈しており，明らかに在地のものとは異なる。このような胎土は黒髪式と類似している。

甕形土器Ⅰｂ類（197～211）

典型的な入来式土器とは若干様相が異なり，外来系の影響を受けたと思われる在地土器の一群である。

197は，口縁部の長さ以外は全て入来Ⅱ式の範疇に入り，胎土も在地的であるが，口縁部が顕著に長い点が注目される。こうした土器は薩摩半島西部ではごく稀に出土するが，須玖式など外来系土器の影響で口縁部が長くなっている可能性が考えられる。

198は，口縁部の形が通常の入来Ⅱ式と異なっており，また，確実ではないが胴部文様をもたない可能性が高く，外来系の影響を受けている可能性がある。

199は口縁部上面が水平で丸くすぼまる。口縁，胴部ともややいびつな仕上がりであるが，須玖式の影響を受けていると思われる。胎土は小礫を含み在地的である。

200は，大まかな形態と，技法・胎土は在地的であり，入来Ⅱ式の範疇と見られるが，口縁部先端が丸いことは多少外来系の影響を受けている可能性がある。

201は，在地的技法と胎土を有するが，口縁部が短いとはいえ，大まかな口縁部形態は須玖式に類似しており，胴部文様がない点も須玖式の影響を受けているように思われる。須玖式を見たことのある人物の作品ではないかと想像される。

202は，口縁部が上方に立ち上がり，先端は丸くおさめられている。細い沈線が２条施され，内面はミガキ調整である。胎土は小礫を含んでいる。技法や胎土は在地的であるが，口縁部形態に黒髪式の影響がうかがえる。

203の口縁部は指押さえで成形されている。上面がややへこみ，端部は凹みが無くなっている点で，黒髪式の影響が考えられる。胎土は小礫を含み在地的である。

204は在地的技法で胎土も在地的である。底部も在地的形態である。ハケメは施されていない。しかし，口縁部先端が丸みを帯びる点や，胴部文様がないことは外来的要素といえよう。

205～207は，胴部に文様がないこと，口縁先端が尖っていることは，外来系の影響とみられる。技法・胎土は在地的である。

208，209は胴部文様をもたないようであり，また口縁部形態もやや変容しているようである。これらはいずれも在地的な胎土と技法である。

210と211は，同一個体の可能性もある。口縁部は上方に立ち上がり，端部は丸くおさまっている。口縁部付近に指押さえ調整が施され，外面はミガキが施される。技

法は在地的といえるが，胴部文様がないことや，口縁部の先端が丸くおさまることなどは，外来系の要素に似ており，口縁部の特徴などから黒髪式の影響と思われる。黒髪式の影響だとすると，中期後半の可能性もある。

Ⅰ類土器底部（212～235）

212～234は入来Ⅱ式の甕の底部である。充実の脚台で，胎土は在地的である。

235は，技法と胎土が在地的である。ただし，通常の入来Ⅱ式の底部より低く，外面は黒髪式的な輪郭である。しかし，底面もくぼんでいるが，黒髪式の中空脚台と比べれば多少くぼんでいる程度にすぎず，そこの部分の調整法も異なる。したがって，入来Ⅱ式の製作者によるもので，黒髪式の影響があらわれているように思われる。

甕形土器Ⅱ類（236～263）

中九州系の黒髪式土器の一群である。黒髪Ⅰ式をⅡａ類，黒髪Ⅱ式をⅡｂ類と細分できる。

Ⅱａ類（236～247）

236～247は黒髪Ⅰ式土器である。

総じて口縁部端部が丸く，口縁部上面がくぼみ，凹面をなす。口縁はわずかに上を向き，内側に弱く突出している。器壁は薄く，胴部はハケメ調整がなされ，沈線を施すのもある。口縁部と胴部の間にナデ調整がなされ，わずかにへこむ。胎土は灰色味や明るく淡い色調を呈するものが多い。多くが黒色鉱物を多く含んでいる。236は黒髪Ⅰ式でもやや古い可能性がある。

Ⅱｂ類土器（248～255）

Ⅱａ類よりも口縁部内面の突出が発達し，口縁が上方に長く伸びるタイプで，黒髪Ⅰ式新段階から黒髪Ⅱ式土器である。248～251は黒髪Ⅰ式新段階～黒髪Ⅱ式古段階。252，253は黒髪Ⅱ式。254，255は黒髪Ⅱ式新段階である。いずれも形態・技法・胎土ともに黒髪式である。

Ⅱ類土器底部（256～263）

256～263はⅡ類土器の底部である。中空の脚台状を呈し，外面はハケメ調整が施される。胎土は黒色鉱物を含んでいる。259は他の個体とは胎土に含まれる黒色鉱物が少量で，他個体ほどは含まれない。素地の組成が他とは若干異なっているといえる。263は黒髪式の甕の底部付近である。本資料は中空脚台が接合部から外れたものと考えられる。胎土は黒色鉱物を多く含み，黒髪式的である。

甕形土器Ⅲ類（264～275）

北部九州の中期土器を代表する須玖式土器である。断面方形に近い口縁部が水平になるものと，上方へ弱く傾くものがある。口縁部内面は弱く突出し，胴部の張りは弱い。鋤型口縁を呈し，口縁部は逆Ｌ字形またはＴ字形で，文様はほとんどみられず突帯をめぐらす程度である。胎土は大粒の無色鉱物（長石）を多く含み，黒雲母も含むものが多い。口縁部が水平で短く，内側が突出しないものは須玖Ⅰ式，口縁部が長くのび，内側へ突出するものは須玖Ⅱ式古段階，口縁部が「く」の字状に起き上がり，内側の突出が無くなるものは須玖Ⅱ式新段階である。

Ⅲａ類（264～266）

264～266は，断面方形に近い口縁部が水平になり，内面は弱く突出する。胴部の張りは弱い。須玖Ⅰ式である。胎土に花崗岩由来とみられる鉱物を含んでおり，搬入品の可能性が高い。

Ⅲｂ類（267～270）

267も須玖Ⅰ式であるが，口縁の張り出しがやや長いため，須玖Ⅰ式新段階とみられる。胎土は黒雲母を含み，外来的である。搬入品の可能性が高い。

268～270は，口縁部内面に粘土帯びを貼付して鋤型口縁となっている。口縁部下面は弱く凹んでおり，胎土には花崗岩由来とみられる鉱物を含んでいる。須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階のもので，搬入品の可能性が高い。

Ⅲｃ類（271）

271は，口縁部が「く」の字状に屈折し，胴部外面にはハケメが施されている。須玖式Ⅱ式新段階である。したがって，中期後半～末といえる。本遺跡の弥生土器の中では最も新しい時期に属する。

Ⅲ類土器底部（272～275）

272は須玖Ⅰ式の甕の底部である。273，274は須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式古段階の甕の底部である。275は須玖Ⅱ式の甕の底部である，底面に籾とみられる圧痕がある。いずれも技法・胎土が北部九州的である。搬入品の可能性がある。

壺形土器・鉢形土器（276～293）

276～281，283は入来Ⅱ式の壺と思われる。胎土は在地的である。276は外面には黒塗りが施された可能性がある。278は甕の可能性もある。281は，口縁部が如意状に開き，端部が凹む。内外面ともミガキ調整である。282は短い「く」字状口縁をもつ無頸壺である。胎土は小礫を含み在地的である。時期は，中期後半の可能性が高いように思われる。283は甕の可能性もある。口縁端部の下面が丸みを帯びており，胴部に自然に移行するというのは本来在地的ではなく，外来系の影響である可能性がある。胎土は在地的である。

284，285は黒髪式の壺の口縁部に類似する破片である。284は，口縁部上面が若干くぼんでいる。外面に横方向のミガキが若干施される。胎土は小礫を含む。

285は口縁上部が若干くぼみ，口縁部内面に修復痕かと思われる痕跡がある。

286～288は黒髪式の壺で，胎土も黒髪式である。

288は，胴部に刻目突帯をもつ黒髪式の壺である。ハケメに一部ミガキが施されている。

289～292は須玖式土器の壺である。289は，外面に丹塗りとミガキが施された丹塗磨研の長頸壺の胴部であ

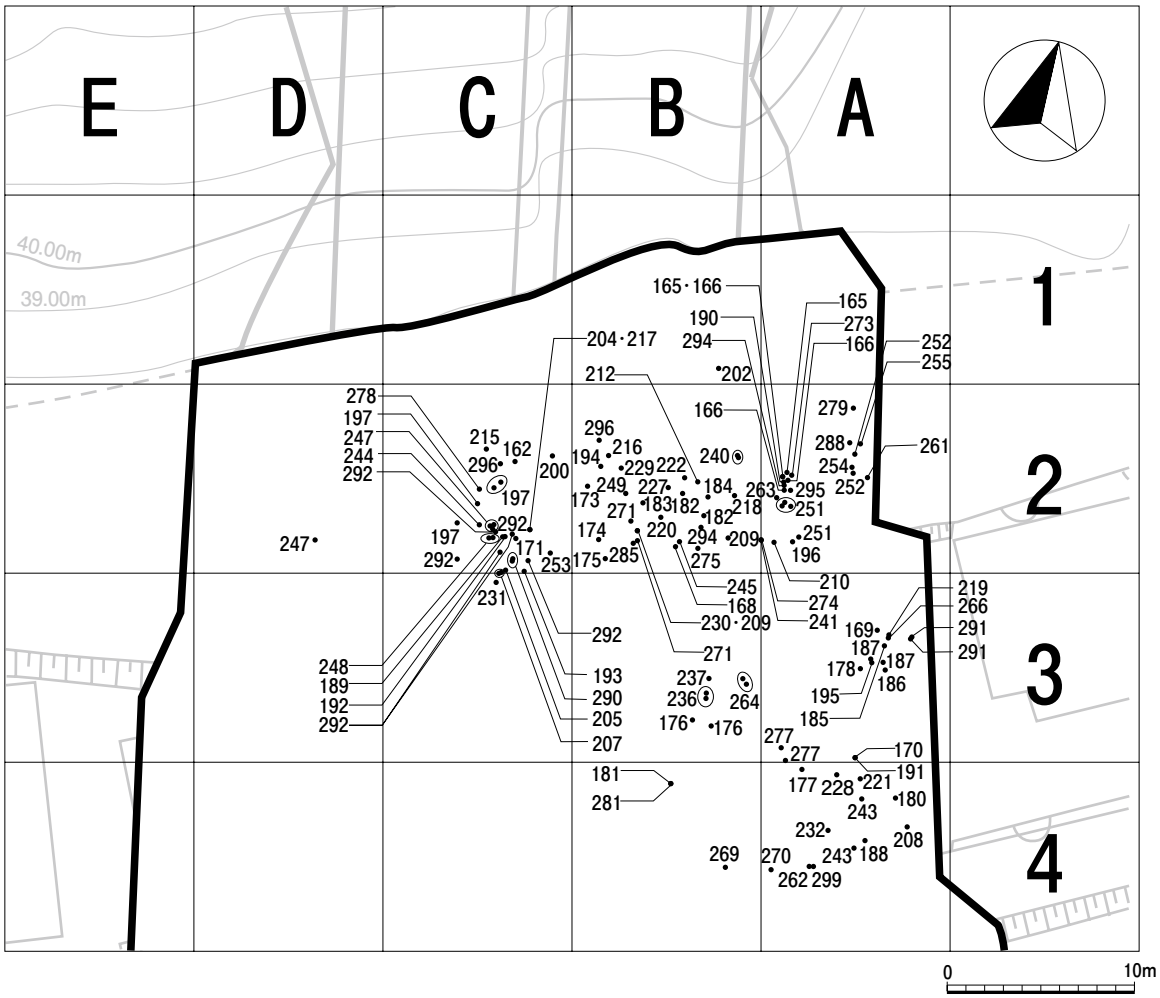
る。おそらく須玖Ⅱ式新段階と思われる。胎土もやや赤みを帯びており，須玖式的である。中期末と思われる。290は，須玖Ⅱ式の丹塗磨研土器で，無頸壺等の器種である可能性が高い。底面には丹塗りがない点，底部にのみ黒斑が見られる点も須玖Ⅱ式の特徴といえる。胎土は須玖式的である。搬入品の可能性がある。291は，須玖Ⅱ式で，外面にミガキの痕跡が確認されるが，本来丹塗りであった可能性がある。胎土は須玖式的である。底面がわずかにドーム状にくぼむ点も須玖式的である。搬入品の可能性がある。292は，須玖Ⅱ式の丹塗磨研土器で，広口壺の可能性がある。底部側面に破裂痕がみられる。胎土は北部九州的で須玖Ⅱ式にみられるものである。搬入品の可能性がある。

293は，鉢形土器の底部である。胎土は在地であり，外来系土器ではないと思われる。

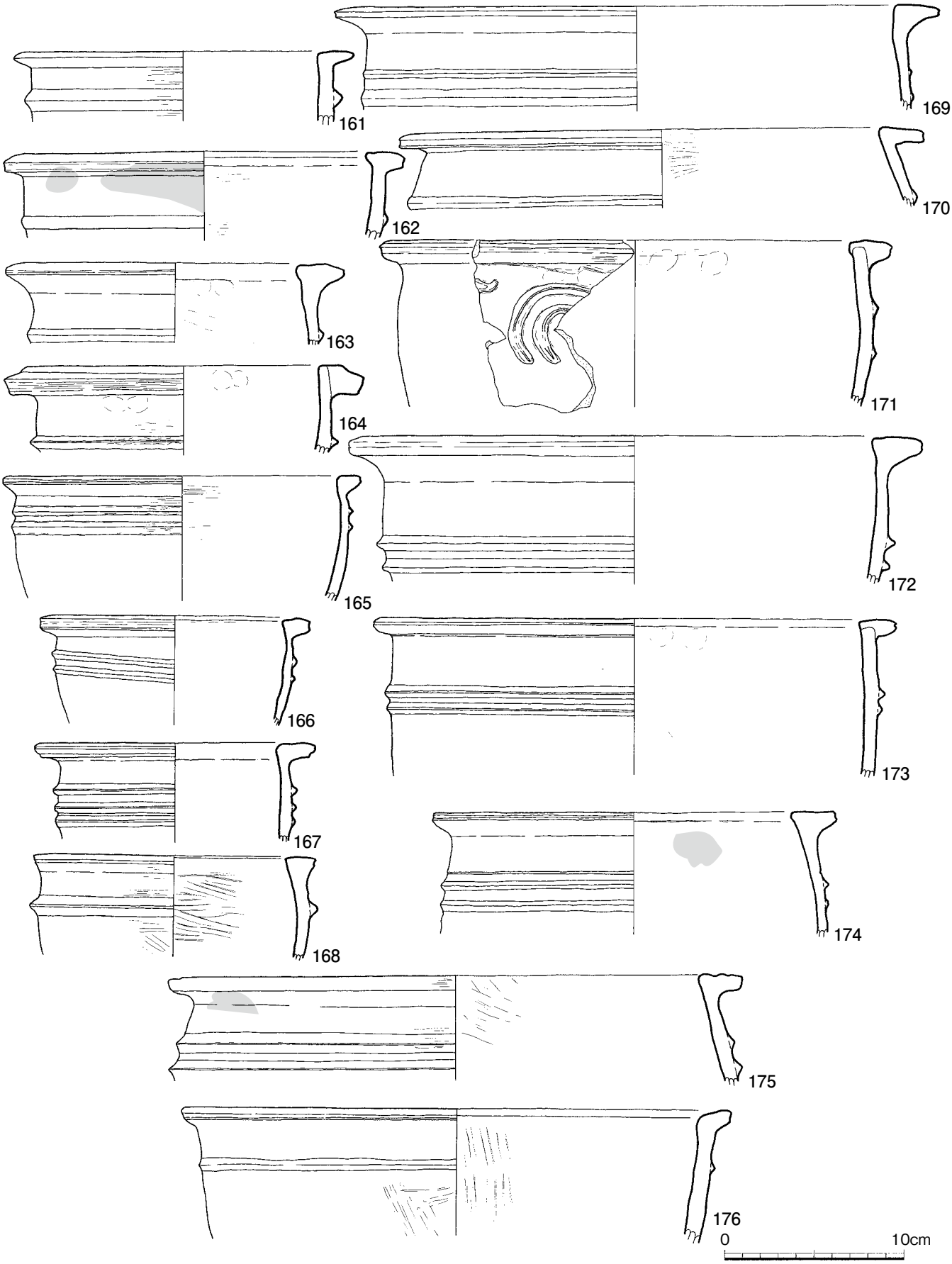
蓋形土器・円盤状土製品（294～301）

294～297は甕形土器の蓋である。294は外面にミガキが施されており，在地の技法で製作されているようである。胎土は在地的である。裾部内面には煤が付着しており，煮炊きに使用されたことは疑いない。295も同様に在地の技法で製作されているようである。頭部のつまみは在地の甕とよく似ており，甕底部の製作法が応用されているとみられる。胎土は在地的である。296は外面にミガキが施されている。胎土は在地的である。297は裾端部に凹線が施されている点が，入来Ⅱ式的である。胎土は在地的である。

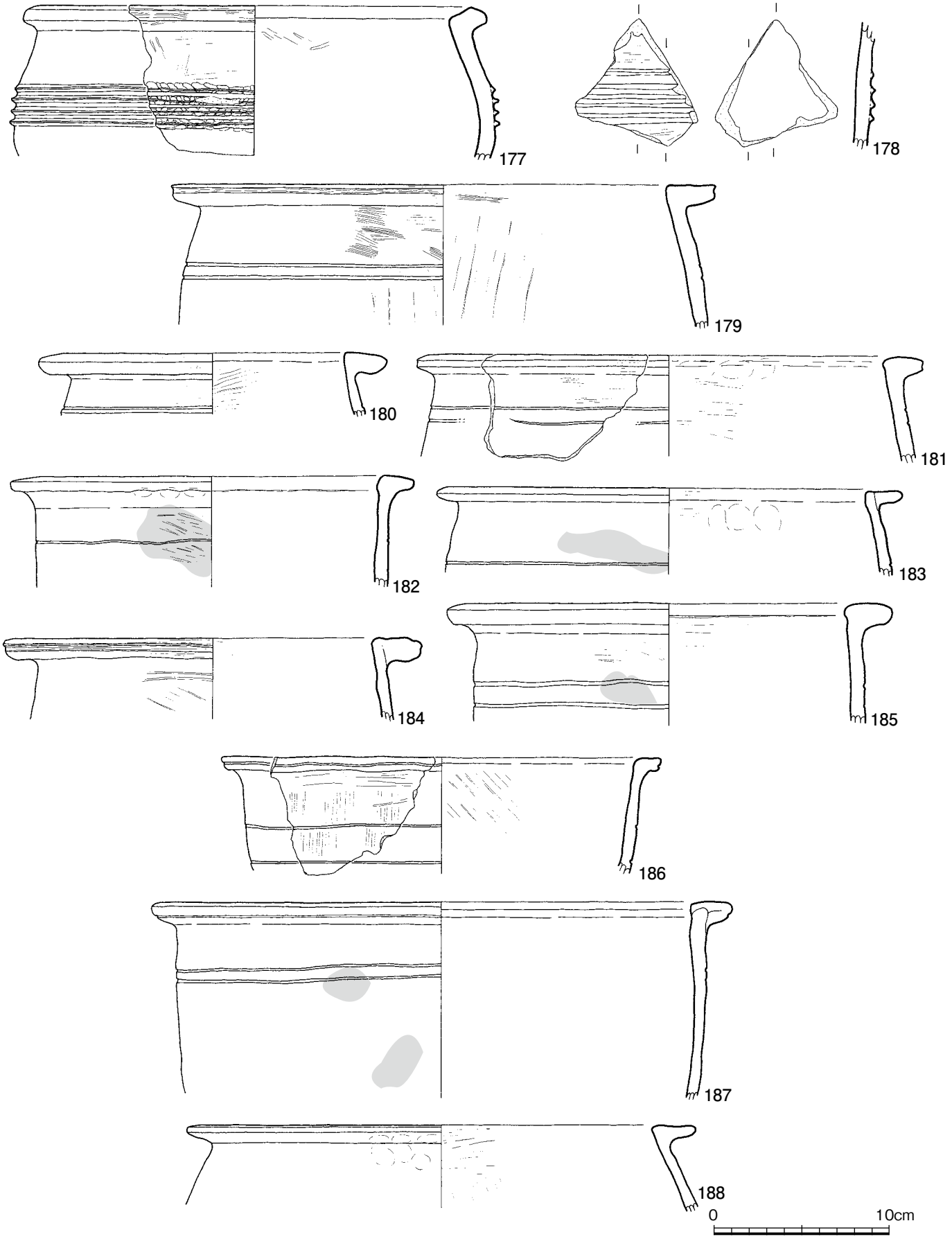
298～300は，土器片再加工の円盤状土製品。弥生土器胴部を使用している。301は土製紡錘車の破片である。胎土は在地的である。



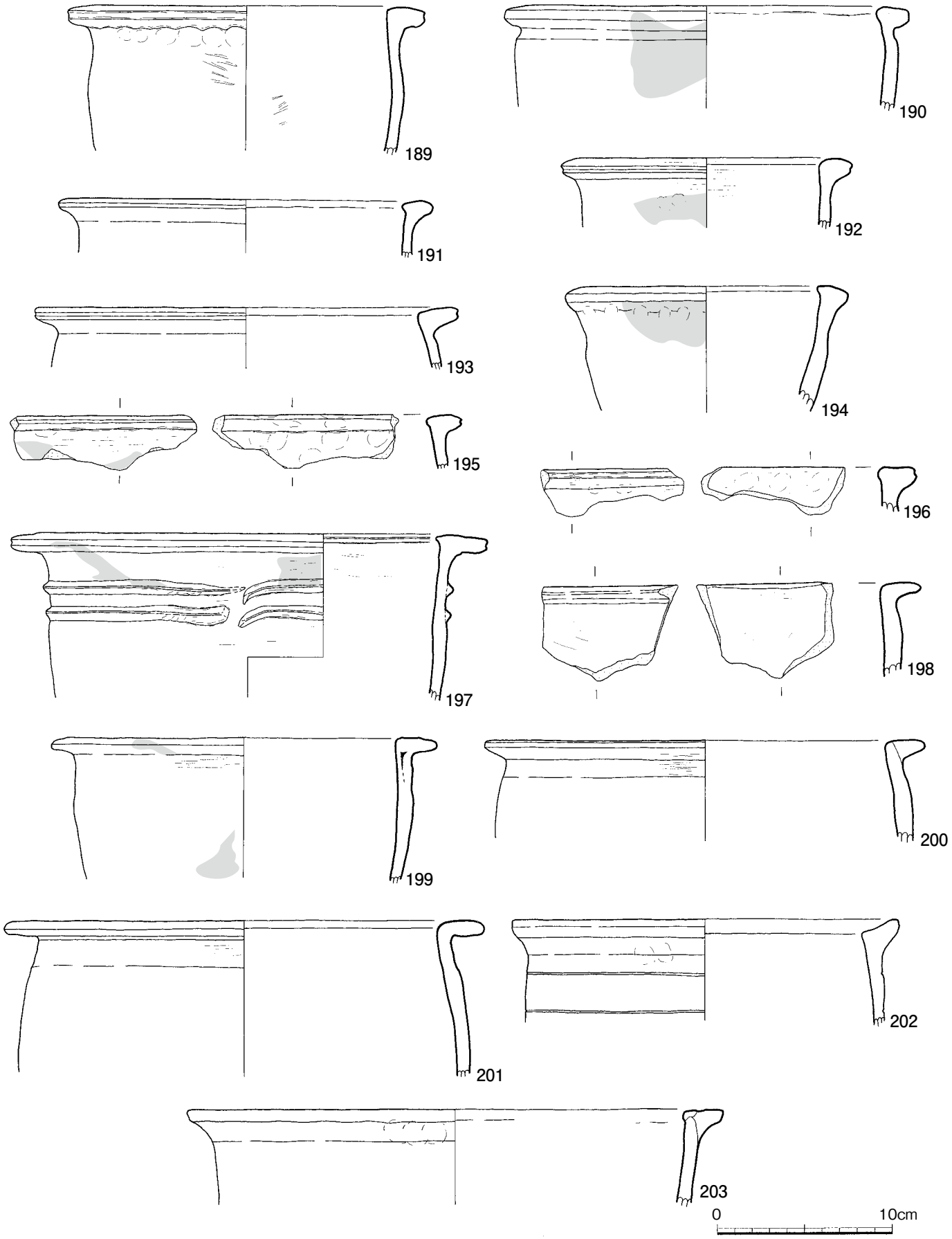
第35図　Ⅲ層（弥生時代）遺物出土状況図



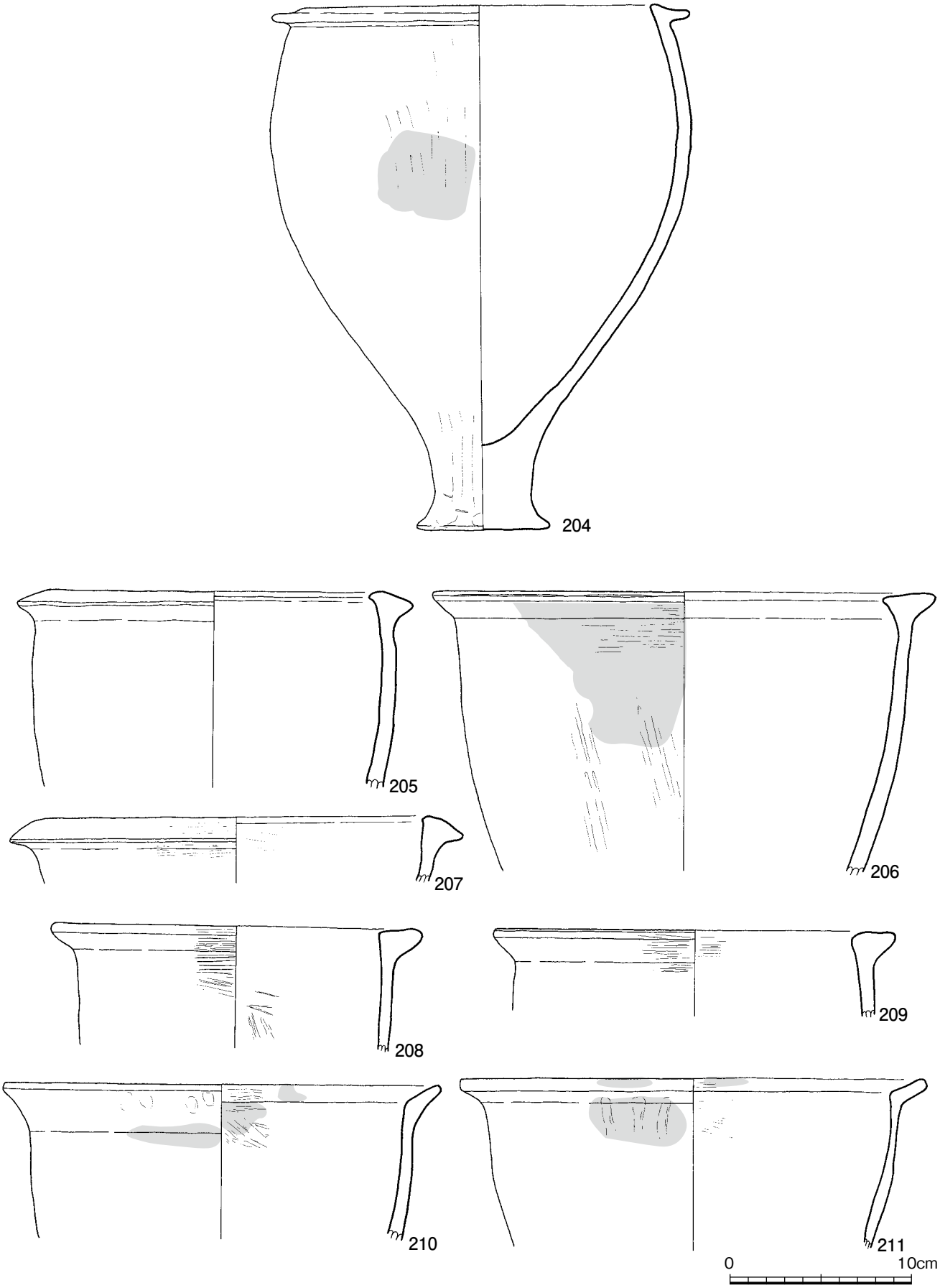
第36図　弥生時代甕形土器Ⅰ類（1）



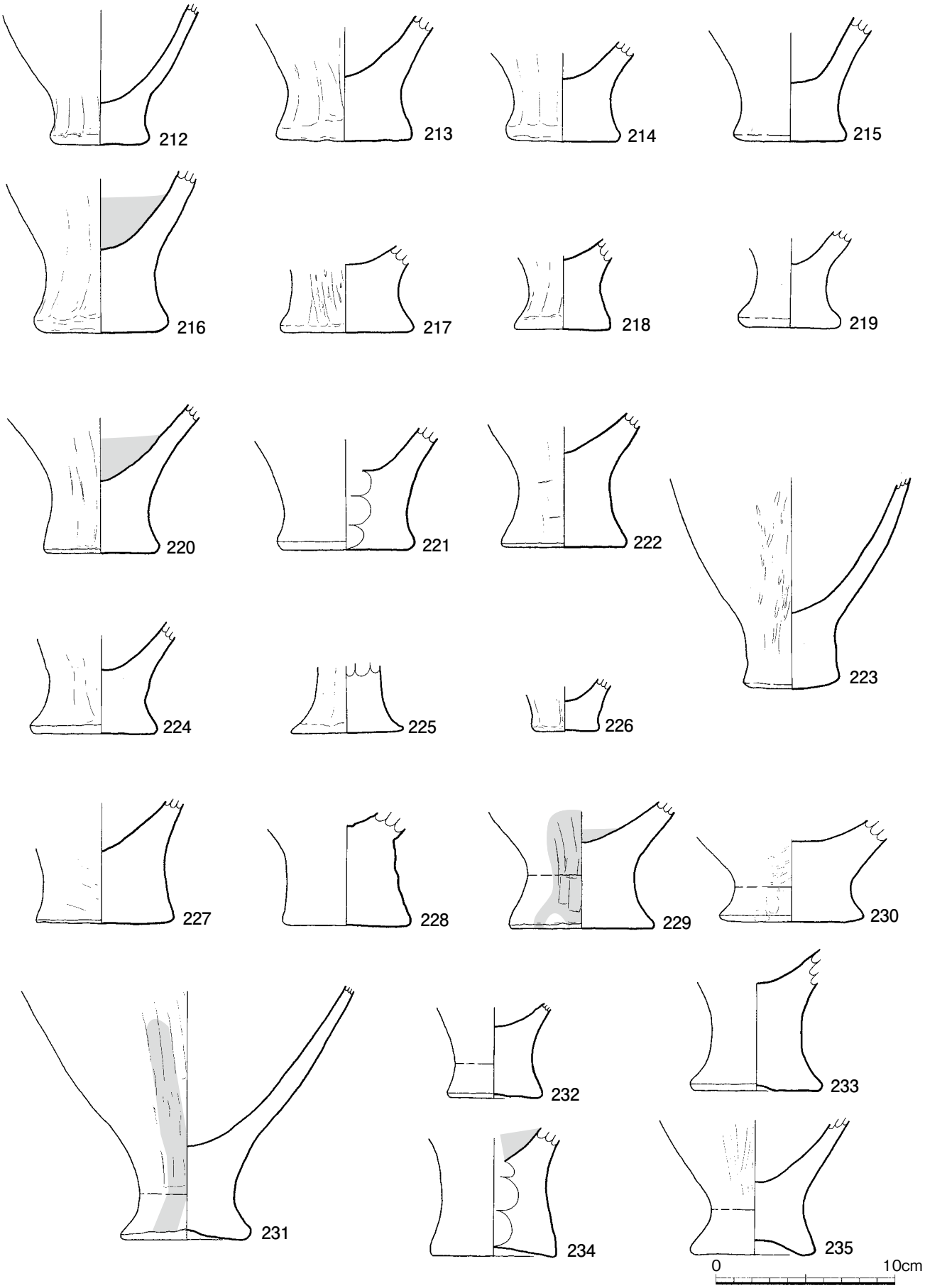
第37図　弥生時代甕形土器Ⅰ類（2）



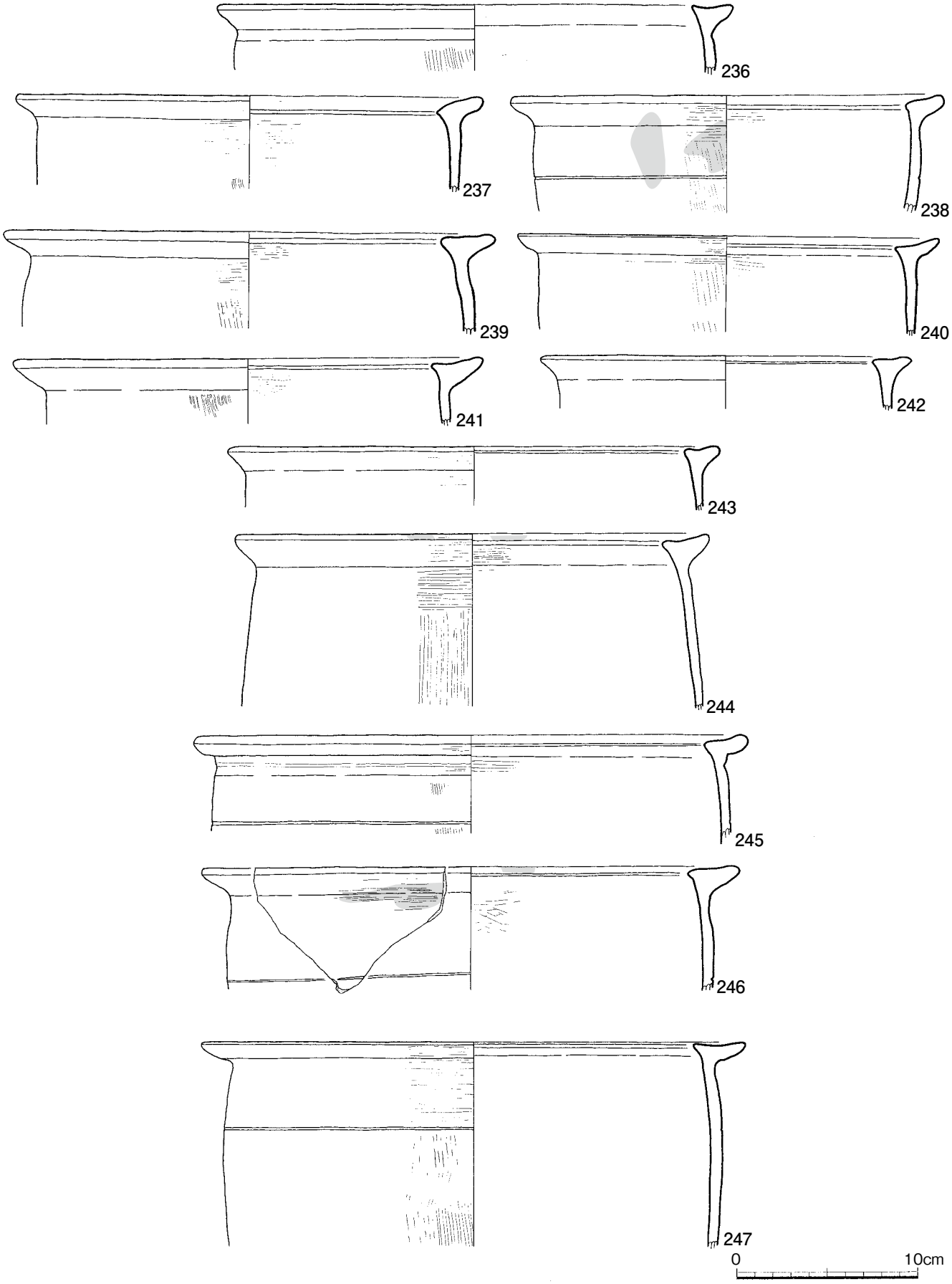
第38図　弥生時代甕形土器Ⅰ類（3）



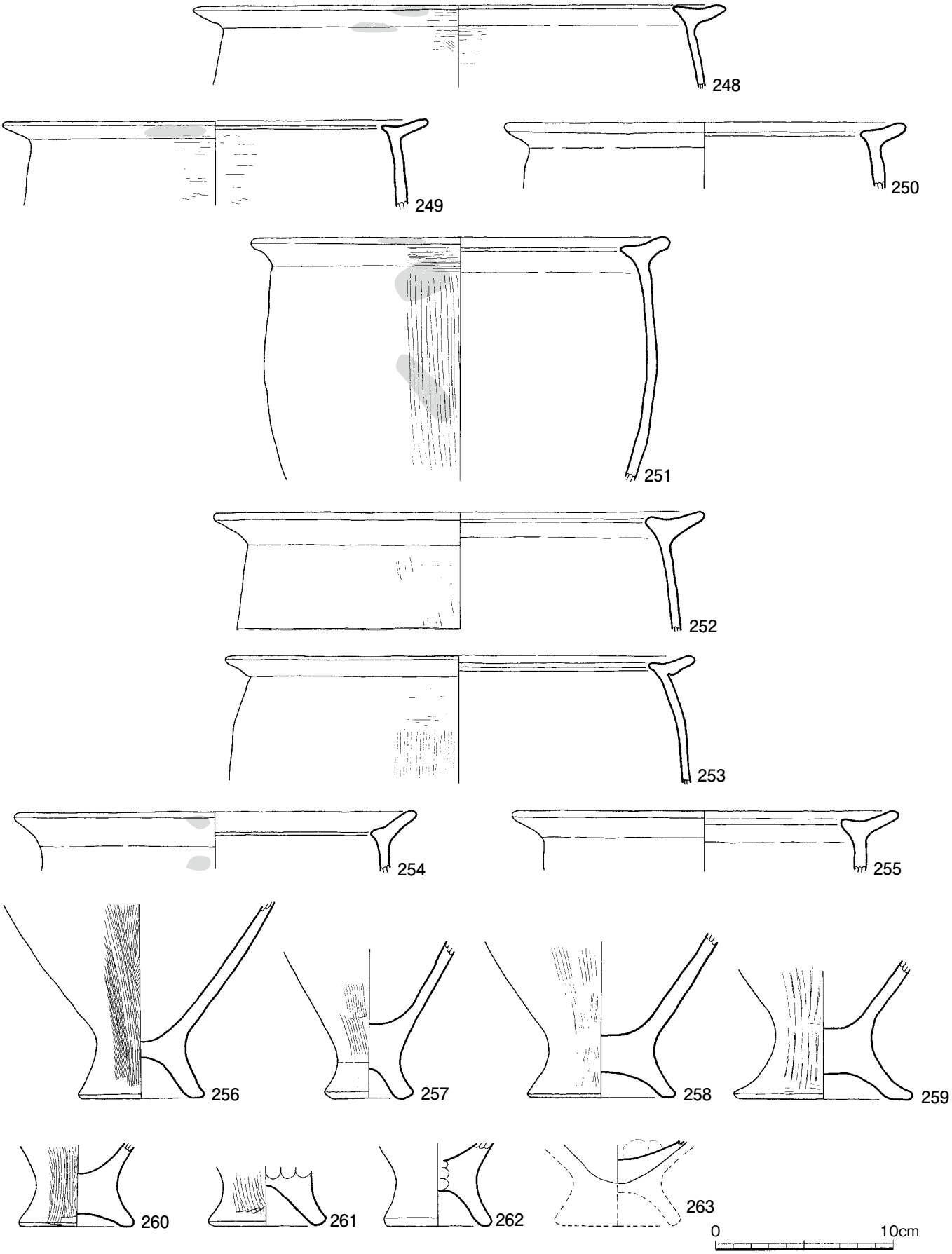
第39図　弥生時代甕形土器Ⅰ類（4）



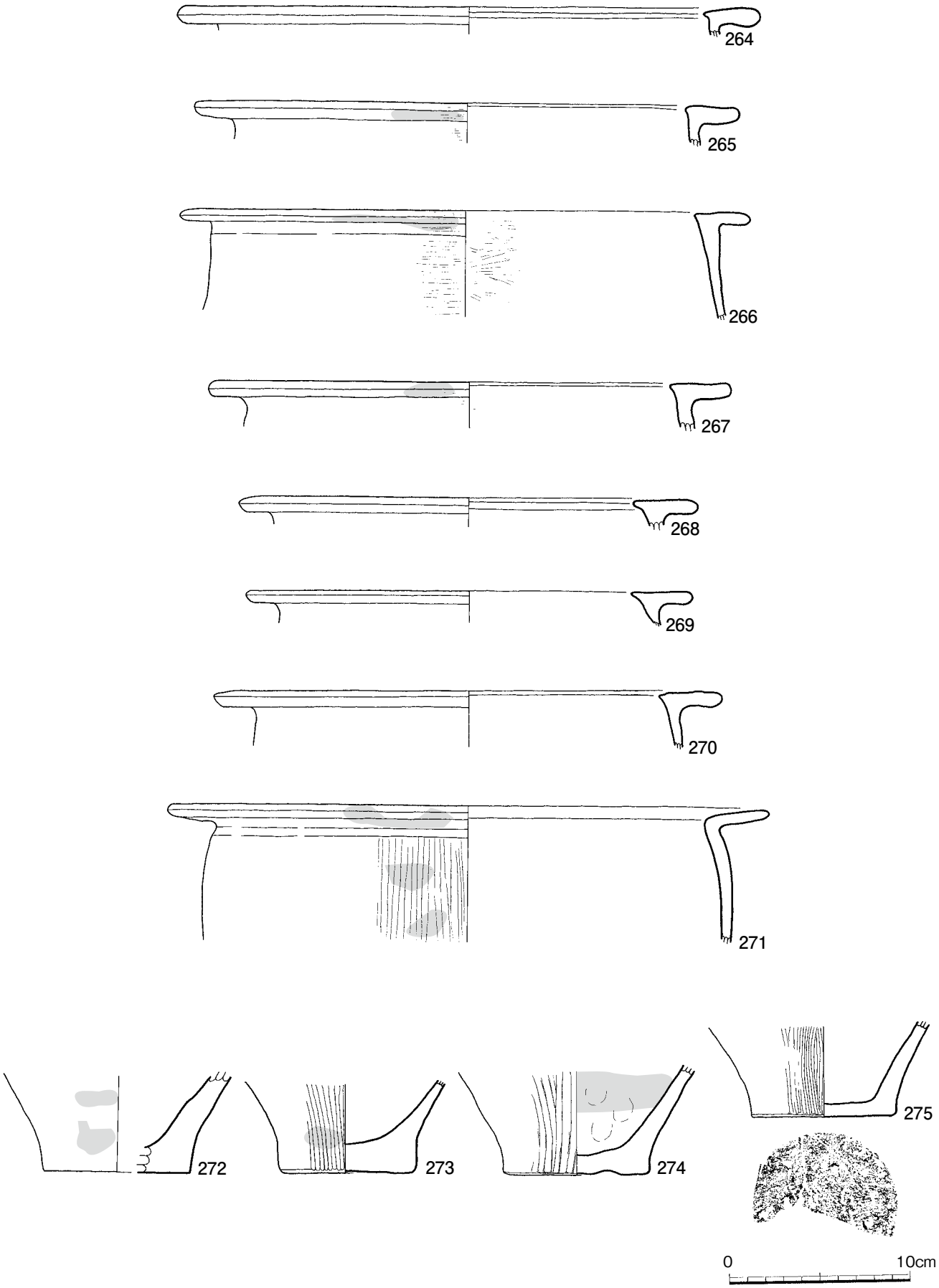
第40図　弥生時代甕形土器Ⅰ類（5）



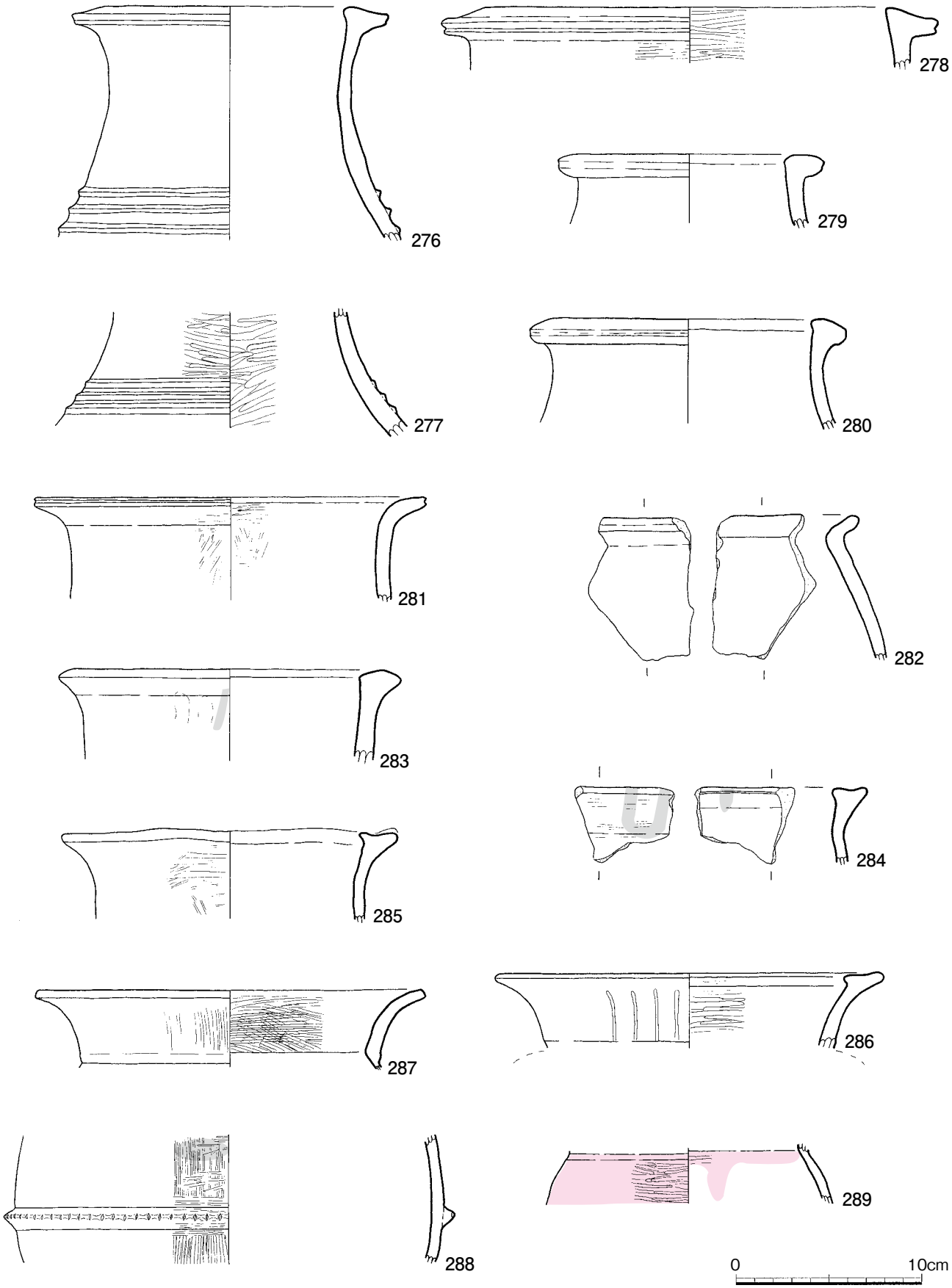
第41図　弥生時代甕形土器Ⅱ類（1）



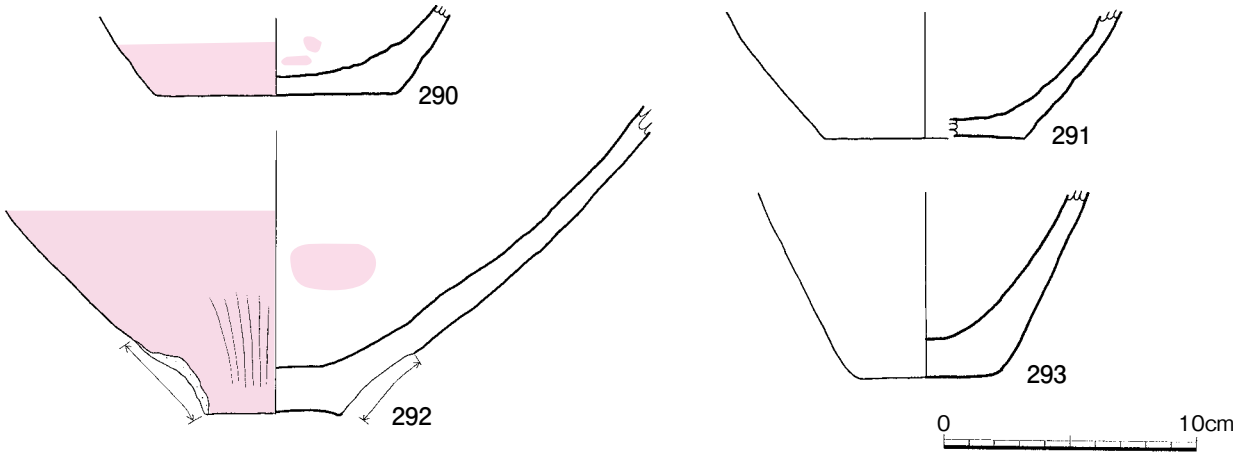
第42図　弥生時代甕形土器Ⅱ類（2）



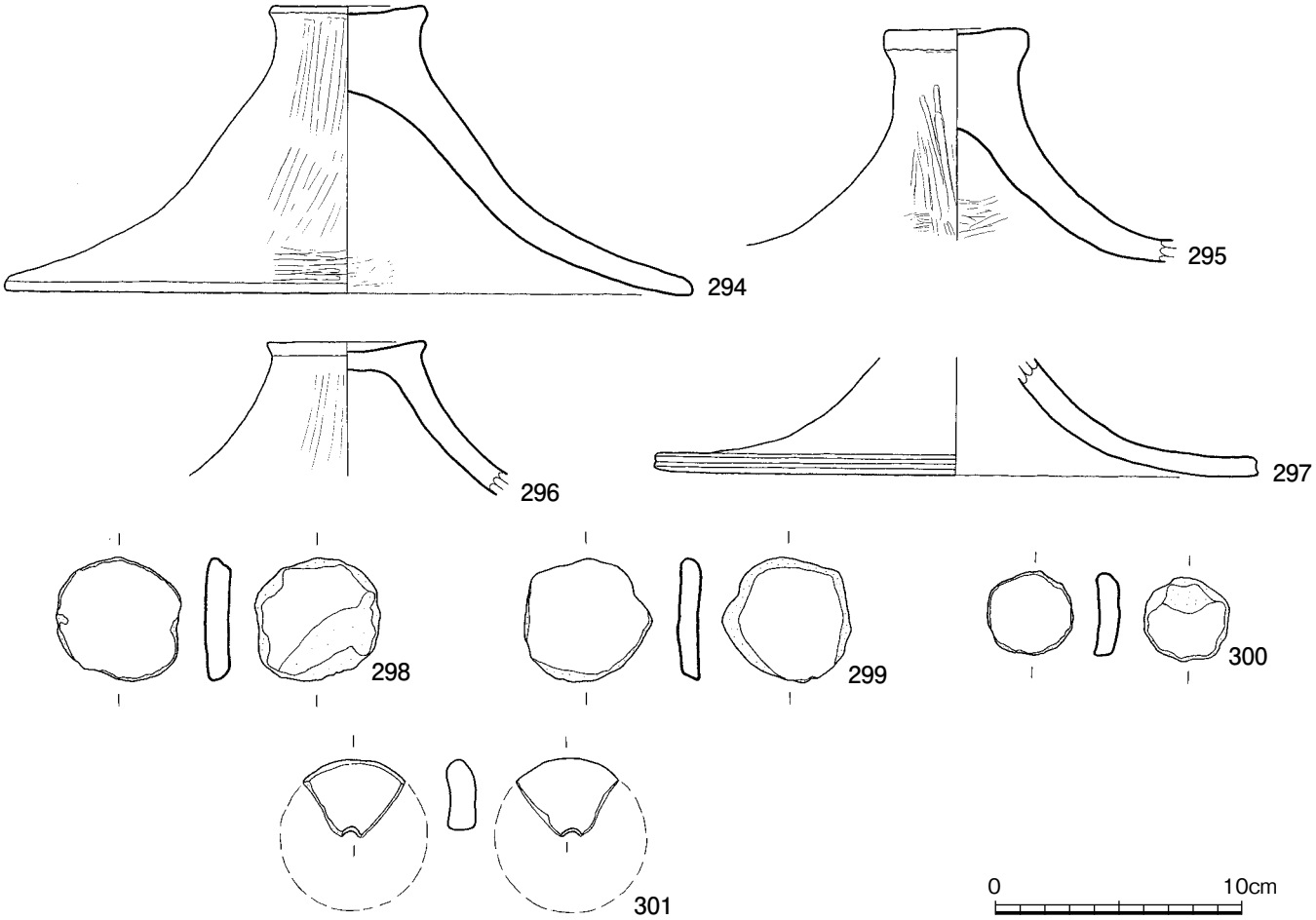
第43図　弥生時代甕形土器Ⅲ類



第44図　弥生時代壺形土器（1）



第45図　弥生時代壺形土器（2）鉢形土器



第46図　弥生土器（その他）

第16表　弥生土器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	類	部位	出土区	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
								外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
36	161	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰa	口縁	A−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	26.0	−	−	○			火山ガラス	
	162	甕形土器	Ⅲ	1290	Ⅰa	口縁	B・C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	18.2	−	−	○			細礫	煤付着
	163	甕形土器	−	22T·17	Ⅰa	口縁	A−4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	16.4	−	−	○			火山ガラス	
	164	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰa	口縁	C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	17.4	−	−	○	○		細礫	
	165	甕形土器	Ⅲ	1238•1337	Ⅰa	口縁	A−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	17.8	−	−	○	○			
	166	甕形土器	Ⅲ	1238·1240·1338	Ⅰa	口縁	A−2	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	12.0	−	−		○			
	167	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰa	口縁	B−2	橙	黄橙	ナデ	ナデ	13.6	−	−	○	○		細礫	
	168	甕形土器	Ⅲ	1427	Ⅰa	口縁	B−2	にぶい橙	橙	ミガキ	ナデ	13.2	−	−	○	○			
	169	甕形土器	Ⅱ	308	Ⅰa	口縁	A−3	明赤褐	にぶい明褐	ナデ	ナデ	28.8	−	−	○	○			
	170	甕形土器	Ⅱ	227	Ⅰa	口縁	A−3	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ	24.2	−	−	○			細礫	
	171	甕形土器	Ⅲ	1261	Ⅰa	口縁	C−2	明赤褐	明赤褐	ナデ	指痕·ナデ	23.2	−	−	○	○			
	172	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰa	口縁	A−2	橙	橙	ナデ	ナデ	27.6	−	−	○	○			
	173	甕形土器	Ⅲ	1196	Ⅰa	口縁	B−2	橙	橙	ナデ	ナデ	24.8	−	−	○	○		細礫	
	174	甕形土器	Ⅲ	1218·一括	Ⅰa	口縁	A・B−2	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	17.8	−	−	○			火山ガラス	煤付着
	175	甕形土器	Ⅲ	1124	Ⅰa	口縁	B−2	にぶい橙	明赤褐	ナデ	ナデ	26.8	−	−	○				煤付着
	176	甕形土器	Ⅱ	971•973	Ⅰa	口縁	B−3	橙	にぶい赤褐	ナデ	ハケメ·ナデ	29.4	−	−	○	○		細礫	
37	177	甕形土器	Ⅱ	175	Ⅰa	口縁	A−4	褐	にぶい褐	ミガキ	ミガキ·ナデ	24.6	−	−	○		○		
	178	甕形土器	Ⅱ	260	Ⅰa	胴部	A−3	褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	−	−	○	○			
	179	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰa	口縁	B−2	橙	橙	ナデ	ミガキ	25.8	−	−	○	○			
	180	甕形土器	Ⅲ	884	Ⅰa	口縁	A−3・4	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ミガキ	15.2	−	−	○	○			
	181	甕形土器	Ⅲ	1493	Ⅰa	口縁	B−4	橙	橙	ナデ	ミガキ	25.0	−	−	○	○		火山ガラス・細礫	
	182	甕形土器	Ⅱ	1145•1155	Ⅰa	口縁	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	18.6	−	−	○	○			煤付着
	183	甕形土器	Ⅲ	1139	Ⅰa	口縁	B−2	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	指痕·ナデ	22.4	−	−	○	○		火山ガラス	煤付着
	184	甕形土器	Ⅱ	1157	Ⅰa	口縁	B−2	にぶい橙	にぶい褐	ミガキ	ナデ	18.8	−	−	○				
	185	甕形土器	Ⅲ	304	Ⅰa	口縁	A−3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	22.0	−	−	○	○		火山ガラス	煤付着
	186	甕形土器	Ⅲ	297	Ⅰa	口縁	A−3	黒褐	にぶい黄橙	ハケメ·ナデ	ハケメ	22.6	−	−	○				
	187	甕形土器	Ⅱ	268·298	Ⅰa	口縁	A−3	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	31.0	−	−	○	○	○	火山ガラス	煤付着
	188	甕形土器	Ⅱ	21T·30	Ⅰa	口縁	A−4	橙	にぶい黄橙	指痕·ナデ	ナデ	24.2	−	−	○	○			
38	189	甕形土器	Ⅲ	1308	Ⅰa	口縁	C−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	指痕・ミガキ	ナデ	16.0	−	−	○	○	○		
	190	甕形土器	Ⅲ	1339	Ⅰa	口縁	A−2	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	20.0	−	−	○			細礫	煤付着
	191	甕形土器	Ⅱ	227	Ⅰa	口縁	A−3	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	19.0	−	−		○		火山ガラス・細礫	
	192	甕形土器	Ⅲ	1282	Ⅰa	口縁	C−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	14.6	−	−	○				煤付着
	193	甕形土器	Ⅲ	1267	Ⅰa	口縁	C−2	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	22.8	−	−	○	○		火山ガラス	
	194	甕形土器	Ⅲ	1484	Ⅰa	口縁	B−2	にぶい橙	橙	指痕·ナデ	ナデ	13.0	−	−	○			火山ガラス・細礫	煤付着
	195	甕形土器	Ⅱ	270	Ⅰa	口縁	A−3	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ	指痕·ナデ	−	−	−	○	○		火山ガラス	煤付着
	196	甕形土器	Ⅲ	1225	Ⅰa	口縁	A−2	橙	橙	指痕·ナデ	ナデ	−	−	−	○	○		火山ガラス·スコリア	
	197	甕形土器	Ⅲ	1296·1320 1394·1395	Ⅰb	口縁	C−2	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	22.0	−	−	○			火山ガラス	煤付着
	198	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰb	口縁	B−2	橙	橙	ナデ	ナデ	−	−	−	○	○		火山ガラス	
	199	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰb	口縁	B−2	橙	橙	ナデ	ナデ	19.8	−	−	○	○		火山ガラス	煤付着
	200	甕形土器	Ⅲ	1191	Ⅰb	口縁	C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	22.2	−	−	○	○		火山ガラス	
	201	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰb	口縁	B−2	橙	橙	ナデ	ナデ	23.2	−	−	○	○		火山ガラス	
	202	甕形土器	Ⅱb	1457	Ⅰb	口縁	B−1	橙	橙	ナデ	ミガキ	22.0	−	−	○	○		火山ガラス・細礫	
	203	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰb	口縁	A−2·3	にぶい褐	にぶい褐	指痕	ナデ	26.8	−	−	○	○		火山ガラス・細礫	
39	204	甕形土器	Ⅲ	1276	Ⅰb	完形	C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	20.4	7.4	28.8	○	○			煤付着
	205	甕形土器	Ⅲ	1171	Ⅰb	口縁	C−3	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	18.2	−	−	○	○		火山ガラス	
	206	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰb	口縁	B·C−2	黄橙	橙	ミガキ	ナデ	24.8	−	−	○	○			煤付着
	207	甕形土器	Ⅲ	1170•1273	Ⅰb	口縁	C−2	にぶい赤褐	黄褐	ナデ	ナデ	20.6	−	−	○	○		火山ガラス	
	208	甕形土器	Ⅱ	355	Ⅰb	口縁	A−4	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	18.4	−	−	○	○		火山ガラス・細礫	
	209	甕形土器	Ⅲ	1432·1135	Ⅰb	口縁	B·C−2	褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	19.0	−	−	○		○	火山ガラス	
	210	甕形土器	Ⅲ	1223	Ⅰb	口縁	A·B−2	橙	明黄褐	指痕·ミガキ	ナデ	23.6	−	−	○		○		煤付着
	211	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰb	口縁	B−2	にぶい黄褐	黄褐	指痕·ミガキ	ナデ	25.0	−	−	○				煤付着

第17表　弥生土器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	類	部位	出土区	色調		調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
								外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
40	212	甕形土器	Ⅲ	1314	Ⅰ	底部	B−2	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	5.5	−	○	○		細礫	
	213	甕形土器	Ⅱ	一括	Ⅰ	底部	B−2	橙	橙	指痕・ナデ	ナデ	−	7.0	−	○	○		火山ガラス	
	214	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰ	底部	A−2・3	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	6.3	−	○	○		火山ガラス・細礫	
	215	甕形土器	Ⅲ	1182	Ⅰ	底部	C−2	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	−	5.4	−	○	○	○		
	216	甕形土器	Ⅲ	1200	Ⅰ	底部	B−2	にぶい橙	暗灰黄	指痕・ナデ	ナデ	−	6.4	−	○	○		火山ガラス	炭化物・煤付着
	217	甕形土器	Ⅲ	1276	Ⅰ	底部	C−2	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	−	7.0	−	○				
	218	甕形土器	Ⅲ	1212	Ⅰ	底部	B−2	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	−	5.4	−	○	○		火山ガラス・スコリア	
	219	甕形土器	Ⅱ	312	Ⅰ	底部	A−3	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	5.0	−	○				
	220	甕形土器	Ⅲ	1214	Ⅰ	底部	B−2	橙	黒褐	ナデ	ナデ	−	6.0	−	○			火山ガラス	炭化物・煤付着
	221	甕形土器	Ⅱ	703	Ⅰ	底部	A−4	橙	灰褐	ナデ	ナデ	−	7.0	−	○	○		火山ガラス	
	222	甕形土器	Ⅲ	1210	Ⅰ	底部	B−2	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	−	7.2	−	○	○		火山ガラス	
	223	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰ	底部	C−2	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	5.0	−	○	○			
	224	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰ	底部	B−2	橙	褐灰	ナデ	ナデ	−	6.6	−	○	○		火山ガラス	
	225	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰ	底部	A−1	橙	−	ナデ	ナデ	−	6.0	−	○			火山ガラス・細礫	
	226	甕形土器	Ⅱ	一括	Ⅰ	底部	B−2	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	−	3.4	−	○				
	227	甕形土器	Ⅲ	1209	Ⅰ	底部	B−2	橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	−	7.5	−	○	○			
	228	甕形土器	Ⅱ	110	Ⅰ	底部	A−4	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	−	6.6	−	○	○		スコリア・ 火山ガラス・細礫	
	229	甕形土器	Ⅲ	1437	Ⅰ	底部	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	−	7.8	−	○				煤付着
	230	甕形土器	Ⅲ	1135	Ⅰ	底部	B−2	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	−	6.4	−	○				
	231	甕形土器	Ⅲ	1168	Ⅰ	底部	A−2 C−3	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	7.0	−	○	○			煤付着
	232	甕形土器	Ⅱ	57	Ⅰ	底部	A−4	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	−	4.8	−	○	○		細礫	
	233	甕形土器	Ⅱ	21T・47	Ⅰ	底部	A−4	橙	橙	ナデ	ナデ	−	7.0	−	○	○		火山ガラス	
	234	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅰ	底部	B−1	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	−	6.8	−	○			火山ガラス	煤付着
	235	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅰ	底部	A−2	橙	橙	ナデ	ナデ	−	6.2	−	○	○		細礫	
41	236	甕形土器	Ⅱ	952・953	Ⅱa	口縁	B−3	浅黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	28.2	−	−	○	○	○		
	237	甕形土器	Ⅱ	936	Ⅱa	口縁	B−3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	25.6	−	−	○		○		
	238	甕形土器	Ⅱ	一括	Ⅱa	口縁	B−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	23.6	−	−	○	○	○		煤付着
	239	甕形土器	Ⅱ	一括	Ⅱa	口縁	B−2	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ハケメ・ナデ	ナデ	25.8	−	−	○		○		
	240	甕形土器	Ⅲ	1350・1351	Ⅱa	口縁	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	18.4	−	−	○		○		
	241	甕形土器	Ⅲ	1441	Ⅱa	口縁	A−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ナデ	25.0	−	−	○		○		
	242	甕形土器	Ⅱ	22T・9	Ⅱa	口縁	A−4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	19.0	−	−	○		○		
	243	甕形土器	Ⅱ	21T・39・767	Ⅱa	口縁	21T・A−4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	26.0	−	−	○	○	○		
	244	甕形土器	Ⅱ	1317	Ⅱa	口縁	C−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	25.6	−	−	○		○		煤付着
	245	甕形土器	Ⅲ	1151	Ⅱa	口縁	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	25.4	−	−	○		○		
	246	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅱa	口縁	A−1	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	28.0	−	−	○	○	○		煤付着
	247	甕形土器	Ⅱ・Ⅲ	1283・1318 1378・1398	Ⅱa	口縁	C・D−2	浅黄橙	浅黄橙	ハケメ・ナデ	ナデ	29.2	−	−	○				
42	248	甕形土器	Ⅲ	1286・1306	Ⅱb	口縁	C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	24.0	−	−	○	○	○		煤付着
	249	甕形土器	Ⅲ	1142	Ⅱb	口縁	B−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	23.0	−	−	○		○		煤付着
	250	甕形土器	Ⅱ	21T・2・13	Ⅱb	口縁	A−4	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	22.0	−	−	○				
	251	甕形土器	Ⅲ	1411・1412 1476・1243	Ⅱb	口縁	A−2	黄橙	黄橙	ハケメ	ナデ	22.6	−	−	○	○	○		煤付着
	252	甕形土器	Ⅲ	1335・1408	Ⅱb	口縁	A−2	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	26.8	−	−	○	○	○		
	253	甕形土器	Ⅲ	1269	Ⅱb	口縁	C−2	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	25.5	−	−	○		○		
	254	甕形土器	Ⅲ	1445	Ⅱb	口縁	A−2	にぶい黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	21.6	−	−	○	○	○		煤付着
	255	甕形土器	Ⅲ	1407	Ⅱb	口縁	A−2	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	21.4	−	−	○	○	○		
	256	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅱ	底部	B−2	浅黄	にぶい黄	ハケメ	ナデ	−	7.0	−	○	○	○		
	257	甕形土器	Ⅱb	一括	Ⅱ	底部	B−2	橙	浅黄	ハケメ	ナデ	−	4.2	−	○	○	○		
	258	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅱ	底部	B・C−2	にぶい黄橙	浅黄	ハケメ	ナデ	−	8.2	−	○	○	○		
	259	甕形土器	Ⅱ	1510・ベルト一括	Ⅱ	底部	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	−	9.8	−	○	○	○		
	260	甕形土器	Ⅲ	ベルト一括	Ⅱ	底部	C−2	にぶい黄橙	にぶい黄	ハケメ	ナデ	−	6.2	−	○	○	○		
	261	甕形土器	Ⅲ	1444	Ⅱ	底部	A−2	にぶい黄橙	にぶい黄	ハケメ	ナデ	−	5.6	−	○	○	○		
	262	甕形土器	Ⅱ	22T・51	Ⅱ	底部	A−4	浅黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	−	6.0	−	○	○	○		
	263	甕形土器	Ⅲ	1241	Ⅱ	底部	A−2	黄灰	浅黄	−	ナデ	−	−	−	○	○	○		

第18表　弥生土器観察表③

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	類	部位	出土区	色調		調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
								外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
43	264	甕形土器	Ⅲ	1506•1507	Ⅲa	口縁	B−3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	29.0	−	−		○		雲母	
	265	甕形土器	Ⅱ	一括	Ⅲa	口縁	C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	24.4	−	−		○		雲母	煤付着
	266	甕形土器	Ⅱ	672	Ⅲa	口縁	A−3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ·ナデ	ナデ	25.2	−	−		○		雲母	煤付着
	267	甕形土器	Ⅱ	一括	Ⅲb	口縁	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄	ナデ	ナデ	22.0	−	−	○	○		雲母	煤付着
	268	甕形土器	Ⅲ	一括	Ⅲb	口縁	B−4	橙	橙	ナデ	ナデ	21.8	−	−	○	○		雲母	
	269	甕形土器	Ⅱ	23T·3	Ⅲb	口縁	B−4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	19.8	−	−		○		雲母	
	270	甕形土器	Ⅱ	22T·42	Ⅲb	口縁	A−4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	25.0	−	−		○		雲母	
	271	甕形土器	Ⅲ	1132•1137	Ⅲc	口縁	B−2	橙	橙	ハケメ	ナデ	32.4	−	−	○	○	○	雲母	煤付着
	272	甕形土器	表	一括	Ⅲ	底部	C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	−	8.0	−		○		雲母	煤付着
	273	甕形土器	Ⅲ	1235	Ⅲ	底部	A−2	にぶい橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	−	7.4	−		○		雲母	煤付着
	274	甕形土器	Ⅲ	1474	Ⅲ	底部	A−2	橙	にぶい黄	ハケメ	指痕·ナデ	−	7.8	−		○		雲母	煤付着
	275	甕形土器	Ⅲ	1152	Ⅲ	底部	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄	ハケメ	ナデ	−	7.4	−	○	○			
44	276	壺形土器	−	一括	Ⅰa	口縁	B·C−2	橙	明赤褐	ナデ	ナデ	13.0	−	−	○	○			黒塗りか？
	277	壺形土器	Ⅱ	192•193	Ⅰa	口縁	A−3	にぶい黄橙	黄褐	ミガキ	ミガキ	−	−	−	○			火山ガラス	
	278	壺形土器	Ⅲ	1297	Ⅰa	口縁	C−2	明赤褐	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	21.4	−	−	○			火山ガラス	
	279	壺形土器	Ⅲ	1333	Ⅰa	口縁	A−2	橙	橙	ナデ	ミガキ	11.0	−	−	○	○			
	280	壺形土器	Ⅱb	一括	Ⅰa	口縁	B−2	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	14.0	−	−	○	○		スコリア	
	281	壺形土器	Ⅲ	1493	Ⅰa	口縁	B−4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	20.8	−	−	○			火山ガラス	
	282	壺形土器	Ⅲ	一括	Ⅰb	口縁	B−2	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	−	−	○	○			
	283	壺形土器	Ⅲ	一括	Ⅰb	口縁	B−2	にぶい黄橙	黄橙	指痕·ナデ	ナデ	16.4	−	−	○	○	○		煤付着
	284	壺形土器	Ⅲ	一括	Ⅰb	口縁	B−2	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	−	−	−	○	○		細礫	煤付着
	285	壺形土器	Ⅱ	1133	Ⅰb	口縁	B−2	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	14.0	−	−	○	○		スコリア	
	286	壺形土器	Ⅱb	一括	Ⅱ	口縁	B−1	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ミガキ	20.8	−	−	○	○	○		
	287	壺形土器	Ⅱb	一括	Ⅱ	口縁	B−2	浅黄	淡黄	ハケメ	ハケメ	20.4	−	−	○		○		
	288	壺形土器	Ⅲ	1479	Ⅱ	胴部	A−2	にぶい黄褐	にぶい黄	ハケメ·ナデ	ナデ	−	−	−	○	○			刻目突帯·煤付着
	289	壺形土器	Ⅱ·表	18T一括	Ⅲc	胴部	18T	明赤褐	橙	ミガキ	ナデ·ミガキ	−	−	−	○	○			丹塗り
45	290	壺形土器	Ⅲ	1310•1403	Ⅲb	底部	C−2	明赤褐	橙	ミガキ	ナデ	−	9.6	−		○			丹塗り
	291	壺形土器	Ⅶ	827•828	Ⅲb	底部	A−3	橙	橙	ミガキ	ナデ	−	8.0	−	○	○		雲母	
	292	壺形土器	Ⅲ	1280•1288•1305 1311•1388	Ⅲb	底部	C−2·3	橙	橙	ハケメ	ナデ	−	5.6	−	○	○		雲母·スコリア	丹塗り
	293	鉢形土器	Ⅱb	一括	Ⅰ	底部	B−2	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	5.2	−	○	○			
46	294	蓋	Ⅲ	1239•1562	−	完形	A·B−2	橙	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ·ミガキ	5.2	26.8	11.6	○			スコリア・細礫	
	295	蓋	Ⅲ	1237	−	上部	A−2	にぶい黄	黄褐	ミガキ	ミガキ	5.0	−	−		○		火山ガラス・細礫	煤付着
	296	蓋	Ⅲ	1253•1487	−	上部	B·C−2	にぶい黄橙	橙	ミガキ	ナデ	6.4	−	−	○	○			
	297	蓋	−	ベルト	−	裾部	B·C−2	黄橙	明黄褐	ナデ	ナデ	−	20.4	−		○		細礫	
	298	円盤状土製品	Ⅱ	一括	−	完形	B−2	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	−	−	○	○		火山ガラス	
	299	円盤状土製品	Ⅱ	22T·7	−	完形	A−4	赤褐	褐	ナデ	ナデ	−	−	−	○	○		火山ガラス	
	300	円盤状土製品	Ⅲ	ベルト下一括	−	完形	A·B−2	明赤褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	−	−	−	○			火山ガラス	
	301	紡錘車	Ⅱ	一括	−	−	D−3	明褐	明褐	ミガキ	ミガキ	−	−	−	○	○		火山ガラス スコリア	

Ⅲ層出土の石器（302～330）

Ⅲ層（濁黄褐色土）出土の石器である。土器との共伴関係に従えば基本的には弥生時代に位置づけられるものであるが，弥生時代の遺構が下層を掘り込んでいることを考慮すれば，一部縄文時代の遺物を含んでいることも想定される。

石鏃　302は灰色に白色および黒色の縞目の入る良質な頁岩製の磨製石鏃である。住居内出土の磨製石鏃と同様，左右の側辺は鋭利に仕上げられるが，浅く内弯する基辺は平坦面を呈する。303は緑灰色を呈するチャート製の打製石鏃である。均整がとれた丁寧な仕上げで，基部はＵ字状の深い抉りを持ち，両脚部は端部が窄まる。304は黒色ガラス質で灰色の縞が入る黒曜石製の打製石鏃である。やや厚みのある剥片を素材とし，基部はやや深く弧状に調整された凹基鏃で，調整は基部および左右の側辺のみに止まり，身部には表裏ともに素材の剥離面が残置される。

石匙　305は玉髄（蛋白石）を素材とする横型の石匙である。刃部は表裏から丁寧に調整され直線的に仕上げられ，身部は半月形を呈する。つまみ部は抉りが浅く棒状に仕上げられている。306は上野原型のつまみが大きくなったもので，石材も他遺跡の上野原型石匙と同じ黒色安山岩を用いている。

磨製石斧　307はホルンフェルスの大型剥片を素材とする磨製石斧である。剥離整形の後，両側縁を中心に敲打調整を加え，両側縁の基部寄りに括れを造り出す。刃部平面形状は弧状を呈する外弯刃で，断面は両凸刃である。308はホルンフェルス製の小型の磨製石斧である。素材剥片の基部及び両側辺に剥離を加えて整形し，敲打調整は施されず，刃部を中心とした研磨で仕上げる。刃部は直刃に近い外弯刃，両凸刃で，製作技術的には縄文時代早期に類例が多い。

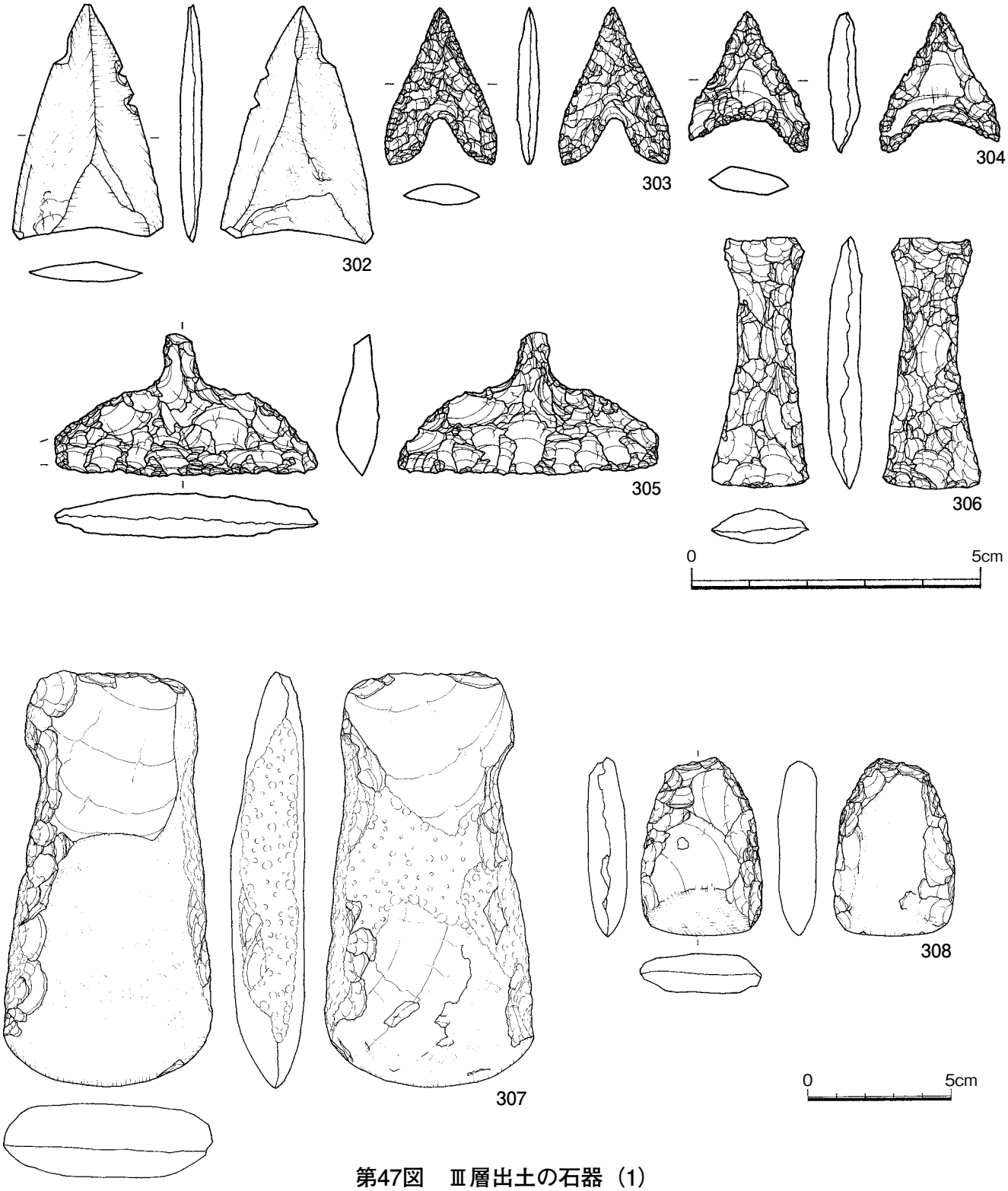
磨石・敲石類　309は小球形の安山岩，310は砂岩の扁平円礫，311は卵形状の安山岩である。いずれも比較的小型の礫で，明確な磨面はなく，表裏面および端部等に部分的に敲打の痕跡がみられる。

312は扁平棒状の安山岩の亜角礫で，平坦な磨面を有し，部分的に線状痕がみられる。313は重量約1.5kgのやや大型の安山岩円礫で，表面の中央部分に集中した敲打痕がみられる。314は石英脈岩の亜円礫である。硬質な石材にも関わらず，上下両端部には顕著な敲打痕がみられ，端部が削られたようになっており，槌石としての用途が考えられる。側面部分にはランダムな擦痕がみられるが，用途に関連したものではないと思われる。315は扁平な砂岩円礫である。表裏面とも平滑で部分的に擦痕が，また，下端部には敲打痕がみられる。316，317はいずれも安山岩の円礫で，表裏面中央に敲打痕が集中し，明瞭な凹みがみられるほか，磨石として使用された可能性がある。318，319は安山岩の円礫で，磨石として用いられたものとみられ，端部には部分的に敲打痕が観察される。320は安山岩の扁平な亜円礫を素材とする磨石・敲石で，左右側縁は敲打により側面が形成され，断面が隅丸方形状を呈する。上下辺および表裏面の中央付近にも敲打の痕跡がみられ，表裏とも凹みが生じている。また，裏面の緩やかに外弯する平坦面は磨石として使用されたものとみられる。

石皿　321，323，324は安山岩の亜角礫で板状を呈し，磨面を有する。いずれも磨面は狭小で，砥石あるいは台石とするのが適当かもしれない。

砥石　322は扁平な砂岩礫で節理部分から３点の板状に割れていたが接合したものである。凹凸のある礫面の凸部を中心に明瞭な砥面がみられる。

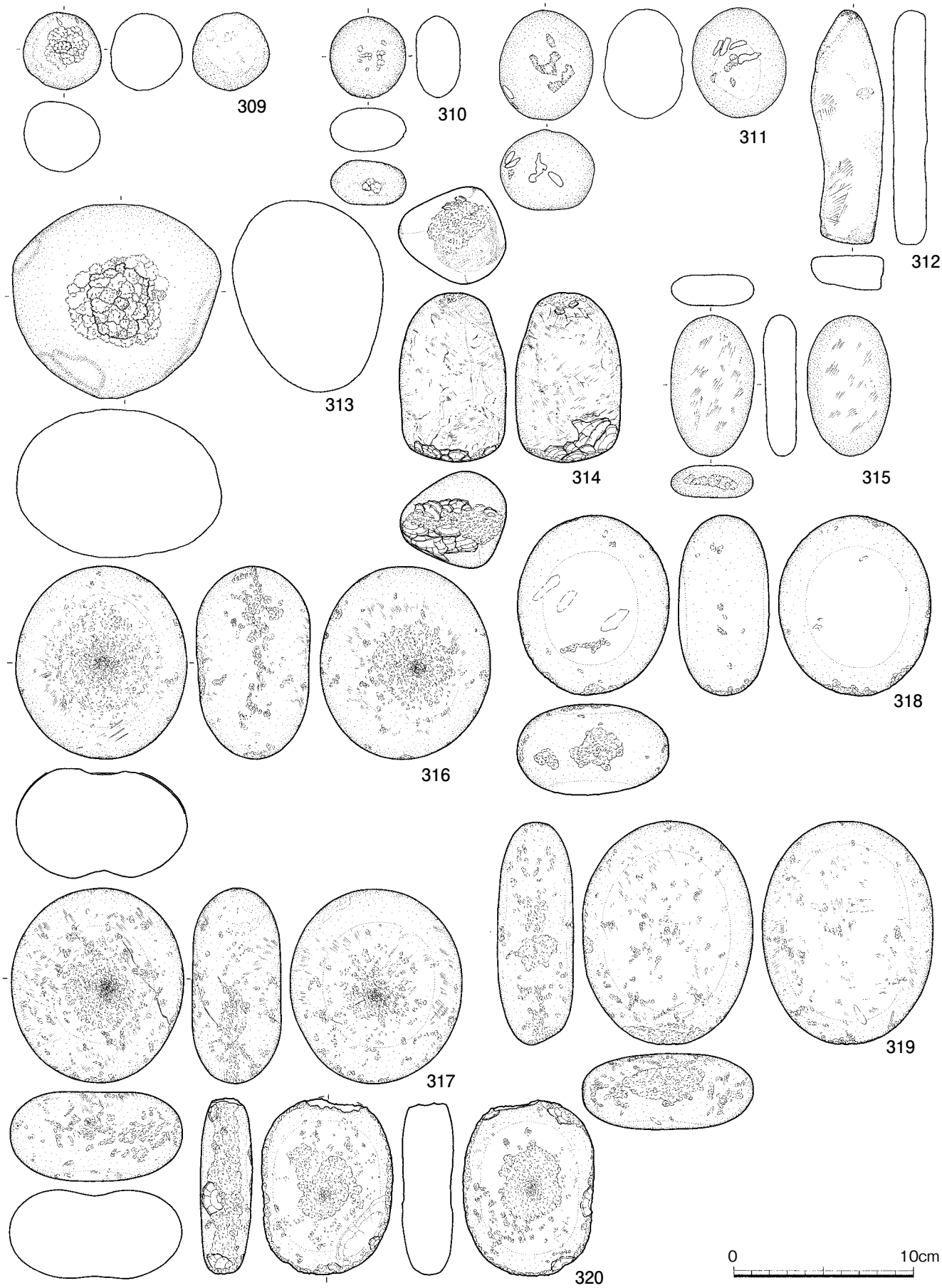
軽石加工品　325～327はいずれも淡黄白色を呈する軽石で，片面に平坦な磨滅面を有する。328はやや大型の軽石で，表側の平坦な面上の中央やや右寄りに，上面で約７㎝×５㎝，深さ約２㎝の凹みが彫り込まれている。329は不定形な軽石の小礫で，径約１㎝，深さ約１cm強の貫通しない穿孔がある。330は小型の軽石礫で，右側面に削られて内弯する部分があるが，下半を欠損するため全形は不明である。



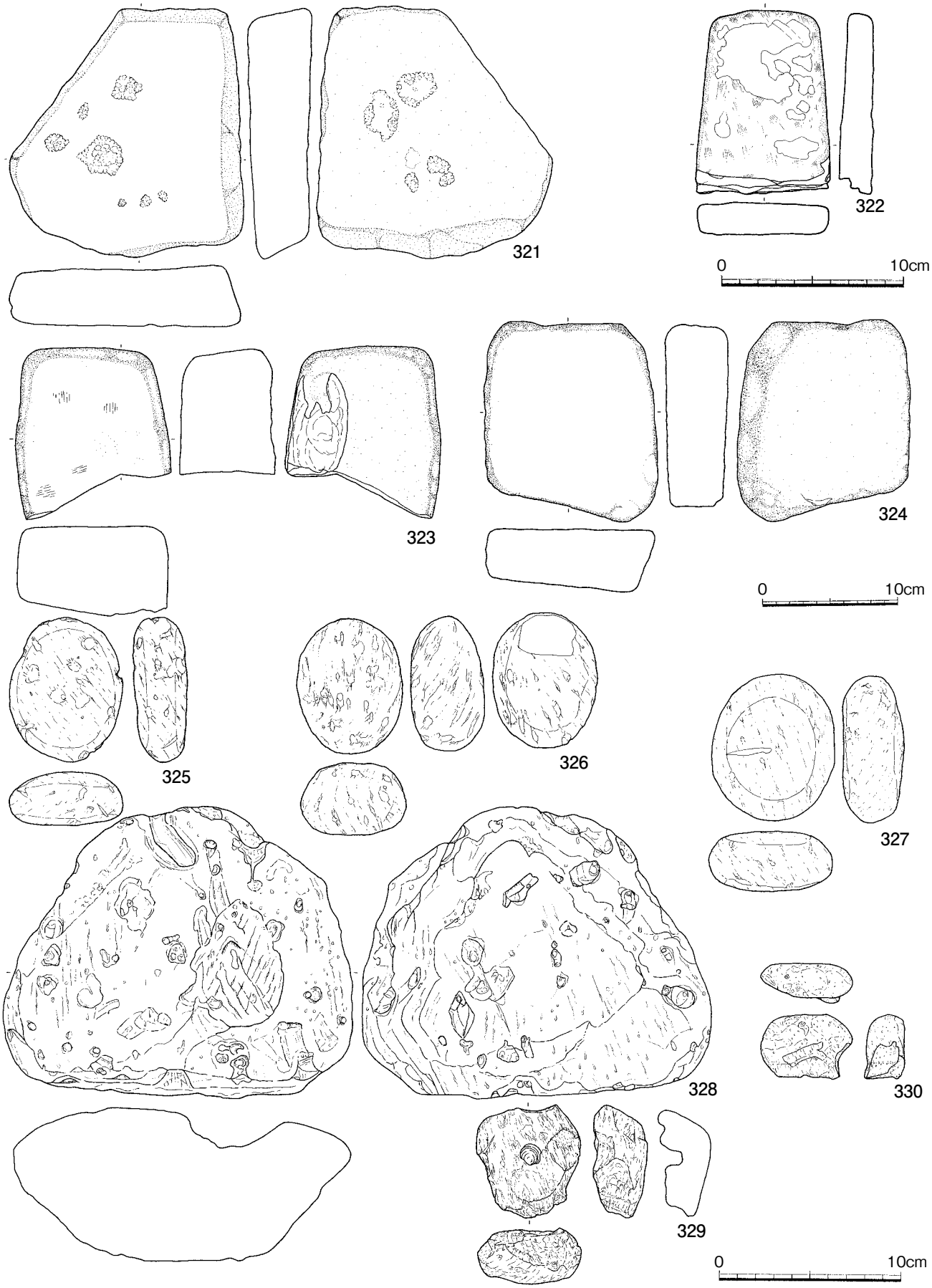
第47図　Ⅲ層出土の石器（1）

第19表　Ⅲ層出土石器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
47	302	磨製石鏃	Ⅲ	頁岩	B−2	−	1207	4.06	2.6	0.38	3.43	
	303	打製石鏃	Ⅲ	チャート	C−2	−	1414	2.7	1.9	0.35	1.33	
	304	打製石鏃	Ⅲ	黒曜石	B−4	−	一括	2.4	2.05	0.52	1.46	



第48図　Ⅲ層出土の石器（2）



第49図　Ⅲ層出土の石器（3）

第20表　Ⅲ層出土石器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
47	305	石匙	Ⅲ	玉髄	D－3	－	1117	2.48	4.5	0.78	5.17	
	306	石匙	Ⅲ	安山岩	A－4	－	45	4.35	1.68	0.6	3.34	
	307	磨製石斧	Ⅲ	ホルンフェルス	A－2	－	137	14.45	7.25	2.56	370	
	308	磨製石斧	Ⅲ	ホルンフェルス	D－3	－	1361	6.19	4.2	1.35	46.82	
48	309	敲石	Ⅲ	安山岩	A－2	－	1226	4.15	4.3	3.92	72	
	310	敲石	Ⅲ	砂岩	B－2	－	一括	4.5	4.22	2.5	62	
	311	敲石	Ⅲ	安山岩	A－4	－	783	6.0	5.2	4.5	142	
	312	磨石	Ⅲ	安山岩	A－2	－	1345	12.9	4.09	1.9	170	
	313	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	A－2	－	1438	10.8	11.6	8.4	1,478	
	314	磨石・敲石	Ⅲ	石英脈岩	B－2	－	1471	9.5	5.9	5.4	388	
	315	磨石・敲石	Ⅲ	砂岩	D－2	－	1118	7.9	4.6	1.8	104	
	316	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	C－2	－	1420	10.7	9.5	6.4	9.5	
	317	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	C－2	－	1291	10.7	9.6	4.9	788	
	318	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	B－2	－	－	10.0	8.5	5.1	626	
	319	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	C－2	－	1402	12.3	9.5	4.2	762	
	320	磨石・敲石	Ⅲ	安山岩	A－2	－	1334	9.7	7.3	2.9	292	
49	321	石皿	Ⅲ	安山岩	B－2	－	1485	18.3	17.5	5.15	2,400	
	322	砥石	Ⅲ	砂岩	A－4	－	43･46	12.0	7.5	1.85	238	21トレンチ
	323	石皿	－	安山岩	A－2	－	一括	12.8	11.5	7.0	1,800	20トレンチ
	324	石皿	Ⅲ	安山岩	B－2	－	1483	14.6	12.9	5.0	1,600	
	325	軽石製品	Ⅲ	軽石	A－2	－	一括	8.02	6.25	2.95	44.52	東側トレンチ
	326	軽石製品	Ⅲ	軽石	C－2	－	1293	7.5	5.8	4.0	47.5	
	327	軽石製品	Ⅲ	軽石	C－2	－	1254	8.11	6.75	3.5	40.96	
	328	軽石製品	Ⅲ	軽石	A－2	－	1242	16.2	19.3	8.5	525	
	329	軽石製品	Ⅲ	軽石	A－1	－	一括	6.21	5.7	2.95	15.67	
	330	軽石製品	Ⅲ	軽石	B－2	－	85	3.6	5.5	2.25	7.31	

表層・Ⅱ出土の石器（331～346）

表層およびⅡａ層（黒色土），Ⅱｂ層（古代～中世の造成土）出土の石器である。本遺跡では弥生時代，古代以降，住居，土坑，柱穴などの遺構の掘削や，屋敷地の造成がおこなわれており，いずれも，本来その帰属してきた包含層から遊離して出土したものである。

石鏃　331，332はいずれも透明で青みがかった灰色の色調を呈する白色の晶子をわずかに混ずる比較的良質なガラス質の黒曜石製である。長さ，幅ともに１㎝強の小型の凹基の石鏃である。331は造成土中の黄褐色土部分からの出土である。333は暗灰黒色を呈する珪質頁岩製の石鏃で造成土中からの出土である。両側辺とも下半部で屈折して脚部を形成し，基部は半月状に内弯する凹基鏃である。334は赤褐色を呈する鉄石英製の石鏃で，右脚部を欠損する。側辺上位で屈折し，五角形を呈する凹基鏃である。335は白色の不純物を多く含む漆黒色，不透明の黒曜石製の凹基の石鏃である。上半を欠損するが，残存部から比較的大型の石鏃とみられる。336は灰黒色を呈するサヌカイト質の良質な安山岩製の石鏃である。長さ3.4㎝の比較的大型の二等辺三角形鏃で，基部はやや深くＵ字状に抉り，脚部が窄まる形態である。

石匙　337は青灰色で透明度が低く，不純物を少量含む黒曜石製の石匙である。刃部は表裏からの比較的丁寧な調整で弧状に仕上げられ，つまみ部はやや簡略な調整ながら，丸みを持つ仕上げになっている。

使用痕のある剥片　338は赤褐色に白色の縞が入る瑪瑙製で，背面に稜を取り込んだやや縦長の剥片である。左側辺上部の腹面側からの剥離は，部分的に施された調整剥離とみられる。側縁および背面稜上には細かい剥離や摩耗がわずかにみられることから，先端部を欠損するもののドリルのような用途に用いられた可能性がある。

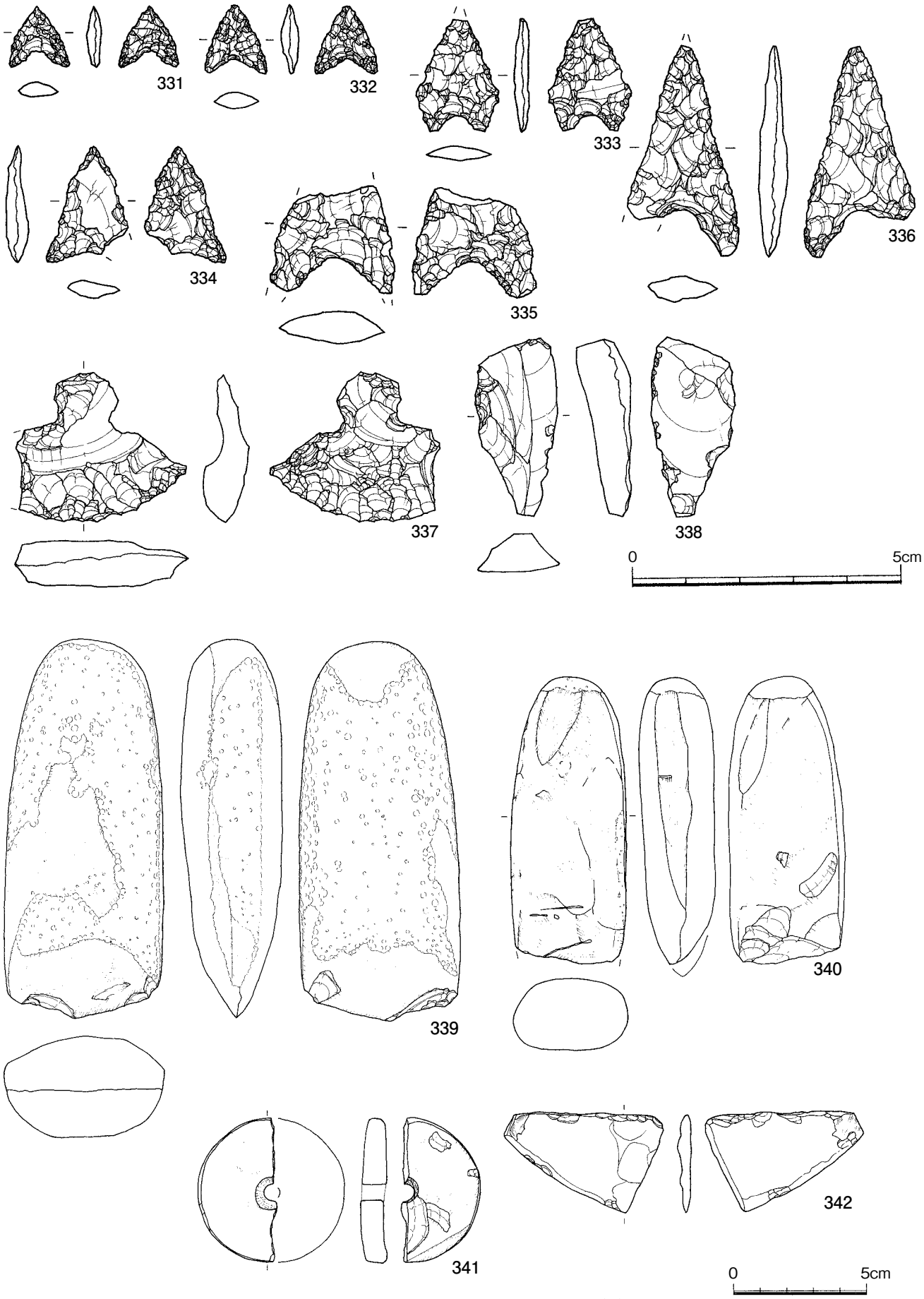
磨製石斧　339は砂岩礫を素材とする両凸刃，偏刃の磨製石斧である。ほぼ全面が研磨面および敲打調整面となっており，剥離調整の痕跡を留めない。また，研磨面を敲打調整痕が切っていること，刃部に生じた剥離痕を研磨痕が切る部分があることなどから，刃部に欠損が生じたのち，メンテナンスが施されたものと認める。340は灰黄色を呈する細粒の砂岩製の磨製石斧である。棒状の円礫を素材としたとみられ，部分的に細かい敲打調整の痕跡を残すものの，ほぼ全面が丁寧に研磨により仕上げられている。刃部は使用によるとみられる剥離により欠損する。

石製紡錘車　341は赤褐色を呈する砂岩製の紡錘車である。中央の穿孔は表側からの回転穿孔で，貫通後，裏面側からも仕上げが施されている。表裏面および側面とも丁寧に研磨され円盤状に仕上げられている。ほぼ二分の一が残存し，残存重量は約24gである。

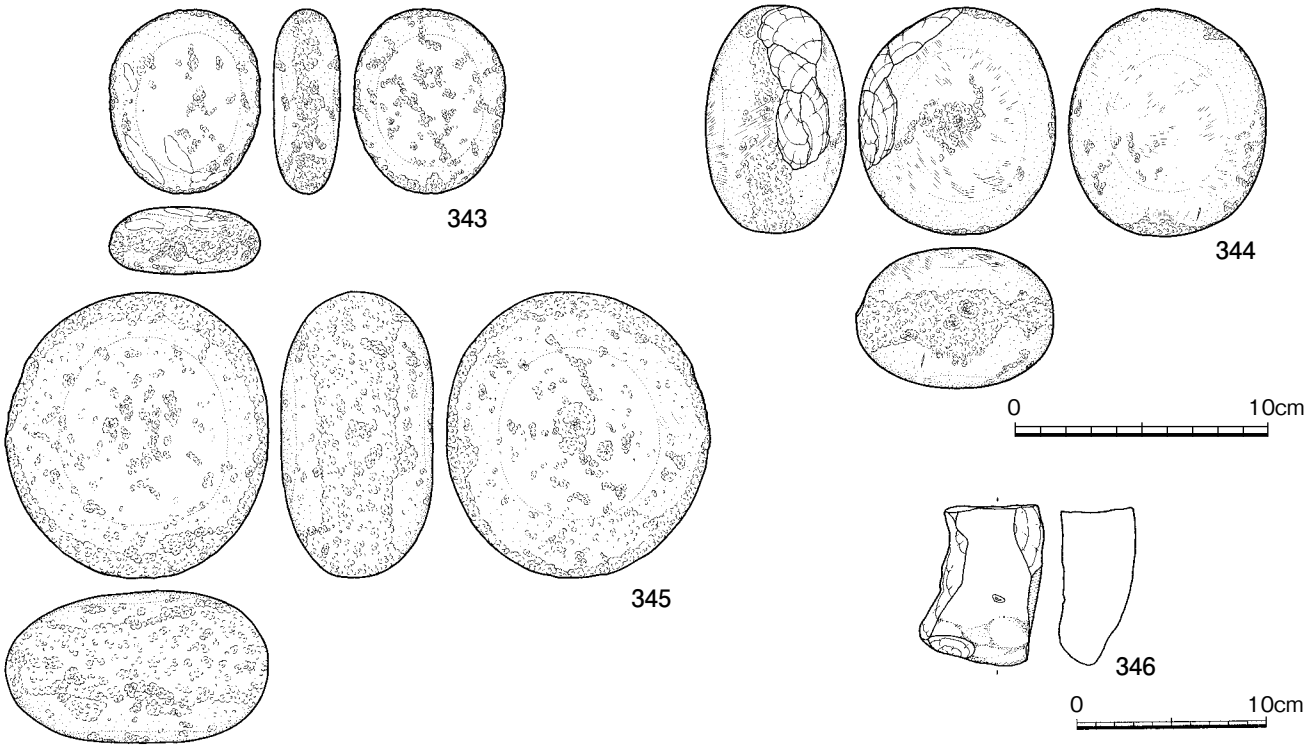
石包丁　342は石包丁の残欠の可能性がある砂岩の石片である。表面は二次的な被熱によるものか剥落が生じているが，表面左端部およびその裏側部分に擦痕を伴う研磨面が残存し，弧状を呈する刃部には砥ぎ出しによって生じたとみられる稜がわずかに観察される。

磨石・敲石類　343は凝灰岩の扁平な円礫で，周縁部および表裏面上の一部に敲打痕が，裏面には磨面がみられる。344は安山岩の円礫で，表裏面は磨石として用いられている。側縁および表面には顕著な敲打の痕跡があり，表面中央には浅い凹みが生じている。345は重量約1.1kgのやや大型の磨石・敲石である。平面形が円形を呈する安山岩の円礫で，周縁および表裏面上に明確な敲打痕がみられ，裏面はわずかに浅く凹むようにもみえる。

石皿　346は造成土中から出土した安山岩の礫片で，破砕した石皿の一部と考えられる。



第50図　表土・Ⅱ層出土の石器（1）



第51図　表土・Ⅱ層出土の石器（2）

第21表　表層・Ⅱ層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	石材	出土区	出土遺構	取上番号	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考
50	331	石鏃	Ⅱb	黒曜石	C－2	－	一括	1.1	1.1	0.28	0.20	
	332	石鏃	Ⅱ	黒曜石	A－4	－	一括	1.25	1.15	0.3	0.29	
	333	石鏃	Ⅱb	珪質頁岩	B－2	－	一括	2.1	1.53	0.28	0.76	
	334	石鏃	Ⅱ	鉄石英	B－2	－	一括	2.15	1.5	0.4	0.87	
	335	石鏃	表土	黒曜石	A－3	－	一括	2.01	2.3	0.6	2.18	
	336	石鏃	Ⅱb	安山岩	A－2	－	一括	3.41	2.05	0.54	2.63	
	337	石匙	Ⅱ	黒曜石	D－3	－	1119	2.8	3.2	0.9	4.64	
	338	使用痕のある剥片	表土	瑪瑙	－	－	一括	3.3	1.59	1.0	3.55	
	339	磨製石斧	Ⅱ	砂岩	A－3	－	307	14.2	6.0	3.79	510.0	
	340	磨製石斧	Ⅱ	砂岩	B－4	－	40	10.75	4.32	2.85	202.92	22トレンチ
	341	紡錘車	Ⅱb	砂岩	C－2	－	一括	5.4	(3.0)	1.0	23.93	
	342	石包丁	Ⅱ	砂岩	A－2	－	1230	3.8	6.0	0.5	15.25	
51	343	磨石・敲石	Ⅱb	凝灰岩	B－2	－	一括	7.3	6.0	2.7	133.2	
	344	磨石・敲石	－	安山岩	B－3	－	－	9.0	7.8	5.6	580	
	345	磨石・敲石	－	安山岩	A－3	－	896	11.3	10.4	6.0	1100	
	346	石皿	Ⅱb	安山岩	B－2	－	一括	(5.8)	(8.4)	3.85	312	

第３節　古代・中世の調査

１　遺　構

(1) 石列遺構を伴う整地面

石列のある地形は標高25～26.5mのやや傾斜した台地である。この地形の中にＡ－１・２区とＣ－２・３区に窪み状の傾斜地形がみられる。傾斜地形以外は北側の台地から張り出したこの２つのテラス地形になっている。この２つのテラス地形は後背台地を削平し，その土を縁辺部に盛土をし，平坦面を造っている。石列はその盛土が崩壊しないように積み上げている石垣の役目をしたと考えられる。

テラスは大きくＡとＢに分けられる。

テラスＡの石列は石列③（３m），石列②（６m），石列④ａ（4.3m），④ｂ（4.2m）があり掘立柱建物跡１を囲むように組まれていたと思われるが，ブロック積み上げによる破壊で欠損したと考えられる。石列③は角を中に入れ，虎口状に組み，そのエリアを入り口に想定するように作られている。石列④は中間部分で途切れており，④ａと④ｂに分かれている。④ａ，④ｂ間の抜き跡は確認できなかったが，埋め込まれた形跡はなかったため，この間は通路と考えられる。

テラスＢの石列は石列①（12.6m）が東西に直線で，石列⑤（１m）は南北に組まれている。Ｃ－３区の石付近はブロック積み上げによる欠損部で１点残っていた。これは石列③の対称部と思われる。このテラスには焼土跡がみられた。

テラスＡとテラスＢの間には１間×１間の掘立柱建物跡２があり，片屋根門の建造物が想定される。

これらの遺構は，台地側ではⅤ・Ⅳ・Ⅲ層が削平のためその面が縞状に検出し，先端側は古代の包含層であるⅡ層の中間層に検出された。

(2) 石列

Ａ～Ｄ－１～３区でテラスＡ・Ｂを囲むように検出された。径50㎝以上の人頭大の礫が一列に並ぶ。

石列②，石列③，石列④がテラスＡを囲むよう並び，石列①,石列⑤がテラスＢを囲むように並べられている。石列⑤は１m検出されたが，調査区外まで延長すると思われる。礫は主に安山岩が使用され，個々の礫には加工痕は認められなかった。無作為に抽出した礫の平均重量は16.8kgである。内側から小礫を込めたような形跡はなく，いわゆる野面積みによるものと思われる。整地面の崩落を防ぐ土留めの役目を果たしたと思われる。

(3) 掘立柱建物１

Ｂ・Ｃ－１・２区のテラスＡで検出された。ほぼ南北方向に梁間２間，東西方向に桁行き５間の建物で，南側に片面の庇がある。柱穴には,柱痕が観察されるものや,底面に硬化土があるものがいくつかあった。また，柱穴内より土師器椀（347）が出土した。

出土遺物（347）

347はＰ５とP12内で出土し，接合した資料である。体部が直線的に開く土師器椀である。淡黄橙色を呈し，復元口径は13.2㎝である。

(4) 掘立柱建物跡２

Ｃ－２区で検出された１間×１間の掘立柱建物跡である。柱間の距離は2.3m～3.3mである。これらの柱穴はいずれも造成面上からの掘り込みであったとみられるが，検出面はⅡ層の掘り下げ後のⅢ層面での検出であった。本来はある程度の深さのある柱穴であったものと思われる。

(5) 土坑

２mほどの方形を呈する土坑がＢ－２区で２基，Ａ・Ｂ－３・４区で２基，計４基の土坑が検出された。

１号土坑

Ｂ－２区のⅡｂ造成土層上面で検出された。１辺約1.2mの正方形状を呈している。暗褐色の埋土の下は炭化物，木炭が床面を覆っていた。炭化物は年代測定，樹種同定を行っている（年代測定は自然科学分析91頁。試料名３：ＩＡＡＡ－102869，樹種同定は同101頁。試料番号３）。

出土遺物（348，349）

348は土師器の高台付皿である。木炭の上から出土した。高台は手びねり風に仕上げている。復元口径は10.0㎝，底径は5.8㎝である。349は土師器坏の底部と思われる。復元底径は4.8㎝である。

２号土坑

Ｂ－２区のⅡｂ造成土層上面で検出された。約1.8m×１mの長方形を呈し，下層は炭化物層を形成する。床面や壁面には焼土，赤化部分が見られた。炭化物は年代測定，樹種同定を行っている（年代測定は自然科学分析91頁。試料名４：ＩＡＡＡ－102870，樹種同定は同101頁。試料番号４）。

３号土坑

Ａ－３区Ⅱ層で検出された。約1.8m×1.2mの長方形を呈し，中央部は若干深く凹んでいる。下層は炭化物層を形成し,木炭が若干残存していた。炭化物は年代測定，樹種同定を行っている（年代測定は自然科学分析91頁。試料名１：ＩＡＡＡ－102867，樹種同定は同101頁。試料番号１）。

４号土坑

Ｂ－３・４区Ⅱ層で検出された。約２m×1.7mの方形を呈し，下層は炭化物を含む黒褐色土層を形成する。炭化物は年代測定，樹種同定を行っている（年代測定は自然科学分析91頁。試料名２：ＩＡＡＡ－102868，樹種同定は同101頁。試料番号２）。

出土遺物（350）

350は土師器甕の口縁部である。表面は摩滅している。胎土にスコリアが目立つ。

(6) 溝跡

Ａ・Ｂ－14・15区で調査区を東西に横切るように検出された。遺構のすぐ南側は木場谷川へ向かう斜面になっている。検出面はⅢ及びⅣ層，底面はⅣ層から一部でⅦ層に達している。溝の幅は30cm～50cm，検出面からの深さは約15cmである。埋土は黄茶褐色土の単層で，砂質の水成堆積等は見られなかった。

出土遺物（351）

351は溝の底壁面から出土した。火鉢あるいは香炉の底部と思われる。脚の一部のみの残存であるが，４本の脚と推定し図化した。復元底径は15.6cmである。簡素な脚の形状から中世末期のものと思われる。

２　遺　物

古代から中世にかけての遺物はＢ～Ｄ－２・３区，石列遺構で囲まれたⅡ，Ⅱｂ層を中心に出土している。

(1) 土師器（352～418）

土師器は埦，坏，皿，内黒土器，甕が出土した。

埦（352～374）

高台がつくものを埦とした。

352は底部が厚く，低い高台をもち，体部は外側に直線的に立つ。353～356，358～365，367，369は，低い高台で，高台内面はやや突出する。高台の端部は丸くおさまり，体部は直線的に開くものと思われる。370は高台が摩耗しており，詳細は不明である。364，366の高台端部は矩形を呈する。高台内面天井部は突出がなく平らに仕上げている。368は器壁が薄く，体部が丸みを帯びている部分が他の埦と異なる様相を呈する。見込み部分は赤く塗られており，丁寧にミガキが施されている。371～374は，充実の高台である。

坏（375～384）

375は底部が厚く突出気味である。体部は直線状に開き端部は丸くおさまる。上面から見ると若干いびつな円になると思われる。376～384は底部である。376は底部の突出はなく，ヘラ切りの後丁寧に撫でられている。375と同様体部は直線的に開いて立ち上がると思われる。381の体部はやや丸みを帯びると思われる。382～384は糸切りの底部である。382は器壁が薄く，体部は直線的に開く。383,384は体部が丸みを帯びている。

皿（385～388）

385，386は口縁部である。いずれも先端が短く外反する。387はヘラ切り底の小型の皿で復元口径10.2cm，器高1.3cmである。388は糸切り底である。

内黒土師器（389～408）

389～406は内黒土師器の埦である。389～392は体部が直線的に開いている。393，394は，口縁部先端が短く外反する。395は，体部が丸みを帯び，やや内弯する。396～406は底部である。396，405，406は高台が低く，端部が丸くおさめられている。体部は外側に広く開くと思われる。397～402の高台天井部は平らに仕上げられている。いずれも体部は外側に開くものと思われる。403は，体部は丸く内弯するものと思われる。404は高台内面の天井部は丸く仕上がっており，高台内面も黒色である。407，408は皿の口縁部である。いずれも直線的に外反する形態である。

甕（409～418）

409の外面はヨコナデが施され，内面はヘラケズリが施されている。410，411は胴部に最大径を持つタイプである。外面は縦方向にハケメが施され，内面はヘラケズリが施される。412は胴部下半に最大径を持つものと思われる。外面に煤が付着し，内面はケズリが施されている。413，414は最大径が口縁部にあり，口縁内部は稜を持たずなだらかに外反する。胴部の膨らみは小さい。413の外面はハケメをナデ消してあり，内面はヘラケズリが施されている。414の外面はハケメが縦方向に施され，内面はヘラケズリが施されている。415は最大径が口縁部にあり，底部は浅鉢状を呈すると思われる。外面にハケメが施され，内面にケズリが施されている。416～418は小型の甕である。416は内外面ともヨコナデ調整である。417は口縁部が短く，わずかに外反している。外面ハケメ，内面ケズリ調整である。417，418は同一個体の可能性がある。

(2) 須恵器（419～436）

須恵器は出土数が土師器に比べて少ない。甕，壺，坏が出土している。

甕（419～430）

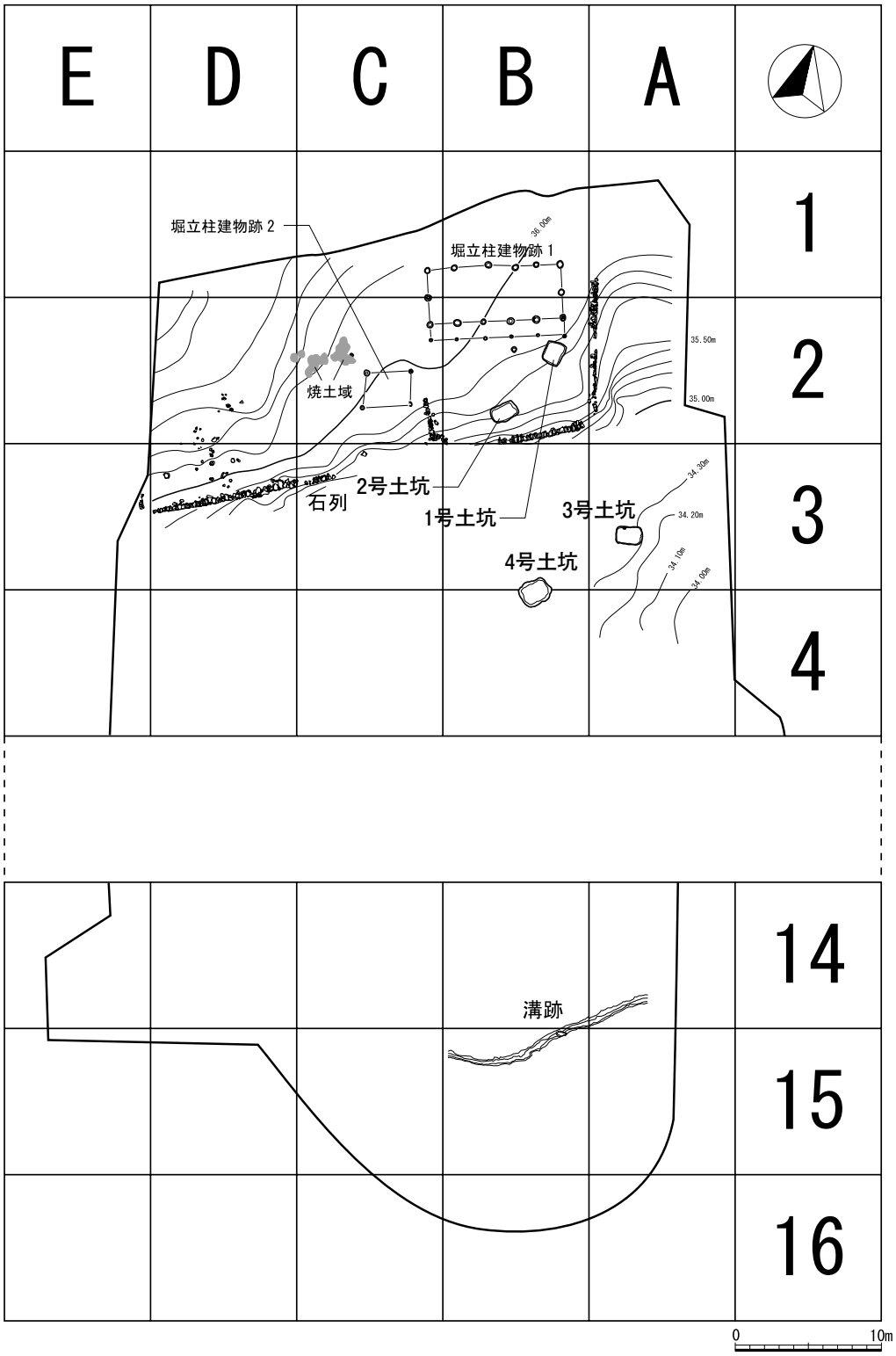
419，420は甕の口縁である。外反する口縁部が端部近くで屈曲し，二重口縁状となる。421も甕の口縁付近である。上端に屈曲が見られる。422～425は甕の胴部である。外面は格子目タタキ，内面は同心円タタキである。425は内面下に平行タタキが見られる。426～428は全体的に焼成が精緻である。外面は目の細かい格子タタキで，内面は平行タタキが見られる。表面は青灰色を呈し，断面は赤灰色である。429，430は内外面とも平行タタキである。

壺（431～435）

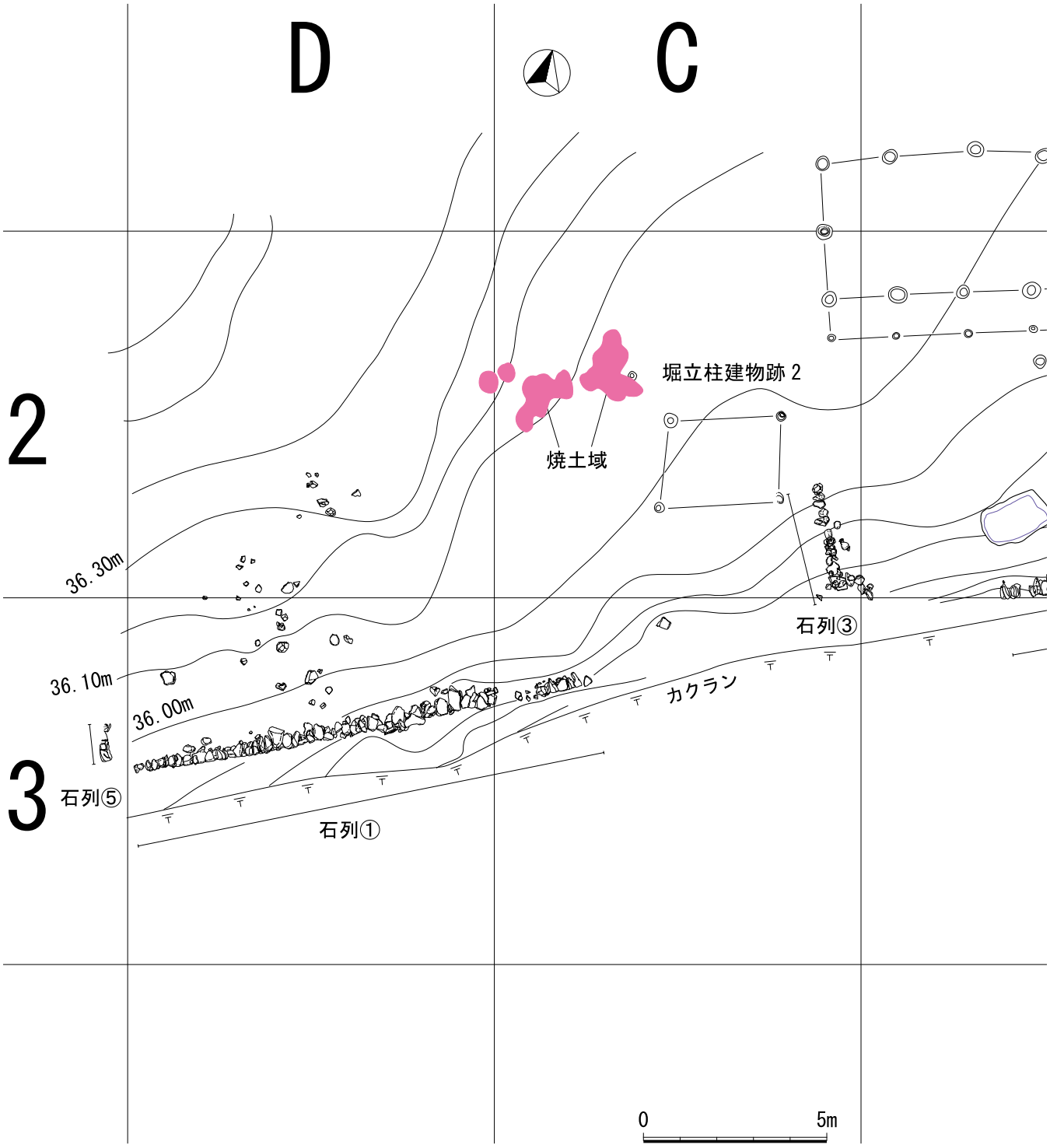
431～433は壺の口縁部である。432は焼成が精緻で，断面はにぶい橙色を呈する。中世のものと思われる。433は外面に十字状の線刻が施されている。434は小石を布で包んだあて具痕が内面に観察される。９世紀頃と思われる。435は底部付近と思われる。

坏（436）

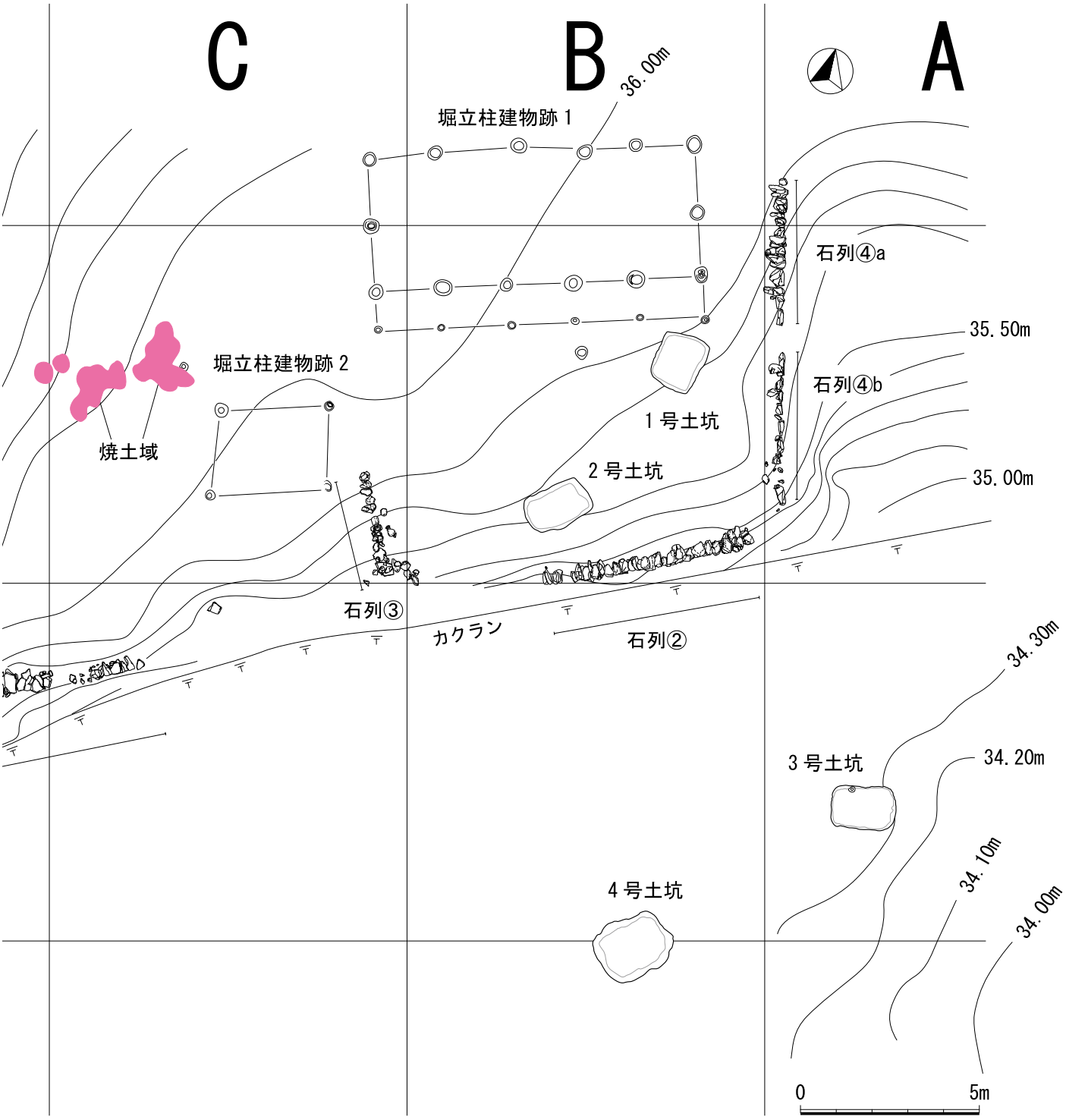
436は坏の胴部である。直線状に上がる体部で，口縁部でやや外反すると思われる。



第52図　古代・中世遺構配置図

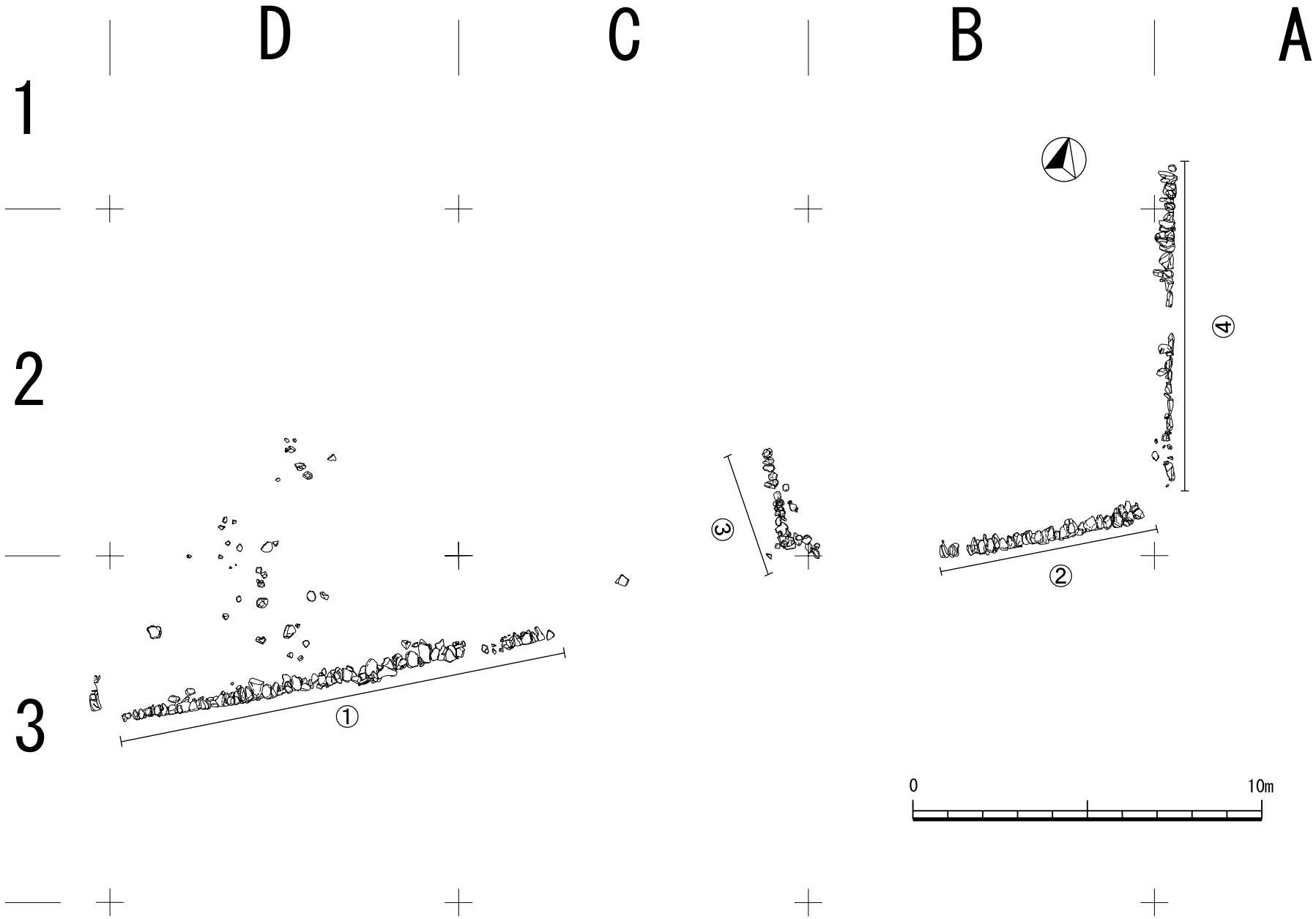


第53図　古代・中世丘陵部遺構配置図（1）

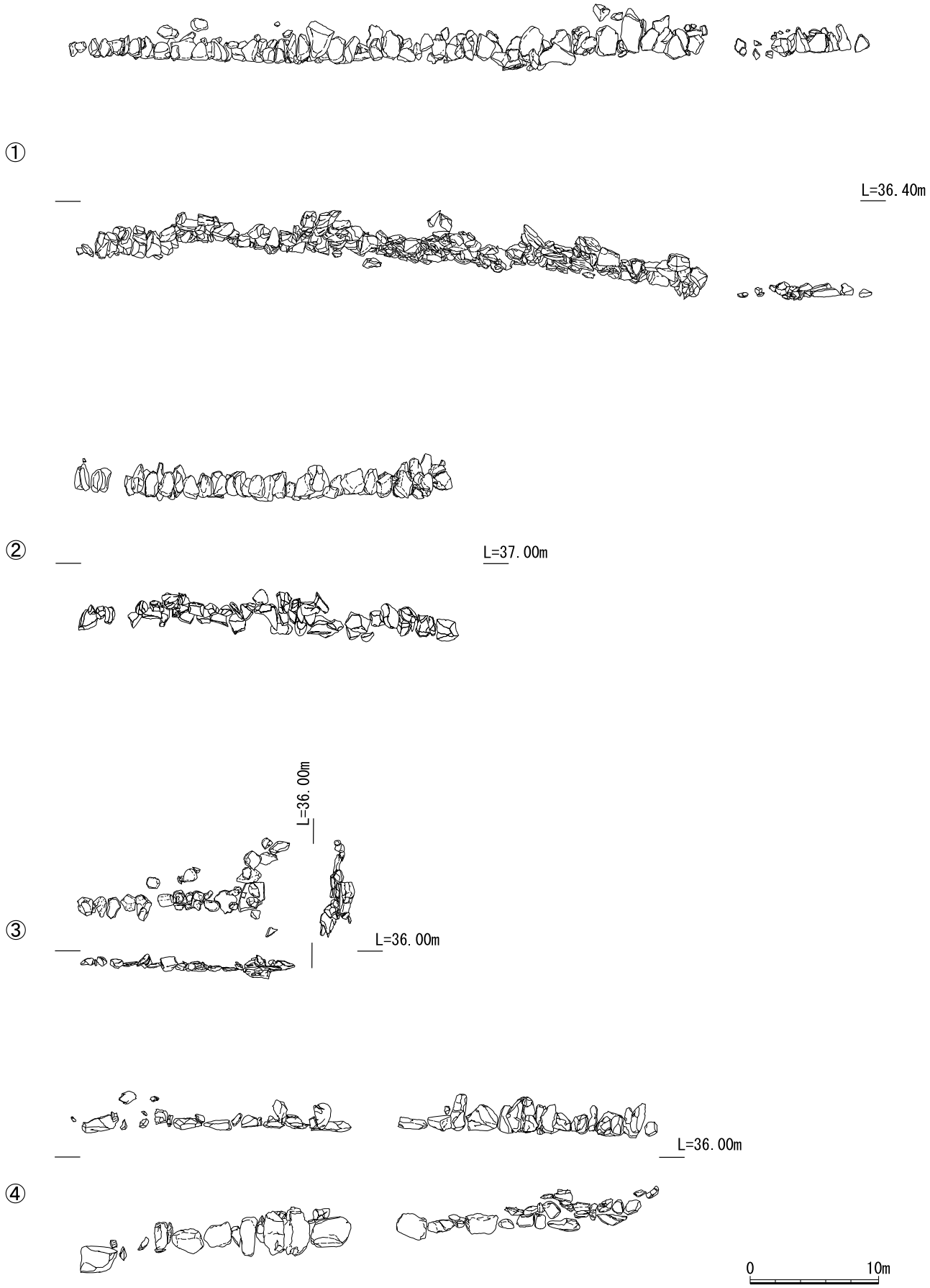


※１号～４号土坑は，石列・掘立柱建物跡とは時期が異なる。

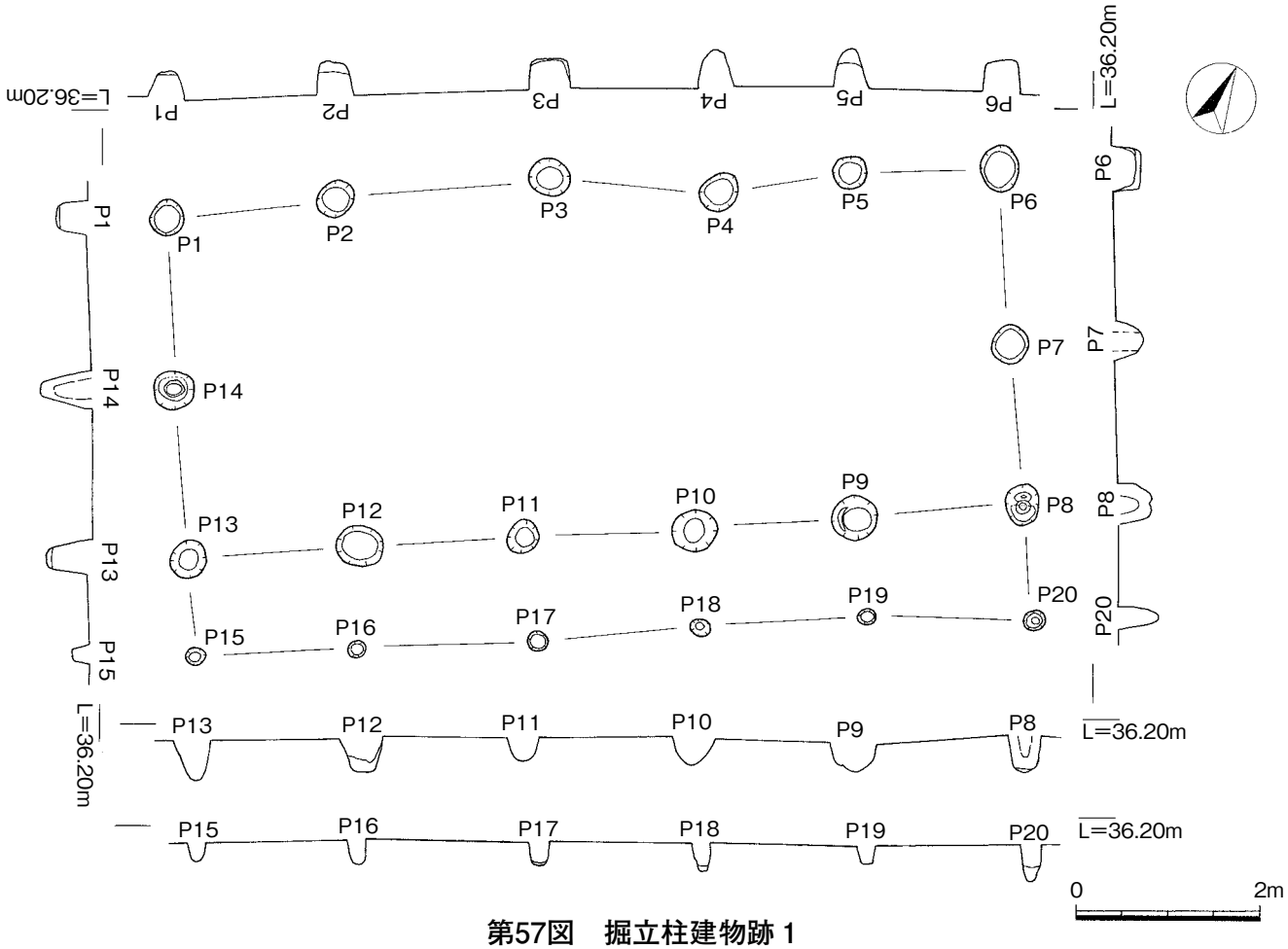
第54図　古代・中世丘陵部遺構配置図（2）



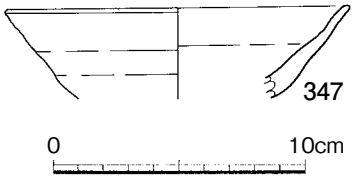
第55図　石列遺構平面図



第56図　石列遺構側面図



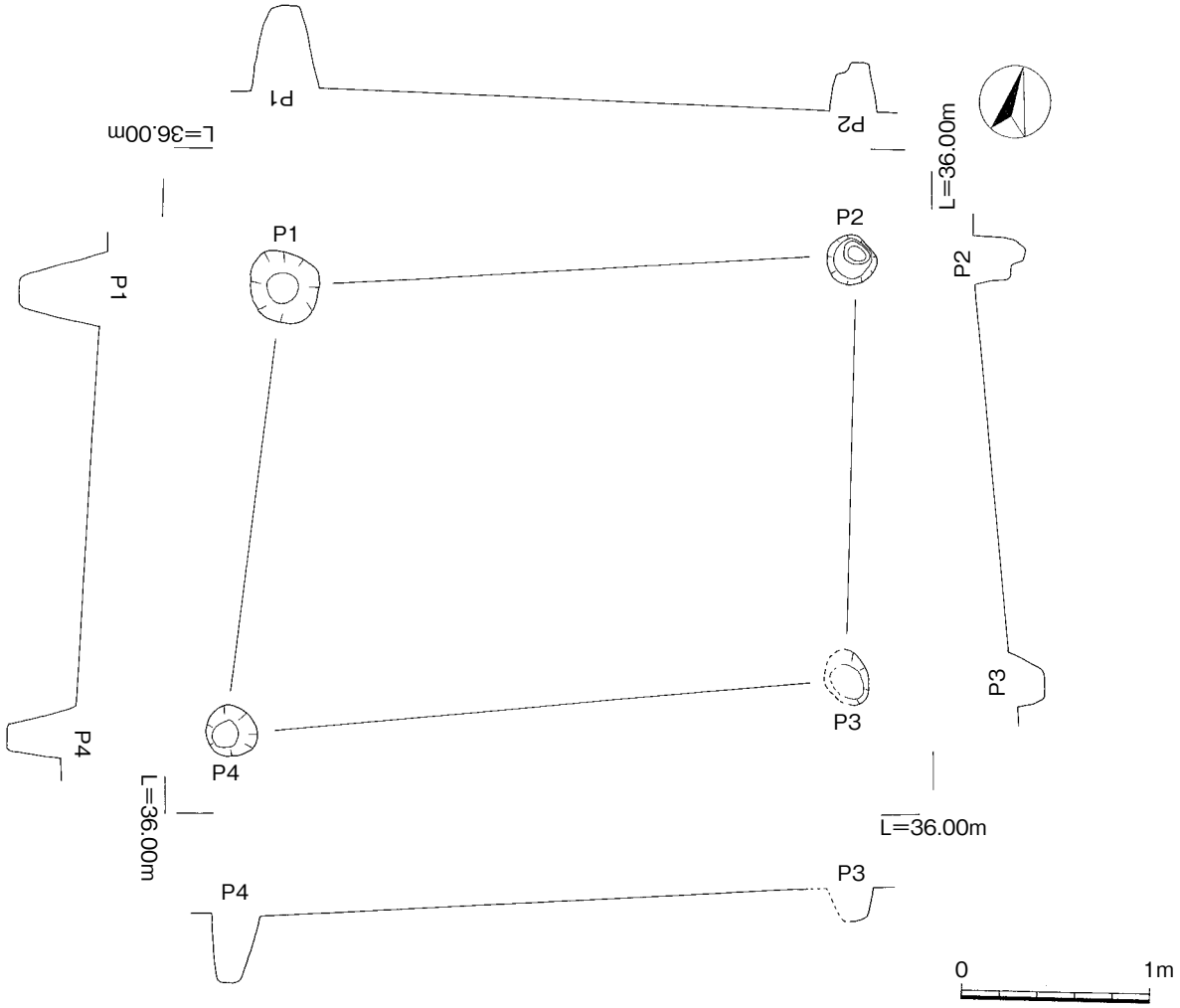
第57図　掘立柱建物跡１



第58図　掘立柱建物跡１出土遺物

第22表　掘立柱建物跡１観察表

梁間柱間（m）			桁間柱間（m）			柱穴	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
2間	P1 ～ P13	4.7	5間	P1 ～ P6	11.4	P1	40	38	32
	P6 ～ P8	4.6		P13 ～ P8	11.4	P2	42	39	37
	P2 ～ P12	4.7		平　均	11.4	P3	45	43	35
	P3 ～ P11	4.9		P1 ～ P2	2.3	P4	47	38	39
	P4 ～ P10	4.7		P2 ～ P3	3.6	P5	40	36	44
	P5 ～ P9	4.9		P3 ～ P4	2.3	P6	50	41	33
	平　均	4.75		P4 ～ P5	1.8	P7	43	41	32
	P1 ～ P14	2.3		P5 ～ P6	2.0	P8	45	35	41
	P14 ～ P13	2.4		P13 ～ P12	2.2	P9	50	50	31
	P6 ～ P7	2.4		P12 ～ P11	2.4	P10	49	45	30
	P7 ～ P8	2.2		P11 ～ P10	2.2	P11	37	32	29
	平　均	2.3		P10 ～ P9	2.3	P12	51	43	40
庇	P13 ～ P15	1.3		P9 ～ P8	2.3	P13	43	38	50
	P8 ～ P20	1.6		平　均	2.2	P14	43	42	55
	P12 ～ P16	1.5	庇	P15 ～ P16	2.2	P15	22	20	20
	P11 ～ P17	1.4		P16 ～ P17	2.5	P16	19	18	27
	P10 ～ P18	1.3		P17 ～ P18	2.2	P17	23	21	25
	P9 ～ P19	1.3		P18 ～ P19	2.3	P18	21	18	31
	平　均	1.4		P19 ～ P20	2.3	P19	20	17	31
				平　均	2.3	P20	24	21	40
				P15 ～ P20	11.5	平均	37.7	33.8	35.1

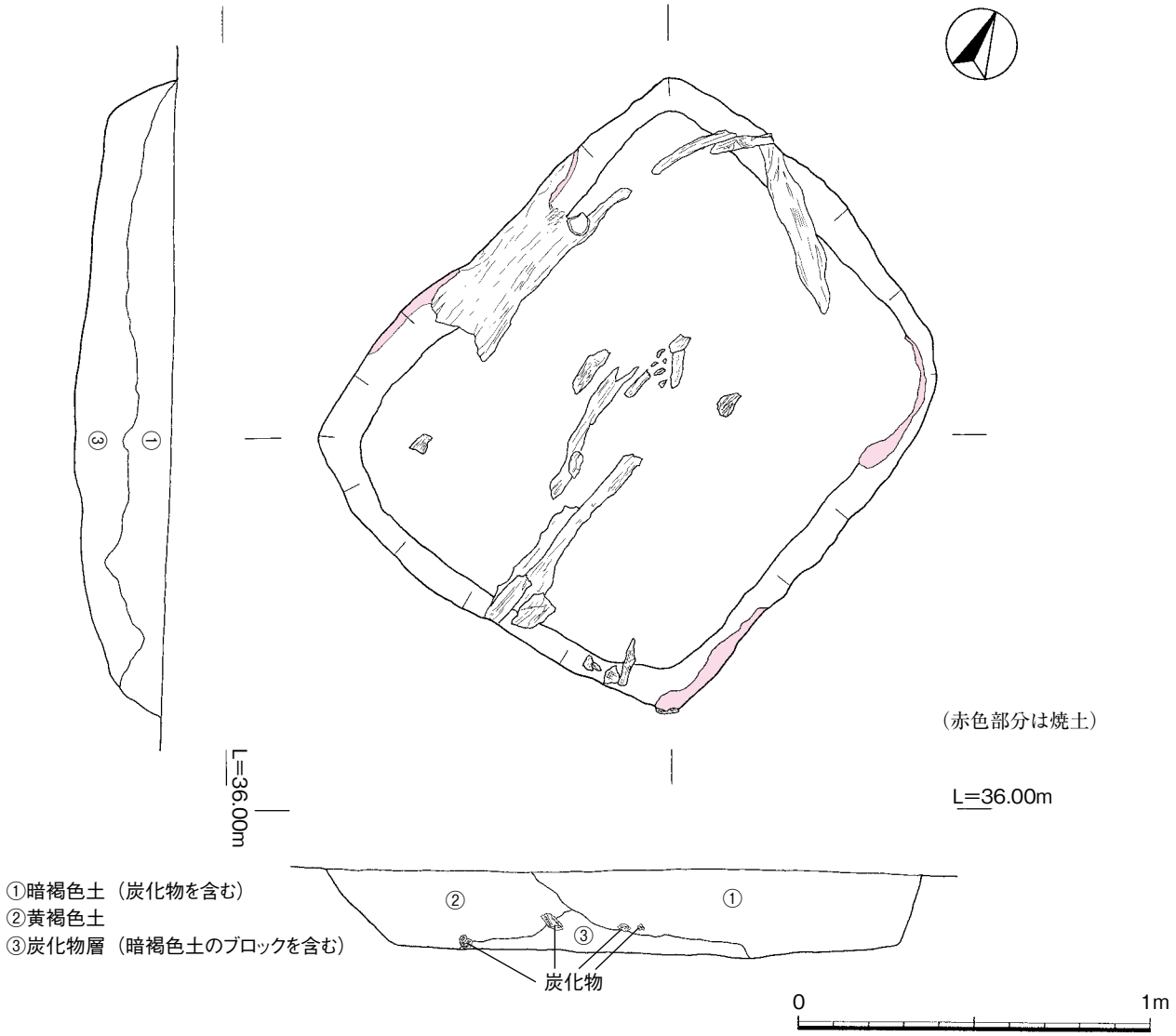


第59図　掘立柱建物跡２

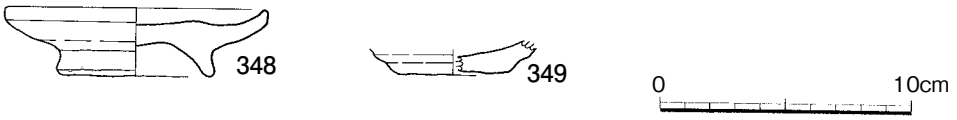
第23表　掘立柱建物跡２観察表

梁間柱間（m）			桁間柱間（m）			柱穴	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1間	P1 ～ P4	2.4	1間	P1 ～ P2	3.0	P1	42	37	48
	P2 ～ P3	2.3		P4 ～ P3	3.3	P2	28	26	28
	平均	2.35		平均	3.15	P3	30	(24)	21
						P4	28	26	38
						平均	26.04	(23.04)	27.44

（　）内は推定値



第60図　１号土坑



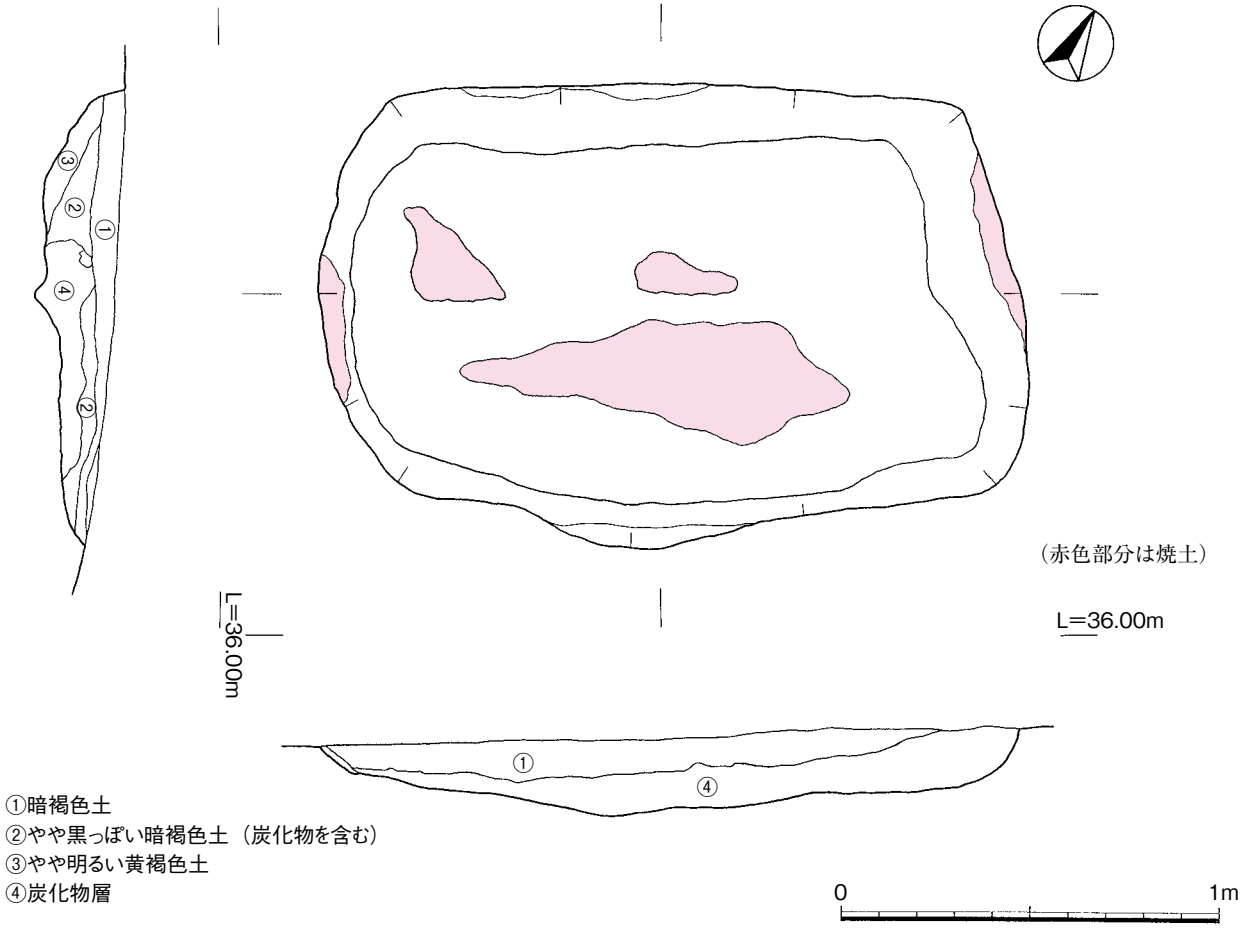
第61図　１号土坑出土遺物

第24表　掘立柱建物跡１出土遺物観察表

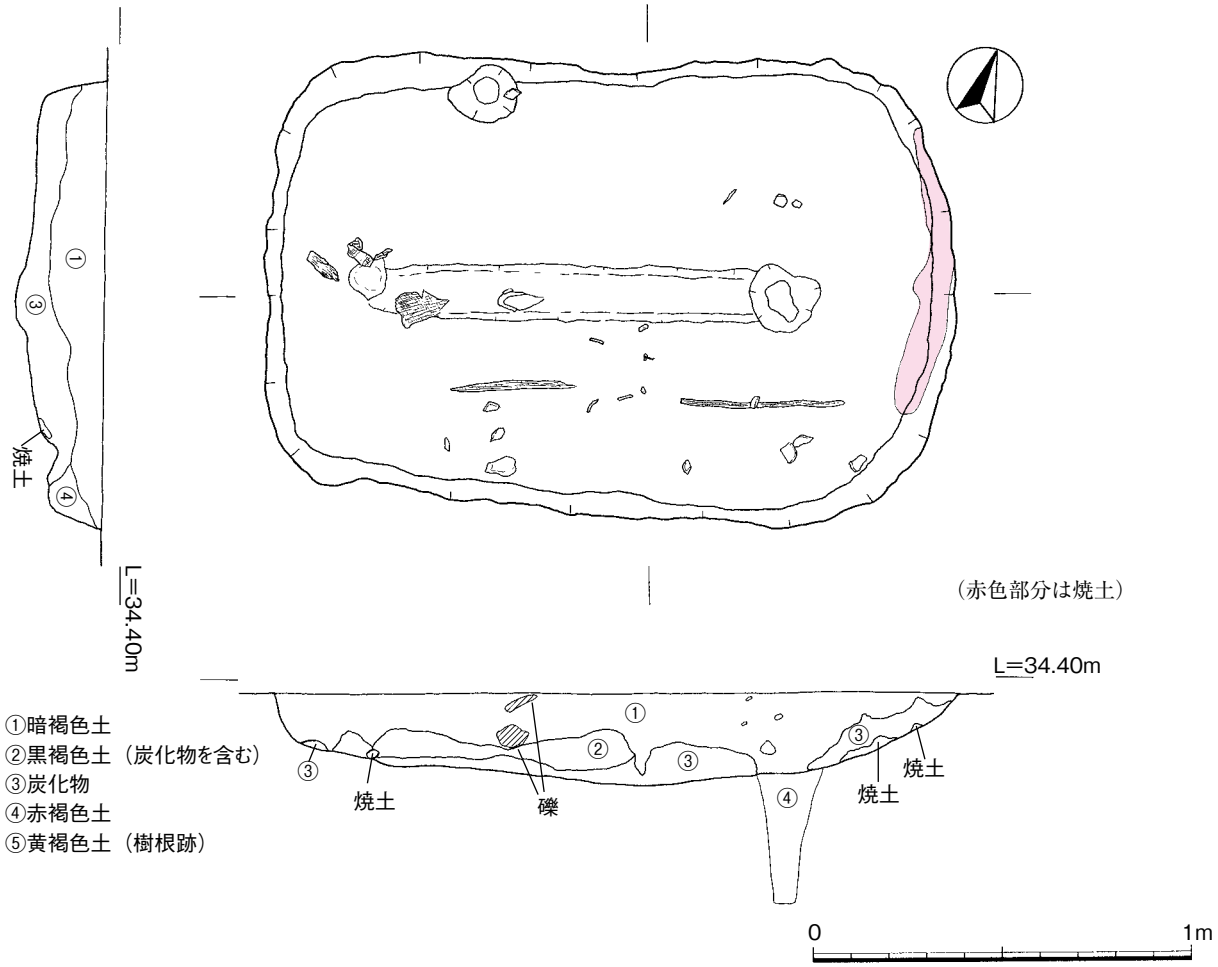
挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
58	347	掘立柱建物跡1	土師器	口縁	淡黄	淡黄	ナデ	ナデ	13.2	―	―				火山ガラス	P5･P12出土

第25表　１号土坑出土遺物観察表

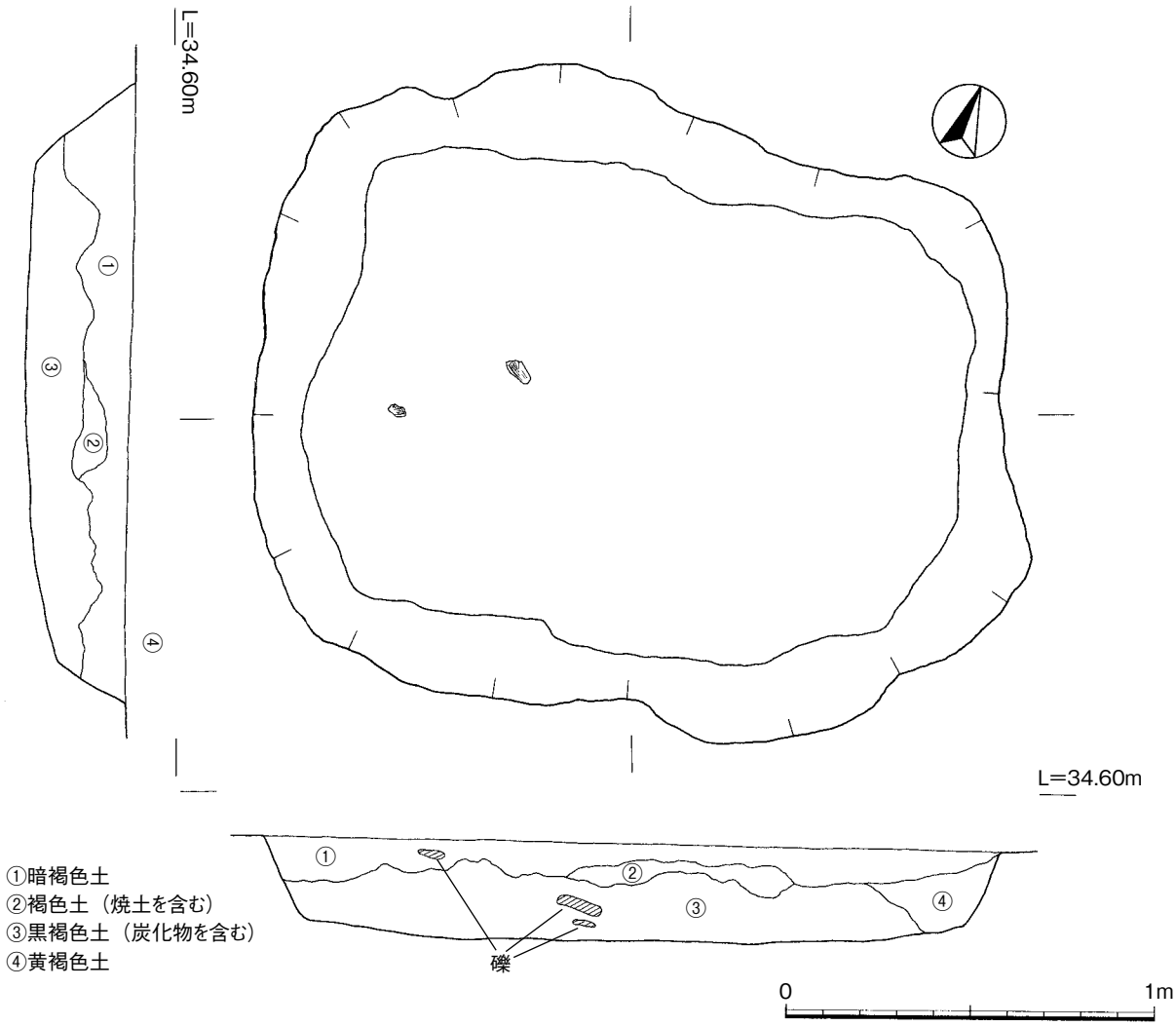
挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
61	348	１号土坑	土師器･高台付皿	完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	10.0	5.8	2.7	○			火山ガラス・スコリア	
	349	１号土坑	土師器･坏	底部	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	―	4.4	―				火山ガラス	


③
②
①
④
②
L=36.00m
（赤色部分は焼土）
L=36.00m
①
④
①暗褐色土
②やや黒っぽい暗褐色土（炭化物を含む）
③やや明るい黄褐色土
④炭化物層
0
1m

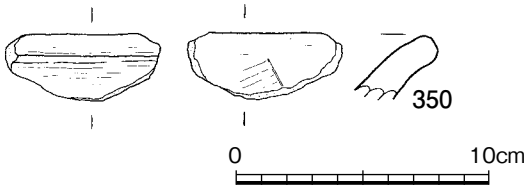
第62図　２号土坑


①
③
焼土
④
L=34.40m
（赤色部分は焼土）
L=34.40m
①
②
③
焼土
礫
④
焼土
焼土
①暗褐色土
②黒褐色土（炭化物を含む）
③炭化物
④赤褐色土
⑤黄褐色土（樹根跡）
0
1m

第63図　３号土坑



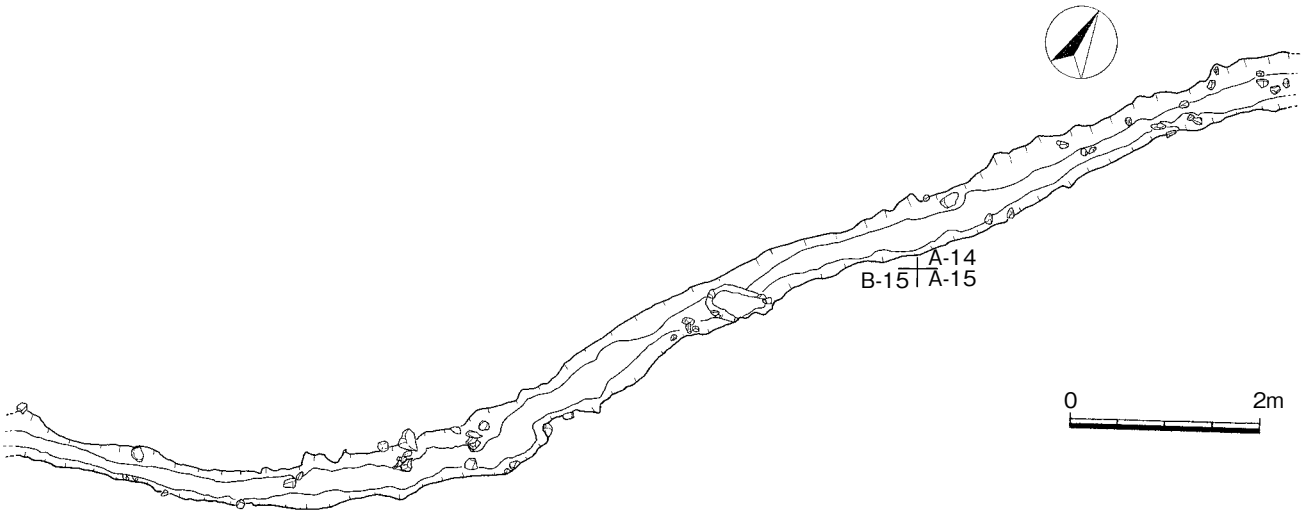
第64図　４号土坑



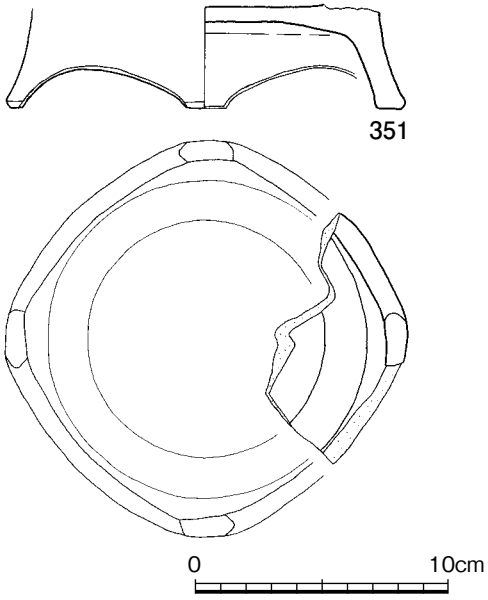
第65図　４号土坑出土遺物

第26表　４号土坑出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
65	350	4号土坑	土師器甕	口縁	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	―	―	―	○	○		スコリア	表面摩滅



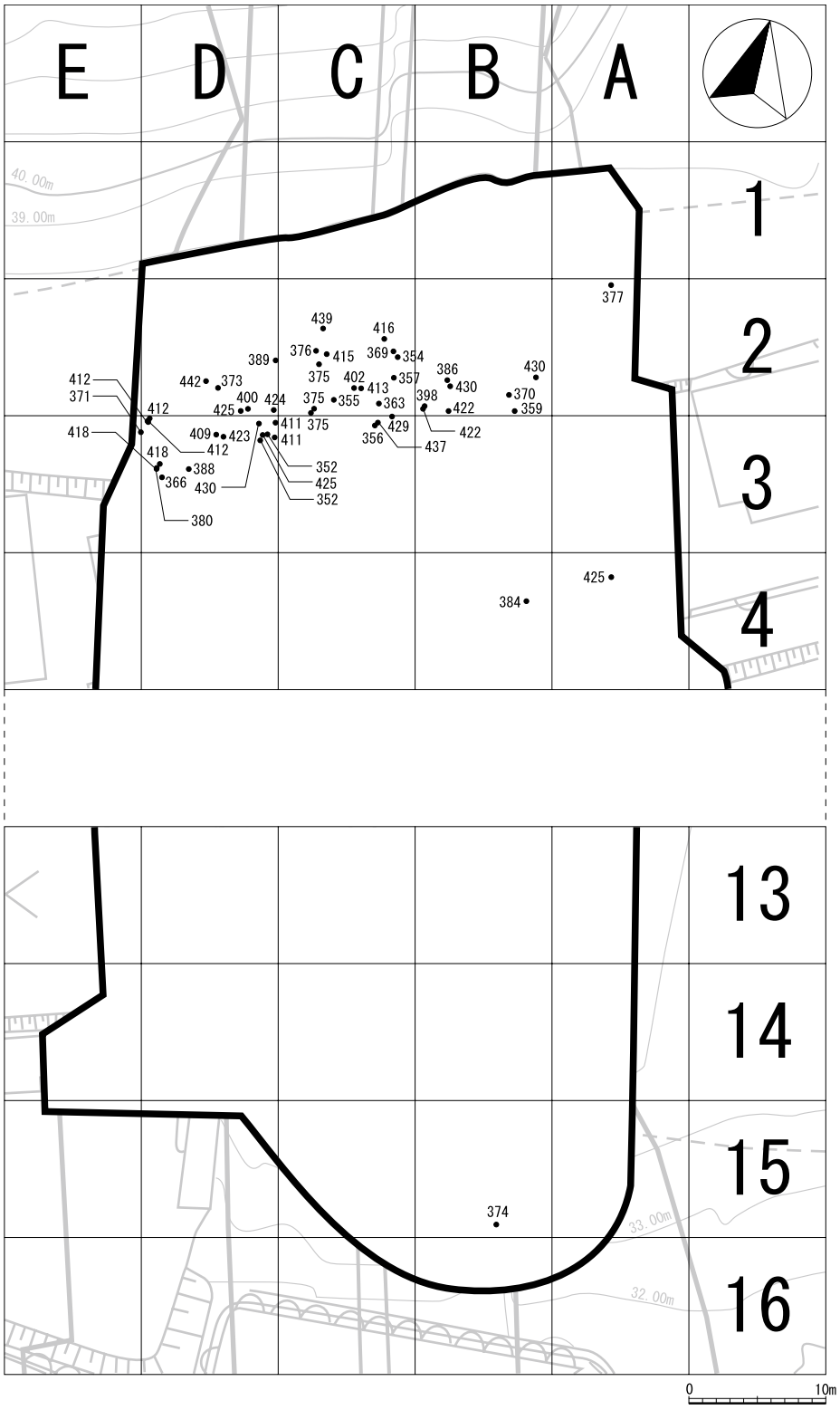
第66図　溝跡



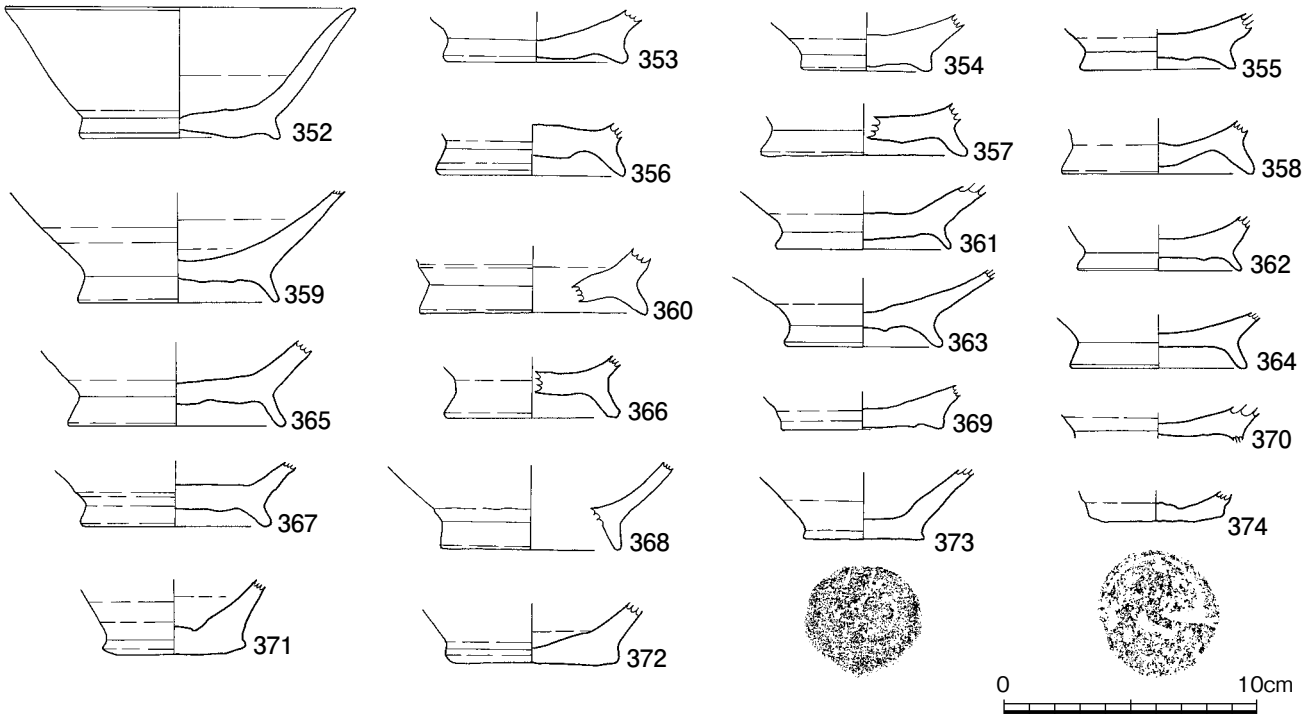
第67図　溝跡出土遺物

第27表　溝跡出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名称	器種	部位	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
					外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
67	351	溝跡	香炉	脚部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	―	(15.6)	―	○	○		火山ガラス	表面やや摩耗



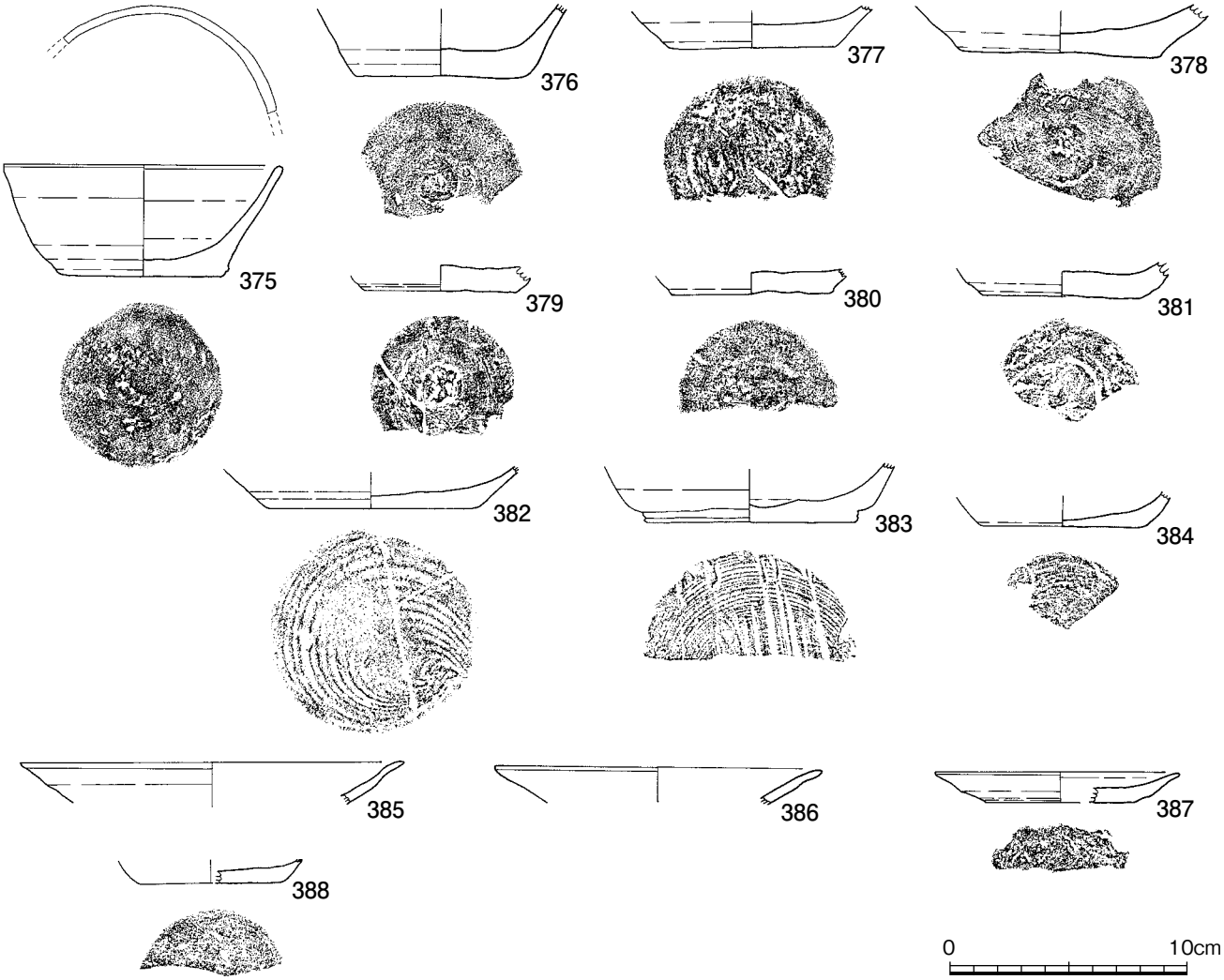
第68図　Ⅱ層（古代・中世）遺物出土状況図



第69図　土師器（埦）

第28表　土師器観察表①

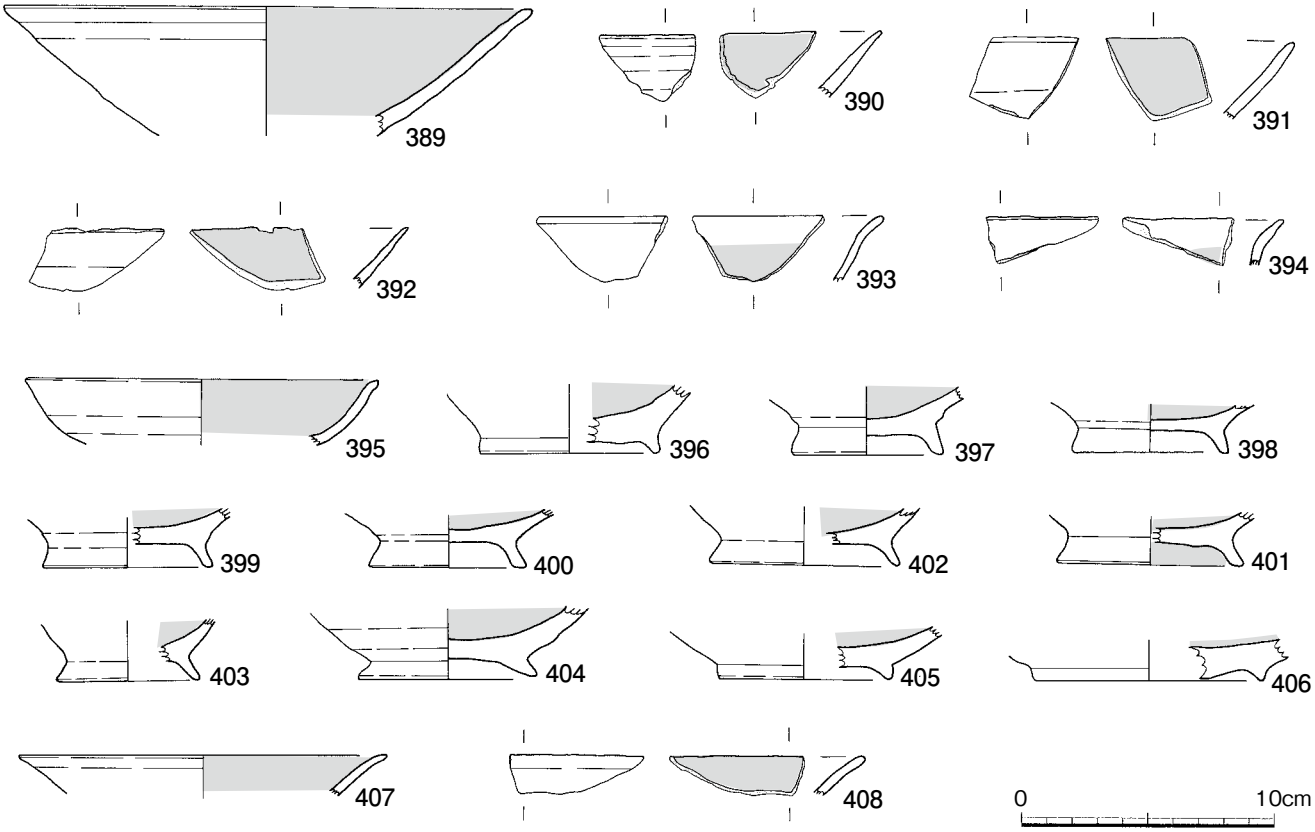
挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	部位	出土区	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
69	352	埦	Ⅱ	1087･1104	完形	D−3	黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	13.6	8.0	5.2	○			スコリア	
	353	埦	Ⅱ	−	底部	D−3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	6.8	−				火山ガラス	
	354	埦	Ⅱ	1195	底部	C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	4.8	−	○		○	スコリア･火山ガラス	
	355	埦	Ⅱ	1112	底部	C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	5.8	−		○		スコリア	
	356	埦	Ⅱ	1166	底部	C−3	にぶい橙	黄橙	ナデ	ナデ	−	7.2	−	○			スコリア	
	357	埦	Ⅱ	1178	底部	C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	7.4	−				スコリア	
	358	埦	Ⅱb	一括	底部	C･D−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	7.2	−	○		○		
	359	埦	Ⅱ	1473	胴部・底部	B−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	7.6	−	○				
	360	埦	Ⅱ	ベルト一括	底部	B･C−2	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	8.6	−	○				
	361	埦	Ⅱb	一括	底部	D−2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	6.8	−	○			火山ガラス	
	362	埦	表	一括	底部	D−3	橙	橙	ナデ	ナデ	−	6.4	−	○	○		スコリア･火山ガラス	
	363	埦	Ⅱ	1174	底部	C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	6.0	−	○			スコリア	
	364	埦	−	−	底部	D−3	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	6.4	−	○		○	火山ガラス	
	365	埦	Ⅲ	ベルト一括	底部	B･C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	8.2	−				スコリア･火山ガラス	
	366	埦	Ⅱ	494	底部	D−3	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	−	6.0	−	○			火山ガラス	
	367	埦	Ⅱb	一括	底部	C−2	橙	橙	ナデ	ナデ	−	7.2	−	○		○	スコリア･火山ガラス	
	368	埦	Ⅱb	一括	底部	C−2	橙	橙	ナデ	ミガキ	−	6.4	−	○		○	火山ガラス	
	369	埦	Ⅱ	1193	底部	C−2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	−	6.0	−	○	○		火山ガラス	
	370	埦	Ⅲ	1153	底部	B−2	浅黄	浅黄	ナデ	ナデ	−	−	−	○				
	371	埦	Ⅱ	456	底部	D−3	淡黄	淡黄	ナデ	ナデ	−	4.0	−	○			火山ガラス	
	372	埦	Ⅱ	−	底部	D−3	淡黄	淡黄	ナデ	ナデ	−	6.8	−	○			火山ガラス	
	373	埦	Ⅱ	405	底部	D−2	淡黄	淡黄	ナデ	ナデ	−	4.8	−	○	○			
	374	埦	−	12	底部	B−15	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	−	6.8	−	○	○	○		



第70図　土師器（坏・皿）

第29表　土師器観察表②

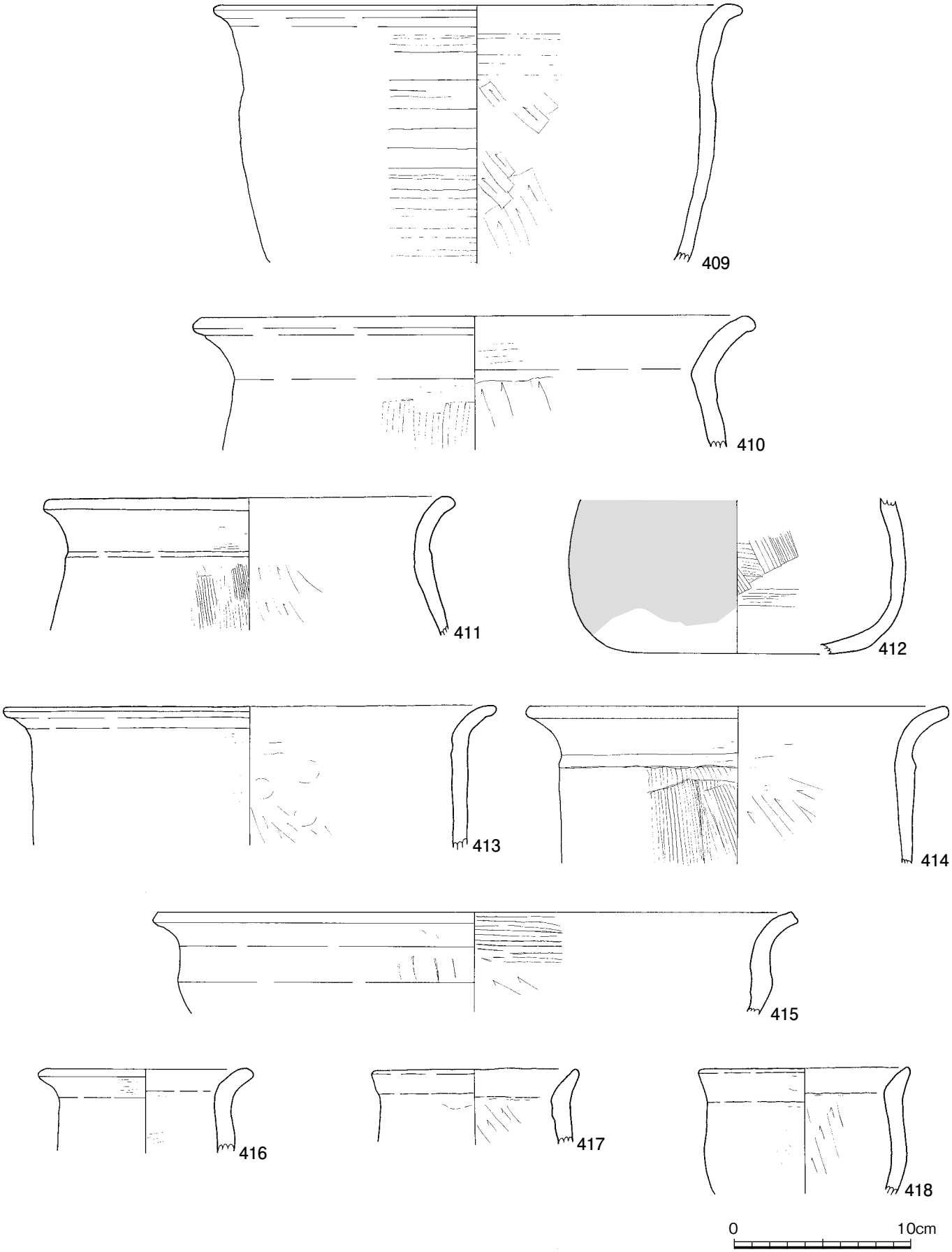
挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	部位	出土区	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
70	375	坏	Ⅱ	1099･1113･1392	口縁～底部	C－2	橙	橙	ナデ	ナデ	11.4	6.4	4.7		○		スコリア	
	376	坏	Ⅱb	1055	底部	C－2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	－	7.0	－	○			火山ガラス	
	377	坏	Ⅱb	1461	底部	A－2	にぶい黄	にぶい黄	ナデ	ナデ	－	7.0	－	○			火山ガラス	
	378	坏	Ⅱ	－	底部	B－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	8.4	－			○	スコリア･火山ガラス	
	379	坏	Ⅱ	一括	底部	C－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	6.4	－	○		○	火山ガラス	
	380	坏	Ⅱ	479	底部	D－3	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	－	6.4	－	○	○			
	381	坏	Ⅱb	一括	底部	A－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	6.8	－	○			スコリア･火山ガラス	
	382	坏	Ⅱb	一括	底部	D－2	にぶい黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	－	8.8	－	○			スコリア･火山ガラス	
	383	坏	Ⅱb	一括	底部	A－1･2	淡黄	淡黄	ナデ	ナデ	－	8.8	－				火山ガラス	
	384	坏	Ⅱ	1031	底部	B－4	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	－	6.8	－	○			火山ガラス	
	385	皿	Ⅱb	一括	口縁	A－2	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	15.8	－	－	○			スコリア･火山ガラス	
	386	皿	Ⅱ	1130	口縁	B－2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	13.2	－	－	○				
	387	皿	Ⅱb	一括	口縁～底部	A－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	10.2	6.4	－				スコリア･火山ガラス	
	388	皿	Ⅱ	497	底部	D－3	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	－	6.0	－				スコリア･火山ガラス	



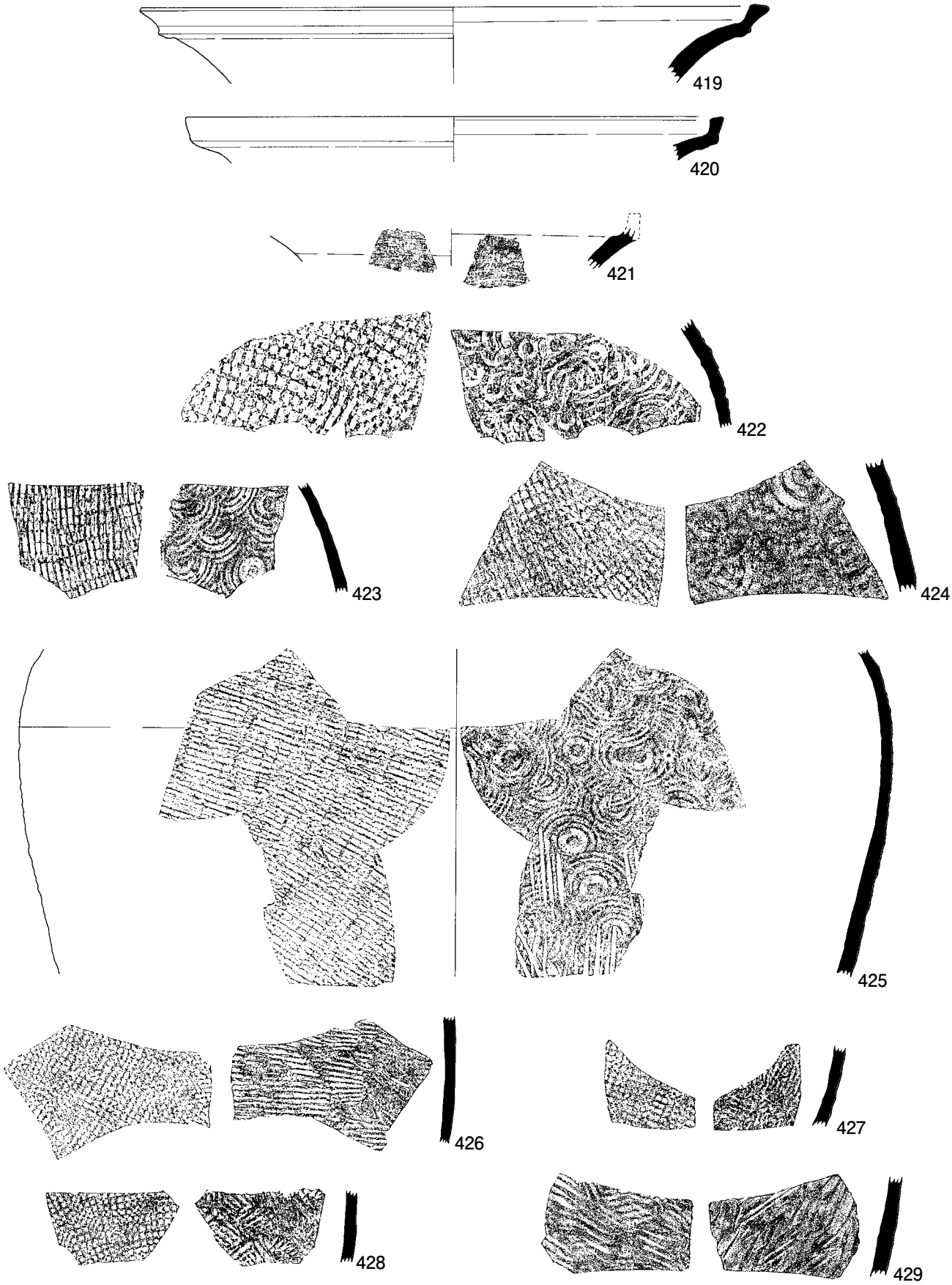
第71図　内黒土師器

第30表　土師器観察表③

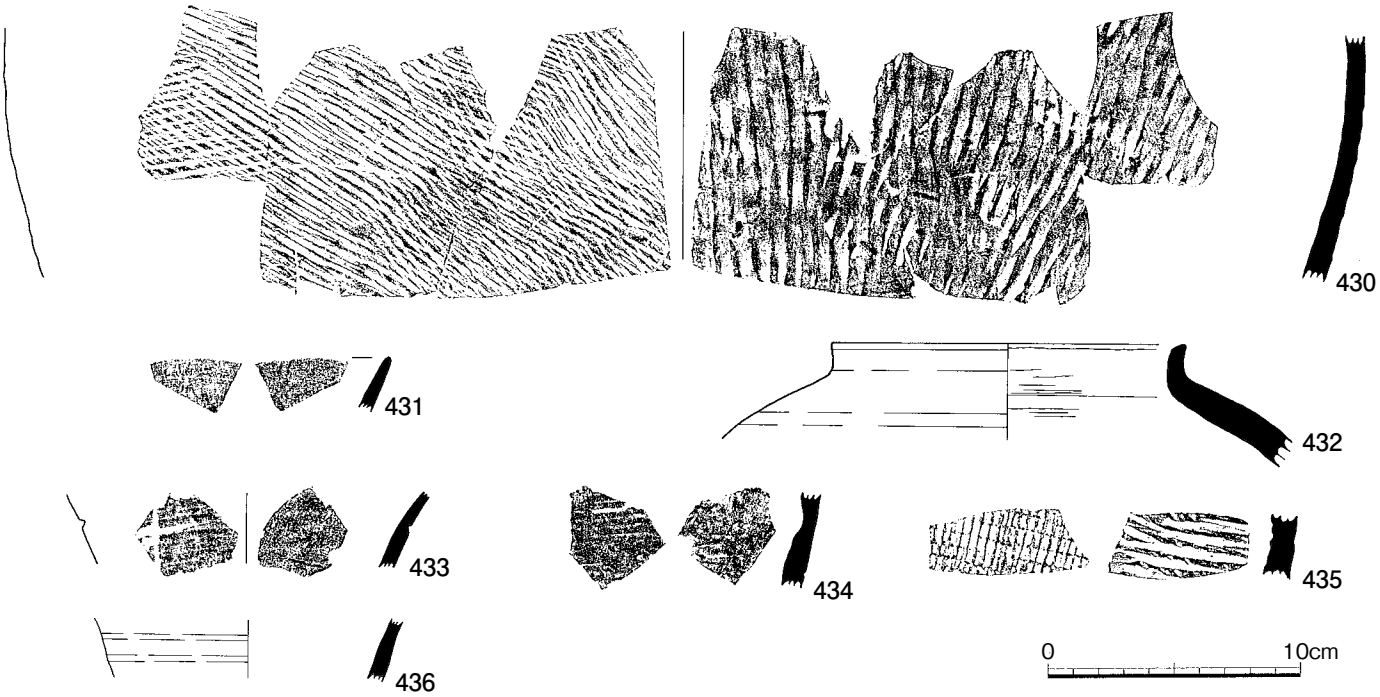
挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	部位	出土区	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
71	389	内黒・椀	Ⅱ	1060・一括	口縁	D－2	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	20.4	－	－	○			火山ガラス	
	390	内黒・椀	Ⅱ	－	口縁	D－3	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	－	－	○			火山ガラス	
	391	内黒・椀	Ⅱa	一括	口縁	D－2	浅黄	黒褐	ナデ	ミガキ	－	－	－	○			火山ガラス	
	392	内黒・椀	Ⅱb	一括	口縁	D－2	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	－	－		○	○		
	393	内黒・椀	Ⅱa	－	口縁	B－2	にぶい黄	灰黄	ミガキ	ミガキ	－	－	－		○		火山ガラス	
	394	内黒・椀	Ⅱ	－	口縁	C－2	灰黄	灰黄	ミガキ	ミガキ	－	－	－				火山ガラス	
	395	内黒・椀	Ⅱ	－	口縁	D－3	浅黄	黒褐	ナデ	ミガキ	13.8	－	－	○			火山ガラス	
	396	内黒・椀	Ⅱb	一括	底部	A－2·3	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	6.8	－	○			火山ガラス	
	397	内黒・椀	カクラン	－	底部	C－2	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	5.4	－				火山ガラス	
	398	内黒・椀	Ⅱ	1221	底部	B－2	浅黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	5.8	－	○		○	火山ガラス	
	399	内黒・椀	Ⅱ	一括	底部	C－2	浅黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	6.4	－	○		○	火山ガラス	
	400	内黒・椀	Ⅱ	1067	底部	D－2	にぶい黄橙	灰	ナデ	ミガキ	－	5.2	－	○		○	火山ガラス	
	401	内黒・椀	Ⅱ	一括	底部	C－2	浅黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	7.2	－	○			火山ガラス	
	402	内黒・椀	Ⅱ	1274	底部	C－2	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ミガキ	－	6.8	－	○			火山ガラス	
	403	内黒・椀	表	一括	底部	D－3	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	5.2	－			○	火山ガラス	
	404	内黒・椀	Ⅱ	1047	底部	A－2	浅黄	黄灰	ナデ	ミガキ	－	6.8	－				火山ガラス	
	405	内黒・椀	Ⅱa·b	一括	底部	B－2	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	6.8	－			○	火山ガラス	
	406	内黒・椀	Ⅱ	－	底部	D－3	にぶい黄橙	黒褐	ナデ	ミガキ	－	8.8	－	○			火山ガラス	
	407	内黒・皿	－	一括	口縁	C－2	浅黄	黒褐	ナデ	ミガキ	14.0	－	－				火山ガラス	
	408	内黒・皿	Ⅱ	－	口縁	C－2	にぶい黄橙	暗灰黄	ナデ	ミガキ	－	－	－	○		○		



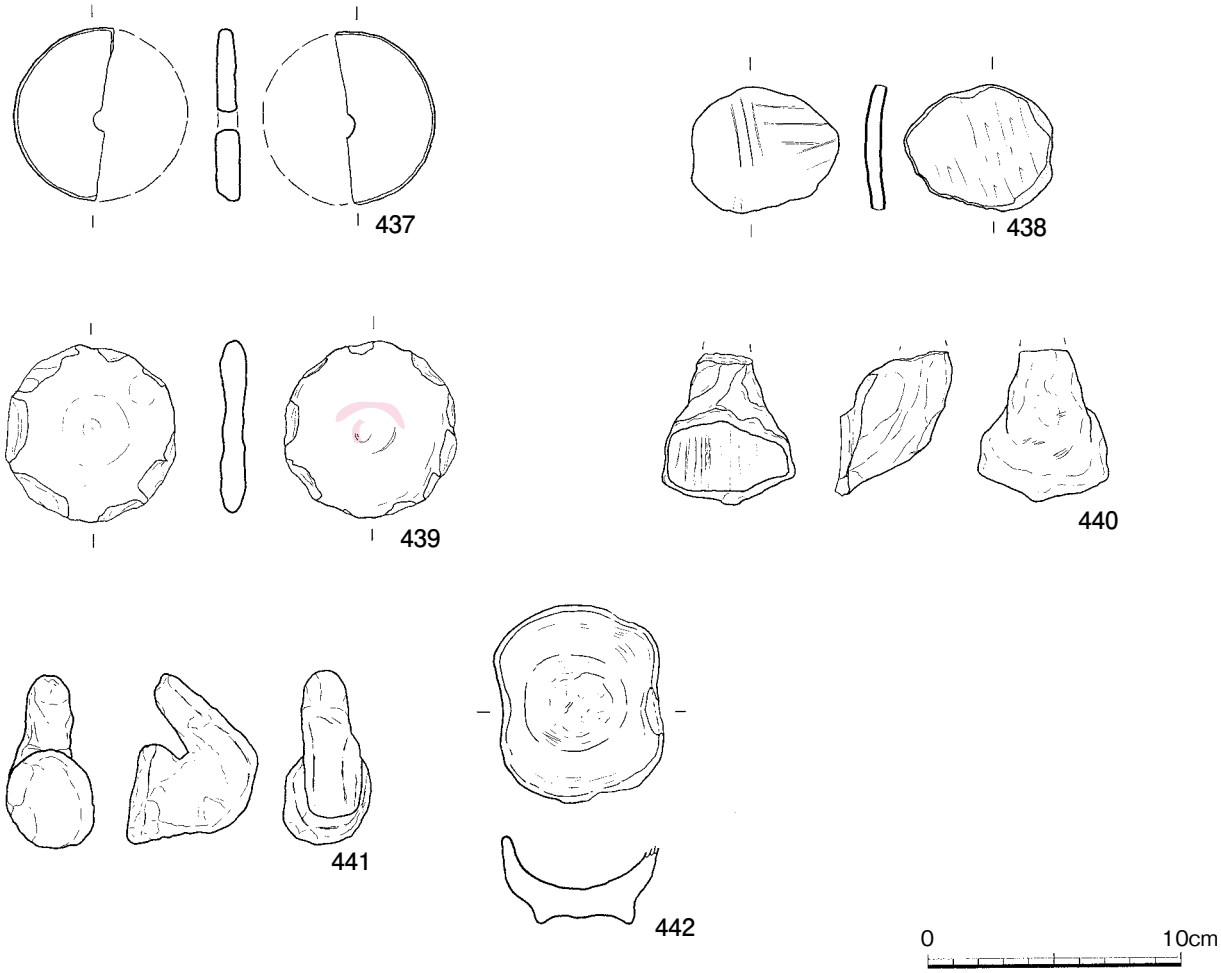
第72図　土師器（甕）



第73図　須恵器（1）



第74図　須恵器（2）



第75図　土製品

第31表　土師器観察表④

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	部位	出土区	色調		文様・調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
72	409	甕	Ⅱ	1368	口縁・胴部	D－3	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ・ケズリ	28.0	－	－	○		○	スコリア・火山ガラス	
	410	甕	Ⅱb・カクラン	1050・1052・一括	口縁	C・D－3	にぶい褐	にぶい褐	ハケメ	ケズリ	30.2	－	－	○		○	火山ガラス	
	411	甕	Ⅱb	1078・1084・一括	口縁	B-2,D-3	にぶい橙	にぶい黄橙	ハケメ	ナデ・ケズリ	21.8	－	－	○				
	412	甕	Ⅱ	450・452・453	底部	D－3	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ	－	10.6	－	○			火山ガラス	
	413	甕	Ⅱ	1175・一括	口縁	C－2	浅黄	浅黄橙	ハケメ・ナデ	指頭・ケズリ	26.8	－	－	○	○			
	414	甕	Ⅱ	一括	口縁	C－2	明褐	にぶい黄褐	ハケメ	ケズリ	23.0	－	－	○			火山ガラス	
	415	甕	Ⅱ	1057	口縁	C－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナズリ	35.4	－	－	○	○	○		
	416	甕	Ⅲ	1259	口縁	C－2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	10.8	－	－	○	○		スコリア	
	417	甕	Ⅱ	480・510	口縁	D－3	にぶい黄橙	暗灰黄	ナデ	ケズリ	11.4	－	－	○				
	418	甕	Ⅱ	487・488	口縁	D－3	にぶい黄橙	暗灰黄	ナデ	ケズリ	11.4	－	－	○				

第32表　須恵器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	部位	出土区	色調		調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
73	419	甕	Ⅱb	一括	口縁	B－2	黄灰	黄灰	ナデ	ナデ	31.8	－	－					
	420	甕	Ⅱb	－	口縁	D－3	オリーブ黒	灰	ナデ	ナデ	28.4	－	－	○	○			
	421	甕	表	一括	口縁	D－2・3	オリーブ灰	黄灰	ナデ	ナデ	19.6	－	－	○				
	422	甕	Ⅱ	1120・1127	胴部	B－2	暗褐	にぶい黄橙	格子目タタキ	同心円タタキ	－	－	－	○				
	423	甕	Ⅱ	1092	胴部	D－3	灰	黄灰	格子目タタキ	同心円タタキ	－	－	－	○				
	424	甕	Ⅱ	1382	胴部	D－2	灰白	暗灰黄	格子目タタキ	同心円タタキ	－	－	－	○	○			
	425	甕	Ⅱ	407・107・1105	胴部	C・D－2・3	灰	灰オリーブ	格子目タタキ	同心円・平行タタキ	－	－	－	○				
	426	甕	Ⅱ	－	胴部	D－3	灰オリーブ	灰	格子目タタキ	平行タタキ	－	－	－	○	○			
	427	甕	カクラン	－	胴部	C－3	灰オリーブ	灰	格子目タタキ	平行タタキ	－	－	－	○	○		スコリア	
	428	甕	Ⅱ	－	胴部	D－2	灰オリーブ	灰	格子目タタキ	平行タタキ	－	－	－	○	○			
	429	甕	Ⅱ	1163	胴部	C－3	灰オリーブ	灰オリーブ	平行タタキ	平行タタキ	－	－	－	○	○			
74	430	甕	Ⅱ	1080・1131・1159・一括・先T2	胴部	B-2,D-3・4	褐	灰	平行タタキ	平行タタキ	－	－	－	○			細礫	
	431	壺	Ⅱ	一括	口縁	C－2	灰オリーブ	灰オリーブ	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○	○		
	432	壺	Ⅱ	－	口縁	D－2	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	14.0	－	－	○	○			
	433	壺	表	一括	口縁	B－3	灰オリーブ	灰オリーブ	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○			線刻
	434	壺	Ⅱb	一括	胴部	D－2	暗灰黄	暗灰黄	タタキ・ナデ	タタキ	－	－	－	○	○			
	435	壺	Ⅱ	－	胴部	D－3	灰黄	暗灰黄	格子目タタキ	平行タタキ	－	－	－	○	○			
	436	坏	表	一括	胴部	D－2・3	灰オリーブ	灰オリーブ	ナデ	ナデ	－	－	－	○	○	○		

(3) 土製品

土製紡錘車（437）

437は土師器片を使用し，縁辺を平らに丁寧に成形し，中央部に穿孔を施してある。

円盤状土製品（438，439）

438は内面にヘラケズリ痕がみられることから，土師器甕の破片を転用したものと思われる。439は土師器坏の底部を使用し，縁辺を叩いて円盤状に成形している。裏面には回転ヘラ切り痕が認められる。表面は赤色塗料が一部残っており，内赤土師器の坏を加工したものと思われる。

把手（440，441）

土師器甕あるいは甑の把手の部分である。牛角状を呈している。いずれも貼り付けによるものである。

耳皿（442）

相対する２か所の口縁を内側上方へ折り曲げている。器壁は厚く，底部には低い高台がある。

第33表　土製品観察表

挿図番号	掲載番号	器種	層	取上番号	部位	出土区	色調		調整		口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土				備考
							外面	内面	外面	内面				石英	長石	角閃石	その他	
75	437	紡錘車	Ⅲ	1164	－	C－3	浅黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	－	6.8	0.9				火山ガラス	
	438	円盤状土製品	Ⅱb	一括	完形	A－2・3	黄褐	黄褐	ナデ	ケズリ	－	－	0.6	○	○			
	439	円盤状土製品	Ⅱb	1054	完形	C－2	にぶい黄橙	明黄褐	ナデ	ナデ	－	7.0	1.0	○			スコリア	丹塗り
	440	把手	－	ベルト一括	把手	B・C－2	浅黄橙	浅黄橙	手捏ね	手捏ね	－	－	－	○				
	441	把手	表	一括	把手	D－2	浅黄橙	浅黄橙	手捏ね	手捏ね	－	－	－	○	○		スコリア	
	442	耳皿	Ⅱ	402	完形	D－2	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	7.7 (6.3)	3.7	3.4	○			スコリア	

第４節　近世の調査

１　遺　構

古道跡

Ａ・Ｂ－４区から，東西方向に長さ12m，幅50cmほどの硬化面が検出された。検出面から硬化面の深さは２～10cmほどで，硬化土は灰褐色土で，径２㎜ほどの炭化物の粒子をやや多く含む。硬化面上，硬化土中からの遺物の出土はなく，時期について確証はないが，現在の道路とほぼ平行して検出された状況や硬化土から見ると中世末～近世ではないかと考えられる。

２　遺　物

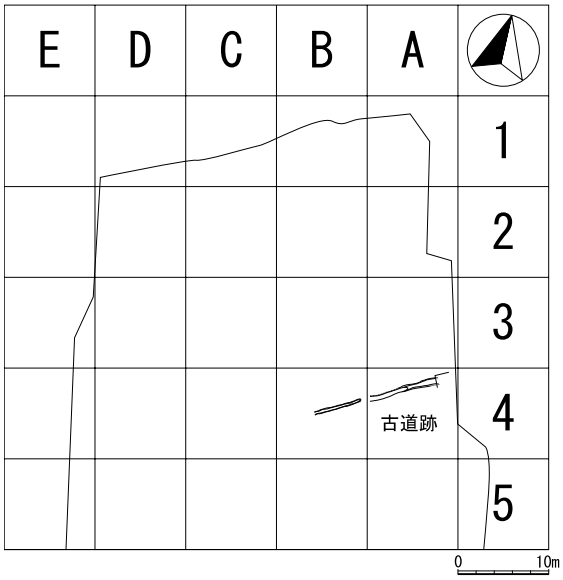
近世の遺物は，包含層が無く，表土からの採集資料である。陶器５点，磁器１点と古銭２点を図化した。

碗（443）

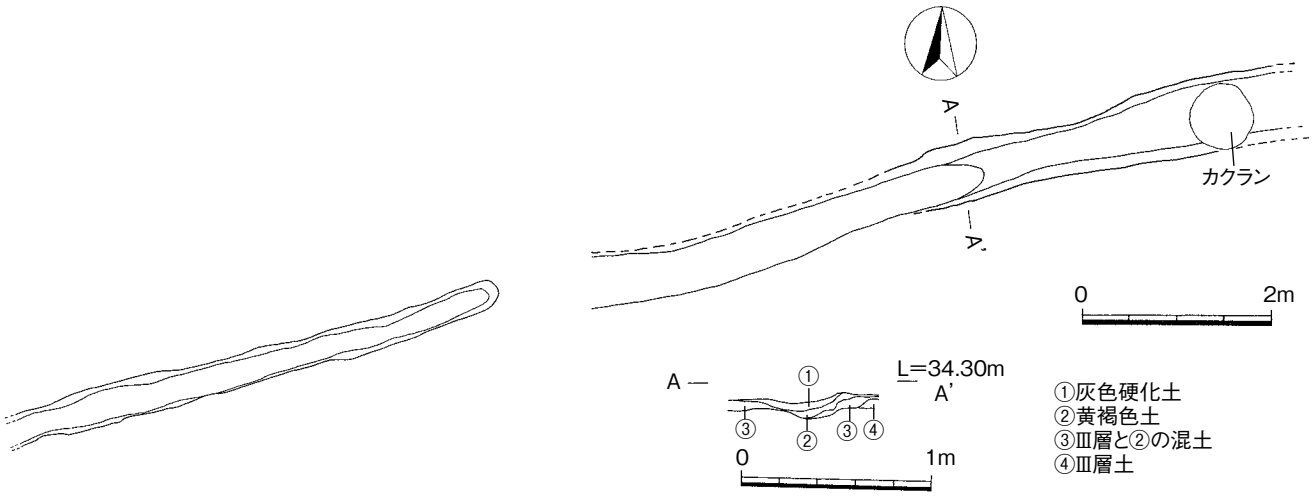
443は肥前系の染付の碗である。文様は不明で，白色の胎土である。やや青みがかった釉がかかる。

壺（444，445）

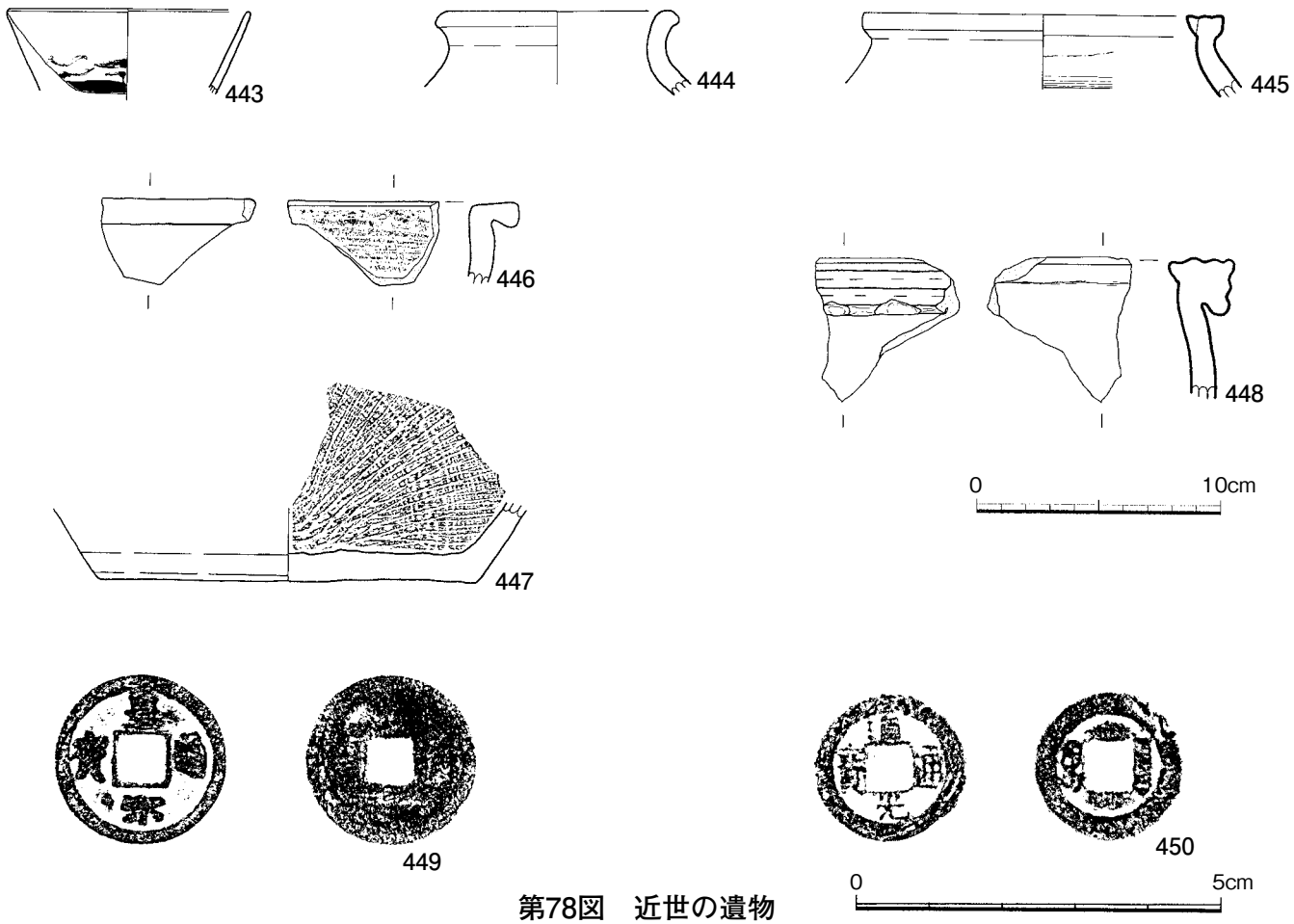
444は小型の壺で，鉄釉がかかる。口縁部は外反し，口唇は丸く作られている。



第76図　近世遺構配置図



第77図　古道跡



第78図　近世の遺物

445は大型の壺である。鉄釉がかかる。内面下位の釉は掻き取られている。口縁部はT字状を呈し，口唇部は釉剥ぎされている。

鉢（446～448）

鉢はすべて薩摩焼で，苗代川系のものである。

446は擂鉢の口縁部である。口縁は逆L字状を呈し口唇部の釉は釉剥ぎされている。内面の擂り目は上位に余白を残さずに施されている。擂り目の下に横方向の工具痕が筋状に残る。447は擂鉢の底部である。外底面の釉は拭き取られている。448は植木鉢の可能性がある。口縁部はL字状に折り曲げた先端に２条の沈線と装飾が施される。口唇部の釉は釉剥ぎされており，３条の沈線が施される。内面に釉はない。

古銭（449，450）

449は皇宋通寶で，初鋳1038年の宋銭である。渡来銭の中で，最も銭名の多いものである。450は道光通寶で，初鋳1821年の明銭である。直径2.15㎝を計る小型の銭で，「豆道光」とも呼ばれ，小銭の代名詞に使われた。いずれも広く流通した渡来銭である。

第34表　近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層	胎土の色調	釉薬の種類 色調	施釉部位	時期	備考
78	443	磁器	碗	碗	肥前系	B－３	表	白色	透明釉	残存部全面施釉	18世紀代	
	444	陶器	壺	小壺	薩摩焼 苗代川系	C－３	表	にぶい赤褐	鉄釉	残存部全面施釉	18世紀代	
	445	陶器	壺	壺	薩摩焼 苗代川系	D－2･3	表	灰褐	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半	
	446	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼 苗代川系	－	表	明赤褐	鉄釉	口唇部釉剥ぎ	18世紀後半	
	447	陶器	鉢	擂鉢	薩摩焼 苗代川系	D－2･3	表	明赤褐	鉄釉	底部無釉	18世紀後半	
	448	陶器	鉢	植木鉢	薩摩焼 苗代川系	－	表	明赤褐	鉄釉	口唇部釉剥ぎ 内面無釉	18世紀後半	

第35表　古銭観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	種別	名称	重さ（g）	備考
78	449	B－15付近	表	銭貨	皇宋通寶	2.0	直径2.4㎝，厚さ約1㎜
	450	B－15付近	表	銭貨	道光通寶	3.5	直径2.15㎝，厚さ約2㎜

第５章　自然科学分析

上新田遺跡における放射性炭素年代(1)
(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1　測定対象試料

上新田遺跡は，鹿児島県薩摩川内市青山町（北緯31°47′，東経130°17′）に所在し，標高約35mの段丘上，北側の丘陵からの緩やかな斜面に立地する。測定対象試料は，土坑出土木片（１：IAAA-102867 ～ ４：IAAA-102870)，５号竪穴住居跡出土土器(125)付着炭化物（５：IAAA-102871)，及び炭化物（６：IAAA-102872，７：IAAA-102873）の合計７点である（表１)。

2　測定の意義

試料が採取された土坑，土器，竪穴住居の年代を明らかにする。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。
(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸(HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
(3) 試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
(6) グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

4　測定方法

3MVタンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2)をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)，^{14}C濃度(^{14}C/^{12}C)の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１)。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する(Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
(3) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表２に示した。
(4) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。

　ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（BronkRamsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

土坑出土木片の^{14}C年代は，土坑３出土の１が680±30yrBP，土坑４出土の２が640±30yrBP，土坑１出土の３が580±30yrBP，土坑２出土の４が550±30yrBP

である。暦年較正年代（1σ）は，１が1281～1382cal AD，２が1294～1388cal AD，３が1317～1405cal AD，４が1329～1422cal ADの間に各々２つの範囲で示される。

５号竪穴住居跡出土試料の^{14}C年代は，土器付着炭化物５が2300±30yrBP，炭化物６が2310±30yrBP，炭化物７が2350±30yrBPである。３点の値は誤差（±1σ）の範囲で重なる部分を持ち，おおむね近い年代を示す。暦年較正年代（1σ）は，５が402～372cal BC，６が403～381cal BC，７が414～386cal BCの範囲で示される。遺構内出土土器は弥生時代中期と見なされており，その所見におおよそ矛盾しない結果と考えられる。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表１

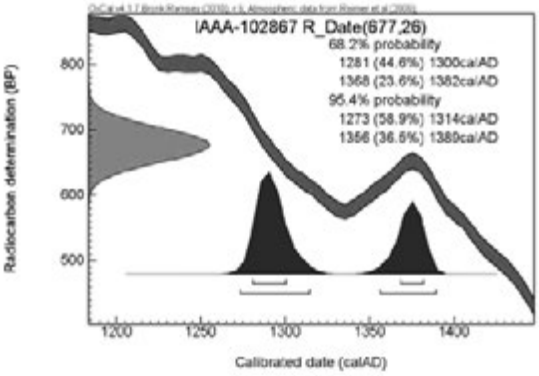
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-102867	1	遺構：土坑３　層位：Ⅱb	木片	AAA	−25.66 ± 0.51	680 ± 30	91.91 ± 0.3
IAAA-102868	2	遺構：土坑４　層位：Ⅱb	木片	AAA	−26.4 ± 0.58	640 ± 30	92.37 ± 0.3
IAAA-102869	3	遺構：土坑１　層位：Ⅱb	木片	AAA	−28 ± 0.6	580 ± 30	92.98 ± 0.31
IAAA-102870	4	遺構：土坑２　層位：Ⅱb	木片	AAA	−25.54 ± 0.6	550 ± 30	93.44 ± 0.3
IAAA-102871	5	遺構：竪穴住居跡５　層位：Ⅲ	土器付着炭化物（125）	AaA	−24.1 ± 0.7	2300 ± 30	75.06 ± 0.27
IAAA-102872	6	遺構：竪穴住居跡５　層位：Ⅲ	炭化物	AAA	−23.68 ± 0.43	2310 ± 30	74.96 ± 0.26
IAAA-102873	7	遺構：竪穴住居跡５　層位：Ⅲ	炭化物	AAA	−24.33 ± 0.54	2350 ± 30	74.65 ± 0.26

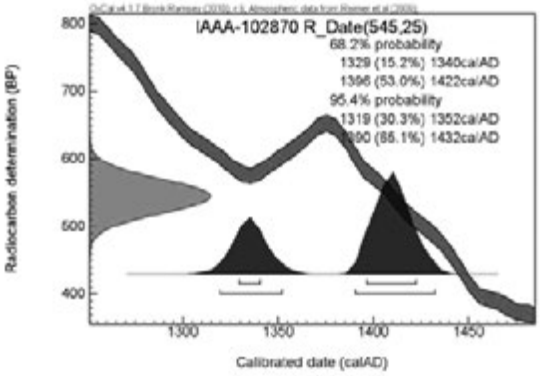
[#4126]

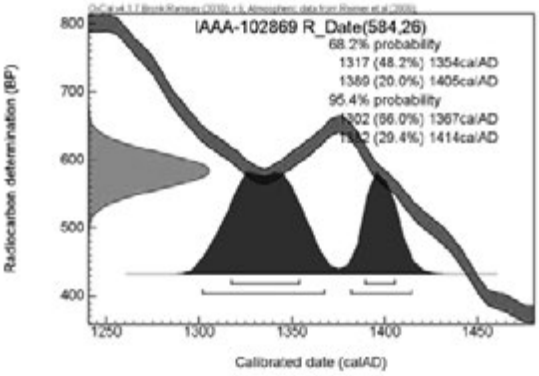
表２

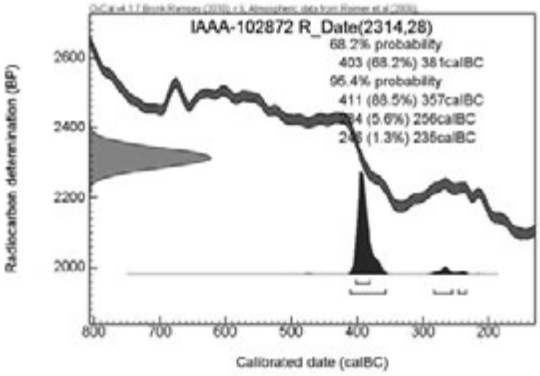
測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-102867	690 ± 30	91.78 ± 0.28	677 ± 26	1281calAD - 1300calAD（44.6%） 1368calAD - 1382calAD（23.6%）	1273calAD - 1314calAD（58.9%） 1356calAD - 1389calAD（36.5%）
IAAA-102868	660 ± 20	92.1 ± 0.28	637 ± 26	1294calAD - 1315calAD（26.4%） 1356calAD - 1388calAD（41.8%）	1285calAD - 1328calAD（40.1%） 1341calAD - 1395calAD（55.3%）
IAAA-102869	630 ± 30	92.41 ± 0.29	584 ± 26	1317calAD - 1354calAD（48.2%） 1389calAD - 1405calAD（20.0%）	1302calAD - 1367calAD（66.0%） 1382calAD - 1414calAD（29.4%）
IAAA-102870	550 ± 20	93.33 ± 0.28	545 ± 25	1329calAD - 1340calAD（15.2%） 1396calAD - 1422calAD（53.0%）	1319calAD - 1352calAD（30.3%） 1390calAD - 1432calAD（65.1%）
IAAA-102871	2290 ± 30	75.2 ± 0.25	2304 ± 28	402calBC - 372calBC（68.2%）	407calBC - 357calBC（81.6%） 285calBC - 234calBC（13.8%）
IAAA-102872	2290 ± 30	75.16 ± 0.25	2314 ± 28	403calBC - 381calBC（68.2%）	411calBC - 357calBC（88.5%） 284calBC - 256calBC（ 5.6%） 246calBC - 235calBC（ 1.3%）
IAAA-102873	2340 ± 30	74.75 ± 0.24	2348 ± 27	414calBC - 386calBC（68.2%）	511calBC - 381calBC（95.4%）

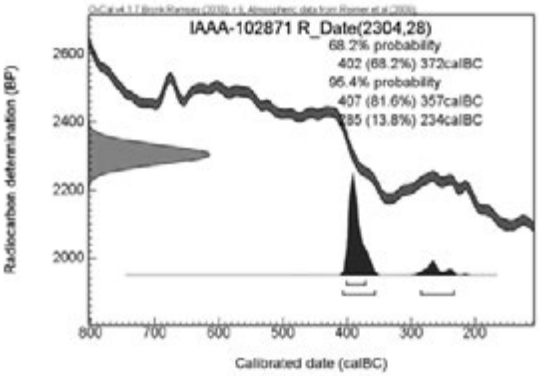
[参考値]

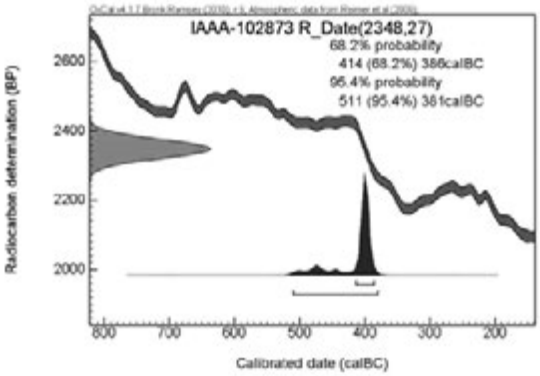


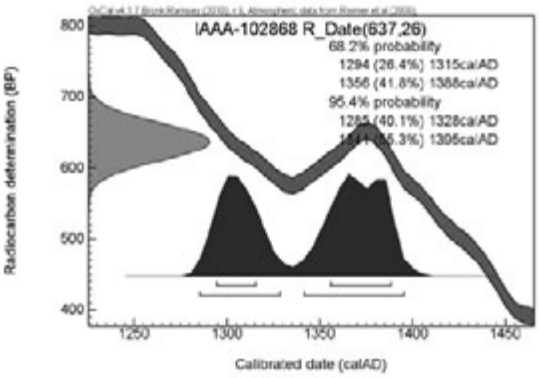












［参考］暦年較正年代グラフ

上新田遺跡における放射性炭素年代(2)

（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

上新田遺跡は，鹿児島県薩摩川内市青山町（北緯31°47′，東経130°17′）に所在する。地形は標高約35mの段丘に当たり，北側の丘陵からの緩やかな斜面上に立地する。測定対象試料は，１号竪穴住居跡出土土器（88）付着炭化物（３：IAAA-103492）１点である（表１）。

2　測定の意義

土器の年代を明らかにする。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。
(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
(3) 試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

4　測定方法

３MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
(3) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。
(4) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。

　ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

１号竪穴住居跡出土土器付着炭化物３の^{14}C年代は2140±30yrBP，暦年較正年代（1σ）は342～114calBCの間に３つの範囲で示され，弥生時代中期頃に相当する。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表１

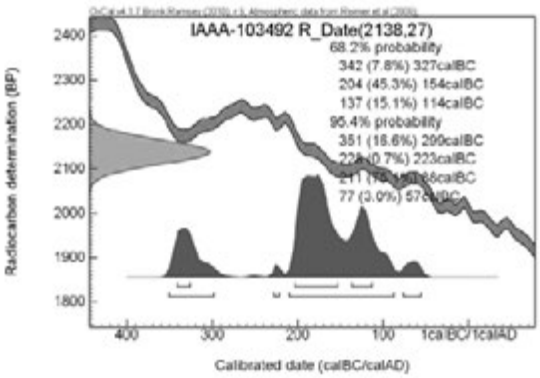
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-103492	3	遺構：竪穴住居跡１　層位：Ⅲ	土器付着炭化物（88）	AaA	−24.22 ± 0.40	2,140 ± 30	76.63 ± 0.26

[#4252]

表２

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-103492	2,130 ± 30	76.75 ± 0.25	2,138 ± 27	342calBC - 327calBC（7.8%） 204calBC - 154calBC（45.3%） 137calBC - 114calBC（15.1%）	351calBC - 299calBC（16.6%） 228calBC - 223calBC（0.7%） 211calBC - 88calBC（75.1%） 77calBC - 57calBC（3.0%）

[参考値]



［参考］暦年較正年代グラフ

上新田遺跡における放射性炭素年代(3)

（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

上新田遺跡は，鹿児島県薩摩川内市青山町（北緯31°47′，東経130°17′）に所在する。地形は標高約35mの段丘に当たり，北側の丘陵からの緩やかな斜面上に立地する。測定対象試料は，５号竪穴住居跡出土土器（135）付着炭化物（１：IAAA-103668）１点である（表１）。

2　測定の意義

土器の年代を明らかにする。

3　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。
(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
(3) 試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。
(6) グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1) δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。
(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。
(3) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２に示した。
(4) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。

　ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

５号竪穴住居跡出土土器（135）付着炭化物１の^{14}C年代は2190±20yrBP，暦年較正年代（1σ）は354～201calBCの間に２つの範囲で示され，弥生時代中期頃に相当する。

試料の炭素含有率は50％を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表１

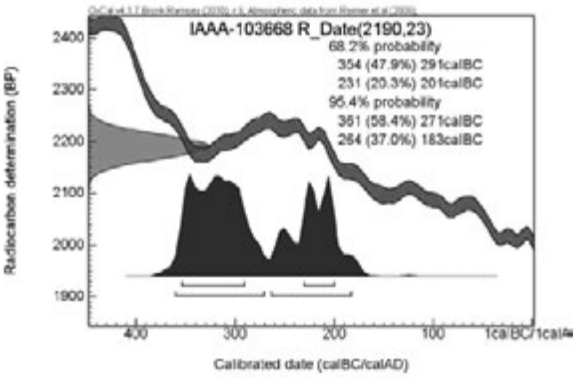
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-103668	1	遺構：竪穴住居跡５ 層位：Ⅲ	土器付着炭化物（135）	AaA	−25.29 ± 0.42	2,190 ± 20	76.13 ± 0.23

[#4289]

表２

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-103668	2,200 ± 20	76.09 ± 0.22	2,190 ± 23	354calBC-291calBC（47.9%） 231calBC-201calBC（20.3%）	361calBC-271calBC（58.4%） 264calBC-183calBC（37.0%）

[参考値]



［参考］暦年較正年代グラフ

上新田遺跡出土炭化材の樹種

(株)加速器分析研究所

はじめに

上新田遺跡の焼土坑から出土した炭化材を対象として，木材利用を確認するための樹種同定を実施する。

1　試料

試料は，土坑１～４から出土した炭化材４点（試料番号１～４）である。

2　分析方法

試料を自然乾燥させた後，木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し，実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴は，島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また，日本産木材の組織配列は，林（1991）や伊東（1995，1996，1997，1998，1999）を参考にする。

3　結果

樹種同定結果を表１に示す。炭化材は，広葉樹２分類群（コナラ属アカガシ亜属・イボタノキ属）に同定された。なお，試料番号１は，炭化した樹皮であり，木部細胞が認められないため，種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で，道管壁は中庸～厚く，横断面では楕円形，単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性，単列，1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・イボタノキ属（*Ligustrum*）　モクセイ科

散孔材で，道管は単独または２～５個が複合して散在し，年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し，壁孔は交互状に配列，道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-20細胞高。

4　考察

焼土坑から出土した炭化材には，アカガシ亜属とイボタノキ属が認められ，少なくとも２種類の木材が燃料材などとして利用されていたことが推定される。このうち，土坑２から出土した炭化材は，半径２㎝のミカン割状を呈しており，小枝が利用されたことが推定される。

アカガシ亜属は，暖温帯常緑広葉樹林の主要な構成種の一つである。イボタノキ属は，落葉性の種類が多いが，本地域には常緑低木で林縁部などに生育するネズミモチも分布している。いずれも本地域にみられる種類であり，遺跡周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織.地球社，176p.

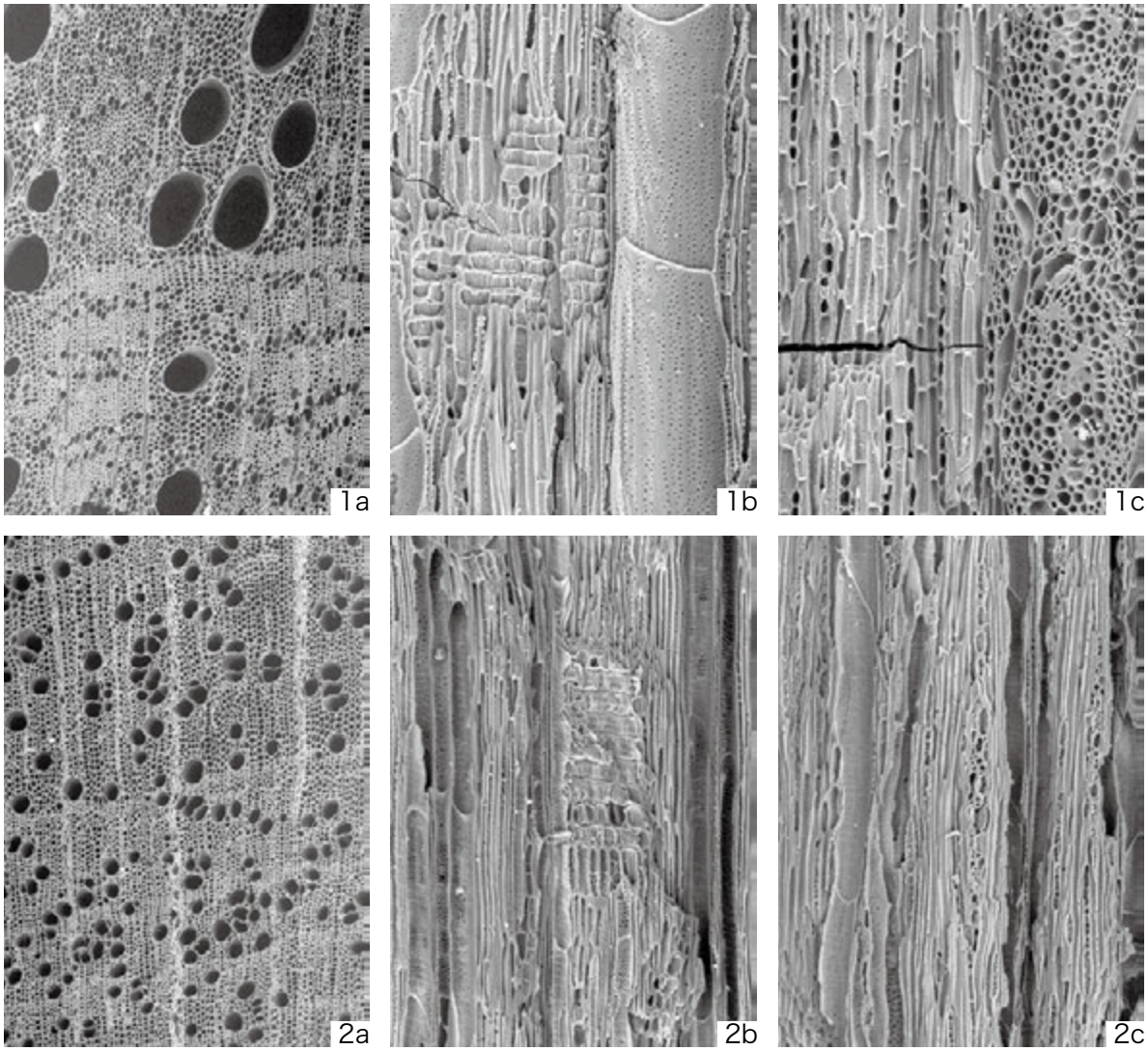
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編)，1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

表１　上新田遺跡の樹種同定結果

試料番号	グリッド	遺構	層位	試料名	樹種	備考
1		土坑３	Ⅱb層	炭化物７	樹皮	
2	Ｂ－２	土坑４	Ⅱb層	炭化物	コナラ属アカガシ亜属	
3		土坑１	Ⅱb層	炭化物１	イボタノキ属	
4		土坑２	Ⅱb層	炭化物１	コナラ属アカガシ亜属	ミカン割状（半径２㎝）

図版1　上新田遺跡の炭化材



1.コナラ属アカガシ亜属(試料番号4)
2.イボタノキ属(試料番号3)
　a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

第６章　総括

縄文時代

１　遺構

遺構は集石遺構が１基検出されたのみであった。遺構内からは遺物は出土しなかったものの，遺構検出層であるⅣ層からは縄文時代早期の土器が多く出土していることから，この集石遺構は縄文時代早期に属する可能性が高いと考えられる。

２　遺物

早期，後期，晩期の土器，石器が出土した。

出土した早期の土器は南九州貝殻文系土器（Ⅰ類の岩本式に近い前平式土器，Ⅱ類の加栗山式土器，Ⅲ，Ⅳ類の吉田式土器系統の土器，Ⅴ類の石坂式土器）と，中九州系の貝殻文土器（政所式（中原Ⅱ式）土器，中原Ⅴ式土器），押型文土器である。薩摩川内市では大原野遺跡において中原式土器と吉田式土器，石坂式土器が共に出土している。本遺跡の石坂式土器は古代の包含層から１点のみの出土のため，大原野遺跡との共通性を論ずるのは若干無理がある。本遺跡出土の中原式土器は木崎康弘氏の編年によるⅡ式（政所式土器）と，Ⅳ式に近い土器が出土している。本遺跡で出土した南九州系貝殻文土器は，大原野遺跡のそれと比べて若干古い様相を呈すると思われるが，大原野遺跡と同様に南九州貝殻文系土器，赤茶系の在地生産の中原Ⅱ式（政所式）土器，黒色鉱物を含む黄茶系の非在地生産の中原式土器（Ⅳ式に近い）という構成である。

石器からの視点としては，相美伊久雄氏が大久保型石鏃が中原式土器・石坂式土器に伴う可能性が指摘されている。本遺跡ではⅡｂ層（造成土層）から胴部下部に最大径をもつ類似の石鏃が１点出土している（333）ことを述べるにとどめておきたい。

後期の土器は，松山式土器（62）１点，晩期の遺物は黒川式土器が出土した。小片で摩耗しているものが多かった。

（参考文献）

黒川忠広　2008「南九州における2つの貝殻文系土器の様相－石坂式土器と中原式土器－」考古学Ⅵ
木崎康弘　1998 「中原式土器について」『九州縄文土器編年の諸問題―早期後半土器編年の現状と課題―』九州縄文研究会
相美伊久雄（編）2004『大野原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（69），鹿児島県立埋蔵文化財センター

弥生時代

１　遺構

遺構はＡ・Ｂ－２・３区から竪穴住居跡が５軒検出された。全形が検出されたのは５号住居1軒のみであったが，いずれの住居も５号住居跡同様に張り出しの無い方形状を呈していると思われる。２号・３号・５号の中央部には炉跡と思われる炭化物の集中域がある。５号住居跡の炭化物の年代を分析した結果，紀元前４世紀前半と考えられる。共伴する遺物は弥生時代中期中葉にほぼおさまり，住居の時期もこの時期に該当すると思われる。時期差については，入来Ⅱ式を主体とする４号住居跡，５号住居跡と，外来系土器が主に出土した１号住居跡と２号住居跡および２号住居跡を切る３号住居跡との２時期が考えられ，４号・５号住居跡が古く，１号・２号・３号住居跡が新しいと思われる。薩摩半島部川内川流域の当該期の様相を示す重要な資料といえる。

２　遺物

上新田遺跡出土の弥生土器は，弥生時代中期中葉を主体とするが，少数の土器を加えれば，中期のほぼ全体に及ぶ。

Ⅰａ類は中期前半の入来Ⅱ式土器で，本遺跡での出土量が最も多い。形態・肉眼による胎土・技法等はいずれも在地的である。

Ⅰｂ類は肉眼による胎土･技法は在地的でありながら，形態は須玖式，黒髪式に類似した土器群である。在地的技法で外来系の様式を模倣しようとした可能性がある。

Ⅱ・Ⅲ類は外来系の様式である。これらは外来系でありながら，個体数としてはかなり多いことが注目される。

Ⅱ類は中九州様式の黒髪Ⅰ式～Ⅱ式である。多くが黒色鉱物（角閃石と思われるが断定を避ける）を多く含んでおり，黒髪式に最もよく見られる胎土の特徴といえる。また，灰色味や明るく淡い色調を呈するものが多く，これらも黒髪式に通有の特徴といえる。したがってこれらの土器は，中九州からの搬入品である可能性は十分に考えられる。

Ⅲ類は北部九州様式の須玖Ⅰ～Ⅱ式である。大粒の無色鉱物（長石）を多く含み，黒雲母も含むものが多いことから，それらは花崗岩地帯の胎土である可能性が高い。このような胎土は北部九州に特徴的なものであり，微細形態からみても，黄色味を帯びた色調など真正の須玖式と断定できるものが多い。搬入品とすると，佐賀平野，筑後平野北部，福岡平野が製作の候補地と考えるが，特に前二者の可能性が高いように思われる。また，口縁部を上からみると正円を呈すること，甕の口縁部下面にもヨコナデの痕跡が明瞭に残っていることなど，製作技術は須玖式のものとみてよく，これも搬入品であることを示唆する。

時期別にみれば，中期初頭と思われるものは微量有るのみである。中期前半代は，入来Ⅱ式を主体としつつ，黒髪Ⅰ式，少量の須玖Ⅰ式で構成されるようである。中期後半代は，黒髪Ⅱ式と須玖Ⅱ式がみられるが，それぞれ古段階のものが多く，中期後半でも比較的古相のものが多い。中期後半でも最も新しい段階（中期末）のもの

は微量であり，中期末ごろには当遺跡地の利用が終息した可能性が考えられる。

また，本遺跡の出土傾向として注目されることは，同時期の山ノ口Ⅰ式（いわゆる吉ヶ崎式）や山ノ口Ⅱ式（伝統的に山ノ口式と呼ばれてきたもの）が明確にみられなかったことである。薩摩半島西部には中期後半ごろから黒髪Ⅱ式が多くみられ，逆に山ノ口Ⅰ・Ⅱ式はあまりみられなくなる遺跡が多く，本遺跡もそのような例のうち最も明確なものである可能性がある。

このことは，当地域の弥生時代の土器様式を考える上で注目される事実である。 遺物指導を依頼した鹿児島国際大学教授中園聡氏は，本地域を含む薩摩半島西部では入来Ⅱ式を最後に概ね黒髪式に交代し，黒髪式の製作に習熟した中九州からの人の移住や，それに伴い在地の人々が黒髪式の製作法を習得したという可能性を指摘する。

このように，本遺跡の様相は，南九州における土器様式の交代の局面を示す典型的な例となる可能性がある。既知の様々な証拠から，おそらく，中期後半における南西諸島～北部九州の貝輪交易ルートが，西九州経由から有明海沿岸経由へと転換することと，こうした土器様式の動態との間には密接な関係があると考えられるが，そうした大きなスケールでの変化の解明にとって，本遺跡やその資料が果たす役割は大きいと考えられる。

古代・中世

遺構は，掘立柱建物跡２棟，土坑4基，溝跡，石列遺構１基が検出された。

掘立柱建物跡１は，２間×５間に片庇付の建物である。本県では市ノ原遺跡（第1地点）において古代の２間×５間の掘立柱建物跡が検出されている。本遺跡の掘立柱建物跡１は，柱筋に若干のゆがみがあり，新出の様相を呈している。

掘立柱建物跡２は1間×1間であり，可能性としては高見台，簡略的な門，倉庫などが考えられる。

土坑は４基検出されたが，いずれも埋土内に炭化物層を形成し，土坑４以外は床面あるいは壁面に赤化がみられる。南さつま市金峰町の山野原遺跡では，規模や形態は異なるが，焼土と炭化材を伴う土師器焼成の平窯と考えられる遺構が検出されている。出水市大坪遺跡では炭化物と赤化部分を持つ古代の焼成土坑が３基検出されている。本遺跡の土坑も炭化物，炭化材が出土し，床や壁面が赤化している点では上記遺構と共通している。本遺跡の土坑については，土師器の焼成が行われたという根拠はない。土師器焼成と類似の燃焼施設的な役割を持ったものであろう。

溝跡は調査区外に続いている可能性があり，その全体像は今回の調査ではうかがい知ることはできなかったが，段丘の先端部に沿って作られており，何らかの境界を示すものと思われる。埋土，出土遺物から中世末から近世にかけての遺構と考えられる。

石列遺構は表土除去後のⅡb層上面で検出された。Ⅱｂ層はアカホヤ火山灰のブロックを含む暗褐色土で，古代包含層であるⅡｃ層上に堆積される。Ⅱｂ層中からは古代･中世の土師器，須恵器と共に，弥生土器，縄文土器，石鏃，磨石・敲石類が出土した。これらの土器，石器は摩滅していないものも多く，調査区付近の土を切り盛りしたことがうかがえる。このことから，Ⅱｂ層は，古代Ⅱ層黒色土以降に切り盛りした際の造成土であると考えられる。

Ⅱｂ層の造成がおこなわれた時期であるが，出土遺物から検討すると，最も新しい時期の遺物は糸切り底の土師器坏である。また，Ⅱｂ層の出土状況の大きな特徴は，青磁，白磁などの陶磁器の出土がまったくなかったことである。このことは中世貿易陶磁器が流通する12世紀以前の造成の可能性もうかがえる。

自然科学の観点から，Ⅱｂ層上面で検出された土坑１，２内の炭化物を年代分析した。測定結果は土坑１，２とも14世紀前半～15世紀前半であった。これらの土坑はⅡｂ層造成後の遺構であり，年代測定の結果から考えれば，造成の下限は15世紀前半ということができる。

遺構の構造から検討すると，Ⅱｂ層の整地面を区画するように石列遺構が検出された。本県内において，類似の遺構としては上屋久町楠川城跡の石積がある。これは曲輪の土砂流出防止のために自然石を積んだ遺構である。楠川城は16世紀前半頃の山城で，石積は土塁を覆うように積まれ，本遺跡の石列のような整然とした列はなさない。湧水町栗野の松尾城跡，鹿児島市鶴丸城跡，霧島市隼人の富隈城跡，霧島市国分の舞鶴城跡には石垣遺構がある。これらはいずれも島津氏の居城で16世紀末～17世紀初頭の築城であり，その規模，性格から本遺跡石列との関連性は考えにくい。

福岡県福岡市の元寇防塁跡には防塁としての石塁がある。これは自然石を加工せずに利用しており，石の大きさ，並び方は本遺跡石列と類似しているように思える。しかし元寇防塁との関連は考えにくく，また，小さな礫を裏側から詰める裏込めが施されていることは，本遺跡石列との相違点である。

近世の寺院跡である東京都多摩ニュータウン№405遺跡（伝教福寺跡）は，丘陵斜面を切土して平坦地とした造成面に，コの字形に配置された区画内に寺院主体部と思われる建物跡が配置されている。これは本遺跡の石列と掘立柱建物跡の配置に類似しており，寺院関連の遺構の可能性も検討すべきであろう。

遺構の検出状況や遺物の出土状況，科学分析の結果，Ⅱｂ層の造成は11世紀～15世紀前半の間と思われるが，

石列の類例が現在確認されないという現状である。本遺跡古代・中世遺構の性格については，石列の時期検討を含め，慎重な議論がなされるべきであろう。今後の資料の増加に期待したい。

（参考文献）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『市ノ原遺跡（第１地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）
金峰町教育委員会1995『河内原遺跡・山野原遺跡・小中原遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）
鹿児島県上屋久町教育委員会2002『楠川城跡』上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）
福岡市教育委員会2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書726集

遺跡の残存状況について

今回の調査で縄文時代，弥生時代，古代･中世の遺構，遺物が発見された丘陵部（A～D－１・２区）の東西部分は，遺跡が残存する可能性がある。

写　真　図　版

図版 1

調査地全景（西側から）

図版２

調査地全景（東側から）

丘陵部分（航空写真）

図版４

調査前風景・作業風景

①②作業・③実測・④表土剥ぎ・⑤調査終了風景

図版６

土層断面（①Ｄ－１・２区丘陵部　②Ｂ－６・７区現代水田跡　③・④Ａ－14・15区段丘部）
⑤集石遺構

竪穴住居跡（①５号住居跡　②４号住居跡　③２・３・４号住居跡　④３号住居跡　⑤１号住居跡）

図版８

石列・掘立柱建物跡１（1）

石列・掘立柱建物跡１ (2)

図版10

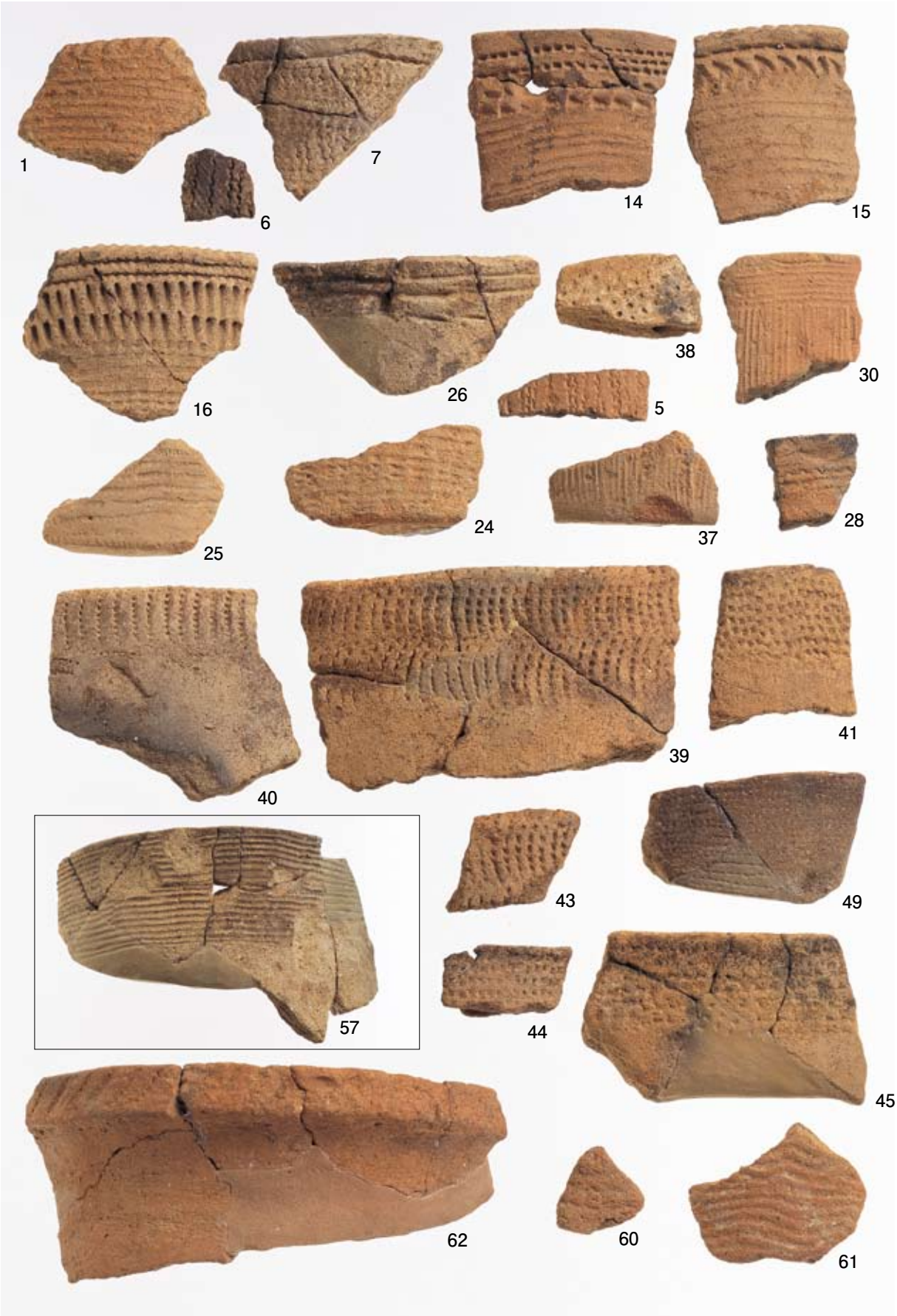
土坑（①②１号土坑　③④２号土坑　⑤⑥３号土坑　⑦⑧４土坑）

溝跡

図版12

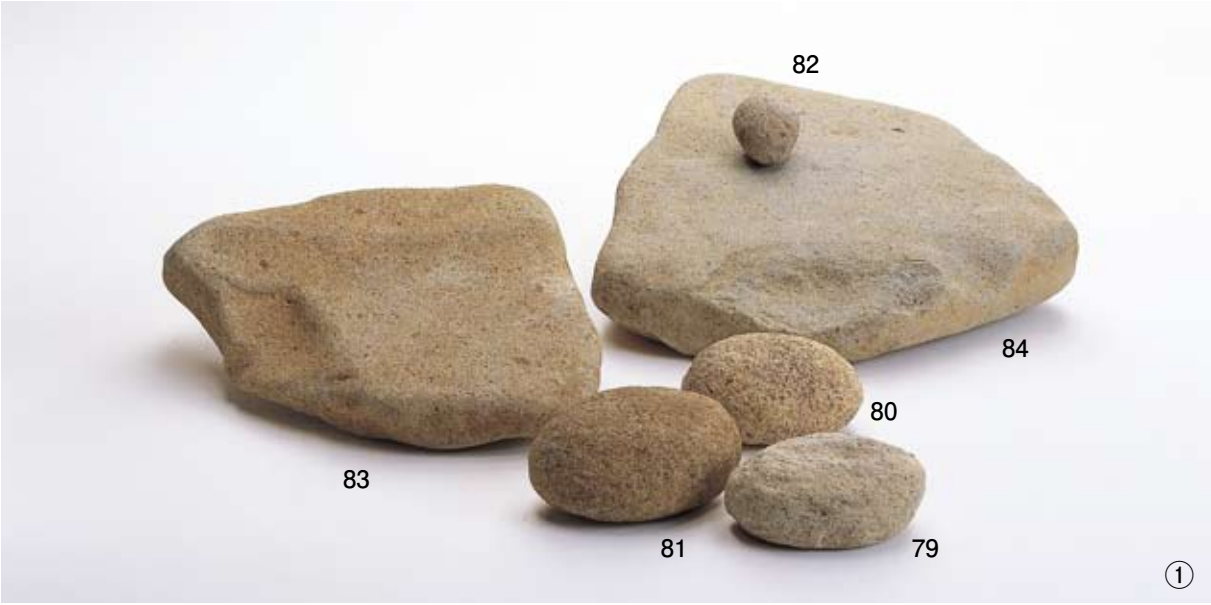
古道跡

①③Ｄ－４区現代水田跡　②Ｂ－６・７区現代水田跡断面

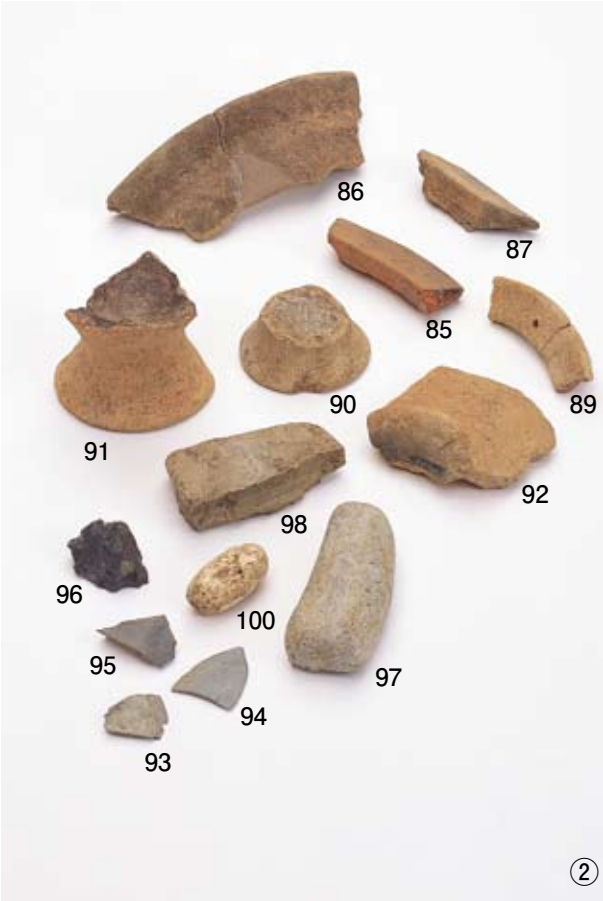


縄文土器

図版14

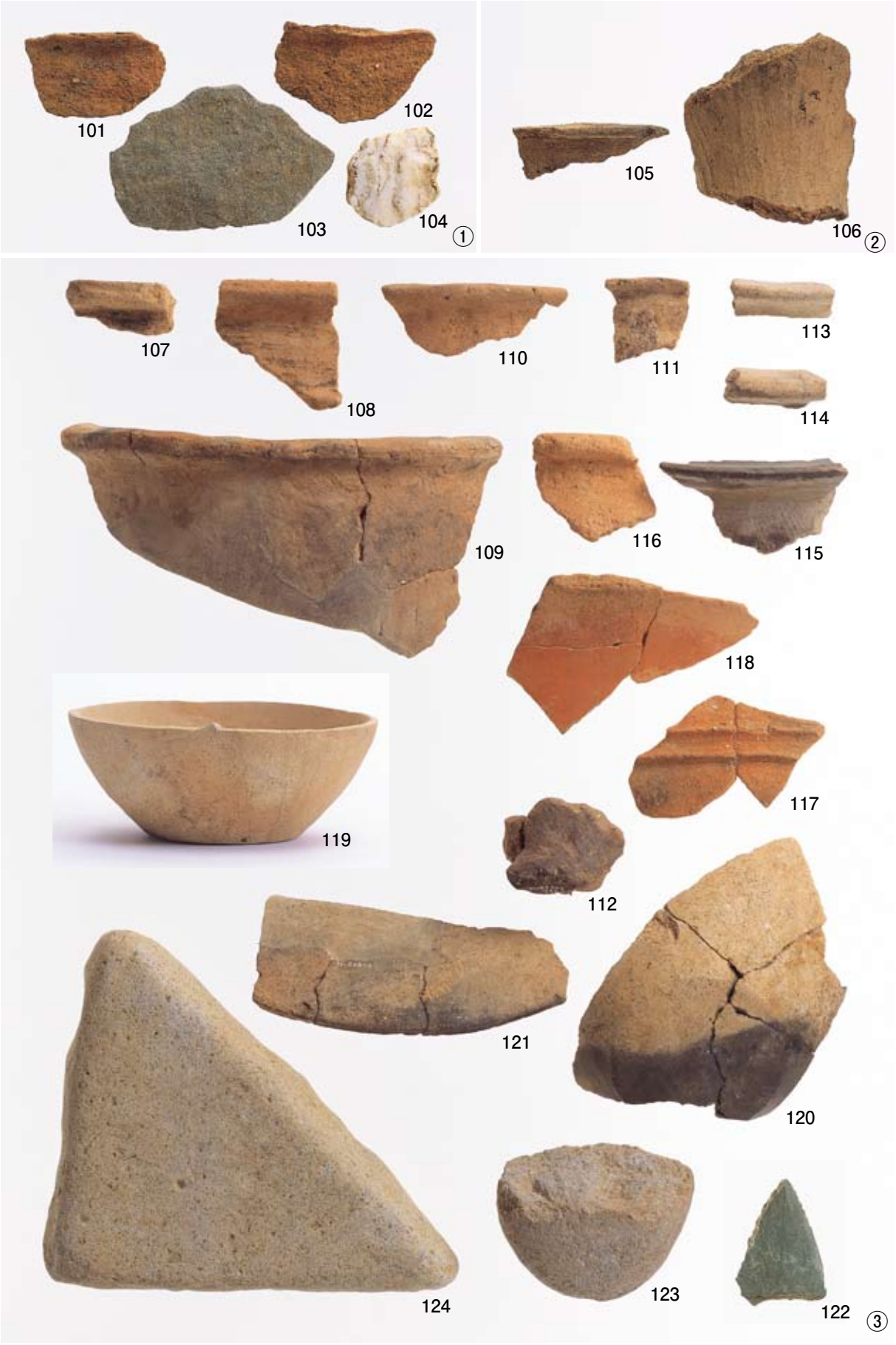


①Ⅳ層・②③④Ⅲ層出土石器



①表層・Ⅱ層出土石器　②③④１号住居跡出土遺物

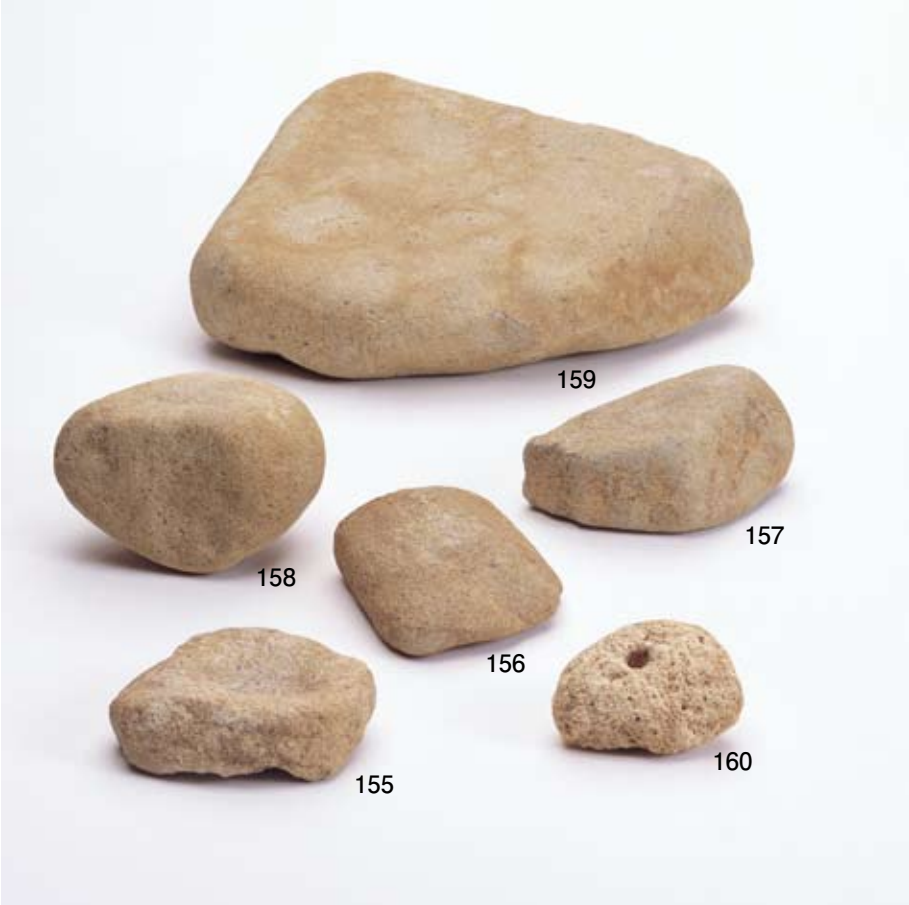
図版16



①２・②３・③４号住居跡出土遺物

５号住居跡出土遺物（1）

図版18



５号住居跡出土遺物（2）

弥生土器甕Ⅰａ類

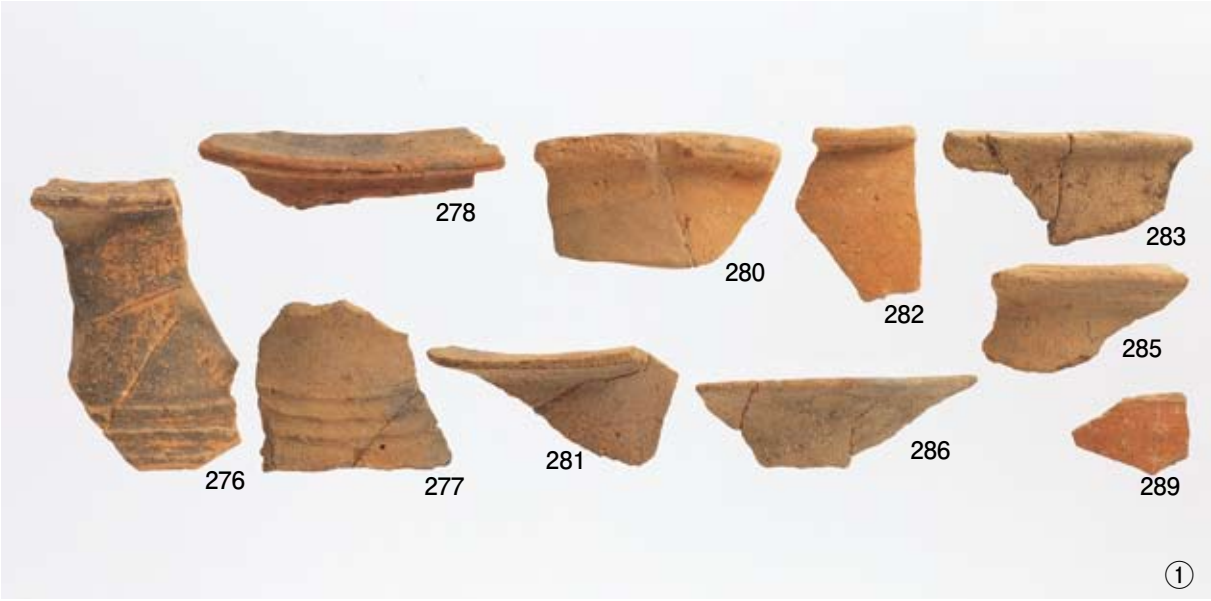
図版20

弥生土器甕Ⅰｂ類

①～④弥生土器甕Ⅰｂ類，⑤弥生土器甕Ⅰ類底部，⑥弥生土器甕Ⅱａ類

図版22

①弥生土器甕Ⅱｂ類　②弥生土器甕Ⅲ類



①～④弥生土器壺・蓋・鉢・土製品　⑤古代・中世遺溝内遺物

図版24

土師器（①②埦・③坏・④皿・⑤⑥内黒）

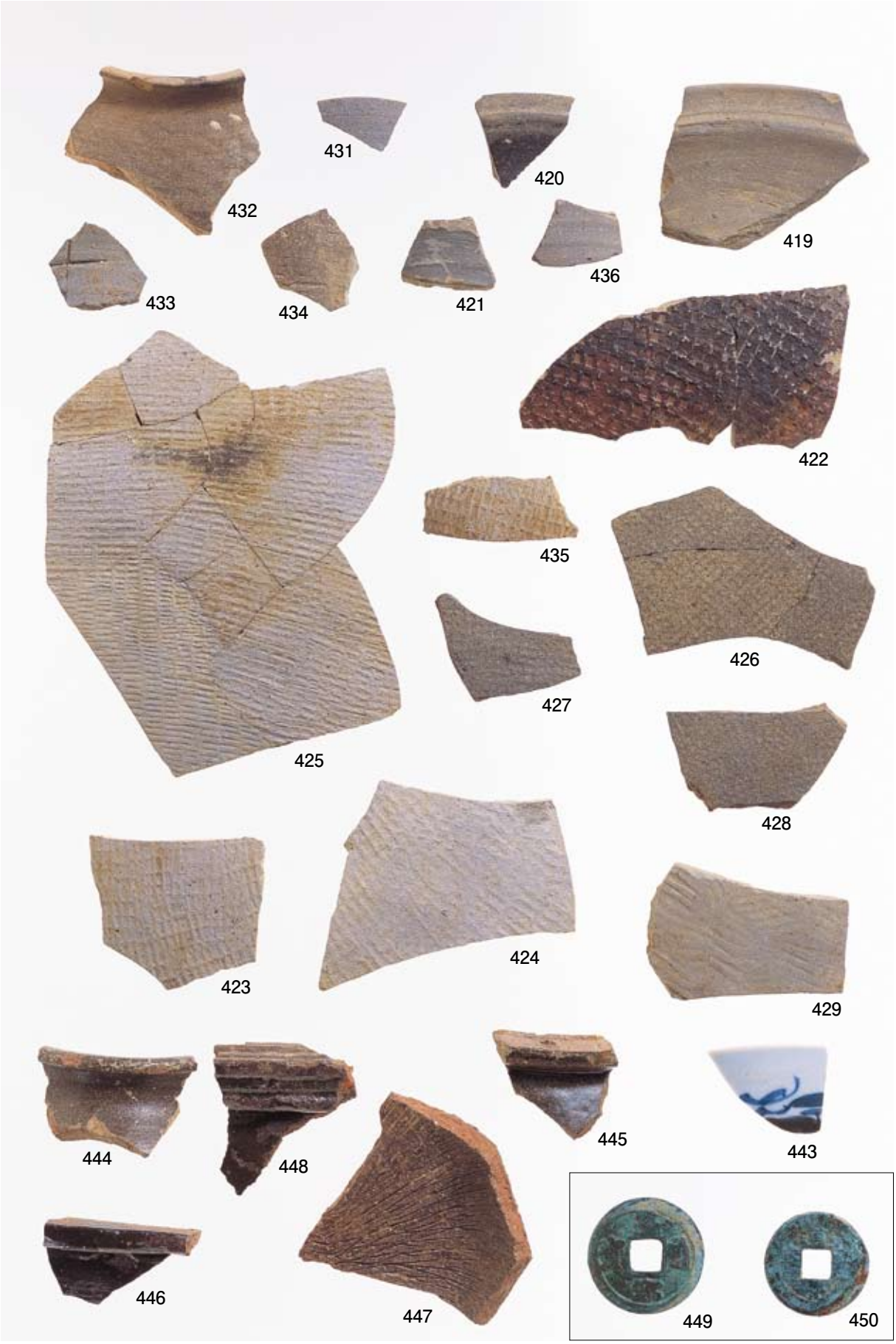
409
410
411
413
415
417
414
416
418
412
①

442
②

440
441
438
437
439
③

①土師器（甕）・②③土製品

図版26



須恵器・近世の遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（166）

上　新　田　遺　跡

発行年月日　2012年１月31日

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899－4318

鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号

TEL 0995-48-5811

印　　刷　株式会社　光陽社

〒890－0072

鹿児島県鹿児島市新栄町23番28号

TEL 099-258-6266

鹿児島県